水上瀧太郎全集

二卷

パスポート添付の寫眞・大正元年春

大正元年三月十九日 巴里鈴木春一氏宅にて

目次

同窓

市中の旅舎の一室の白い寢臺の上に、疲れる迄むさぼつた一夜の睡眠から覺めた。

今朝の日は既に空を突いて聳える向ふ側の家々の屋根を越えて登つたらしく、此の室の大路に面した玻璃窓の水色の窓かけは、共に引かれた薄いレエスの影をうつして、淺瀨の波に日光のさし入る趣に輝いてゐた。

その窓の外の幾百尺の下に騷がしいブロオド・ウエイを往きかふ車馬の物音はかすかに遠く聞えるばかりで、眠り疲れた自分はなほ半は夢心地で枕を離れる氣力も無かつた。

未だに身は大洋の波に搖られる船の上か、又は大陸を横斷する汽車の中にあるやうに思はれもした。

旅の嬉さはかへつて頼り無い心細さの中にあると深くも思ひ定めてゐた爲か、あけくれにわびしい灰色の海の他には見る物も無い二週間餘の船の旅に此の日頃煩はしい身の周りの事に荒び疲れて、何時も苛々して居たのとはうつて變り、生れてから此方つひぞ知らなかつた寂しい靜な心の中に、自分自身を頼りにする心持の強く湧いて來るのを限り無く懷しみつゝ自分は航海さへ樂しん

た。

もとより狭い船の上にも氣を置かなければならない社交も無いではなかつたが、あまりに偉大なる海洋の怖しい凄い光景に打たれた心は、氣難しい我儘に別れて、かゝる些少の面倒は少しも苦にはならなかつた。平生兎角人を嫌ひ世間を厭はしく思ふ傾向の自分は、此の海のたゞ中に一切の人をひとしなみに親しく思ふ心地を知つた。

霧の深い夜を悲しげに警笛を鳴らして進む時、海の嵐の烈しく帆柱にもつれて異様な音の耳を襲ひつゞける時、絶間無く打ち上げる波濤のしぶきに甲板はしとゞに濡れて乾く間も無い時、心は頼り無き嬉しさに震へた。父を想ひ母を想ひ、兄弟姉妹友だちを此時程完全なものとして戀しく思つた事は無い。或は又枕の下に終夜(よもすがら)暗くつぶやく波の音の耳について眠られぬ夜半には、屢々そのかみの「ノルマントン沈沒の歌」に涙を催した柔いものゝ怖れを思ひかへして、吾と我身を抱きしめた事もあつた。

酒好きの船員の群にまじつて盃をふくみながら、日に燒けた彼等の顔に崩れるやうな笑を浮べて物語る無邪氣に放縱な話のをかしさにも、その底にひそむ頼り無い海の子の心持を忘れぬおもひやりを持つて居た。朝から晩迄船底に博奕(ばくち)打つ支那人の、夜となれば必ず鳴らす胡弓のむせび

泣くやうな故郷の唄には、眞實しみ〲涙さへ流れたのである。

人々が一日も早く目的の陸地に着く日を待ちこがれてゐる間に立つて、自分一人その海の旅の長からん事ばかり祈つてゐたのも、此の懐しい心持に身を浸してゐたかつたからであらう。降り續けた雨に風さへ加はつて、物凄い大洋の波の怒りに見るかげも無く船のもてあそばれる時、人々は襲ひかゝる不安に蒼ざめてゐるのに、自分は時にふとかりそめの空想のひらめきの中に、そのまゝ水底に沈みゆく運命をさへなつかしいものとして考へた程である。

しかし船は豫定の日に一日も遲れる事なくシアトルの朝の波止場にゆるぎなく横づけになつた。同船の客の多くは此の新開の港町にささやかな店を持つ商人か、又は更に西部（ウエスト）に行つて、志を立てようとする人達だつたから、その日の夜の汽車に乘つて眞夜中にロツキイを越え、果しも無い亞米利加の大平原を東部（イイスト）へ運ばれて行くのは自分の他に一人もなかつた。

人々は今度の航海の無事だつた事を祝し合ひ、同じ船に乘合せ旅の無聊を慰めてくれた禮を互に取りかはして、さてちりぢりに別れたのである。波止場に出迎へる妻子を此の地に持つ人は、かくしきれぬ喜悦を面にあらはしながらその妻子の手を取つて町の方へ立去り、更に又もろともに汽車の旅をする人々は一層の親しさを求め合ひつゝ肩を並べて宿屋又は停車場へ急いだ。

自分は一人あてども無く町筋へと歩いて行つた。旅鞄は先きに停車場迄運ばせたから、今はただ一人をその夜の汽車の出る時刻迄何處へか横たへる他に何のわづらひも無いからだなので、いゝ加減に市中を廻り歩かうと考へた。

久しぶりで土を踏んだ爲か或は波のまにまに搖られて暮した旅の疲れの故だらうか、自分は知らぬ國土に來た驚きも感じず、劣等な自分の姿體顏色を恥る氣も無く、全く鈍いものうい一人として人通りの多い大通を方角も知らずにぼんやりと歩いてゐた。

ところがとある町角で自分はうす汚ない一人の同朋とすれちがつた。すれちがつてフト見合した視線を又無意識に避けた時、その時突然湧起る不安を知つた。その不安の誘惑は直にふりかへつて、過ぎ行く男の後姿を求めさせたが、五六間とも行かなかつた男は同く足をとどめてけげんさうに自分を見詰て立つてゐた。

突然古い記憶の斷片は明かな形になつてあらはれた。「柴田だ、柴田に違ひない」から氣付いた時どうしたのか、自分は自分でも驚いた程あわただしく人ごみにまぎれて横町へ曲つてしまつた。

馳け込むやうに曲つた横町は、一筋の道を遠く秋空の晴れた山手にだらだら上りに導いてゐた。息をはずませて砂塵の多い斜面を上つて行きながらも幾度となくふりかへつて見た。大丈夫誰も

ついて來はしなかつたが、それでもなほ追掛けられる心地を消す事が出來なかつたので、かなり長い坂道を上り切つた時丁度更に東西へ通じる小路のあつたのを幸に人通りの多い方をとつさに擇んでまぎれ込んだ。

いかにも大きな災厄から逃れ得た心地でホツトした自分は更に新しいもの丶驚きを再びした。自分が偶然入込んだ町は此の果しもない新大陸に遙々と住馴れた故鄕を後にして一代の富を夢みながら移り住んだ我が同朋のいつしか形造つた一廓であつた。

そのせ丶こましい日本町の不可思議を極めた光景は、自分をして、船中の徒然に讀んだ「亞米利加物語」といふ短篇小說集の中の「惡友」と云ふ一篇に驚く可き細かい寫實的の筆で描き出されてゐた事を想ひ起させた。

立並ぶ店屋の多くは日本人の所有に屬し、その間々に麗々しくお壽司、生蕎麥、汁粉、錢湯など丶書き出した看板を出した家が數知れず目に觸れるのみか、會席御料理何々樓、何某亭と云つた家も到るところにあつた。

見馴れない風態の者の物珍しさうに步いて居るのを見て、往來の者はもとより店番の男女迄、前後から自分の一身に疑ひ深い注視を集めるので足早に步いたが、白晝此の新大陸の日本町で自

分の一身をもてあつかふ心持がして、遂にてれかくしに岡の中腹の或料理屋に上つてしまつた。呼鈴を押すと間も無く女の顏が一二寸あいた扉のかげに見えたが、直ちにその扉を大きく開いて、四十女のくせに皺の寄つた顏に白粉を塗り立て入毛でふくらました束髮に薔薇の造花をさしたのが、純粹の洋服でもなくさりとて西洋人の所謂キモノでもない異變な服裝で現はれた。さうして關東の氣短かな言葉に馴れた自分には非道く馬鹿にされたやうな氣のする關西訛で仰山なお世辭を並べながら手を取るやうにして導き入れた。

二三人若い女が出て來て自分を取卷いた。

暗い煉瓦造りの入口をくゞると取つつきの階段の導くまゝ二階に上つて、額の汗を拭つた。

すべてそれらの光景がまださめぬ夢のやうにうすらあかるく浮んで來るのを、想ふともなくおもひかへして、ほとぼりのさめない寢覺めの床に暫時ものうい心地よさをむさぼつた。

しかし此の朝はA商會に父の昔の友だち野添氏を訪問して何くれと今後の事も頼まなければならないのだつたと、ふと氣が付くと枕の下の時計を出して見た。

旅舍の入口に立つて出入りの客を待つ金モールの飾のついた服を着た美少年のボーイにA商會

の所在(ありか)を訊ねてから、思ひ切つてブロオド・ウヱイの人込みにまじつて歩き出した。
午(ひる)に近い町の賑はひはあからさまに目の前に展開された。汽車の中で讀んだ案内記に、紐育市(ニウヨウクし)の道路はすべて碁盤目に規則正しく計畫されて造られたものであるが、只ブロオド・ウヱイばかりは曲りくねつてゐる、それは最も古い一筋で、昔まだ町が野原だつた時代に牧牛者(うしかひ)が牛を引いて通つた名殘だとあつた。意外に狹い道路を挾んで聳え立つ煉瓦、石造の家屋が青空に迫つてゐる。車馬の往來はすき間もなく、その間を電車が通るばかりでなく、絕間もなく足の下に轟然たる音響の聞えるのは地下鐵道であらう、一重うらの町の空には高架鐵道が凄(すさまじ)い反響を町々に傳へて過ぎて行く。人道は押合ふばかりの人の波で、又實際急いで居る者は遠慮會釋も無く人を押分けて行くのであつた。自分は自分の姿の矮小な事をつくづく思つた。此の國に住むには腕つぷしが強くなくてはならないと考へた。
家々の戶に記された番地に注意しながら押されるやうに步いてゐると、間も無くA商會の入口を探しあてた。重い扉を中にして兩側の飾窓には、西洋向きの安物の陶器、こんなものがと思はれるつまらない玩具、けばけばしい色彩の繪日傘や提灯が見てゐると恥かしくなるやうなものだが、人目を引いて飾られてある。自分は直に扉を押して中に入(はい)つた。

廣い店の中には更にさま〴〵の商品が所狹く並んでゐた。その間を忙しさうに客を導いて商ひをしてゐるのは何れも日本人だつた。誰か手すきの人がゐたら案內を賴まうと思つたけれど、みんな客扱ひに專心で自分には不思議さうな視線をちら〳〵そゝぐばかりだ。詮方がないから客の立てこまない方に足を運んで物珍らしく商品を眺めてゐた。

ふと傍を若い女客と話しながら過ぎた店員があつた。牡丹と孔雀を描いた金屛風の前に立止つて二人は暫く話して居た。

その人の橫顏がどうも見た顏だと思はれるので、見ないふりをしてもどうしても視線を引かれる。先方も話の合間にはふりかへつて自分を見るので、度々視線が合ひかけては又それたが、間もなく女客が立去ると、彼は急に笑顏になつてツカ〳〵と寄つて來た。

「失禮ですが貴方は辰野君ぢやありませんか。」と云はれた時自分はその笑顏と聲とでその人を想ひ出した。

「貴方は上原さんですね。」

「どうも驚いた。見たやうな人だなと思つたが君とはわからなかつた。一體何時此方に來たんです」

「昨夜グランド・セントラルに着いたばかりです。私も貴方が此の店に居るとはちつとも知らなかつたもんですから。」
「イヤお互ですよ。何しろ君は大きくなつたからね。なんですか長く紐育に居るんですか。」
「イイヱ二三日のつもりです。ケムブリッヂに落つくつもりなんですが、少し時日が遲れたので學校はもう始まつてゐるでせうし、急いで行き度いと思つてゐます。實は野添さんにお目にかゝりたいんですが。」
「野添さんに。アア左様ですか、もう出て居られるでせう、一寸待ちたまへ。」
云ひ捨てゝ上原君は氣輕に店をつきぬけて事務室の方へ行つた。その後姿を見てゐると、少し癖のある歩きつきが昔の通りだつた。
自分よりは年配も上だつたし級も三四級違つてはゐたけれど、小學も中學も同じだつた。その家も互にあまり離れてゐなかつたので、親しく往來した事はなかつたけれど逢へば挨拶もすれば、學校のゆきゝには一緒だつた事も屢々あつた。その後上原君は大學部を中途でよして亞米利加に渡つた事は知つてゐたが、それから七八年たつた今日迄亞米利加の何處で何をしてゐるのか噂に聞いた事もなし、此處で偶然逢はなかつたら、永久に忘れ去つた人であつたかもしれない。不思

議な所で思ひも掛けない人に逢ふものだと、シアトルの町で見た柴田らしい男を又思ひ出してゐたのである。

間も無く上原君は事務室の戸口に身體を出して高く手をあげたので、自分は招かれるままにその後に隨つて、せせこましい事務室の忙しい帳簿のひらめきの間を拔けて突當りの支配人の室に導かれた。

「サア入りたまへ。僕はまだ用事があるから。話が濟んだら店に來たまへ、晝飯でも一緒に食べに行きませう。」

上原君はささやいて、又忙しさうに行つてしまつた。

室内の大きな机には、半白の頭を向ふむきに體格の偉大な老人が、しきりと商賣上の紙きれを眼鏡に近々と寄せては、人の入つて來たのも知らない風で、調べてゐるのであつた。

自分は所在なさに、あかりとりの窓から、恰もうら通りになつてゐるらしい煉瓦造りの向ふ側の家の廂の間に遙なる空の眞青に一尺ばかり見えるその澄み渡つた青い色に視線を引かれて、此の頃目に近く馴染んだ海の水を思つてうつとりした。

「どうも失禮。」

さう云はれてハツトした時、野添さんは既に此方に向いて立上ると、つかつか椅子を離れて來て、骨張つた大きな手を差出してゐた。少しまごついてオヅオヅ延べる手を強く握つて振りながら、

「サアおかけなさい。」

と其處にあつた椅子をすすめる。

「實は先頃お父さんから貴方が來られるから萬事よろしく賴むと云ふ手紙だつたので、もうお出での頃と待つてゐたが、紐育に着かれる前には電報でもおうちの事と思つて――さうすれば又誰か店の人にでも停車場(ステエシヨン)迄行つて貰へたんだが。――しかし別に迷子にもならなかつたと見える。」

老人は幅のある聲で笑つた。

「昨晩遅く着きましたので、迎ひに來て頂くのも大變だと思ひましたから。でもどうかかうか旅舍(ホテル)迄は無事に行かれました。」

「で此處に暫くゐるつもりですか。お父さんのお手紙ではケムブリツヂに行かれるやうにあつたか。」

「エエ、マア二三日見物してから直(すぐ)に彼地(あつち)へ行き度いと思つてゐます。」

「サウ、その方がよからう。どうも此處は勉強しようといふ人の長くゐるところではない。殊に君のやうな若い人にはね。」

老人は又快活に面白さうに笑つた。

自分が學んだ學校の前身だつた私塾に、父が覺束なくも英書を學んでゐた頃机を並べた友だちだといふ此の老人の、顏色から聲音から元氣の溢れてゐるのを見て驚いた。それにつけても兎角此の二三年暑さ寒さに疾病を得ては、自分の目の前に傷しくその衰へを見せた父を想ひ起した。その父から云ひつけられた通り、此の國にゐる間は、學資、衣食住の入費、小遣錢に至る迄一切の面倒を見てくれるやうにと、暗じたまゝに頼んだ後は、話上手な老人に巧につぎ／＼と訊ねられるまゝ、學校に入つてからはこれ／＼の科目を專攻するつもりであるとか、それを卒へたらば更に英吉利に渡り度いといふ事迄つぶさに語らなければならなかつた。老人からは又節儉を旨として一切の浪費をはぶく事、すべて罪惡の源であり、墮落の緒口である酒と女の誘惑に陷らぬ事など繰返してくれ／＼も聞かされた。

「私は紐育州ではないが直き此處から一時間位で行かれる田舍の川つぷちに住んでゐるが、君がもう少し長く此處を見物するつもりなら是非お宿をしたいけれど、兎に角一日も早く學校の方の

手續をした方がいゝから、それは耶蘇降誕祭休暇か來年の夏休み迄おあづけにしませう。けれども折角の新客だから近頃の日本の有樣や學校の話も伺ひ度いから――サウ、明日は日曜だ、明日がいゝ。私の家で一同で食事でもやり度いがどうです。――此店には今の上原君の他には二三人あの學校出の人がゐるし、物產や正金にも少しはゐる。時々同窓會もやるが、マア今度は臨時歡迎會とでもいふ事にして閑な人に來て貰ひませう。」

老人は云ひ終つて、

「でも萬事は上原君に賴んで置くから今日はゆつくり見物しておいでなさい。午食はどこかそこらで一緒にやりませう。」

「ありがたうございますが、上原さんと約束しましたから今日は失禮致します。明日は是非ともお宅へ伺ひます。」

「矢張り若手は若手同志がいゝかな。」

老人は又幅のある聲を高くして笑つたが、思ひ出したやうにポケツトから商用の手紙を取出して讀み初めたので、自分はそれをきつかけに言葉を殘して室を出た。

戸口には既に上原君が戸外に行く姿で待つてゐた。

「どうです、聖書（バイブル）の講釋は出ませんでしたか。」

「エエ、誰でも野添さんにはやられるんですよ。聖書をね。一も聖書二も聖書ですからね。」

「聖書（バイブル）の講釋。」

「イ、エまだその方は聽きませんが、もう今後の心得丈は拜聽しました。」

二人は又陶器、漆器、玩具等の間を拔けて店から町へ出た。

「いづれゆつくりお目にかゝる事にして、ちよつとそこいらの横町で午飯（ひるめし）を喰べませう。毎日吾々の行くところで至極くお粗末なんですが、一度はそんな處を見て置くのも後學の爲ですよ。」

上原君は先に立つて、丁度食事時の殊に人足繁き大通りを横町へ導いて行く。

とその曲角の煙草屋から出て來た若い男があつた。

「ヤア。」

と云つてつか〳〵寄つて來た。山上（やまがみ）といふ中學時代の同級生だつた。

「珍しい處で逢ふもんだなあ。何時來たんだ。君はちつとも變らない。」

彼は無理に自分の手を取つて、痛い程握りしめて振りたてた。

「君こそ昔の通りだ、相變らず元氣がいいぢやあないか。」

同級中で一番ちひさな身體をしながら喧嘩好きのカンニングとエスケエプの名人だつた山上が、昔ながらの小造りでカラカラした聲で話し掛けるのを、自分は非道くなつかしく思つた。
「僕はぢき其處のＢ合名に働いてゐるんだ。」
彼は往來の人には頓着せず、高調子の日本語で盡きない話を始めようとする。
「マア話はゆつくりする事にして、君も一緒に食事に行かないか。」
と上原さんは聲をかけた。
山上はうなづきながら自分の肱をつかんで歩き出した。
「全諾。」
「上原君、久しぶりなんだから一杯やれる家にしようぢやないか。」
「左樣だね、僕は自分がいかないもんだから氣が付かなかつた。辰野君は飲めるんですか。」
「飲むとも。」
山上は返事を奪ひ取つて答へた。
町角の酒場の眞下の地下の飲食店に、山上は自分の手を取つたまま飛込むやうに馳込んだ。ちひさな食卓のギツシリ詰まつた室内は、恰も近所の商人會社員らしい連中が出つ入りつする時分

時なので、皿やグラスに肉刀肉刺の觸れ合ふ音が人聲足音に入りまじつて騷しく、低い聲では話も聞えないので更に又高聲になるのであつた。山上は片隅に空席を見つけると勢よく人々を押分けて行つた。

注文した皿と麥酒がはこばれると、山上は直にグラスを擧げるので、自分も之に倣つた。グッド・ラックと云ひながら、三人はグラスを觸れ合せて滿を引いた。

山上は上原君を閑却して自分の身の上を物語る。丁度中學卒業の前の年に學校を退いてしまつた此の男の、その後の消息は誰も知らなかつた。

「何しろ君、おやぢが商賣の手ちがひから學校に行く事も出來なくなつちまつたんだ。半分はヤケで飛び出して來たんだからね。長い間西部にゐてそれや君、いろんな事をやつたよ。」

彼は麥酒の分量と共に益々聲が高くなつてゆくのであつた。

此の國に來る若い者の誰もが夢見る通り、山上も初めは西部で働いて金をためたら、果しも無い程の畑を所有し、米國全土にゆき渡る或種の野菜の供給を一手に支配するやうな大農にならうと志したが、もとより百人の百人が失敗する同じ筋道をとつて、間も無く、彼の地から此地へと職を求めては移つて行く身の上になつてしまつた。働きさへすれば其の日其の日を送るのになん

の苦勞も無い此國の事だから、皿洗ひ、窓拭きはもとより、行商人にもなり、競賣屋にもなり、夏場あてこみの射的場、玉ころがしもやつたが、入れば入る丈使つてしまふ生活に、何時迄たつてもうだつが上らず、擧句の果が知人の傳を求めて紐育に來ると直に今の會社に勤める事になつたのださうだ。

「愉快だ。何しろ此の先生とは机を並べてゐたんだからな。それにしても君はちつとも變らない。ねえ上原君、この先生は昔の通りぢやないか。」

「左樣かねえ、僕は又非道く大人になつてしまつたんで一寸わからなかつた。」

「イイヤ、變らない。」

彼は少しフラフラして來て、愉快だ愉快だと叫んでは拳骨で食卓を叩いた。

「どうだい、ひとつ支那町でも案内してやらうか。」

などといつては自分の背中をいやつて云ふ程なぐつたりした。隣席の二三人は言葉が通じないので一層驚いた顏をして吾々をけげんさうに見守つた。彼はそんな事には平氣で愈々機嫌上戸になつて行き、午後の勤務のあるのも忘れて、しやべり續けてやまなかつた。

「僕は一足先に失敬しよう。やりかけの仕事が殘つてゐるから。」

上原君は見切りをつけて立上つた。
「マアいいぢやないか、久しぶりだ。」
山上は相手の上衣をつかんでしつつこく引とめる。
「又ゆつくり逢へるよ。兎に角今日は君も店に歸らなくちやいけないだらう。」
「ナアニ構ふもんか。」
彼は駄々ツ子のやうに首を振つて又麥酒をあふるのであつた。そのすきに上原君は椅子を離れて、一寸上衣の襟を直すと帽子をかぶつて歩き出した。
「いづれゆつくり逢ひませう。」
輕く會釋して階段を急いで上つて姿は消えた。
「ほんとに君も行かなくつちやいけないんだらう。」
自分は山上を促してみた。
「ナアニ構ふもんかどうせ店にゐたつて遊んでるんだ。――それよりか、どうだい此方に來て何か面白い事でもあつたかい。」
「面白い事なんかあるもんか。まだ着いたばつかりだ。船から直ぐに汽車に乘つたんだからね。」

云ひながらフト、シアトルの町で見た柴田の事を思ひ出した。
「オイ、君は柴田を知つてるか、寄宿舍にゐた奴さ。」
「アア、あの手癖の惡い奴だらう。」
「それさ。その柴田にシアトルで會つたぜ。」
「會つたか。どうした。彼奴はあすこいらを荒し廻つてゐやがるんだ。」
「往來で會つたんだ。すれちがつてから見たやうな男だなと思つてふりかへると、先方もふりかへつて見てゐるんだ。面倒だからスタスタ來ちやつた。」
「さうか、つかまると大變だぞ、彼奴にや。」
その柴田は西部の日本人のゐる地方と云ふ地方では、誰知らぬ者も無い惡漢になつて、惡事の數も重なつてゐるのださうだ。
「何でも女の事かなんかで人殺しもやつたつていふ噂なんだが、兎に角人間もああなつちやおしまひだね。」
山上は酒の醉に坐りの惡くなつた頭を背後の壁にもたせて天井を仰いだ。
自分は彼から聞いた噂から、柴田が如何して其處迄落ちて行つたかと考へた。さうして彼を無

頼の徒に突落したのは自分だつたにちがひないと考へられて詮方がなかつた。

十年近い歳月は流れるやうに過ぎた。自分が學校の寄宿舍にゐた頃の小賢しい姿は、二つ三つ年上の、痩せてはゐても大人のやうな骨格をした人相のよくない少年の姿と共に瞭然と浮んで來る。それが柴田だ。一同は彼を狼と呼んだ。蒼黒い顔に凹んで光る鋭い眼が獰惡な獸を思はせた。吾々の自習室は隣同志で、吾々の寢室は同室だつた。彼の父は商船の船長だつたさうだが、或夜の暴風に船もろとも行衛不明になつてしまつた。彼は小學に通ふ前から母一人の手で育てられた哀れな身の上であつたけれども誰一人彼を愛する事の出來た者はゐなかつた。意地惡で強情で氣嵩でその上妙に陰鬱な少年らしいところのちつともない少年だつた。

二年三年同じ寄宿舍で、同じ寢室で寢ながら自分は彼と親しむ事が出來なかつた。自分ばかりではない、自分と同室の者も、彼と同室の者も、彼と親しむ事は出來なかつた。

事件の起つたのは自分が中學の三年で、彼が五年の時であつた。百にあまる寄宿舍の室々の彼方でも此方でも小遣錢を盜まれて、それが外來の盜人か内部の者の所業か見當がつかなかつた。つかまへたら思ふ存分なぐつてやると、盜まれた者も盜まれない者も待構へてゐた。自分達の室の近所は不思議に無事だつたけれど、それでも全舍内の空氣に卷込まれて寄るとさはると盜難の

噂ばかりだつた。さういふ時室の片隅で何氣なく一人讀書してゐる柴田の、時折吾々の方へ投げる一瞥が如何したのか自分に盜人は彼であつたと疑はせた。どうして彼を疑つたのか後々迄自分ながら解らなかつた。ただ人々が頻々たる盜難に昂奮して殺氣立つてゐる中で、彼一人默々として平生よりも殊に人とまじはらず盜人評議に一言も口を出さない態度が、此の直感を助けたとより考へられない。兎に角自分は彼に嫌疑を掛けた其の日から、全く探偵の興味にとらへられてしまつた。しかし最後に此の嫌疑の眞實だつた事を確めたのは、それは自分の探偵の結果ではなくて、全く偶然の出來事だつた。

或朝、たしか代數の時間だつたが、前の晩から少し具合の惡かつた腹痛に堪へられなくなつて、自分は中途で教場を出て來た。寄宿舍の長い廊下が何時もよりも一層長く思はれるのを足を引ずるやうにして運んで來て自分達の寮へ曲らうとした時、フト人の姿が自分達の室から出て次の室へ吸ひ込まれたのを見た。柴田だ、と思つた時自分は腹痛を忘れてもとへ引かへした。

室長の鈴村が机の曳出に入れて置いた蟇口の紛失を發見して騷ぎ出したのはその日の午後であつた。自分は彼を人無き所に呼んで今朝の話をした。さうして犯人は必ず柴田にちがひないと云つた。鈴村は目を見張つて自分を見詰めたが、此事は誰にも云ふなと云ひつけて去つた。

その夜柴田は大廣間に呼び出された。吾々中學の生徒はその場に臨む事を許されなかつた。戶の外に立つてゐると委員の大學生が時々顔を出しては解散を命じた。しかし一度解散しても又直ぐに集つて來て、內部(なか)の模樣を想像しながら耳を聳てた。

急に激しい物音が起つた。重い物體の疊に落ちた音であつた。騷然と疊を踏み叩く音が續いた。戶の外の年少者は怖しい內部の光景を想像して息も出來なかつた。

數分の後、バツタリ物音が止むと五六人委員が出て來て吾々を追拂つた。

鈴村の蟇口は柴田の行李の中に發見されたのであつた。

その夜自分は終夜(よもすがら)寢られなかつた。自(みづから)委員の一人として制裁を加へた鈴村は健かな鼾を立てて、何事もなく眠つてしまつたが、室の隅の寢臺の上に夜具をかぶつて橫たはつてゐる犯罪者の無念の啜泣(すゝりなき)は、その鼾よりも低いのに、自分の耳には鋭く鋭く響いた。若し自分が密告しなかつたなら彼はこんな非道い目にはあはなかつたらうと思ふと、自責の念が胸に喰ひ入つて來た。なほ止度なく聞える啜泣に誘はれて、自分の目にも涙があふれて來た。人に知られては惡い、殊に柴田には知られ度ないと思つて、夜着の襟を嚙んで堪へても涙は容赦なく流れて來た。

柴田の姿は翌日から見えなくなつた。同室者の夜具蒲團は鋭利な小刀(ナイフ)で寸斷寸斷(ずたずた)に切り裂かれ

てゐた。

自分は數分間に古い記憶を長い物語としても、又繪畫としても追想して、それと最近に見た柴田、今の今聞いた柴田を結びつけて慄然とした。

若し自分が密告しなかつたら、と考へた時何とも云へない不愉快に襲はれて、思はず知らず目の前のグラスを取上(あげ)ると、半分ばかり殘つてゐる麥酒を一息に飲み干した。

「アアア。」

突然山上は大きなあくびをした。

「どうだい、そろそろ行かうか。」

「ア、行かう。君は兎に角店に行かなくちやいけないだらう。」

「ナアニ行かなくつていゝんだ。」

と云つたが少し酒のさめて來た彼は前のやうにはしやがなくなつた。さうして給仕人(ウエイタア)をさし招いて勘定をすると默つて立上つた。

「しかし君はこれから如何する。」

「僕か、僕は何處か見物でもして來よう。大丈夫だよ。ベデカアの案内記を持つてゐるから。迷

子にはなりつこない。」
「僕がひまだといゝんだがなア。」
山上は急に仕事を思ひ出したらしく眞面目になつてしまつた。
「大丈夫だよ。愈々方角が解らなくなつたら辻馬車にでも自動車にでも乘つて旅館の名さへいやあいゝんだから。」
「ソウだなあ。兎に角これでＡＢＣも習つたんだつけな。」
二人は話しながらその飮食店を出た。
「それぢやあ僕は失敬しよう。又ゆつくり逢ふ事にしようぢやないか。」
「ア丶まだ二三日はゐるだらうから。」
さうして無雜作に別れた。
車馬の間をくゞるやうに拔けて、往來を此方から向ふに渡つてゆく山上の小柄な後姿は、直ぐに人ごみにまぎれてしまつた。
時計を見ると三時に近いが、これから夕方迄を如何して暮さうか。豫て人々の話にも聞き、寫眞や繪葉書で見もして、高く炬火を捧げた姿を崇高なものに想つてゐた紐育の港の口に立つといい

ふ自由の女神の像を、第一に見に行かうか、それともハドソンの岸に立つといふグラント將軍の墓に詣で、その近くのコロムビア大學でも見て來ようか。又は中央公園(セントラル・パアク)にあるといふメトロポリタン美術館に金にあかして集めた歐羅巴の藝術品を一覽しようか。思ひ迷ひながらも往來の人に押されて自然に足を早めながら、何方(どつち)が上町(アップタウン)か何方が下町(ダウンタウン)か見當も知らずに歩き出した。

十數分の後自分は町の四辻に立つて、目の前の廣い公園を臨んだ。地圖を取出して見るとそれが中央公園だつた。そこで美術館を見る事にして公園の中の芝生の小みちを安心して歩いて行つた。

夕方、美術館を出ると、自分は先づ公園の人氣(ひとけ)の少ない木立の下の椅子(ベンチ)に疲れた身體(からだ)を置いた。日は暮れて空に殘つたうすあかりも見るまにうすれて行き、大樹のかげは冷々(ひえびえ)と秋の夜が迫つて來る。何時降りたとも思はないうちにそこいらを籠めて漂ふ霧の遠くに、町の灯がかすかに輝き初めた。それを見てゐると身は他郷にある事が沁々思はれて來るのであつた。

自分は立上つて町に出た。その時はもうそこいらはすでに燈火の巷(ちまた)になつて居た。驚くばかりあかるい店々(みせみせ)の燈火の他に、夥しい廣告の電燈が紅に青に紫に夜の空を照してゐるのであつた。

しかし自分はその光明の世界の中に旅の孤獨を感じて止まなかつた。

いつであつたか、まだ幼い頃、明治の初年に洋行した父が土産に持つて歸つたのだといふのぞき眼鏡を蟲干の時土藏のがらくたの中に見出した事があつた。それは極めて簡單なしくみではあつたものの、まだ西洋といふ二字を聞いた丈でも遠い遠い美しい世界を想像し得た時代に、わけて幼きものの目には珍しいものであつたから、一度は埃に埋もれてゐたのを引出して大凡百枚近くもある西洋の風俗風景を映した寫眞をさしかへさしかへては眼鏡に顏を押つけて飽く事を知らずに覗き見た。

太平洋の波濤に打ち傾く迄ゆられながらもその國の旗を高く揭げて進む黑船もあつた。廣い廣い原の向ふに浮ぶ白雲の下にたよりなく望まれる風見車を背景にして、音高く動ける如くさながらに映し出される汽車もあつた。それは自分が此の三週間の間に親しく通つて來た所の景色と融合つて自分の記憶の中にまざまざと蘇生つて來た。又他の寫眞には、芝生の中の小みちを行く裾長き人の日傘を越えてしづ心なく散る噴上の泉が見え、その下に波紋を描く池水に浮んで遊ぶ白鳥の群も珍しかつたが、それは今日中央公園で見た池の邊の景色ではなかつたらうか。それよりも車馬の往來のしげき町角に立つ騎馬の銅像寫眞は、あれは今自分の步いてゐる此處らあたりの

光景ではあるまいか。それからそれと、そののぞき眼鏡の寫眞はゆくりなくも思ひ出されて、中でも殊に幼かつた日の自分が好んでは自ら眺め入るばかりでなく、人々にも強てのぞかせた樣々の景色がその當時いだいたなつかしい感情を伴つてあまり明かに浮んで來るのであつた。

自分は幼い日に歸つたやうな賴りないなつかしさを感じながら夜も出さかる人通りの中を、旅舍の方へ志しながら、半世紀も前に父が旅人の心をいだいて歩いた道は此道だらうなどととりとめもない空想に誘はれて行つた。

突然、自分の前に立ふさがつた人があつた。

「どうしたんです。何處に行つたんです。」

と自分の肩に兩手を掛けたのは上原君だつた。

「今君の旅舍迄行つたんですよ。さうしたら、晝前に出たつきり歸つて來ないつていふから何處に行つたらうと思つてね。それでもよく此處で出つくはしましたねえ。」

自分は手短に上原君に別れ、山上に別れてからの行動を話した。

「兎に角旅の疲れでせうか、非道くくたびれたもんですから、旅舍に歸つて御飯でも喰べて寢てしまはうかと思つてたんです。さうしたら不意に肩を叩かれたんで驚きましたよ。」

「今から寢るなんて、そんな事があるもんですか、今夜はひとつ僕のお得意の伊太利料理でも御馳走しませう。隨分汚い家ですが、日本人がよく行くんです。スパゲテイは君は嫌ひですか。」

上原君は自分の手を取つてうら町の方へ歩き出した。

みちみち彼の語るところによると、先刻自分に約束した通り野添老人は明日その郊外の川添ひの家に此地在住の同窓者の誰彼を集めて自分をもてなしてくれるさうで、命をうけた上原君が方々へ電話で都合を問合せたさうだ。さうして不知案内の自分の爲めに明日は朝から旅舍へ來てくれて案内役になつてくれるのださうだ。

「矢張り同じ學校を出た人はちがひますね。殊に外國にゐると他人のやうな氣はしませんよ。」

しめやかな調子で上原君は語つた。

何處を如何歩いたのか、暫時して、ひつそりした暗い町の往來に淡く灯影を投げる小料理屋の前に二人は立つた。入口の扉に伊太利料理と書出してあるのを押して上原君は自分を導き入れた。

「此處ですよ。ちひさな家でせう。しかしうまい物を喰べさせるんです。」

さゝやきながら矢張り自分の手を取つて彼は奥に入つて行つた。茶褐色の窓かけで遮られてゐるので、戸外からは暗く思はれたが内部は思ひ切り明るい電燈に照し出され、存外奥深い板敷の

部屋に所狹く置かれた食卓は殆んど空席も無く客でいつぱいだつた。扉をあけた瞬間に幾人の人の一時に談笑する騷音が食器の觸れ合ふ音と一緒に耳を襲つたが、同時に立て籠めた室內の煙草の煙の濃い匂ひはあけた扉のすき間からほとばしるやうに突いて出た。

「どうも場所がありませんね。」

上原君は空席を求めて步いたが見當らないので引かへして來て困つた風で云つた。其處に立働いてゐる給仕人(ウエイタア)も氣の毒さうに揉手をして、折惡しく席の無いのを詫びるのであつた。

「待つてゐろつて云ふけれど何時になつたらあくかわからないから、しかたがない、何處か他の家に行きませう。」

と上原君は又自分を促して此家を出ようとしたが、

「オヤ。」

といつて立止まつた。

「上原君ぢやあないか。」

入口の自分達が氣が付かずに通り過ぎた一隅から高い日本語で呼掛けた。

「どうも場所がなくてね。」

上原君はその食卓に行つて話し始めた。
「そんなら此處に來給へ。いいぢやないか。一緒にやりませう。」
いい年配の少し頭の禿たのが自分の方に注意しながらすすめるのであつた。さうして直に給仕人を呼んで椅子を持つて來させるので、上原君は自分を招いて紹介した。
「アア貴方ですか今度日本から來られたのは。實は先刻程野添さんから電話で、若い學生さんが來たから明日は臨時同窓會をやる、出席しろッていふ話でしてね。――どうです日本も變りましたらう。」
その人は川邊といふ此の土地にも古い商人だと自分で名乘り、連の三十代の男は自分と協同で商賣をしてゐる人だと紹介した。二人は旣に卓上のキャンテイの壜を大方空にして、醉の發した顏を光らせて居た。
「イヤ兎に角同じ學校の人とかうして逢ふといふのは奇緣ですな。」
川邊さんは自分達の酒杯に殘りの酒を注ぎ盡して更に一本を命じながら、話好らしい態度で一人でしやべるのであつた。
「どうです、同窓といつても紐育にゐる者丈でも年配には段がついてゐますぜ。まづ私と貴方方

ぢやあ親子だね。さうかと思ふと又野添さんなんて古いとこがゐますからな。」
「あすこいらは第二期でせうか。辰野君のお父さんなんかが第一期でせう。」
上原君の話は仲介者らしく自分の方に話題を導く。
「辰野さんですな。辰野さんとおつしやると芝の山内にゐらつしやつた辰野さんですか。」
川邊さんは奪ひ取るやうに口を出して自分に聞いた。
「エヽその山内に居りました辰野です。只今は麹町の方にうつりましたが。」
「イヤこれは驚いた。それぢやあ私は貴方を抱いてしつこをかけられた事さへあるんですよ。
――これは驚いた。」
いかにも驚いたといふ表情をする川邊さんに一同は笑ひ出した。
「どうもそんな粗相をした覺えはありませんが。」
思ひ掛けない話に誘はれて自分も浮々した心地になつた。
「私は度々貴方の御宅へあがつた事があるんですよ。實は私は貴方の叔父さん――叔父さんですな、大場幸造君は――あの人の親友でした。なんとか云つた薩摩原の近くの下宿に二人でゐましてね、下宿の飯にあきると大場君は姉の家に行かうと云つては私を引張つて山内の御宅に出かけ

たものです。丁度貴方は二歳(ふたつ)か三歳位でしたかな。あの頃はお母さんもお若かつたが、もう大分年とられたでせう。」

川邊さんは酒の爲か度はづれの高調子で物語りながら手近の罎から手酌で注いでは飲むのであつた。

「それからあの、なんとかいつたつけ、まあちやんでしたかね、貴方の兄さんがあつたでせう。」

「私の兄なら正雄です。」

「さうでせう。吾々はまあちやんまあちやんといつたもんですが、あのまあちやんも大きくなりましたらう。」

「兄は一昨年結婚してもうおやぢになりました。」

「驚いた。」

川邊さんは又仰山に叫んだ。

「どうも驚いた。あのまあちやんがもうお父さんですつて。――驚くぢやありませんか。」

「何も驚く事はないでせう。川邊さんも隨分古いんぢやありませんか。」

側から連の男がからかふ。

「イヤ、自分の頭の禿たのはわかるが、他人のそれも子供の時分きり知らない人の年とつたのはとても想像出來ないね。何しろそのまあちやんが、やつと七八歳位なもので此方なぞはまだ目をあいたばかりなんだから。」

彼は身の上を物語るやうにその頃の話を始めた。

「そのまあちやんで思ひ出すが、大場君と一緒に非道い縮尻をやつてね、非道く叱られた事がありましたよ。」

まだ學校にも通はない位だつた兄の正雄の手を引いて、その同じ下宿にゐたといふ叔父と川邊さんとで向島のお花見に行つたのださうだ。他所の學校の端艇競漕のあつた日で、賑はふ人の群にまじつて競漕を見たり、子供につきあつてお團子を喰べたりして半日は暮れたが、元來甘い物には手の出なかつた大酒の叔父は、少しはためらひもした川邊さんを促して川岸の旗亭に歸路の疲れを忘れようとした。二人が憚つたのは、まだいたいけした正雄をつれてゐる事であつた。叔父から見れば姉の夫に當る嚴格な正雄の父に、かういふ場所に幼い者をつれて來た事が聞えた時、何といつて叱責されるだらうといふ心づかひがあつたのだ。

幾度盃をなげうたうとしても、それに別れられず、遂には一生を旅から旅と渡り歩いて旅先で

死んだそれも酒の爲だと云はれた叔父は酒がなくては血の通はない人だつた事を、自分は川邊さんの話を聞きながら想つてゐた。
その日も次第に盃が重なると叔父の眼は輝いて來た。
「どうもその場所が惡かつたので。」
と川邊さんは、それが現在の事だつたやうに頭をかいた。聽人は話を察して笑つた。
「始めのうちは神妙なものでしたが、どうも段々手持不沙汰に我慢出來なくなつて、大場君のいふには、まあちやん叔父さんが綺麗な姐さんを呼んでやらうかつて云ふんだ。そのかはり家に歸つてお父さんにもお母さんにも誰にも云つちやあいけないよと、まあ醉つた口が云はせたもので す。」
自分はその時の兄の姿がありありと日に浮んだ。それは幼い兄であつたか、又は自分自身の姿だつたかわからなかつた。自分自身の幼い日にも同じ話を持つてゐたから。自分は話を聽きながら自分自身の追想を追つてゐた。何處に行つた歸りだつたか、矢張り同じその叔父に芝浦の料理屋につれられて行つた事がある。その時叔父は今川邊さんの話したと同じ調子で自分にもその綺麗な姐さんを呼んでくれた。まつたく幼かつた自分には、かゝる席でかゝる女を見る事はまだま

だ知らぬ世界であつた。どんな女がどんな風をしてゐたか、叔父のその女等に對する態度がどんなだつたか少しも覺えてゐないが、初めのうちは恥かしがつてゐたけれどしまひにはその女の中の一人が面白がつて口をあかせては金とんを入れてくれるのを、自分も面白がつて喰べてゐた姿が明かに殘つてゐる。おなかがはつてしまふと、緣側の欄干につかまつて海を眺めた。目の前にまんまるな月がのぼつた。

「かなり陽氣にやつてゐるうちにまあちやんは眠くなつて、しまひには女の膝を枕にして眠つてしまつたものです。」

とかくして切上げて家に歸るみち〳〵も、眠くて眠くてたまらない正雄には、幾度も幾度も口止をして、御飯はと訊かれたら西洋料理を喰べたと云ふ返辭迄敎へ込んだ。

「どうもしかたの無い叔父さん達だな。」

話の途切れに連の男は又口を挾んだ。

「それもこれも昔の話さ。」

川邊さんは少し頭がふらふらして來たが、醉つた人に特有のわざと姿勢を正して話を續ける。

「ところが子供は罪が無いぢやあないか。うちに歸ると先づ歸りが遲いので大場君は姉さんに叱

られて居ると、それをとりなすつもりなんだ、叔父さん、僕は今日西洋料理を喰べたんたね、お茶屋に行つたんぢやあないねえつて、訊かれもしないうちにやつちまつた。」
川邊さんはたまらないと云ふ風で笑ひ出した。聽く者も一緒に笑ひ崩れた。あたりの客は言葉はわからないながらも吾々の方を眺めて笑つてゐた。
「かうなつちやあおしまひさ。すつかり油をしぼられたあげくに、辰野さんのお父さんに頭から叱り飛ばされたよ。」
川邊さんは話を終つて又笑つた。
「そのまあちやんがお父さんだつていふのに、こちとらは起きては轉び起きては轉び未だに紐育くんだりでその日暮しをしてゐるんだからなさけない。」
彼はうつちやるやうにつぶやいたが、
「時に大場君は今はどうしてゐます。」
と訊ねたので自分は寧ろ意外に思つた。
「御存じありませんが、あの叔父はもう餘程以前になくなりました。」
「ニッぽんとですか、あの大場君が。」

川邊さんも驚いて醉眼を見張つた。

「私は此方に來てからも初めのうちはチョイ／＼便りをしてゐたが、先生からは思ひ出したやうに年始狀なんかくれる位だつた。それも何時の間にかお互ひに打絶えて、なんでも十年ばかり前たつたか北海道に移住したなんて云つて寄越したきり、居所もわからないのでそのまゝになつてしまつたが、へエ亡くなりましたか。」

感慨深く彼はため息した。

「北海道には長く居ませんでした。それから一度新潟に居たと思ひます。あれは丁度七八年前になりますが急に何か思ひ立つて朝鮮へ渡りました。それから間もなく急病で死んだといふ電報を受取りました。」

自分を可愛がつてくれた大男の叔父を偲んだ。學問も出來、何をさせても間に合つたと聞くのに、叔父はあまりに感情が強かつたのであらう。旅から旅と流轉してゐた頃、自分の父が叔父を評して、あの男は惜い事に釘が一本たりないと云つたのを思ひ出すのである。

「大場君も亡くなりましたか。」

川邊さんは繰返して歎息した。酒の醉に持ち堪へかねる身體の上半身を食卓の上にのせて危く

支へてゐた。
「此の人の叔父さんだ、その大場つてのは。まるで兄弟のやうにしたもんなんだ。」
又話が元へ戻つて續かうとしたが、どうしたのか彼は急に額を卓上の手の平にのせてつつぷしてしまつた。
「先生參つたね。」
連れの男は吾々に目くばせしたが、
「オイ大將どうした。」
と川邊さんの背中を叩く。
「マアうつちやつて置き給へ。先生は何時でもこれなんだ。」
上原君も少量の葡萄酒に眞赤になつて後腦を兩手で支へながら陶然として煙を吹いてゐた。
「意氣地がないな。オイどうしたんだ。」
連の男はこれも聲の高くなつてゐるのが、うるさく醉人の肩を搖つて起さうとする。それでも川邊さんは頭を振つて起上る事を拒んだ。
周圍の客は何時の間にか立去つて汚れた食卓と共に殘つたのは、吾々の他に二組三組しか見え

なくなつた。
「大場君も亡くなつたかねえ。」
突然川邊さんは顔を上げてもつれる舌でかうつぶやいたが、彼の目からは涙が頬をつたつて落ちた。
「私は大場君の親友なんだ。」
同じ事を又繰返し始めた。
「此の人なんか僕の膝の上でしつこをしたもんだ。」
「もうい、もういい。わかつたよ。」
連の男はなだめるやうにもからかふやうにも見えた。
「それやあさうと今夜は進擊しないのかい。」
「いや、やめた。今夜は僕は此の人と大いに飲むんだ。――僕は此の人を抱いた事があるんだ。
面白いぢやないか。」
「飲む。飲むんなら兎に角場所を變へようぢやないか。」
「よからう場所を變へよう。」

川邊さんはいふかと思ふと立上つてふらふら席を離れた。給仕人（ウエイタア）が馳せ寄つて外套を着せた。
「私は疲れてゐますから失敬して旅舎（ホテル）へ歸りたいんですが。」
自分も立上りながら上原君にさゝやいた。
「大丈夫ですよ、途中でまいちまひますから。」
さうして吾々も彼等の後について戸外に出た。
「オイ君、一緒に飮まう。」
川邊さんは又醉が強く發したらしく連の男に支へられながら、二人とももつれ合つてひつそりした暗い町を千鳥がけに歩いて居る。
「吾々は同窓なんだ。同じ先生の薫陶を受けたんだ。大いに飮まうぢやないか。」
「飮まう飮まう。」
上原君は口では調子を合せながら、相手の步調には頓着なく自分の手を取つて足を早めて步き出した。
「オイ待たないか。オイ。」
醉拂（よつぱらひ）は後から聲を掛けて追ひつかうとしたが足もとが危いので倒れさうになつた。

「オイ君、僕は君を抱いた事があるんだ。」
後の方で怒鳴つてゐるので、自分は足をとどめてふりかへつたが、
「うつちやつてお置きなさい、うつちやつて。」
と上原君は自分を引張つて大通の方へ急がせた。町角で見かへると、暗い街を眞黒な人影が何か聲高く罵つてゐたが、そのまま吾々は明るい大路の人ごみに流れ入つた。
旅舍の前迄送つてくれて又明日を約して上原君はその上町の下宿に歸つて行つた。
自分は昇降器で運びあげられた高い階上の一室に落つくと、外套を脫ぐのも面倒な程非道く疲れてゐた。酒の後で急いで歩いた爲か蒸されるやうに暑いので、大路に面した窓をあけてその側へ椅子を持つて行つて掛けた。目の前の秋の夜の大空の下に未知の大都の燈火は無數に輝いてゐる。それをじつと見下してゐると、又しても孤獨の旅愁は寂しい心地よさを包んで胸に浮んで來る。事多かつた今日の一日にあつた人々の事も思はれた。意外な所であつた意外な人、川邊さんはまた此の夜更けの燈火の中を蹣跚として歩いてゐるであらうか。
それからそれと野添老人をおもひ、上原君をおもひ、山上をおもひ、そしてシアトルの街上ですれちがつた柴田をおもつた。

此の目の前の大空の下に住む人々、殊に自分の知つてゐる人々を限りなく懐しく思ふ心が、唯一人異國の旅舍の一室に頼り無い旅人の身の自分を、やがて柔かに涙ぐませた。（大正二年の春作
——六年三月二十日補筆稿了）

楡の樹蔭

一度積るとなかなか解けない雪は、日陰はもとより日向でも、人に踏まれて固くなつて、晴れわたつた青空の日などは目映く輝き、家々の窓硝子に反射して頭の痛くなる程冴えかへるが、ふと夕方から曇り初めた空模様を氣づかふうちに、又しても降り出す雪に風も添つて、夜に入つては家々をゆるがして渦巻く雪嵐になり、翌朝は膝を埋める迄積つた中を、あまりの寒さにおのづから流れる涙に濡れつつ學校へ急ぐ日が多かつた。横なぐりに吹きつける粉雪の、拂つても拂つてもかかる目つぶしに耳も鼻も凍るかと思ふばかり、故郷は遠く父母は遠く、一人異郷にさすらふ自分をはかなむ心の起るのも、雪の日の朝の學校通ひのならひであつた。

十一月の末頃、落葉の上に霰のたばしる夕暮を二度三度二階の窓から眺めて、その窓に近い並木の楡の夙く葉は落ちてかれがれになつた梢に、物に怖れて啼き叫ぶ木鼠のあわただしく狂ひ廻るのを、我身の事のやうに哀れがつたが、年の暮耶蘇降誕祭の前後は必ず大雪で、一年中で一番榮しい日の夜、家々の窓に輝く蠟燭の灯は一層戸外の雪を深く思はせ、何處から何處に行く橇か、鈴の音の鋭く聞えて、やがて町筋を遠く消えて行くのは、たとへるものも無く心をいたましめる

ものであつた。

長い冬の間、自分は幾度冬を呪つたかわからないが、何時か三月の初めになると、ふと蒸暑い一日が雪や霙の日の後につづき、着馴れたままに着て出た外套を腕に重くかかへて額の汗を拭ふ氣まぐれな日が訪れる。音も無く降り暮らす酒のやうな雨に日かげの雪も少しづつ解けて流れて、思ひ切りよく晴れた翌朝、家々を圍む芝生の芝の、もとより褪せはしたけれど、雪にも枯れたかつた青いのが一面に水蒸氣を立ちのぼらせ、見る間にその緑の色の萌え立つばかり濃くなる景色は、昨日迄雪に馴れた人の目を驚かすものである。

四月の雨と諺にも云ふ程温い春雨は柔かに此の天地に降りそそぎ、降りそそぎ、荒寥たる冬にあきあきした自分をして、終日窓際の椅子に何をするとも無く、その降りそそぐ雨脚を眺めて眺め暮らさせる事もあつた。

ふと晴れた日の散歩に、何處かの家のうら庭に連翹の花の咲いたのを見て、愈々春のおとづれを思ふ時、故鄉の我家の古びた庭を想ひ起さない事はない。冬中霜柱に起されて輕い埃を立て易い春の土に日の色の濃くなりまさる頃、その黃色い花は今迄灰色に包まれた庭の隅の竹藪の際に鮮かに咲き初めるのであつた。ちひさな黃色い花の一片を掌にして、迫り來る春を、なつかしい

人の消息のやうに感じたものであつた。

雪解けて連翹の花咲き初め候。

と母へ送る手紙の冒頭に認めたが、二日三日たつと垣根の際、うら庭の日あたり、教室の窓の下、到る處に咲きつづいて大空の藍もこの花の咲いた日から愈々深く澄みわたる。

けれども、此の國の春は極めて短く、楡柏橡楓、樹々の梢に若芽が萌え初めるともう夏で、見る限りの物の色が單純に光り輝く中を、女の衣服は一齊に白く、何處の家でもあけ放した窓から洋琴、提琴、その他のさまざまの樂器の奏づる音樂が流れ出て往來を踊るやうに聞えて來る。忽ちに附近一帶を埋めてライラツクの花が咲き初めると、その紫、白、薄紅、さまざまのいとしい花は町中むせぶ程濃い香を漂はせ、窓から吹き入る初夏の風は、讀書にもあきあきした時など、どうしても散歩に誘ひ出さないでは置かないのである。

或日曜の朝の事であつた。宿のお婆さんに教會に行かうと誘はれるのを怖れて、チヤアルス河の土堤に出かけた。灌木の枝の細かく差替す日影の草に仰向に寢轉んで、持つて來た今朝の新聞を開いた。目の前の川の面には、ありとしもない風に誘はれてさざ波が日に光り、名無草の咲きまじる草生にはかすかに羽虫の飛ぶ氣配がするばかりで、あたりには人の影も見えない靜な朝で

あつた。

遙かなる川上の連山はうす紫に霞んでゐるが、その峯を向ふへ越すと、其處が自分の生れた國、父母の家であるやうな氣がしてその山の峰の上に浮ぶ一片の白雲にさへ長く心を誘はれる。

A thing of beauty is a joy for ever:
It's loveliness increases; it will never
Pass into nothingness; but still will keep
A bower quiet for us, a sleep
Full of sweet dreams, and………

如何したのか無關係に Keats が Endymion のはじまりを何時か暗記したのを想ひ出して口誦むと、その美しい銀の霞へを自分の胸にも感じ、若々しい憧憬の念のなほ自分を見捨て果てぬ嬉しさを思つた時である、はらはらと目の前の新聞の上に露が落ちた。見上ると傍の木の梢に四五の雀が川水に濡らした羽をふるつてゐるのであつた。かよわい羽から振ひ落ちる無數の雫が金色に光りつつ散りかかるのであつた。

雀のゐる枝の上の上の青空を見て、少年の日に屢々とりとめも無く悠久に憬れた心持の蘇へる

のを思つて、なつかしくしかし果敢ない心地に誘はれて仰向きに寝ころぶと、大空の底迄も漂ふ藍は瞳に近くゆらぐのである。

Full of sweet dreams, and health, and……

と又順を追つて續けようとしたが記憶は其處で絶えて、繰返へしても繰返へしても行きどまつてしまつた。少なくともまだ十行位は暗記してゐたつもりだつたのが、いくら考へても思ひ出せない。

An endless fountain of immortal drink.
Pouring unto us from the heaven's brink.

と少し飛んで思ひ出したのを今度は聲に出して誦して、これで自分の知つてる句はおしまひだと思ふと安心した。

雀は何時か飛び去つたが、青空は愈々青く、正午に近い日輪は益々強烈に輝き出した。

夏だ、夏だ、ほんとに夏が來たのだとその時つくづく感じたのである。

更に日一日と樹々の葉は密生して往來も暗くなり、乾き切つた埃は自動車の過ぎて行く後に舞ひ上るので、それを防ぐ爲に道路一面に流すどろどろの黑い油の藥くさい匂ひが一層暑苦しく思

はれて來る頃は、もう自分の室は、窓近く延びた枝の尖迄繁りに茂る楡の葉に晝もうす暗く、あらゆる物が緑を映して青みわたり、ふと鏡にうつる自分の顔の蒼白さに驚く事もあるのである。朝はその細かい葉に埋もれた梢を僅かに洩れる日光が、あけ放して寢た窓近い寢臺の白い敷布の上に、あるかないかの風にゆらぎ、夕暮はその梢を透いて遠く平原に沈んで行く日にいろどられた雲のうつろひが心細く眺められ、夜は又あざやかに澄んだ月光に葉うら迄も光るかと思はれる。つけ忘れた燈火の無い室の中に忍び入るその月あかりに誘はれて、旺んだつた氣力の衰へてゆく父をおもひ、子供心にも又なく美しく思ひしみたのが今はその面影もはかなくなつてゆく母をおもひ、手紙の度毎に喧嘩した昔が戀しいと云つて來る姉をおもひ、つひぞいつぺん優しい言葉をかけた事もない我儘の兄の爲にも別れといへば泣いてくれる妹達をおもふ事も多かつた。

堪へられぬ暑さの長い夏を此の楡の樹蔭に送つた事も、一生涯忘れられぬ記憶の中に殘つて、何時になつてもありありとおもひ浮べる事が出來るであらう。

夏休みになつて、裏手の小部屋の學生はメインの家に歸省し、階下の工科の助手は田舍の大學の夏期講習に招かれて行つてしまひ、音樂を習ひにはるばるテキサスから來た金持の百姓の娘は、朝から晩迄相手にして口をきいてゐた祕藏の猫をつれて父母の家に歸つてしまつたので、室借り

は自分一人になつてしまつた。

ハアヴアアドの夏期講習に諸地方から集つて來る學生の、殊にそれは女が多いのだから、誰か若い娘でも室借りに來ればいゝがと、宿のお婆さんは自分にからかひながら繰返へしたが、別段若い娘も來ないで眞夏になつてしまつた。

休暇には旅行しようとかねがね樂しみにしてゐたのであるが、一體暑氣には負けやすい自分には酷しい此地方の六七月に重い鞄を手にして、停車場迄行くのを想像する丈でも堪へられず、涼風が吹いてからでもいゝではないかと思ふ無性が忽ち勢ひを得てしまつた。それ迄はひとつ思ひ切り勉強をしようと一人で盟つて、この誓約をいい事にして例の購書癖から夥しく本を買ひ集めてそれを机の上に積んだ。

窓の硝子戸はすつかりはづされ、蚊除けの目の細かい金網を張つたのに取かへられたが、南と西に向いた二つの窓と、室の入口の扉をあけ放しても風は吹き通さず、たまたま少しでも風立つ日には砂埃が舞ひ込んで、机の上、本棚、目に見る所手の觸れる所すべて白茶けた塵埃をかぶつてざらざらするので、自分の癇性は終日其處いらを拭いて廻らせた。

日に幾度となく頭から冷水を浴びても、後から後から汗になり、シヤツやカラアは一度外出す

るとびしよ濡れになつて濡紙のやうに身體に密着する。それでも此處いらの室貸しの家のおきまりで食事の世話はしないのであるから、三度三度外出しなければならないので、自分は學校の若手の教職員、上級の生徒、近所の女學校の女教員などの集るホオルに通ふ事にしてゐたが、その四五丁の往來には必ず此の濡紙をしよつて歸らなくてはならなかつた。

室内では上着やシャツも脱いで、端艇(ボート)の選手の着るやうな肩のつけ根迄の肌着一枚で、手あたり次第に本を讀んだ。初めに計畫をたてた通りに秩序正しく整然と讀む根氣はなく、ただ無闇に意地になつて讀むのである。額から襟から腕から流れる汗は玉になつて落て本を濡らした。

宿のお婆さんは裏庭の芝生の日影で編物をして暮らす。よくもそんなに編む物があるものだと思ふ程毎日毎日編物ばかりして居るのである。或は自分が考へる程手は働いては居ないのかもしれないが、兎に角毛糸の玉と銀の編針はいつもそのしなびた手の中にあつた。

芝生はくつきりと日向と日影(かげ)をわけて、その日あたりの垣根には思ひ切つて延びた向日葵(ひまはり)が馬鹿々々しく大きな花を咲かせ、強烈な色彩の粉をふいてゐる花輪を見詰て居ると、眩暈を起す程である。

お轉婆のルウスはこれも暑さに堪へられぬための氣まぐれから、かへつて暑い日向の芝の上に

仰向けに寢轉んで、日光浴をするのだと騒ぐのである。
「又ルウスがあんな眞似をして。」
とお婆さんはたまらなく可愛いといつた風で、此の年頃の器量の悪い祕藏つ子の日に曝してのぼせ切つた醜い顏を、決して醜いとは思はずに自分をかへりみて笑ふのであつた。
娘は又いきなり飛び起きて家の内に馳け込むと、直ぐに客間から洋琴の音の湧き上るやうに聞えて來る事もあつた。
不思議な事に此の母親似の頬骨の高い醜い娘は美しい友だちを一人も持つてゐなかつた。時折學校朋輩が集ると、暑氣にもめげず鬼ごつこをしたり追掛つこをしたり、家中を猫の子のやうに飛び廻つて汗みどろになつてゐるのを見るが、これはと思ふのは一人もゐなかつた。
お婆さんの一家は加奈陀から來たのださうだ。一千九百十二年の秋、自分が初めて此地に來て下宿を求めた時、最初尋ねたのは一軒置いて隣の老嬢姉妹の家で、十數年前その家に寄宿してゐた事のある日本の紳士からの紹介狀を持つて、馴れない土地を心細がりながら、その家の蔓薔薇の花の眞赤に咲いてからんだ扉を叩いたのであつた。出て來たのは大兵肥滿の老人で、此方の下手な英語が耳の遠い人には一層通じないで困つたが、紹介狀を出して見せると、受取つてうなづ

いて奥に引込んだ。
暫時すると脊の高い、高過る爲に少し猫背になつた白髮の、しかし子供らしい顔つきの女が出て來て自分を室内に導き入れた。これが紹介狀の名宛人で、非道い若白髮の爲にふけて見えるが、まだそれ程の年配ではなかつた事を後で知つた。導かれるままに狹い客間に一歩入ると、直ぐ壁にかかる縫取の富士山や日光廟などの額や、長椅子の上の友禪縮緬のクツシヨンや、棚の上の九谷燒の花瓶などが不思議に目に映じたが、話してみると自分に紹介狀をくれた人ばかりでなく、誰彼と十數人の日本人の名前を擧げ、これ等の日本品はその人々の贈物である事を說明した。この人は極端な早口で、おまけに話をしてゐるうちに、口中に唾のたまるたちなので聞きとりにくくて困つた。自分は幾度問ひかへし、幾度頓珍漢な返事をしたかわからない。
その時その家には空室が無いので、直ぐ近所の加奈陀から來た人の家を紹介しようと云つて、連れて行かれたのが自分の今の宿なのである。
初對面の時お婆さんは自分を十八九の少年にしか見なかつた。察しの惡い年寄と下手な會話で苦しむ度にお婆さんは娘を呼んだ。娘には此方の云ふ事が比較的によくわかつたが、それでも非道い片言と、歐米人に比べては矮小な體格なのでルウスは同年配位に思つたと、後々笑ひ話の種

にしてからかつた。自分が學校に入るのだと云つた時も、お婆さんは小學校からやるのだらうと思つたさうで、大學に入るのだと教へた時は幾度も幾度も念を押して間違ひではないかと訊ねた。鞄をあけて取出した本と、着いた翌日から買ひ集め初めた本を見て、お婆さんは奇異の思ひをしたさうである。

「この國には話は何の差支へもなく出來ても本の讀めない者は澤山居るが、お前のやうなのは珍しい。話は出來なくて、どうしてこんなむづかしい本が讀めるだらう。」

と眼鏡をかけかへては、本箱に並んだ本の背表紙を見て小首を傾けた。

娘は有名な體操學校サアジェント・スクウルに通つて居て、卒業したら加奈陀に歸つて學校の先生になるのだと云つてゐる。早く加奈陀に歸り度い歸り度いと云ふので、どうしてそんなに加奈陀が好きなのかと訊くと、

「だつて加奈陀は大雪が降つて、スケエテイングをするのに此處よりも餘程面白いんですもの。」

ときまつて答へる程單純であつた。そのくせ學校は大變よく出來ると、その學校の先生が自分の行くホオルの食卓で噂をしてゐた。

息子は何處に通ふのか、朝は早くから出て夕方ぐつたり疲れて歸つて來る。亞米利加人のなら

ひとして、職業金錢については隨分あけすけに話し合ふので、彼は自分にむかつて一ヶ月どの位小遣を貰ふかとか、故郷の父親は金持かなどと遠慮の無い質問をしたが、自分にはどうしても彼の職業が何であるかをきく事が出來なかつた。いかにも勞働で鍛へあげたやうなごつい體格と、全く學問的に事物を考察する事の出來ないらしい彼の日常から推察して、あまり立派で無い職業に違ひないと思はれる程、訊ねる事が出來ないのであつた。快活な娘に比べて此の兄はたんまりむつつりで、時には母や妹に向つて癇癪を起し、荒々しい聲を張上げる事もあつた。

同じやうな家の立並ぶ此の一筋の楡の並木に影暗き町の人々は、大概ゆきずりに見知つてしまつたけれど、自分が最もちかしくしたのは老孃の姉妹であつた。

姉は近所の娘達に洋琴を教へ、妹はボストンの女學校に敎鞭を執つてゐた。大兵肥滿の老人は姉妹の叔父で、今は僂麻質斯(レウマチス)で歩行も不自由な位だが、唯一の樂しみの烟管(パイプ)をくはへながら南北戰爭に從軍した當時の話をする時は、聲も顏付も活氣づいて見ちがへる程元氣になるのである。

自分が讀書好きだと知つてから、古典の好きな姉は古典を勸め、近代文學に熱中してゐる妹は主として歐羅巴の近代作家の作品を讀めと勸めた。下手な英語を氣にしながらも、馴れては批評めかしい事も云つて、時には流行の女性問題を論じ、時には米國々民性を論じたりした。

どういふものかこの姉妹は、亞米利加人の癖に亞米利加と亞米利加人が嫌ひで、英吉利に憬れて居た。此の國の人の粗野を嫌ふのはもとよりその一原因であらうが、他方に於ては文學書によつて多く英吉利についての知識を得、それを理想化してゐる爲であつたに違ひない。

遊びに行く度に所望して音樂を聽かせて貰つたが、姉はメンデルソンの「春の曲」が好きで、きまつてそれを彈いた。

或時妹が一册の本をくれて批評してくれといふので、貰つて歸つて讀むと、それは妹が自作のLove in Umbriaといふ三幕の戯曲であつた。その批評を眞顔になつて求めるので、いゝ加減な返答も出來なくなり、讀んでは面白いけれど戯曲の建築的要素を缺いてゐるから舞臺の上では效果は少ないだらうと云ふと、姉は手を拍つて喜んで、それこそ自分が常々妹に云つてゐる言葉なのだとはやし立て、

「何しろこの人は人ごみに出るのが嫌ひで、芝居といつたつて讀むばかりで見た事は無いのだから駄目ですよ。」

とからかふのを、妹は眼鏡の下でその癖の目をしばだたいて、笑つて聞くのであつた。

夏になつたら亞米利加中を旅行して、旅日記を書いて見ろと姉妹はしきりに勸めたけれど、自

分はケムブリツヂに居殘つて、時たまLongfellowの住んだ家の邊りからチヤアルス河の川上の方へ歩き廻るか、時には汽車でコンコルド邊迄行き、彼のEmerson, Howthorne, Thoreau等の住んだ家々を見て來る事もあつたが、多くは暑氣のはげしさに怖れをなし、籠居して讀書に長き一日を暮らしあぐむ日が多かつた。

雨は降らず、日は照りつけるばかりなので、昨日今日の新聞にはボストンの町で日射病に倒れた人の名前が並び、各教會は申合せてその戸を公衆の爲に開き、晝は行人の休息所にあて、夜は誰人でも自由に一夜の屋根を借りるやうにしたといふやうな記事を掲げてゐる。

暑い暑い夏の日に我窓の楡の下枝は力無くうなだれ、その葉は光澤を失つて今にもぢりぢり焦げて燃えさうに見えるのを、忌々しく眺めながら夕暮ばかりが待たれるのであつた。

とかくして長い一日も何時か片影が多くなり、あれ程人を苦しめた日輪も楡の梢の向ふの空をうす紅に染めて、次第次第に大通りの高い建物のかげに沈んで行くと、忍び寄る黄昏は日中の暑さにだらけ切つた一切の動植物をよみがへらせる。

ここらあたりは同じやうな門も無ければ垣根も無く、緑の芝生でつつまれた家が楡の並木をさし挾んでつらなるのであるが、晝の間何處にも人は居ないやうにひつそりして、ただ暑氣ばかり

漲りわたつてゐたのが、日がかげると何處の家でも急にポオチに椅子を運び出し、家中其處に出てやすらふ時、子供は芝生にまろび合ひ、犬は往來を勢ひよく馳廻るのである。女の衣の白いのがハンモツクの網の目をもれて涼しげに見えると、ふだん見馴れた娘で、あんまり美しくないのさへ、ゆきずりにふと心をひかれてかへりみないではゐられない事もある。食事が濟んで灯がつくと、方々の家から輕い音樂が聞えて來る。

筋向ふの子供の多い家では十六七を頭にどれが兄だか弟だかわからない五六人の男の子の、洋琴を彈くのもあり、ヴアイオリンをひくのもあり、マンドリンをひくのもあり、クラリネットを吹くのもあつて、毎晩食後にはきまつて簡單な勇ましい行進曲を合奏する。

それを先刻市中の勤務から歸つた半白の父親は、上衣を脫ぎ、シヤツの袖をまくりあげ、はちきれさうなお腹を平手で叩きながらマドロス・パイプをくはへ、緣に持出した搖椅子に腰かけて前後に體を動かしながら嬉しさうに聽き入り、あの體でよくも澤山産んだものだと近所で話し合ふ小柄な母親は夫のうしろによりそひながら、まだ乳呑子の末の子を抱いてあやして居る。

この子供の多い家の合奏は決してその一家ばかりの樂しみではなくて、此の家を中心にして東西に延ひてゐる一筋の道路を挾む十數軒の家族も、又始つたとばかりに夕涼のポオチに總出で聽

くのである。
向ふ側の恰度子供等の家の隣家の跛の娘も芝生に下りて不自由な足でそゞろ歩きながら、時々子供等の父母に聲をかけたりしてゐる。
隣家の美しい兄妹は一人の母親を中にして家の戸口の段々に腰掛け、廿歳位の希臘の彫刻にある勇士のやうな輪郭を持つ顏の兄の方はしきりに口笛を吹き、十六七の兄に似てしかもそれを極端に優しくした、二三年後の美しさの心配になる程明瞭に想像される妹は足拍子をとつて調子を合せてゐる。
その又隣りの老孃の姉妹も、絶えず煙を吹く叔父と共に聽手に加はつてゐる。
自分の宿のお婆さんは一番風通しのいい緣端の椅子にちよこなんと腰かければ、その膝に上半身をもたせかけて娘は床の上にぢかに足を投出し、一日の仕事で疲れ切つた息子は疲勞の後の休息を限り無く享樂する健(すこやか)な肉體を芝草の上に横倒しにして、大空に眺め入つてゐる。
每日每日殆んど同じかういふ景色が自分が晩の食事から歸つて來ると、必ず其處に展開される。
「いい風ですよ。」
「ちつとお涼みなさい。」

お婆さんと娘はきつとかういつて勸めるので、自分も入口の扉の前の段々に腰かけて、楡の葉越しに吹下す夜風に吹かれながら、へだてのない夏の夜の隣近所の人々の中に更けてゆく迄語りあふのである。

子供等の合奏が一曲終る毎に其處此處の家々の聽衆は一齊に拍手する。すると子供の父母は喜び極まつて手を振り半巾(ハンケチ)を振り立てて拍手喝采に酬ゐるのである。時には聽衆のいたづらから再び三度(みたび)同一の曲を所望し、若し子供等がはにかんでひつそり靜まりかへつてゐると、何時迄たつても拍手しつづけて促し立てる。かういふ時は父親が室内に入つて、子供等に勸めて又も繰返へさせるのである。宿のお婆さんも娘も、隣家の美しい兄妹も、お向ふの跛の娘もする拍手に自分も一緒になつて手を叩くのである。

子供達は、中には三度も四度も繰返すのもあつて、知る限りの曲を奏し終ると、又一しきり盛んな拍手の中を、或者は勇しく室内から躍り出して芝生の上に飛び下り、飛び下りたかと思ふと其處いらをころがり廻り、或者はさも演奏に疲れたといつた風を見せて父母の背にもたれかかるのもある。

それで演奏會は終つて聽衆は崩れ初め、そのまま其處にゐる者も突然思ひも掛けない話題に飛

んで、何時の間にか全く子供達の存在は忘れられてしまふのである。さうして人々は床に入る迄、多くは戸外で語り合ひながら更かすのであるが、自分は又二階の一室に讀みかけの本を開いて、机にむかふならはしであつた。

「そんなに本を讀んでどうするんです。」

とお婆さんは何時も云ひ云ひしたが、訪問客でもあつて自分を紹介する時は、

「これは私のもう一人の子供です。おとなしくて勉強家で、むづかしい本ばかり讀んでゐます。それは朝から晩まで。」

と自慢にして云ふのであつた。

人々が寢靜まつてから燈火を消して床に入つても眠られぬ夜が多かつた。眠られぬままに又起きて、窓の近くに椅子を据ゑて樅の梢を渡る夜風に、知る限り故郷のうたを口笛で吹き鳴し、吹き鳴して脣が乾いて痙攣して震へる事もあつた。さういふ時には又、昔學校にゐた混血兒の少年が運動場の片隅で寂しさうに歌つてゐたのを聞き覺えたはかない唱歌をきつと思ひ出して小聲でうたつた。

My Bonnie lies over the ocean,

My Bonnie lies over the sea,
My Bonnie lies over the ocean,
Oh, bring back my Bonnie to me.
Bring back, bring back, bring back my Bonnie to me.
Bring back, bring back, oh, bring back my Bonnie to me.

（大正六年七月十八日）

大都の一隅

古代埃及希臘から近代に至る迄の夥しい繪畫、彫刻、瓶子、織物、細工物、あらゆる藝術の勝れた作品を、ひとつひとつ順々に見て廻るうちに、暮れやすい日はいつか傾いて、美術館の內部はうす暗くなつて來た。

梁瀬は先刻から二三時間も歩きづめに歩いてゐた疲勞を一層強く感じて、まだ全館の半分も見ないのではあるが、今日はもうおしまひだと思つて、足を停めた。丁度その足をとどめたところの少し仰いで見る壁の中央にエドワアド・バアン・ジョオンスの「戀の歌」がかかつてゐた。彼はそれを見ると、友だちに逢つたやうな氣がした、恰も室の眞中に置いてある長椅子に腰を下して、改めてその繪を仰ぎ見た。三週間ばかり前、愈々この亞米利加をさして日本を離れる前日に、相模の海岸の病院に不治の病軀を養つてゐる親友に別れを告げに行つた時、藥品の臭の鼻をつくその病室の白壁に、寫眞版の此の繪がかかつてゐて、額ぶちと寫眞の間を埋めた鼠色の羅紗紙に、

"Hélas! Je sais un chant d'amour,
Triste ou gai, tour à tour."

と友だちの癖のある下手な字で書いてあつた。少し熱があるといつて寢たまま話をしてゐる友だちの寢臺の側に、寂しい心持で腰かけてゐた梁瀨は、慰安の言葉の見出せない所在なさに、二三度口吟んでその句を覺えてしまつた。今も亦それを一人で口に出してつぶやいてみた。友たちの氣の毒な身の上が想はれると共に、この水彩畫を親しいものに思つたのである。

遠く牧場を望む廣場の草の上に坐つた若き騎士は、目の前に歌ふ女を見詰めてゐる。女は片手には開いた本を持ち、片手ではオルガンを彈いてゐる。そのオルガンの傍には翼を持つ人の姿で、目かくしをし、薔薇の花輪を冠にしたのが坐つてゐるのである。此のラファエル前派の詩的空想は紅、うす紅、紫、黃、靑、水、あさぎ、さまざ\のこまやかな色彩に柔かい諧調を保つて、うす暗い室内に優婉に暮れ殘つた。

ぼんやりそれに見入つてゐるうちに、疲れた彼は眠くなつた。

「お母さん、あれ日本人？　支那人？」

ふと子供の聲がしたので驚くと、目の前を若い母親に手を引かれて、まるまると肥つた五歲六歲の男の子が、物珍しさうに彼の方を見度がるのを、母親は困つてぐんぐん引張つてつれて行つてしまつた。半づぼんの下から眞白な膝つ子の出た足は、殆んど馳足で引擦られるやうにつれて

行かれながらも、その子の好奇心は梁瀬の黄色い顏をふりかへつて見ないでは承知しなかつた。

梁瀬は又かと思つて苦笑した。シアトルの港に上陸した日から、每日每日往來で繰返す不愉快な經驗だ。日本人は支那人よりも遙に強く優越した國民だといふ自負心が傷つけられると同時に、昨日迄世界の優等國民だと勝手に決めてゐた安心が根底からぐらついて來た。太平洋を越えた此の岸では、天孫人種だと稱する吾々も、吾々がちやんちやん坊主といやしめる支那人も、ひとしなみに劣等な國民としか見えないのであつた。

梁瀬は自分自身を慰める爲にわざと舌打ちをした。時計を出して見ると閉館時間に近づいてゐるので、もう一度バアン・ジョオンスの繪を仰ぎ見て、さて出口を志して歩き出した。

勝手がわからないので、無闇に廣く思はれる繪畫部の室內を足早に拔けて、稍廣い廊下に出ると、いづれも歸りを急ぐのであらう、同じ方角に向つて行く人が澤山あつた。それにまじつて歩いてゐたが、ふと石の太いまろ柱のかげに一人の男が畫架に向つて鉛筆を走らせてゐるのを見た。ふりかへつて見ると、その後姿はどうしても東洋人である。何氣ない風をして少し橫手に廻つて見ると、頰骨の高い黃色い貧弱な顏は疑ひもなく東洋人だ。梁瀬はそこいらを通り過る白皙人が珍しさうに此の美術學生をかへりみてゆくのを見ると、自分も亦彼と同じ黃色い顏の持主である

事を恥ぢた。その男が其處に貧弱な風采をして、大理石の女の裸身像を寫生してゐるのを憎んだ。その男をふりかへりふりかへり見て行く人々の目の色から、全體としての黄色の民が理不盡に侮蔑されてゐる光景をまざまざと見せつけられる爲に、彼の存在が無かつたら吾々も亦輕侮は受けないのだといふやうな非論理的な感情が起きてゐたのである。しかし次の瞬間には、その男の猫背と、中凹みになつた平べつたい胸と、ちり毛もとの寒さうな首筋から推察して、彼は支那人だと思つた。日本人ではなかつたのだと考へて安心した。支那人ならば自分とは縁が遠いと思つた。もう自分が支那人と同一視されてゐる事は瞬間的に忘れてしまつて、矢張り日本人の自負心に依頼してゐたのである。

　その男が支那人だと決まると、梁瀬は一度通り過ぎたが、先方の氣のつかないのをいい事にして、又後戻りして、後からそつと肩越にのぞいてみた。

　誰の作だか知らないが、全身裸體の女の、右の手は高くうしろに廻して、洗つて解いた髮を握り、左の手は輕く乳房を抑へてゐる立姿の、少し反身になつた胸から腹の曲線が大きくうねつてゐる邊迄、既に鉛筆は運んでゐた。うまいかまづいかは、もう少し近寄つて見なくてはわからない。支那人なら構ふものかと思つた時、その男は人の氣配に鉛筆を止めてふりかへつた。梁瀬は

流石に何氣ないふりをして、今通りかかつたやうに見せかけながら歩き出した。

「君、君。」

いきなり後から呼止められた時、それが明瞭な日本語たつたので梁瀨は吃驚してふりかへつた。

「君、君。君は日本人でせう。」

その男は三脚を離れて立上つて、梁瀨の方へ近寄つて來た。

「君は日本人でせう。」

「エエ、さうです。」

赤面して梁瀨は答へた。

「ね、矢張りさうだ。日本人は直きわかりますよ。」

男は自分よりも餘程脊の高い梁瀨を下から覗くやうに見上げた。

「君はまだ日本から來たばかりでせう。どうもさうらしい。」

「さうです、まだ來たばかりです。C町に着いたのは四五日前なんです。」

「ヘエ、四五日前に來たのか。」

彼は少しの遠慮も無い態度でしげじげと梁瀨の顏を見守つた。

「一體君は何處で働いてるんだい。」
といつの間にか言葉もぞんざいになつて來る。
「何處で働いてゐるつて。」
「さうさ、何をしてるんだい。家内勞働（ハウス・ワアク）かい。」
梁瀨は初めて其問の意味がわかつた。
「イイエ、僕は學生なんですよ。」
「僕だつて學生さ。」
男は昂然として云つた。
「學生だつて君、金錢（マネ）がなくちやあ學校に行けやしないや。なにかい、君は金持かい。」
梁瀨は馬鹿々々しくなつたので、默つてその貧弱な小男を見下して、今でも矢張り彼は日本人ではなくて支那人なんだといふやうに思へてしかたがなかつた。
「C町にゐるつて云へば、H大學にでも入（は）るんですか。」
男は輕蔑したやうな、しかし又尊敬の準備をしてゐるやうな落（おち）つかない態度で、言葉も亦叮嚀になつて、しげじげと梁瀨を見詰めてゐる。

「エヽ、H大學に入る手續を昨日濟(すま)したばかりなんです。一學期には遲れてしまつたけれど、遲ればせにも講義丈は聽き度いと思ふんです。」

「へエ、H大學の生徒(ステユウデント)なんですか。隨分金錢(マネ)がかかるだらうなあ。」

梁瀨はその男の口ぶりのいかにも卑しいのを侮蔑しないではゐられなかつた。彼は經濟學を學んでゐるのではあつたが、子供の時から藝術の作品を熱愛し、引いては藝術家を尊敬する心を持つてゐて、ともすれば藝術家だといふ單純な一事で、その人間を過重に敬ふ傾向さへ免れなかつた。從而(したがつて)此の美術學生の態度は、彼が心に描く藝術家のそれと、甚しく相反するので、反動的にも輕蔑し度くなるのであつた。

「貴方は始終此處へ寫生に來るんですか。」

「僕ですか、僕は此の裏手の美術學校にゐるんですが、一週間に一度づつ何かしら畫いて教師(プロフエツサア)のところに持つて行つて見せなくちやならないので、此の模寫を始めたんですよ。僕だつてもうちつと腕がありやあ、いゝ金を取るんだがなあ。」

と妙に剽きんな顏をして笑つたが、梁瀨は笑ひもしないので、何かしら具合が惡さうに、

「この國ぢやあ、君、繪かきは實際いゝ職業(しようばい)なんですぜ。」

と眞顏になつてつけ足した。

梁瀨は益々つまらなくなつて、機會さへあれば逃げようと思つたが、そのいい機會が見當らなかつた。

男は一人で面白さうに、美術學校には女の生徒が多いとか、月謝は幾何だとか、もう少したつと生きたモデルのしかも裸體のが描けるとかいふやうな話を他愛もなく續けたが、

「アア、何時の間にか暗くなりやあがつた。」

とつぶやいて、黃昏の忍び入つた室內を今更のやうに眺め廻した。

「もうおしまひにして、出ませうか。」

さも初めからの道連れだつたやうな口のきき方をして、

「一寸待つて下さい。直き片附けますから。」

と云ひながら畫架の方へ馳出したが、見る間にそれを三脚と一緒に短くたたんで、畫板を腋の下に挾んだ手に提げて來た。

「サア行きませう。お待遠さま。」

彼は先に立つて步き出した。

もう館内には人の影も見えなくなつた夕方の暗い中に、うす白く光る石階を並んで下りると、男は又梁瀬を待たせて、その畫架と三脚を何處かへ預けて來た。

館外に出ると、存外まだ明るくて、前庭の廣い芝生の上の夕空は靜に高く仰がれたが、その空の幾分は黑い雲に覆はれてゐて、晴れた部分が透き通る程澄んでゐる丈暗かつた。間も無く夜にうつりゆく暫時の間を、ためらひ勝に暮れて行く光の中にも秋に限られた寂しさが漂つてゐる。人工的に温められた館内から出て來たので少しの風も寒かつた。梁瀬は手に持つてゐた外套を着て、先立ちの男の後について行つた。

目の前にひろがる大都は既に暗い影になつて、ところどころの教會のゴシック風の屋根ばかりが抜ん出て高く暮れかねてゐる。知らない土地の夕暮を梁瀬は身にしみて感じた。

「アアア、腹がへつちやつた。」

男は吸ひ盡した煙草を投げ捨てると、それを追かけて行つて踏み躙りながら、力の無い聲でつぶやいた。

「どうです、これから倶樂部へ行つて牛鍋でもつつつきませんか。」

「倶樂部?」

「エエ、日本人會ですよ。晩にはみんな寄つて一緒に飯を喰ふんです。吾々には矢張り米の飯でなくては駄目ですからね。」

「だつて僕は會員ぢやありませんもの。」

「會員でなくたつて構はないんです。僕と一緒に行けば。それやあ愉快ですよ、いろんな奴がゐますからね。兎に角來てごらんなさい。」

彼は熱心にすすめるのである。

梁瀨はC町に來てから、H大學には日本人も少しはゐるとは聞いてゐたが、別段友だちでも無い人を戀しがる性質でもなし、殊に外國では知らない同胞などとうつかりつきあつてはゐられないと考へて居たので、此方からたづねて行く氣も無かつたが、この學生にあつて、兎に角暫時に獨語の他には口にした事の無い日本語を話してみると、不自由な英語の發音を氣にしながら胸をどきつかせてもどかしく話すよりは氣楽でいゝ。その日本人會といふのに行つて見て、海外生活をしてゐる同胞に逢ふのも、一の新しい世界を見る事だから面白さうにも思はれる。多少はあつた疑懼の念を打消して、梁瀨はその男の誘ふままに、一緒に大通りを歩いて行つた。

兩側の並木の楡楓は殆んど散りつくし、僅かに殘つた枯葉は、うそ寒い梢の風に吹かれて鳴つ

てゐる。大店は早くから戸を閉めて靜まりかへつてしまつたけれど、繁昌の中心には少し遠いここいらの町の小さい店は遲く迄商賣をしてゐるので、果物屋烟草屋菓子屋染物屋小料理屋などの軒を並べてゐる間に、殆んど町の角々には生藥屋か酒屋が、一際明るい燈火を往來へ投げかけて、出入りの人の足も絶えない繁昌を見せてゐる。何處からともなく肉を燒く匂ひが流れて來るのを感じる頃は、町にはうすく霧がかかつて、その霧の底の底に、ところどころ星屑の三つ四つ五つづつ、雲切れのした空の間にちらばつてゐるのが仰がれた。

往來の人は多いけれど、何れも先を急いでさつさと擦れ違つてしまふのであるが、時々はその町角の酒屋酒屋から、嚙烟草の赤い唾をぺつぺつと吐きながら、足下も危なくよろけ出て來る醉拂ひもあつた。そんな時にふと立別れても、また直ぐに二人は肩と肩とすれすれに並んで歩いたが、一人は猫背の背中を愈々まるくして默々として歩いてゐる。梁瀨は外套を着てもまだ冷々する十一月の夜の空を屢々仰いでは、故鄕の遠い事を想つた。

一君、君。一寸此處に寄つて行きませんか。」

ふと二三歩遲れた連の男に呼ばれてふりかへると、今通り過ぎた酒屋の入口を指して男は立ちどまつたのであつた。

「ね、一寸一杯麦酒でも飲んで行きませう。」
彼は梁瀨を促しながら、その酒屋の重い扉を押して入つた。濛々とした烟草の煙は天井から下つた幾つかの電燈の光をくもらせてゐるので、そこいらにうようよしてゐる客の姿も明瞭とは見えないが、ただ雑然と人々の話し合ふ聲が入りまじつて、喧嘩口論をしてゐるやうな騒がしさである。
バアの前に立つて、男は兄分らしい態度で梁瀨の好みをきいてから、麦酒を二つ命じた。
「グッド・ラック。」
彼は得意さうに云つて、何も知らずに梁瀨が既に口のはた迄持つて行つた硝子杯に彼の硝子杯をかちりとあててから、上に浮んだ雪白の泡を一息に床の上に吹き飛して、扨て仰いで飲み干した。
「もう一杯どうです。」
と梁瀨を見上げたが、そのまま返事も待たずにおかはりをいひつけて、それも亦一息で飲み干した。
「アア、いゝ氣持になつた。どうしても仕事をした後では、一杯やらなくちや駄目だ。」

一人言めかしてつぶやいたが、梁瀨が衣嚢から小錢入れを出したのを見ると、

「どうも濟まないなあ、君に拂はしちやあ。」

と云つたが、別段濟まないらしくもなく、先きに立つてさつさと戶外に出た。

「どうも濟まないなあ。」

後から出て來た梁瀨を町角で待ちうけて、又同じ事を繰返したが、

「だけどいいや、君は金持ちなんだから。」

とつけ足した。

夜の霧は深くなつて、店々の燈火もうすぼんやりと滲んで來た。少し醉の出た顏に觸れる風もしめつぽく濡れてゐる。

「今夜は雨だ。」

しばらくして男は一度空を見上げたが、又持前の猫背になつて足早に步いた。

間もなく先立ちになつた男は、町角の或るうす暗い建築物の前に立停つた。

「此の二階が俱樂部なんです。」

と云つて指さす上の方の霧にくもつた窓硝子から、ぼんやりと燈火がさしてゐる。入口の石段

を上つて重い扉の内に入ると、うす暗い廊下で、直ぐとつつきに急な階段が稻妻形に二階の方へ導いてゐる。二人はそれを上つて行つた。

二階へ上り切ると狹い廊下で、又三階へ導く階段がうすぼんやりと見えたが、それよりも手近い目の前に倶樂部の入口があつた。

連の男が戸をあけた時、梁瀨はそのすき間から渦卷いて出て來た烟草の惡臭と、その烟草の煙の底に騷然と談笑する人の氣配に襲はれた。

「今晩はお客様をつれて來たぜ。」

猫背の男は室内に入ると、大きな聲で云つて、

「さあ君、入りたまへ。」

と梁瀨を促した。

内部は二つの部屋に別れてゐて、廣い方には大きな食卓が置いてあつて、其處には誰もゐなかつた。奥の狹い部屋には長椅子や椅子やちひさい卓子が不規則に亂れてゐて、そこには三人の日本人が烟草の煙に埋もれてかたまつてゐた。三人とも上衣を脱いでシヤツの袖をまくりあげてゐるが、一人は長椅子の上に横になつて飲み干したままの硝子杯を胸の上で弄んでゐると、他の二

人はその前に腰かけて、これも硝子杯を手にしてゐた。片つ方の大男は頭に繃帶をしてゐた。卓子の上には空になつた麥酒の瓶が四五本並んでゐる。蒸氣で温められた室内はむんむとして、梁瀨は直ぐに外套を脫いだけれど、幾度となく額の汗を拭かなければならなかつた。

「この人はね、H大學の生徒なんだ。」

猫背の男は梁瀨を一同に紹介した。

「僕かね、美術館で寫生してゐたら偶然出つくはしたのさ。まだ此地に來たばかりたつていふから、兎に角飯を喰ひに來たまへつて連れて來たんだ。いづれ會員になつて貰ふんだから。」

「H大學の學生だつて。マア此方に來てかけたまへ。」

「吾々のところでは遠慮なんかしてちや駄目だ。」

そこで梁瀨も手近の椅子を引寄せてかけた。

「オイ井上、もう一本麥酒を拔いてくれ、珍客の健康を祝さうぢやないか。」

長椅子に寢轉んでゐるのがしわがれた聲で叫んだ。

「駄目た、駄目だ。僕のゐないうちに勝手に飲んだりするのは規則違反だ。前金でなければいけないつて醫師が云つたぢやないか。」

「なんだと、貴様のゐないうちに勝手に飲んだつて。誰が勝手に飲んだ。誰が勝手に飲んだつていやあがるんだ。」

長椅子の男はふらふらする身體を起して、猫背の男――井上にむかつて怒鳴り出した。

「そりやあ飲んだつていいさ。けども前金でいふ規則だから、僕が後で醫師に叱られるからね。」

「ぢやあなにか、俺が飲み倒して拂はないつていふんだな。」

彼は危ない足を踏みしめて、よろけながら廣い部屋の方にやつて來た。

「さうぢやないんだよ。だけど規則だからなあ。」

井上は困つた顏をして、なだめるやうに云ふのである。

「兎に角此處にあるものは僕があづかつてゐるんだから、麥酒だつて拂つてくれなくちや困るんだ。」

「だから誰が拂はないつて云つた。金なんざいくらでもあらあ。」

「よせよ先生。怒つたつてつまらねえや。」

頭に繃帶をした大男は舌つたるい子供子供した聲で横あひからなだめた。

「井上君。兎に角もう一本拔いてくれたまへ。今日は僕の退院祝ひなんだから。先刻の分も一緒

に後で僕が拂ふよ。こう、こんなもんだ。」

と云ひながら片足あげて、づぼんの衣嚢を上から叩くと、ちやらちやらと銀貨が鳴つた。

「ハハハハ、俺も當分成金だ。」

「なくなつたら、又ぶつけりやあいゝのさ。」

もう一人の眼鏡の男も笑つた。

「ひでえ奴さ。自動車を衝突さしといて、儲けやがつたんだからな。」

みんな聲を揃へて笑ひ出した。醉笑つてゐるので際立つて高く響く。

「ぢやあ大丈夫かい。きつと拂はなくちやいけないよ。」

「うるせえなあ、こいつは。拂ふつたら大丈夫だよ。二本でも三本でもいいや、ありつたけ抜いちまへ。」

大男は又銀貨をちやらつかせた。

「爲樣のねえ奴等だなあ。」

井上は輕く舌うちしながら、臺所へ通ふ戸をあけて引込んだが、直ぐに三四本麥酒瓶を抱へて出て來た。

ぽんぽをんとその口を拔くいい音を取卷いて、座にゐる者の顏はひとところに揃つた。

「僕も一杯御馳走にならう。」

井上は他の者が各々勝手に注ぎ終ると、直ぐに手を出して自分の前の硝子杯を滿たした。

「いやな奴だな。さんざ文句を云やがつて。手前も飮むんぢやあねえか。」

大男はいゝきげんで彼の背中を叩いた。

「オイオイ、お客樣にもお酌しろよ。御遠慮遊ばしてらつしやらあ。」

先生と呼ばれる長椅子の男は、とろんこの眼を据ゑて梁瀨を見た。彼は物を言ふ度に激しく目をしばたたき、顏面は痙攣してぴりぴり動いた。なみなみとある麥酒の硝子杯を持つ手も震へて、酒はさかづきをあふれて流れた。

「君はそりやあH大學の學生かもしれないさ。金持なんだらう、どうせ。しかし僕は——僕は藝術家だ、藝術家なんだ。僕は。」

「先生、お株はよせよ。」

「又初めやあがつた。」

他の者はせせら笑つて取合はずに麥酒を飮んだ。

「やかましいやい、運轉手め。貴樣達には藝術はわからねえんだ。――どうたい君は、藝術を解するかね。」
梁瀨は先刻からの光景が豫期したよりも亂脈なので、どうしていいか困つてゐたが、又此の醉拂ひに話をしかけられたので、なんと返事をしていいか弱つてしまつた。
「どうだい君は、繪はわかるかい。」
「さうですねえ、わかるかわからないか知りませんが、好きは好きです。今日も美術館に行つて見ました。さうして井上君に逢つたのです。」
どうしても返事をしなければ承知しないので、彼は當らず障らずの事を云つた。
「井上？　あんな奴は君、藝術家ぢやないさ。あれは――あれは職人だ。しかも技倆の無い職人なんだ。なあ井上、貴樣は職人だなあ。」
「僕か。僕は職人さ。先生のやうな提灯の繪を畫いてる藝術家とは違ふんだ。」
「なんだと。」
醉拂つたのは、いきなり目の前の硝子杯を取ると、相手を目がけて叩きつけた。飲み殘しの麥酒は井上の肩から胸にかけてかかつたが、ねらひははづれて、後の壁にあたつて微塵に碎けて飛

んだ。
「よせ、よせ。どうしたつていふんだ。」
「先生。醉拂ふにはまだ早いぞ。」
他の二人は、なほ怒つてあばれさうな先生の細々と瘦せた身體を兩方から抱へて、奥の部屋へ連れ込むと、以前の長椅子の上に押倒してしまつた。押倒された先生はちつとも抵抗しないで、寢かされたままに寢てしまつた。
「井上君。君もよくねえや。先生のはあれが癖なんだから、なんとでも云はして置けばいいぢやあないか。」
「ほんとだぜ。俺は藝術家だ、俺は藝術家だつて云ひながら、中氣で何も畫けないんだから氣の毒なものさ。あれで以前はいい技倆を持つてゐたさうだぜ。」
眼鏡は云ひながら長椅子の方を振りむいたが、先生はもう鼾をかいて眠つてゐた。
「そんな事は兎に角、そろそろ飯にしようぢやないか。」
「今日は醫師が、是非ともすきやきにしてくれつて注文して行つたんだが、如何したんだらう。忙しくて來られないのかしら。」

井上は平氣な顔をして、床の上に落ち散つた硝子杯の破片を拾つてゐたが、
「どれ飯の支度でもしよう。」
と云ひ捨てて、臺所へ引込んでしまつた。
殘つた二人は取りぢらかした食卓の上に殘つてゐる麥酒瓶を順々にさかさにしては、最後の一滴迄したんで飲んだ。
「どうです驚いたでせう。君達紳士はかういふ生活は知るまいからね。しかしみんないい人間なんだ。」
眼鏡の男は烟草に火をつけて、椅子の背にもたれかかりながら、自分の事、他人の事を面白さうに話し出した。
彼は此の市の法律學校の生徒で、夏の休暇の間に稼いでは勉強の資を得てゐるのだと云つて、ひそかに自分は他の者よりも眞面目であり、知識的(インテレクチュアル)であるといふ意味をほのめかした。先生と云ふのは聖路易(セントルイス)の博覽會の時、渡米した日本畫家だが、別に儲け仕事があるわけでもなく、時には物好きな米人が大幅を畫かしてくれる事もあるけれど、大概は扇や岐阜提灯の繪を畫いて暮してゐるので、それさへ何時かしみこんだ酒毒に腕が震へて、滿足には働けないのださうだ。井上

は西部の果樹園に働いてゐたのが段々東へ流れて來て、此の地方へ來てからは、此の倶樂部の賄と留守番を兼ねてゐる他に、美術學校の掃除番として働く傍、繪をならつてゐるのださうだ。何れも日本を出てから永い年月を此の大陸に流浪してゐる連中であつた。

「この人はね、これは自動車（オオト）の運轉手（ショオファア）さ。」

と眼鏡は繃帶の大男を指さして云つた。

「僕はね、この山根君なんかと違つて學問はありませんや。」

彼は人のよささうな笑顔を見せて引取つた。

「この郊外の百萬長者（ミリオネア）の家にゐたんだが、其處のうちのかかあを乘せて走つてると、恰度町角でよその自動車と衝突しちやつたんでさ。かかあは無事だつたが僕はこの通りやられちやつてね。こうつと、あれで四週間も病院にゐたかしら、非道（ひど）いめにあつたものさ。」

「だつていいや、うんと見舞金にありついたんだから。」

「ちげえねえ、そんなものか。」

二人はさも面白さうに高々と笑つた。

その笑ひの終らないうちに、こつこつと戸を叩く音がして、直ぐに四十かつかうの小柄な男が

入つて來た。見知らない梁瀨の顏を不思議さうに見たが、
「イヨオ、お揃だね。」
と他の者の方に挨拶した。
「どうしたい。君はもう癒つたのかい。」
「エエ、やつとよくなりました。今日は久しぶりでみんなの顏でも見て、退院祝ひをやらうと思ひましてね。」
「あんまり飲むと傷に障るぞ。しかし痕は殘らないのかい。」
「どうですか。殘つたつて構ひませんや。」
「もともと好い男でもないんだからね。」
「ひどいなあ、醫師。」
大男はさも參つたやうに頭を掻かうと手をあげたが、繃帶に氣がつくと、そつと上から押へたばかりで下してしまつた。
醫師は椅子に掛けると、又梁瀨の方を見て合點の行かない樣子だつた。
「此の方は。」

遂々彼は訊ねた。

「此の人はH大學の學生で、まだ日本から來たばかりなんだが、井上が連れて來てね。」

「井上君に美術館であひまして。」

梁瀬は眼鏡の男の說明を引取つて、自分で名告(なの)つた。

「アアさうですか。よくいらつしやいました。僕はこの階下(した)で開業してゐる齒科醫者(デンティスト)です。不肖ながら此の會の會長(プレシデント)をしてゐますものです。」

ひどく改まつた態度でわざわざ椅子を離れて挨拶した。それから自分が長い間此の國で苦しんで、遂々齒科醫の免狀を取つて、今では米人の客も多いといふ自慢話を、この人の癖らしい大げさな身ぶり手ぶりで梁瀬にきかせた。

「兎に角亞米利加は偉大ですからな。日本なんかから來ると、隨分驚く事が多いでせう。」

醫師(ドクタア)は二十年の間遠ざかつた日本については殆んど全く無知識であつた。さうして亞米利加の物質文明を、いかにも淺薄な誇張を加へてほこつた。紐育のウルワアスの建築は何十何階だとか、ボストンの市中丈でも自動車の數は幾臺だとかいふやうな話が多かつた。

「どうしたんだ、大分飯は遲いぢやないか。」

話が切れると時計を出して見てつぶやいた。

「井上君、まだかい。」

大男は立上つて戸をあけて、臺所に聲をかけた。

「もう直きです。直ぐです。」

井上は途方もない大きな聲で答へたが、間もなく大皿の上に生々しい血の色に濡れた牛肉の盛られたのと、鍋とを兩手に持つて出て來た。

「醫師。遲くなつて濟みません。」

彼は又引込んで、今度は茶碗、皿、箸などを運び出した。

「山根君、濟まないが、ちつと手傳つてくれないか。」

「よし來た。」

眼鏡と大男とは受取つた器物を食卓の上に配置して、眞中のアルコオル・ランプの上に鍋をのせて燐寸を擦つた。玉葱と一緒にぶちこんだ肉は見る間に煮え立つて、物の臭ひはむらむらと室内に漲つて來た。

「うまさうだなあ。こいつでもう一杯やらうぢやねえか。」

大男は眼鏡をかへりみて云つた。
「退院祝ひだ。おごつてやらあ。」
「たまにやそれもいいや。ねえ醫師(ドクタア)、御馳走にならうぢやないか。」
「さうさね、この人は退院するし、日本からのお客はあるし、今晩は僕もおごらう。」
「こいつはありが度い。」
井上は頓狂な聲を出して額を叩いた。
「ぢやあ僕は僕の分丈出すよ。」
云ひながら醫師は銭入から銀貨をつまみ出して、卓の上に置いた。
「さうか、それぢやこれが俺の分だ。」
大男も同じ程の金を出した。
「君は先刻のも拂つてくれなくちやいけないぜ。」
井上はその金を算へながら催促した。
「わかつてらい。催促なんかされたくねえや。」
大男は今度は札を投出した。

「ほら、今晩の飯の代もはいつてら。」

「飯の代なら俺も出さう。」

眼鏡も小錢を其處に並べたので、

「ぢやあ僕も拂はして貰ひませう、おいくらです。」

と梁瀨は井上にむかつてきいた。

「イヤ、君はいいよ、君は。君は今晩はお客様だ。」

醫師は手を振つて、井上の返事を打消した。

「でも兎に角拂ひませう。」

梁瀨は眼鏡と同じ額なら間ちがひはないと思つて、卓上の銀貨をかぞへた。

「廿五仙でいいんですか。」

「ぢやあ貰つとけ、貰つとけ。」

醫師は其處に集つた金をひとまとめにして、井上が持つて來た手箙のやうなものに納めて鍵をかけた。

「こいつは今晩はお正月だ。」

井上は狡猾さうな笑を浮べて、臺所から麥酒瓶を兩手で抱いて出て來て、惜氣もたく拔いた。
「オイオイ、三階の奴はどうしたい。」
醫師は一口つけた麥酒を下に置いて云つた。
「さうさう、すつかり忘れて居た。呼んでやらないと、後で又しつきりなしに怒りやがるぞ。」
眼鏡は立上つて入口の戸をあけたが、顏をつき出すと大きな聲で怒鳴つた。
「齋藤ッ、飯だぞ。」
そのままどしんと戸をしめたが、その反響の消えるか消えないうちに、三階から足音荒く馳け下りて來て室の中に飛込んだ若い男があつた。
「どうしたんだい。あんまりひつそりしてるから、居るのか居ないのか忘れちやつた。」
眼鏡が云ふと、それには返事もしないで、手に持つてゐる大きな瓶を高くあげて振つて見せた。
「なんだい、それは。」
「なんだかわかるまい。」
一人で嬉しさうに笑ひながら、彼はその瓶をあかりに透かして見てゐる。蒼白な顏をきれいに剃つて、頭も厭味な程叮嚀に分けた此の男は、長い胴と短い脚の釣合が極めて惡く、その爲に頭

ばかりが大きく見えた。
彼はその瓶の栓を取ると、手近の皿を引寄せて、瓶の中の肉塊を手づかみで引張り出した。烈しい藥の匂ひが強く鼻孔を刺した。
「腦だらう。」
と誰かが云つた。
「こんな腦があつて堪(たま)るもんか。」
醫學生の齋藤はその肉塊を人々に見せた。女の肉體の一部だ。みんなが驚いて皿の上に頭を寄せ集めたのを、彼は得意さうに笑つて眺めてゐた。
「これはね、つい此間自殺した女のなんだ。まだ處女(ヴアアチン)なんだぜ。」
「へエ、これがかい。」
大男がわざと黄色い聲を出して覗き込んだので、又笑聲が起つた。
「身體に變調を來したもんだから、妊娠したと思ひ込んで、寫眞に使ふ藥を飮んだんださうだ。」
「處女(ヴアアチン)で妊娠するやつがあるもんか。」
「だつてまだ亭主はないんだぜ。」

「亭主はなくたつて男がありや處女ぢやないや。處女つてなあ生娘の事たんだ。」
眼鏡は知識をほこるやうに相手を追及した。
「なんでもいいや、兎に角若い別嬪なんだ。」
齋藤は面倒臭さうに云つてのけながら、肉塊をひつくりかへしたりなんかして、他の者に説明してゐる。
「いやだ、いやだ。こんなものを見ちや飯が喰へねえや。」
大男は眞先きに自分の席にかへつて、鍋の肉をつつつき初(はじ)めた。
「一體何處でそんなものを手に入れたんだい。學校でくれるのかい。」
「くれるもんか。小使につかまして切取つて來たんだ。」
齋藤は醫師(ドクタア)に答へながら、手早くもとの瓶の中に納めて、室の隅の棚の上に置いた。さうしてその肉塊を載せた皿を臺所で洗つて來た。
「オイオイ、その皿で何か喰はされちや堪らないぞ。」
醫師が眉をひそめて云ふと、
「ナニ俺が喰ふよ。」

と云ひながら彼はほんとにその皿に牛肉を取り分けた。

「なんにも汚ない事はありやしないや。おまけに別嬪なんだ。」

いかにも空腹さうにがつがつ喰ひ初めた。

麥酒はしきりに抜かれ、みんなの顏が赤くなつて來た。

梁瀬は殊に強ゐられて、もとよりいける口だから、注がれるままに飲んだ。少し醉が廻つて來ると、この不秩序に亂脈な一室を、北米の大都の一隅に見出した事が面白く思はれて來た。誰も彼も無智で皮相で、しかも此の亞米利加を無反省に崇拜し、自分達がその崇拜の國に長くゐるといふ事を何よりのほこりにしてゐるのが、寧ろをかしくて、その何れに對しても自分の優越を感じるのが、醉ひ心地にはふさはしかつた。

「先生はどうしたんだ。先刻から寢てるぢやないか。」

醫師は椅子の背によつかかつたまま、奥の室にながしめを送りながら眼鏡にきいた。

「先生は駄目だ。例の通りへべりやあがつたところへ、知らない人が來たもんだから、いつものお株が初まつたのさ。俺は藝術家だ、藝術家だつてね。そいつをよせばいいのに井上が餘計な事を云やあがるもんだから、見事に硝子杯を叩きつけやあがつた。なあに下らねえのさ。」

「先生のは危なくてしやうがねえや。手あたり次第に叩きつけやあがるんだもの。」
井上は硝子杯の當つて碎けた壁をかへりみて醫師に話した。
「だけど珍しいいい人間だぜ。稼いぢや飮み稼いぢや飮み、それつきり慾も得もねえんだから
な。」
眞赤に醉つた大男は持前の子供らしい聲でしみじみ云つた。
「おらあ先生がゐねえと寂しいや。」
「ほんとた。少なくとも先生はお前達よりや上等に出來てら。藝術家はあれでなくちやいけない
んだ。」
齋藤はいくら飮んでも赤くならないで、うけ口のうすい脣をひるがへして得意さうだつた。
「きいた風な事を云つてやがら。だけどほんとに先生が寢込んじまつちや寂しいや。起してやら
うぢやねえか。」
「よせよせ、又硝子杯を割られちや堪らねえや。」
「大丈夫だよ。藝術家がらしときや間ちがひはないんだ。起してやらうぢやないか。」
「起せ起せ。」

大男は立上つて、長椅子の側に寄ると、いきなり兩手を擴げて寢たままの先生を宙に持上げて、食卓のところ迄運んで來て、椅子にかけさせた。

「どうした先生、しつかりしろい。」

何時の間にか景氣のいい酒宴の始まつてゐた其の場の光景を不思議さうに見てゐる寢呆けた先生の背中を、山根はいやつて程どやしつけた。それでも先生はうすら寒さうに背中を曲げて、ちらかつた食卓の上に視線を落してゐたが、急に大きなあくびをした。その縮こまつた痩つぽちの姿がとぼけてゐるので一齊に笑つた。

「先生、一杯。」

大男は自分の硝子杯を干して先生の手に持たせた。

「よせよせ。僕は飲まないよ。」

手を引込めてしまふ先生の態度は酔つた時に似ずいぢらしい程弱々しく、言葉つきも叮嚀になれば、その顏には羞しさうな表情さへも現はれた。

「何を云つてやがんでえ。飲まないつて奴があるもんか。」

齋藤は遠くから手をのばして注がうとする。

「だけどもう先刻大分飲んだからね。」

先生はうぢうぢしながら手を出したが、ごぼごぼといい音をさせて金色の酒が硝子杯の中に漲り入るのを見ると、もう目を細くして口を寄せるのであつた。

「アア、矢張りうまいや。」

ぶるぶる震へる手の硝子杯を高く燈火に透かして見たが、今度は勢ひよく一息に飲み干した。

「ハイ、おかはり。」

大男は間も置かず又注いだ。

三杯四杯と立てつづけに飲むうちに、先生の顔には酒の氣があふれて、目には凄みが現はれ、言葉も亦亂暴になつて來た。震へる手で注いでは震へる手で飲んだ。

「先生。先生がゐなくちやあ寂しいとさ。何か唄でもうたはうぢやねえか。」

「俺は唄なんかうたへねえや。」

先生はさもさげすんだやうな顔をして大男をかへりみた。

「そんな事を云はねえで、何かおやりよ。」

からかふのか、おだてるのか、しきりにしつつこくすすめてゐたが、

「ねえ君、そつちの先生。」

と今度は梁瀬の方に聲をかけた。

「今日本ぢやどんな唄が流行つてますね。」

「さうですねえ、どんな唄が流行つてるんでせう、僕はそんな事はちつとも知りませんよ。」

「ヘツ、氣取つてやがら。」

大男は強く云ひ捨てたが、そのまま天井をむいて、

「花よりあくるみよし野の……」

と咽喉をつまらせてうたひ出した。

「よせ、よせ。」

先生は苦い顔をして大男を止めた。

「よさねえ、よさねえ。默つて聞いといで。――花よりあくるみよし野の、春の曙見渡せば、もろこし人も高麗人も……」

「よせつたら、よせツ。」

ぴしやりと大男の横つつらを平手で張り飛ばした。

「ハハハハ、こいつあ面白え。俺あ先生になぐられるんなら、いくらでもなぐられてやらあ、ハハハハ。」

大男はかへつていい機嫌で笑つてゐる。

「馬鹿ッ。」

今度は半分飲んだ麥酒を、その笑つてゐる赤い顔にぶちまけた。

「ハハハハ、こいつあ面白えや。」

大男は平氣で笑つてゐる。麥酒の雫は、鼻から頬つぺたから顎からしたたり落ちて胸を濡らした。

片方では齋藤が梁瀨を捕へて、身の上話を聞かせてゐる。これも勞働しては學校へ通ひ、金が盡きては又やめる生活をして來たが、今はこの市の醫學校に通つてゐるのだ。來年の夏はうんと稼いで、秋の新學期にはH大學へ入り度い、さうすれば同窓になるのだから、よろしく賴むといふ意味の事を繰返して云つた。

「僕はもう日本へなんか歸らない。もう吾々のやうに長く此方にゐると、とてもけちくさい島國なんかには住へやしない。」

彼は亞米利加の自主自由を說いたあげくに、半解の社會主義者的口吻で故國を罵つた。
「お前は歸り度くないだらうよ。れこが放すめえもの。」
眼鏡は隣から話を聞き嚙つて、口を入れた。
「君、君。こいつはね、電話係の女をだまかして夫婦約束をしてやがるんだぜ。」
と梁瀨の方に聲をかけた。
「彼女は面はまづいけれど肉體はいいね。俺に裸體を畫かしてくれねえかなあ。」
井上もそばからからかひかける。
「生意氣云つてやがら。貴樣なんかに何が畫けるもんか。」
「それでもこいつは裸體はうまいかもしれないぞ。」
「井上君は裸體專門さ。何時だつて美術館の裸體の像ばかり寫生して來るぢやないか。」
と醫師も面白づくで仲間に加はつて來た。
「近頃はどんなものを畫いてるんだい。見るよ。」
眼鏡は云ひながら手を延して、後の棚の上に先刻井上が置いた畫板を取下した。
「ね、こんなものばかり畫いてやがるんだ。」

彼はそれを梁瀬に渡した。手に取つて見ると鉛筆の裸身像は思ひ切つて拙かつた。殊に陰影が出たらめなので、まるみのある彫刻の面白さは消えて、平つたいものになつてゐた。
「なんだ、なんだ。女の繪か。」
大男は遠くから延び上つて見たが、椅子を離れて來た。
「よせよせ。井上の繪なんか見るない。」
先生は口に含んだ麥酒を口尻から垂らしながら怒鳴つたが、自分も立上つて、よろけながらやつて來た。
「なんだ、こりやあ。こんなもなあ繪ぢやあねえや。」
先生は癪に障つた顏をして、とろんこの目で井上を睨んだが、いきなり彼の頭をひつぱたいた。
「馬鹿ッ。貴樣はなんだ、貴樣は。貴樣は職人だい。技倆のねえ職人なんだ。」
彼の顏は眞靑になつて、顏中が痙攣してゐる。
「亂暴はよせよ、先生。井上君もなかなかうめえぢやねえか。この腹んとこなんか堪らねえな。」
大男は卑猥な事をつけ加へて云つた。
「ば、ばかッ。」

力を込めて怒鳴つたが、聲はかすれて咽喉にからんでしまつたので、先生は一層蒼くなつて震へた。
「默つてろい、貴樣なんかに藝術がわかるもんか。運轉手(ショオフア)め。俺は、俺は――……」
聲は全く涸れて、先生の口はこはばつてしまつた。
「俺は藝術家だつていふんだらう、なあ先生。」
「ば、ばかッ。」
先生の手が上つたかと思ふと、齋藤の胸から顏にかけて飯粒が散亂した。喰ひ殘しの飯の入つた茶碗を投げつけたのである。
「何をしやがんでえ。いい加減にしろい。」
齋藤は怒つた顏をしたが、直ぐに忘れてしまつて、胸や膝にこぼれた飯粒を一つ一つ拾つては口に入れて喰つた。
「亂暴はよせ、先生。今夜はお客もゐるんだし、愉快に飲まうぢやないか。」
醫師が云ふと、
「ほんとだぜ、俺の退院祝ひなんだ。唄でもうたつてくれよ。」

大男は先生の背中に手を廻してなだめた。

「俺は、俺は亂暴なんかしない。俺は藝術家だ。」

先生は又繰返して云ひ出した。

「オイ君は藝術はわかるか。」

と梁瀬の方に近寄つて來た。

「僕は藝術家なんだ。井上なんか、あいつは職人だ。いいか、わかつたか。」

「わかつた、わかつた。」

梁瀬は大きな聲で叫んだ。

「イイヤ、わからない。わかるもんかい。一體貴様はなんだ。藝術家ぢやあるまい。」

「僕か、僕は藝術家ぢやないさ。ただの醉拂ひだよ。」

梁瀬は面倒臭くなつて突慳貪に答へた。

「馬鹿ッ。」

耳元で叫んだと思ふと、梁瀬の顔にしたたか麥酒を浴びせかけた。何を、と思つて立上つた時、

先生は素早く食卓の上に倒れてゐた麥酒瓶を取ると、梁瀬を目がけて打ち下した。危ない、と顔

を防いだ二の腕は手ひどく打たれたが、直ぐに相手の手首をつかんで、梁瀬は麦酒瓶をもぎ取つた。

「危ねえ、危ねえ。」

「よせよせ。」

口々に叫んで一座は立上つて二人の間に割つて入つた。混亂の中で、人の體に押(おさ)れて傾いた食卓の上の器物は滑つて落ちて碎けた。はげしい物音の中に、硝子のこはれる響が冴えて聞えた。氣がつくと、梁瀬は後から齋藤に抱き止められてゐた。酒の後の息切れがはげしく胸に波を打つた。

「馬鹿ッ、馬鹿野郎。」

先生はみんなに兩手をつかまへられながら、身をもがいて敵に向はうとあせつてゐる。

「どうしたんだ、先生。」

「そいつの面(つら)が氣に喰はねえんだ。畜生ッ。」

「ハハハハ、やりやあがつた、先生。」

大男は面白さうに笑つて、先生の肩をつかまへると押しつぶすやうに椅子にかけさせてしまつ

た。
「ナニ僕は亂暴しやあしない。」
梁瀨はいかにも平氣たといふ落つきを見せて人々に云つた。
「馬鹿ッ、そん畜生を追拂へ。」
先生は又猛然とたけりたつて、足をあげて食卓を蹴つた。食卓も椅子も梁瀨の方に倒れかかつた。
「危ねえ。」
後から齋藤、前からは大男が叫んだ時、梁瀨は思はず知らず、麥酒瓶を振り上げてゐた。
「危ねえ、危ねえ。」
大男は梁瀨の腕をつかむと馬鹿力を出して戸口迄押つけて、そのまま室の戸をあけると、後から抱き止めた齋藤もろとも室外の廊下に押出してしまつた。折重なつて倒れさうになつたからだを立て直した時、目の前の室の戸はひどい音をさせてしまつた。
梁瀨はそれをあけようとしたが、どうしてもあかないので、癪に障つて蹴飛したが、内からは返事かないので、しかたが無く階段を階下へ降り始めた。

「君、君。待ちたまへ。」

齋藤が後から呼んだので、わざと急いで馳け下りた。

「外套と帽子を置いて來たらう。歸るんなら僕が取つて來てやらう。」

出口で追ひついた齋藤は云ひ殘して、又階段を上つて行つた。

戸外は霧の夜で、往來に出ると冷たい雨が感じられた。氣がつくと、まだ麥酒瓶を手に提げてゐた。梁瀬は自分のした事を悔いた。あんな醉拂ひを相手に立廻らうとしたはしたない自分が忌々しかつた。殊に今、この夜更けの大道に麥酒瓶をぶらさげて立つてゐる自分が癪に障つて堪らないので、いきなり瓶を鋪石の上に叩きつけると、はげしい音を立てて、こなごなに碎けた硝子の破片は四方八方に飛び散つて、彼自身のからだにもはねかへつて當つた。

一臺の自動車が凄い程大道を射照して過ぎた。

「馬鹿ッ。」

彼は大きな聲で叫んだ。堂々と走り過ぎた自動車と、脆くも碎けて散つた空瓶と、自分自身をひつくるめて罵つた氣がした。

「失敬、失敬。どうも待たせちやつた。」

齋藤は梁瀬の帽子と外套を抱へて出て來た。自分も身支度をしてゐる。梁瀬はひつたくるやうに受取つた外套を着ると、默つて歩き出した。

「君、怒つてるのかい。」

齋藤も並んで歩きながら云つた。

「怒つてやしないさ。」

「怒るのはよしたまへ。つまらないよ、あんな奴等を相手にして。」

苛々してゐる梁瀬は此の男がうるさくて堪らなかつた。俄に醉が出たやうに、歩くと足下の定らない自分よりも、彼が一層千鳥足なのさへ癪に障つた。

「あいつらはみんな取るに足りない奴だぜ。あの醉拂ひと來ちやあ、あれは誰とでもやるんだ。もう酒精(アルコオル)中毒でばかみたいなものさ。悲慘だねえ、ああなつちやあ。しかしあれでもまだいい方なんだ。他の連中と來たら全く零(ゼロ)だ。醫師(ドクタア)だつて以前(もと)は水夫(セイラア)なんだからね。そりや勉強しとげた努力は買ふさ。しかし吾々のやうに順序を追つて高等教育をうけた者から見ると、そりやあ全く非常識たよ。云ふ事をみたまへ、淺薄ぢやないか。」

齋藤は默々として歩いてゐる梁瀬を追掛けながら、のべつにしやべり出した。梁瀬は闇の中に

も彼のうけ口のうす脣のぺらぺらひるがへるのを感じた。
「山根なんて奴はありやねえ、決してつきあつちやいけないぜ。あいつは學校へなんか通つてやしないんだ。自分ぢやあ法律學校の生徒だつて云つてるけれど、そりやあ一時は籍位あつたかもしれないが、——兎に角今はごろつきさ。」
なんといつても返事をしないで、さつさと歩いてゆく相手の背中に話しながら、彼は醉拂つた足をふみしめふみしめ急いだ。
梁瀬はどつちの方角に自分の下宿のあるC町があるのか、其處へ歸る地下鐵道の停車場は何處にあるのか、全く知らなかつた。行手の霧の中に滲んでゐる街燈ばかりが頼られる心持で歩いた。その所々の街燈のそばに來ると、近くの家のあかりの届く部分丈は明瞭見えるが、高い三階四階は眞暗な空の中に吸ひ込まれて、物音も響かない夜更けであつた。雨とも霧とも區別のつかない程細かい雨は、冷たい闇を濡らしてゐる。人道も車道も濡れて、二人の靴の音は陰氣に耳につい て來た。帽子も濡れた。外套も濡れた。人通りは殆んど絶えて、所々の酒屋ばかりが、まだ殘つてゐる客の爲に戸を閉さないばかりだ。
「ハロオ。」

擦れちがひざまに聲をかけたものがあつた。女だ。ふりかへると立止つて此方を見たが、ものにならないと見極めて、又霧の中に見えなくなつた。黑い衣服に黑い帽子をかぶつた下から眞白に塗つた顏を見せて笑つたが、女は決して若くなかつた。

「ヘン、お茶挽め。」

齋藤は忌々しさうに唾をした。

間も無く二人は廣い四辻に出た。梁瀬はそのどつちに行く自分だらうと考へて、足を停めた。

「君は直ぐ歸るのか。」

齋藤は追ひついて云つた。

「僕は咽喉が乾いちやつた。そこいらで一杯麥酒を飲まう。」

梁瀬は返事もしずに相手を見下して立つてゐたが、自分も急いで歩いて來たので、咽喉が乾いて息切れがした。だから此の申出は拒まなかつた。

「向ふ側の角の酒屋は遲く迄開いてる筈だ。」

齋藤は梁瀬の肱をつかんで、廣々と濡れた道路を橫切つて、向ふ側のその家につれて行つた。

酒場には三四人、うす汚ない男が立飮みをしてゐる丈だつたが、奥の一室からは自動洋琴らしい

單調な音樂と一緒に、入りまじつた男女の聲が賑かに聞えて來た。誰か踊つてでもゐるやうな、床の上に靴の擦れる音もまじつた。

二人は默つて麥酒を飮んだ。齋藤が勝手に命じた二杯目を飮み干すと、梁瀬は勘定をして戸外に出た。

「オイ、オイ、そつちぢやあ方角が違ふぜ。」

後からついて出た齋藤は大きな聲で叫んだ。

「何處に行くんだい、君は。」

「うちに歸るんだ。」

梁瀬はふりかへつて答へた。

「C町ならそつちぢやないよ。まるで反對だ。」

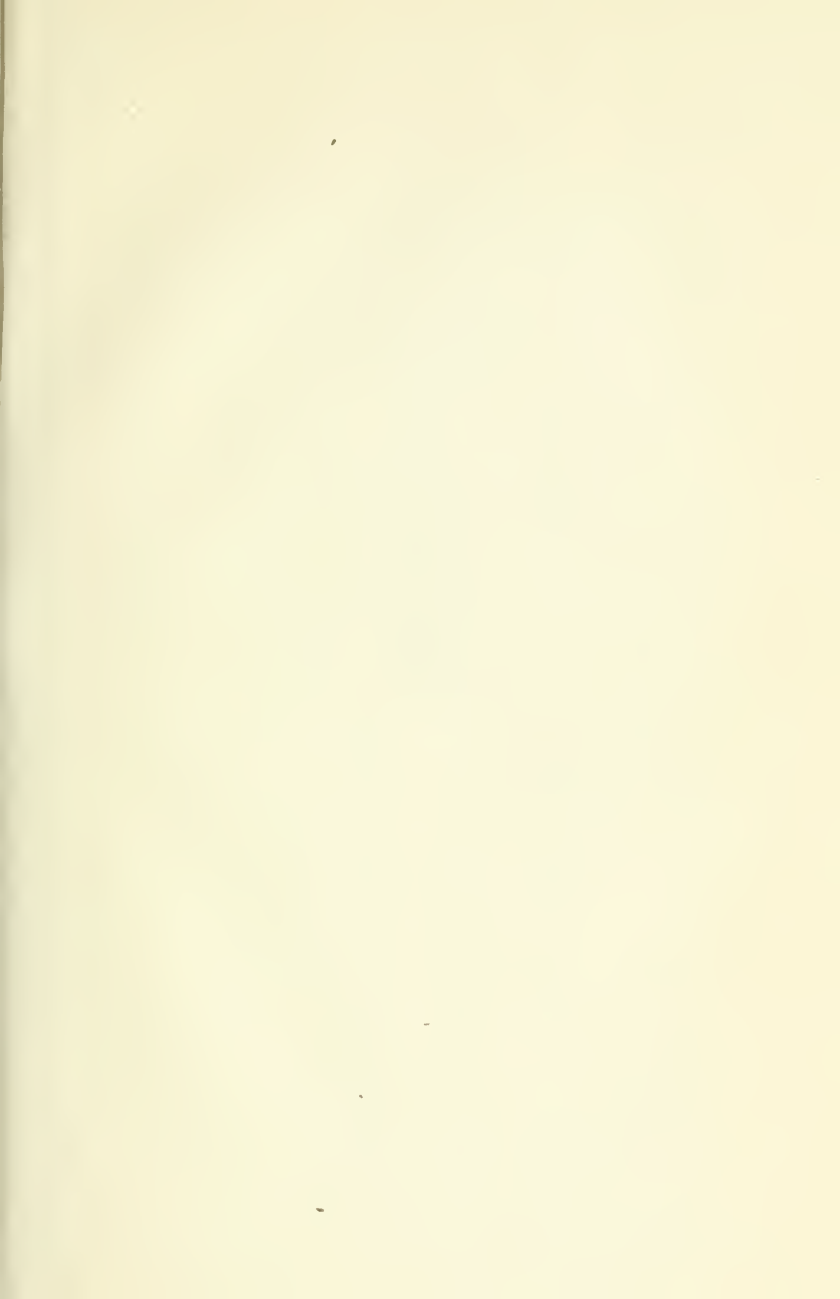
齋藤はさもをかしさうに笑つた。

「僕が送つてつてやるから大丈夫だよ。」

「冗談ぢやない。此の夜更けに送つて來られてたまるもんか。地下鐵道（サブ・ウェイ）の停車場さへ教へてくれりやあいいんだ。」

齋藤は聲を高くして梁瀨に迫つた。
「君が新米で、此の國の様子も解らないだらうから、心配してやるんぢやないか。僕を一緒に置いてくれりやあ、君の爲になるんだ。ね、君の爲なんだ。」
彼は梁瀨の顔をのぞき込んで、少しからむやうに迫つた。
「うるさい奴だなあ。餘計なお世話ぢやないか。」
梁瀨は又力を込めて突飛した。
「何をしやがんでえ。」
「なんだと。」
梁瀨は相手の腕をつかむと、いきなり足をからんで投げた。とつさの間に、ああ俺は醉つてるなと思つたが、もう止める事は出來ないで投げた。
「馬鹿ッ。」
云ひ捨てて彼は馳け出した。
「ヤイ待て……畜生ッ。」
後を見ると、齋藤は起上つて追つかけて來る。梁瀨は雨に濡れた大通を一散に馳け出した。昂

奮した顏に降りかゝる霧雨がいい氣持だつた。
　次の四辻迄來てふりかへると、霧にかくれて人影は見えないが、氣のせゐか齋藤が今にもその霧の中から出て來さうに思はれ、足音さへ聞えるやうに感じた。彼は又一丁場走つた。さうしてその次の辻にあてもなく客を待つ自動車を見ると、いきなり馳け寄つて呼んだ。
「自動車（タクシイ）、自動車（タクシイ）。」
云ひながら自分で戸を開けて中に入つて、行先きを教へると、居眠りをしてゐたらしい運轉手はあわただしく支度を始めた。
　酒の醉は一時に頭に上つて胸苦しかつたが、梁瀨は大きな危難を逃（のが）れたやうな安心を覺えて、ぐつたりと後（うしろ）によりかかつた。
　自動車ははげしい音を立てて、霧に包まれた夜更けの大都を、眞直ぐに貫いて走り出した。（大正六年九月二十日）

ベルファストの一日

昨夜グラスゴオを出た船は曉方ベルファストに着いた。

獨逸の潛航艇が出沒するといふ噂に、乘組も客も、星の光のうす青く流れた海の面を、恐怖を以て眺めたが、燈火を滅した船は搖れもせず、靜に水の上を滑つたのである。

倫敦を出てから二週間近くなるのに、一日も完全に晴れわたつた青空を見た事が無く、毎日毎日雨に濡れた東條は、人々が船室に下りて寢靜まつた後迄、一人甲板に殘つて、水氣を含んだ雨後の空に數を盡してきらめく星を仰ぎ見てなつかしんだ。彼はその時今宵程、清淨な心持の自分を幾年にも見た事が無いと思つた。潛航艇に襲擊されて、船と共に沈んでも、かかる美い空の下の靜な海ならば、寧ろ望ましいとさへ、ふと考へた程靜寂な天地の間に自分の孤獨を嬉しく思つたのである。

それには住み馴れた倫敦の汚れ腐つた生活に、身も心も著く衰へた獸のやうな自分を忌々しく思ひながら、如何しても桎梏から逃れられず、夏は秋になり、冬は春になり、又しても都會には暑い夏が廻つて來たが、激しい努力を自分一人で經驗した後で、漸く旅へ逃れ出た人の知らない

安心も、東條の心を平靜な世界へ導いたよすがとなつて居たであらう。
夜更けて海は暗くなり、うす霧が一面に漲つて、機關の音ばかりが妙に冴え冴えと響くのを、遲く寢床に入つた彼は眠られぬまま氣に掛けて、暫時は右に左に枕をしかへたが、遂には外套のかくしに入れてあつたブランデイの小瓶を取出して飲んだ。少量の酒ながら存外よく利いて、醉心地になると、流石に旅の疲勞から、今度はかへつて前後も知らず熟睡した。
今朝、頭の上を歩く人の足音に目の覺めた時は、船はもう愛蘭土の港に近く進んで居た。狼狽てて飛起きて、狼狽てて衣服をつけ、狼狽てて荷物を纏めたが、その時はもう船は棧橋に横づけになつて居た。
先を爭ふ人々の後から、彼は重たく鞄をぶら下げて上陸した。朝霧の底にどつしりと沈んで居るベルファストの未だ目覺めない町の方へぐんぐん歩いて行つた。さうして其の町で一番先に目に入つた旅舍の開き扉を押して內に入つて行つた。
帳場に控へて居る禿頭のおやぢは、大きな鼈甲緣の眼鏡の下から、ぢつと東條の貧弱な黃色い顏を見上げたが、妙に客馴れた優い聲で、
「御存じとは存じますが、此頃は警察が馬鹿にやかましいので、旅のお客様には一度警察へ入國

居を出して頂く事になつて居りますので。」

と宿帳をつけてゐる東條の耳のそば迄顔を寄せて云つた。

「ごらんの通りです。」

と後の壁に貼付てある外國人の旅客に對する戰時取締令を指差して見せた。

「アゝ、何處に行つても此頃はこいつが面倒でね。」

英吉利内地の旅で馴れてゐる東條は平氣だつた。

「それより兎に角御飯を喰べさせてくれないか。一休息してから警察へ行く事にしよう。」

「よろしうございますとも。」

老人は答へながら卓上の呼鈴を鳴して下僕を呼んだ。

愛蘭土人特有の、足の短い、肩幅の不釣合に廣い、險しい顔付の男が出て來て鞄を持つて先に立つた。うす暗い階段を上りながら、東條は自分よりも脊の低い下僕に對して優越を感じた。日本人としてはちひさい方では無いのだが、倫敦では殆んど自分より脊の低い男は見當らなかつたが、愛蘭土なら、こんな男も多いたらうと、肉體の大きさに威壓され勝だつた大都會をかへりみて、田舍の旅を氣安く思つた。

三階の東向の部屋に彼を導いて、下僕は一片の銀貨を手の平に受取ると、型ばかり頭を下げて立去つた。重たい靴の音が階段を下りて行くのをぼんやり聞いて居たが、それも遠ざかると、人氣の無い旅舍はしんとして古ぼけた。

東條は取殘された賴り無い心持で、建付の惡い古び汚れた家具調度を一順見廻したが、その中に立つ自分の衣服も雨に濡れ埃にまみれてみすぼらしくなつてゐるのを感じた。彼は鞄を開けて新しい肌着と襯衣を取出さうとしたが、中にはもう、汚れ切つたものばかりで、襟さへうす鼠色に垢じみたものの他は無かつた。

東條は輕く舌打ちをして、着換は思ひ止り、窓の側の寢臺の上に、靴のままで大の字に寢轉んだ。かういふ所作が自分の旅の疲勞を最も適切に自分自身に感じさせてやる手段だと心の底に思ふものがあつた。

鶯茶に眞赤な薔薇の花を染め出した壁紙の、その花の赤い色さへ煤けて黑くなり、所々裂け破れたのを仰ぎ見て居ると、遙々と來た旅人の身の賴り無い靜な嬉しさが又しても沁々胸に湧いて來る。枕に近い窓の遙の下の往來には、次第に車馬のゆきかひが繁くなつたらしく、種々入りまじつた物の音が聞えて來た。疲れた瞼を閉ぢて聽くともなしに聞いて居ると、その騷然たる物音

にも韻律があるらしく、不知不識睡氣を催して來て、何時の間にか東條は、短い時間の間に深い眠に落ちて行つた。

ふと物音に驚いて目を開いた時、扉の外に人の氣配がして、輕くその扉を叩いた。

「お入り。」

と半分身體を起して叫んだ時、年取つた給仕人がそこから顏を出した。

「食堂の用意が宜しう御座います。」

「難有う、直き行くよ。」

答へながら東條は故意と威勢よく寢臺から床の上に飛下りた。

何時の間にか霧は晴れて、眞靑な朝の空に日輪は猛烈に上つて居た。窓の硝子を通して、その暑い夏の光は、此の貧しい旅舍の一室に容赦無く射込んで居た。

嗽ぎ、顏を洗ひ、鏡に向つて頭髮に櫛の目を入れるその鏡にも、日光は反射してまばゆかつた。雨の後の蒸暑い日が海にも陸にも重たくのしかかつて來たのである。

だだつ廣い食堂には五六人の客が各々友だちも無く、ちりぢりに卓に着いて居た。東條はその人々の異國人に對する好奇の視線を一身に浴びながら、粗末な朝飯の肉刀と肉叉を取上げた。

食後は又部屋に歸つて、一人ぽつちの煙草を樂しんだ。あけ放した窓から露臺に出て見ると、目の下の町の家々は戸をあけて、今日の商賣を營み始めた。電車が通る、自動車が通る、馬車が通る、人が通る。高い處から下を見下す時に何時も感じる自分の方が下の人間よりも偉いと思ふ根底の無い好い氣持が、食後の彼を滿足させた事は云ふ迄も無い。目を遠くに送ると、向ふ側の家々の屋根を越えて、今朝上陸した海岸が明瞭に日に光つて居る。川口を出て行く船と入つて來る船が、うすい煙を水の上の空に靡かしてゆきちがふ。東條も煙草の煙を同じその夏の青空に向つてゆるゆると鼻の孔から立昇らせた。

警察の所在を訊ねて、暑い往來へ出たのは既に正午近かつた。今日は恰度傷病兵慰問の爲の花の日で、市中には若い女が手に手に花籠を提げて歩いて居る。一樣に白い衣服を着た花賣は、燒けつくやうな大道に、くつきりと浮んで見えた。彼等は道行く人の總てに花を勸めたが、珍しい東洋人の姿は直ぐに彼等の目についた。あつちからもこつちからも集つて來て、一齊にからかふやうに花籠をさしつける。東條は故意(わざ)とその女達を押のけて、後の方に立つてゐる惡強(わるじ)ゐをしない一人に此方から近づいて、その掌に一片の銀貨を載せた。

若い娘は手首に掛けた花籠を東條の目の前に捧げて、

「薔薇がお好きですか、撫子がお好きですか。」

と少し首をかしげて聞いた。つばの廣い夏帽子にかくれ勝だつた顏が、あからさまに日に照らされて、大きな目とちひさな脣が、無邪氣にほほ笑んだ。

「撫子にして下さい。」

東條は隔意の無い氣輕さで答へた。

「色は何にしませう。赤ですか、白ですか、もも色ですか。」

娘は又首をかしげて、東條を見上げた。

「貴方の一番好きなのを擇んで下さい。」

東條は口の邊（あたり）に微笑を浮べながら、娘のその大きな青い目を正面から見た。娘はふと顏を染めて花籠に目を落したが、二人を物珍しさうに取巻いてゐた他の花賣は一齊に面白さうに笑つた。當の娘は一寸考へる振をしたが、默つてもも色の撫子を籠から拔いて、東條の胸にさした。

「難有う。」

東條は帽子を取つて挨拶して別れて歩き出した。

「難有う、日本のお方。」

娘も彼を見送つて云つた。ふりかへると、その娘も連の花賣達も一齊に手をあげて振つた。東條はもう一度帽子を取つて應へて、さて四辻を海手へ曲つて別れた。一生の中に二度逢ふ事も無い娘と口をきいた旅人の心持で、その大きな青い目とちひさな紅い脣を、無責任に思ひかへして忘れなかつた。

煉瓦造の倉庫の立並ぶ海岸の石垣には、何を入れて來たのか大きな樽が、幾つもいくつも轉がつて居て、その附近には荷揚人足が呑氣に働いて居た。どれもこれも怠惰者らしい風をして、マドロス・パイプをくはへながら重たい足を引擦つてゐるのを、東條は倫敦で見たダブリンの一座の演じたシングやグレゴリイ夫人の戯曲そのものを見る興味で見て過ぎた。警察は此の海岸の裏通りにあつた。

煉瓦造の粗末な建築物の入口の石段に立つて居る見上るばかりの大男の巡査に來意を告げると、大男は珍しさうに東洋人の黄色い顔を見下しながら、子供をあやすやうな態度で東條を控室に導いた。其處には四五人、何れも國籍の違ふのが手に手に旅券を持つて不安な顔付で待つて居た。佛蘭西らしいのも、伊太利らしいのも、露西亞らしいのも、どれもこれも多少不安らしいまごついた態度で控へて居た。或者の旅券には其の寫眞さへ貼付けてあつた。

順番が廻つて來て、東條は奥の一室に呼込まれた。いかにも探偵らしい顔付の男が、後から後から入つて來る旅客を、一人一人訊問した。國籍、年齡、職業、旅行の目的、昨夜の滯在地、明日の行先と順々に訊ねた後で、鼻の尖の赤い係の役人は、旅券と特別入國許可證とを幾度も繰返して讀んでは、東條の顏を珍しさうに眺めた。

「エ、と、國籍日本、年齡廿六歲。特徵は髮黑く、皮膚鳶色なりか、ハツハツハツハ……」

彼は無智な人間に特有の單純な高笑をして、改めて東條を見た。

「廿六歲とは想像も出來なかつた。十八九かと思つてゐた。」

机を並べて居る同僚に、その小役人は同意を求めた。

「サア、十八九とも見えないが、少なくとも廿歲か一だね。」

眼鏡の下に目やにのたまつた目をしばだたいて、古手の役人はしげじげ東條を見上げた。

「日本人は小柄だから若々しく見えるのでせう。兎に角僕は急ぐんだから、早く許可の印を押して下さい。」

東條は稍突けんどんな調子で促した。

「だが、一體君は歐洲戰爭についてどんな意見を持つてゐるね。」

係の男は落つき拂つて許可の印を押しながら、此の日本人と問答をするのが面白くて堪らないらしく思はれた。

「左様、此の暑さでは兵隊もさぞかし堪るまいと思ひますよ。」

東條は苛々して、額の汗を拭きながら、故意とわき道へそれた返事をした。

「ハツハツハツハツハ。」

役人は何が可笑しいのか、そりかへつて足踏をして笑つた。東條はその馬鹿々々しさに堪へかねて、手を延して旅券を引つたくると、急いで戸外に馳出した。馬鹿にしてゐやあがると思つた時、彼は額から背中から襟から胸迄、蒸される暑氣に汗になつて、襯衣も襟も肌にぴつたり吸ひついて居るのを感じた。

正午の日は海にも陸にも漲りわたり、ぎらぎら油光に光る潮水は川をさか上り、土が含んだ雨の濕氣は見る間に乾いて、往來には片影も無くなつた。東條は、天も地も町も、一切のものの存在が放散する暑氣の中を、あてども無く町筋へ歩いて行つた。今朝よりももつと繁くなつた人通りの中を、花を賣る娘達は數を増して、その白衣ばかりが僅かに涼しさを覺えさせるばかりであつた。彼はふと立止つて、胸にさされた撫子を取つて鼻に觸れてみた。甘つたるい匂は目に沁み

る程深かつた。

これからさき如何しようと、目的も計畫も無い東條は、暫時(しばらく)辻に立つて考へたが、兎に角案内記でも買つて、市中を見物する事たと、本屋を見付けて入つて、小形の愛蘭土案内記を買つた。其處を出ると、今度はその案内記を讀む爲めに一軒の茶店に入つて行つた。一隅の卓子に空席を見付けて坐ると、壁に仕掛けた扇風器が、汗に濡れた額に垂れかかる髮の毛を吹きちらす程強く廻り出した。

手輕な食事の後で、一片の檸檬(レモン)を切込んだ紅茶の冷したのをおかはりして飲みながら、東條は今買つた案内記を開いて見た。

ベルファストは、北緯五十四度三十六分、西經五度五十六分、面積一萬五千四ヱヱカア、人口三十八萬五千四百九十二人（但し一千九百十一年調）、議會へ代議士四人を送る、と冒頭に書いてあつた。汽車、電車、蒸汽船の便、旅舍飲食店の案内から簡短(かんたん)な歷史地理、商工業の現狀迄、東條は殘らず讀んだ。

「何を讀んでいらつしやるの。」

傍に立つて物珍しさうに注視して居た給仕の女は、自分が地圖を開いて見てゐる後から顏を差

出して云つた。まるまると肥つた頰邊の赤過る程赤いのが、初めて日本人を見たといふやうな素振りをかくす事が出來なかつた。

「ベルファストの案内記さ。わざわざ日本から貴方の國を見に來たとは信じられないだらう。」

「日本。日本てあの露西亞と戰をした國ですか。」

「アヽ、その日本さ。」

「隨分遠いんでせうねえ。」

「遠いとも。船で二月もかかるよ。」

「二月。」

女は目をまあるくみはつて驚いた。

「それぢやあ、そろそろ貴方のベルファストを拜見して來ようか。」

勘定を濟して、

「左樣なら。」

「御きげんよう。」

東條は給仕の女にも輕い言葉を殘して茶店を出た。

彼は案内記の導くままに、此の市の有名な建築物を、ひとつひとつ訪問した。市廳、裁判所、監獄、工業學校、圖書館、病院、養育院、敎會、郵便局、それからそれと見て廻つたが、それは單に機械的に見物したので、勿論面白いとも思はなかつた。夏の午後の日は一層暑氣を增して、東條は汗もしとどに濡れた。一體全體何の爲に自分は斯うベルファストの町を見物して步かなければならないのか、とふと考へて苦笑した。世間普通の旅客が、初めての土地へ行くと、名所舊跡を必ず見廻るのが當然だと云ふ慣習に不知不識誘はれてゐたのであらう。彼は町はづれの埃の多い大通を步きながら自分を馬鹿馬鹿しく思ふのが寂しかつた。彼は幾度路傍の並木の樹蔭に佇んで、まだ高い太陽を仰いで退屈したかわからない。乾いた土を踏む足も靴の中で蒸されて重くなつた。

最後に東條は大學の築地に倚つて、如何して殘る今日の時間を消さうか思ひ惱んだ。夏期休暇中の大學は、病院として使用され、戰地から送還された負傷兵は、芝生の上で庭球や球轉がしをやつて居る。或者は松葉杖に縋つたまま球を轉がし、或者は切斷された殘つた片腕にラケツトを振つて、嬉々として遊んで居た。戰友同志抱合つて、炎天の芝生の上に寢轉んで居るのもあつた。疲れ切つた東條は、それを何の反應も無い、自分自身も傷病兵の一人だつたかのやうなぼんやり

した事を感じながら眺めた。

「一寸伺ひます。」

突然耳の側で呼掛けゝれて、東條は驚いてふりかへつた。人品のいい老人が叮嚀に帽子を取つて、

「突然話掛る失禮を許して下さい。お見掛したところ、貴方は東洋から來た方と思ふが、東洋は日本ではありませんか。」

「左樣です、私は日本人です。」

東條も帽子を取つて答へて、改めて老人を見た。ふちの廣い夏帽子をぬいだ赤く光る頭を覆ふ髮は雪白で、短く刈込んだ口髭も、顎鬚も同じく眞白だつた。輪郭の正しいいい顏で、光の鈍つて優しくなつた目の切れの長いのと、思ひ切つてちひさい赤坊のやうな脣が、初對面の旅人にも隔意のない心持を持たせるのである。派手な白と鼠の格子縞の服に、淡紅色の襟飾を綺麗に結んだのが老人を舞臺の人のやうに見せた。

「確に日本の人だと思ひましたよ。一體此の國には何をしに來たのです。」

「この國つて愛蘭土の事ですか。愛蘭土にはただ見物に來たのです。」

「ホウ、日本から愛蘭土を見物に。」

老人はちひさい口を一層ちひさくして、驚いた顔をして見せた。

「イイエ、左様ぢやありません。私は永らく倫敦に勉強に來てゐるのです。恰度夏休を利用して英吉利内地から蘇格蘭土を廻つて、今朝ベルファストに着いたところです。」

フムフム、それで此處には永く居るつもりですか。」

「イイエ、明日はダブリンに行かうと思つて居ます。今朝から市中を見物して、もう行く所が無くて困つて居る位です。旅舍へ歸るのも馬鹿々々しいし、如何しようかと思つて考へて居たところです。」

東條は手にした案内記を老人の目の前で開いて見せた。

「フム、市中は見物してしまつたと。そんなら私の宅へ遊びにお出でなさい、直き其處ですよ。」

老人は極めてそれがあたりまへの態度で、向側の、橫に折れ曲つた道を指し示したが、東條はあまり唐突な誘引に驚いて、何と返事をしていいかわからなかつた。

「直き其處ですよ。」

老人は繰返して、

「實は些少伺ひ度い事もあるので。」
と附足した。東條の好奇心は勿論此の時動いたが、なんだか未知の世界に入つて行く不安と、其處には何かしら面倒が待構へて居るらしい豫感を打消す事が出來なかつた。
「難有う。しかし未だ日も高いから、有名なヂャイアンツ・リングに行つて見ようかと思ふのです。」
と咄嗟に思ひ付いた事を答へながら、それをまぎらす爲に時計を出して見た。案内記で讀んで知つては居たのだが、市外を四哩も離れて居る上、電車の便利も無いといふので、わざわざ行つて見ようとは思つてゐなかつたが、老人の誘引を斷る爲に、心にも無く口に出してしまつた。
「ホウ、ヂャイアンツ・リング。ヂャイアンツ・リングなら私が案内しよう。迷惑でなければ。」
老人は、もう身支度も出來たといふやうに、小脇に抱へて居た夏帽子をかぶり、杖でこつこつと足下を突ついて云つた。
「けれども、貴方は御忙しいんではないんですか。」
東條は老人の親切さうな無邪氣な顔を見て、斷り切れないで困つてしまつた。
「私が忙しくはないかつて。ハハハハ、此の老人が忙しい事があるものか。もつとも迷惑なら爲

方(かた)が無いけれど、さうで無ければ私に案内をさせて貰ひませう。」

「難有う、難有う。」

東條は迷惑しながらも、口では感謝の言葉を繰返さなければならなかつた。

「サア行くなら、早い方がいい。」

老人は時計を見て促した。

二人は並んで歩き出したが、東條は其時初めて、老人が跛(びつこ)を引いてゐるのに氣が付いた。並木の影は著しく斜になつたが、かへつて日ざしは強くなつた。午後の乾き切つた往來は輕い埃を浮べたまま、何處迄も何處迄も、遠くの山の方迄續いて居る。少し背中を曲げて、不自由な足取で歩いてゐる老人を見ると、東條には四哩の行手が氣づかはれて爲方が無かつた。

「チャイアンツ・リング迄は隨分遠いんぢやないんですか。」

彼は遠慮しながらも、自分を案内しようといふ老人を思ひ止らせようと努めた。

「フム、それ程でもない。」

老人は息切れのする樣子だつたが、それでも跛の足は停めようともしない。

「でも、これから歩いては大變でせう。」

「アアその事か。それは心配には及びませんよ。どうして此の老人に四哩の道が步けるものか。」

云ひながら面白さうに高らかに笑つた。

町を愈々出はづれようとする三叉の辻に出た。往來の眞中に石磐があつて、なみなみと水を湛へた周圍に三輛の馬車が客を待つて居た。木の影の暗い馭者臺には古ぼけた馭者が、馬と共にやすんで居た。

「ジョオジ。」

老人は遠くから手をあげて馭者を呼んだ。

「いいお天氣だね。」

「今日は、旦那。」

「今日は。」

「今日は。」

三人の馭者は老人に答へて、叮嚀に帽子を取つた。

「どうだい、ジョオジ。デャイアンツ・リング迄行つて貰ひ度いんだが。」

「參りませうとも。」

一番年とつた酒肥りの馭者は答へながら、直ぐに手綱を引締めた。
「今日は私のお友だちが遙々來てくれたので、案内役さ。」
云ひながら老人は東條を促して馬車に乘つた。馬車とはいふものの、所謂愛蘭土馬車で、箱も何も無く、板敷に腰掛けたまま、足は宙にぶら下げて居るのである。よく油繪で見る枯草を積む車に似てゐると、東條は珍しいものに思つた。鞭があがると、馬は威勢よく馳出した。
家の數は粗(まば)らになり、木立は次第に深くなつて、何時かなだらかな傾斜面を、馬はたてがみを亂して進んだ。
「どうです倫敦は。もう隅から隅迄知り盡して居るんでせう。」
老人は若々しい調子で云つた。
「それ程でもありません。何分語學が不得手なので。」
「フムフム。しかし君なんかそれ丈話せれば用事は足りるさ。」
「エエ用事は足りるんですが、會話を樂む丈の餘裕がありませんから、眞の英吉利人の生活を味ふ事は到底駄目です。」
「フムフム。それで勉強してるのは。」

「近代文學です。私は作家になり度いんです。」
老人の隔意の無い態度に誘はれて、東條は何も彼もかくさずに話せる氣易さを喜んだ。
「ホウ、作家に。それぢやあ、學校や圖書館よりも往來の方が勉強になる。」
老人は自分の警句をよろこんで、
「作家は何でも經驗しなくては駄目だ。政治も、經濟も、社交界も、珈琲店も、料理屋も。」
云ひながら東條の肩を叩いて笑つた。
「ね、倫敦はそれにはもつてこいだ。私は若い頃は倫敦に住んでもゐたし、また其頃は元氣もよかつたので、夜は大概珈琲店で暮したりしてね。」
「けれども倫敦には喫茶店は澤山ありますが、珈琲店らしい珈琲店はあまりありませんね。カフヱ・ロオヤルの他には。」
「それそれ、私の毎晩通つたのはそのカフヱ・ロオヤルですよ。ホウ、君はカフヱ・ロオヤルを知つてゐますかね。」
「私は何時でしたか、オスカア・ワイルドの傳記を讀んだ時に、ワイルドが毎日其處でウイスキイ曹達を飲んだといふ事を知つて、好奇心から行つて見たのです。ところが大變氣に入つてしま

つて。」
「アア、ワイルドか。彼の男は氣障な奴でね、いやな裝をして來たものでした。しかしよく飲んだよ。まるで海綿だつた。」
「貴方はワイルドを御存じなんですか。」
「知つてるとも、知つてるとも。」
老人は若かつた頃を夢見る顏をして頷いた。
「けれども如何してロオヤルが氣に入つたのです。彼處は私達の巢だつた。」
「左樣ですねえ。第一は靜なのと、日本人の來ないのが氣に入つたのです。」
「どうして日本人は彼處には行かないのです。」
「つまり女が來ないからでせう。」
「ハハハハハ。」
老人は車の上にそりかへつて笑つた。
「しかし私なんかもうおしまひだ。此の四五年は瘻痲窒斯で足もきかなくなつたし。」
賑かな心持で笑つてゐた老人は、急に聲を低く落して、顏付も暗くなつたが、ふと話を切つて

默した。車輪の響が石ころの多い坂道に高く聞える。
低い岡のつらなる空が目の前に開けて、其處いらの麥畑から小鳥が飛立つて、遙の大空に聲を震はして鳴いた。目の下の谷間には水が流れ、ところどころの百姓家の風見車は長閑に廻つて居る。
「彼處に家が見えるでせう。あれは病院です。」
老人は向の岡の上の黑い森の中に、屋根を見せて居る建築物を指して云つた。
「彼處で私の妻は亡くなりました。去年の秋です。」
その午後の日の眞正面に當つて、眞赤に、金色に輝く程照付けられてゐる煉瓦造を、遙になつかしさうに老人は見た。
間もなく馬車は山蔭の涼しい木立の下にとまつた。雜草の花の水泡のやうに淡く浮ぶ草むらの何處かに、水の音の聞えるのを、東條は暫時茫然として聞いた。
「どうです、いい景色でせう。」
いかにもその風景を享樂するやうに、眼鏡の曇を拭いて老人は四圍を眺め廻した。
「これから先は、馬車は行かないから、歩いて貰はなくちやならない。」

彼は說明するやうにつぶやきながら、跛を引いて草の中の小道に入つて行つた。雨の名殘の露であらう、道を妨げる草の葉尖に殘つてゐて、踏分けてゆくと、草から草に散るのであつた。日蔭の道は乾き切らず、靴の先も直(ちき)にしめつて來た。それでも老人は危ない足取の割合に元氣よく、先に立つて上つて行つた。

突然頭の上の方で唱歌の聲が起つた。樹々の葉の向ふに透いて見える空に震へて、若い女の合唱する歌の聲である。老人は東條をかへりみて、面白さうに笑つて見せたが、その儘どんどん進んで行つた。

夏草にかくれ勝だつた目の前が急に廣くなつた時、二人は岡の上の平地に出た。樹木も何も無い廣い草場の周圍を土堤が取卷いてゐるその眞中に、大きな石がただ一つづつしりと腰を据ゑてゐる丈である。しかしそれよりも先に目についたのは、二人の若い女が手を組んで、その草生を散步してゐる白衣の姿であつた。

「今日は。」

「今日は。」

女は老人を見ると遠くから聲をかけて、手を組んだまま馳け寄つて來た。

「オウ、貴方がたか。今日は。」
老人は嬉しさうに二人の手を取つて振つた。
「その後は別にお變りもありませんか。」
「難有う、ごらんの通り丈夫ですよ。」
老人はその女達の手を放さずに話合つたが、手持無沙汰に佇んで居る東條に氣がつくと、
「こちらは日本から來た私のお友だちですよ。」
と彼を二人に紹介した。
「これはあの向ふの、今通つて來た病院の、私の妻が永らく世話になつた人達です。」
老人は女達の手を放し、女は珍しさうに東條の顏を見守りながら握手した。
「ほんとに奥様はいい方でしたのにねえ。」
若い看護婦は氣の毒さうに老人を見ながら眉を寄せた。まんまるい顏の、頰の赤い、快活な顏つきにも同情の表情があふれてゐた。老人も女達も、さうして東條も誘はれて、老人の妻の死んだといふ病院の岡の方を眺めた。
「これが有名なヂャイアンツ・リングです。來て見るとつまらない所だけれど、一體案内記には

どんな風に書いてあります。」
東條の手から案内記を受取つた老人は、それを眼鏡に近々と開いて讀んだ。
「チャイアンツ・リングはベルファストより四哩の郊外にありて風景絶佳、愛蘭土の古跡中最も興趣深き所なりか、ハハハハハハ。」
老人はそれを女達に見せて笑つた。
「何しろ大したものだ。この人なんかわざわざ日本から、こればかりを見に來たのださうですよ。」
彼は特有のちひさい口をつぼめて冗談を云つた。
「ほんとですか。」
「ほんとですとも。」
老人は眞顔になつてからかつた。
「アノ、日本にも病院はありますか。」
もう一人の口數の少ない方のが突然東條に問掛けた。これも血色のいい無邪氣に健康な顔をしてゐた。

「ありますとも。」
　東條は意外な質問に笑ひながら答へた。
「ありますか。あるなら私一生の中に一度は行つて見度いのです。ですが、お醫者樣や看護婦は日本人ですか。」
「日本人ですとも。」
　彼は更に語氣を強くして答へた。
　他愛の無い會話が、暫時人々の間にとりかはされたが、その間に日輪は遠慮無く西の空に傾いて行つた。
「オヤオヤ、もう日が暮れてしまふのかしら。」
　一人がつぶやいて、
「私達はもう交替時間ですから。」
　と別れを告げさうな風を見せた。
「お待なさい。別に見るものもない所だから、吾々も町へ歸りませう。」
　老人は東條をかへりみて云つた。夕陽の美しい日で、岡の上の空は淡紅色を流して、高く高く

ゆらいだ。四人はそれを仰ぎ見ながら、前後して草の小道を下りた。

馬車の待つてゐる所へ來ると、老人は女達に勸めて相乘させた。無言の馭者が再び鞭を取上げると、馬車は左右に搖れながら坂道を下り始めた。

「では私達は此處で下して頂きませう。」

途中の別れ道で看護婦は、道端の草の中に下り立つた。

「左樣なら。いつか一度は日本の病院に行くかもしれませんよ。」

「いらつしやい、是非。」

「左樣なら、御きげんよう。」

「左樣なら。」

口々に云ひかはしたが、二人の女の姿は、向ふの岡へ導く谷間の草の中に見えなくなつた。と思ふと先刻よりも一層高く、細い聲で合唱して行くのが聞えた。空の色はもう黃昏れかけて、岡の上の風は涼しくなつた。輕くなつた馬車は一散に、その夕方の澄んだ空氣の中を走つた。

「アア、病院の灯が見える。」

老人の聲が寂しさうにつぶやくのを聞いた時、向ふの岡の森の中のその病院の窓に、かすかな

灯影を認めて東條も何となく心に止めて見守つた。けれどもそれも間も無く、折曲る道の木立にかくれて見えなくなると、無言の人をのせた馬車の車輪の響ばかりが高く響いた。
馬車が市中へ入つて行つた頃は、ベルファストは夜に包まれて、大路小路には灯がついた。先刻來た道をかへるのか、別の道を通るのか、東條にはわからなかつた。默々として並んで掛けて居る老人の安靜を亂し度ないと思ふ心が、彼を寂しく無口にした。
「旦那、何時ものところですか。」
不意に馭者は大きな聲で、ふりかへりもしずに聞いた。
「ア、、勿論。」
老人は低い聲で返事をして又默した。
何時の間にか馬車は大通の一番繁華な場所を、電車と擦れ擦れに走つてゐたが、とある町角の料理屋の前で止つた。
「御苦勞、御苦勞。」
老人は馭者をねぎらひながら、東條の手を取つて下りた。
「どうです、ちつとはお腹も減つたでせう。」

お愛想を云ひながら、老人は先に立つて内部に入つて行つた。
「いらつしやい、今晩は。」
給仕頭の男は老人を見ると寄つて來て腰をかゞめながら、しかも後に從ふ東條の見馴ない姿を盗み見る事を忘れなかつた。
「何時ものお席が空いて居ります。」
太鼓腹の給仕頭は揉手をしながら、しきりにもてなしぶつて、一番奥の一隅に導いた。
「今日は此のお友だちが來て呉れたので、ヂャイアンツ・リング迄行つて來たところさ。」
老人は室内の輝きわたる電燈の下で、急に活氣付いた顔をして、珍しい黄色人を伴ふ事を自慢さうに話した。
「君は何を飲む。ウイスキイ曹達ですか。」
「結構です。」
東條は何でもかんでも辭退しない人馴れた氣持で、空腹の目の前に、温い肉汁の皿の運ばれるのを待つた。勿論其の家は大した料理屋ではなかつたが、それでも此の町では相應なところなのだらうと東條は考へた。無數の電燈に天井や壁の金ぴかの裝飾はぎらぎら反射し、食卓の上の糊

の強い卓布も目の痛くなる程眞白に光つた。隣室は酒場になつてゐるらしく、食卓に酒を運ぶ給仕人(ボオイ)は、その間のしきりの戸から絶間なく出たり入つたりした。食堂には音樂は無かつたが、酒場の方からは醉拂つた洋琴(ピアノ)が賑に聞え、時々は羽目をはづした人々の笑聲が湧きかへるのであつた。

「如何(どう)です、倫敦の料理屋とは。」

老人はそのちひさい口に肉片を運びながら、いかにもこんな田舍の料理屋は駄目だといふ調子を見せて云つた。彼は東條を我子のやうにもてなした。

「サアサア、オスカア・ワイルドのやうにお飲みなさい。」

などとからかつて一人悦(えつ)に入つた。強い酒精は老人の血を若い日の夢にかへらせる力があつた。酒が廻ると、老人の顏には艷が出て、愛嬌のある目も輝き、聲も少し高くなつて、且つ著しく饒舌になつた。好んで倫敦の往來、劇場、寄席、倶樂部、料理屋、珈琲店についての豐富な知識をほこつたが、それには又若い時の二度とは來ない悔恨が一脈の寂しさを添へるのか、ふと彼をして沈思せしめる事もあつた。

「兎に角、旅人程呑氣(のんき)で面白いものはない。」

老人は東條がしきりに願つてゐる佛蘭西伊太利の風光を激稱し、それらの土地にも思ふがままに行ける東條の若さを羨しがつたが、ふと聲を低くして、

「私も日本に丈はもう一度行つて見度いと思ひますよ。」

と四圍を憚かる様子でつけ加へた。東條は意外の言葉に驚いて老人を見た。

「實は私は、サアもう昔の話だけれど、日本に行つた事があるのです。其頃は、なんでも世界中を旅行し度いといふ考へでした。長崎、神戸、横濱、東京。私は神戸に一番長くゐました。」

老人は感慨にふけるらしく、その癖妙に落つかない様子で四圍の人を氣にしながら低い聲で語り續けた。興に乘つて重ねたウイスキイに、ちひさい口も少しばかり締りの無くなつた舌たるさが、老人を子供のやうに思はせた。

「日本でも倫敦に於けると等しく、劇場料理屋で日を暮したのですか。」

「ハハハハハ、左様いふわけでもないけれど。」

老人は笑つたけれど、それは寧ろ寂しい笑だつた。妙に座が白けて、二人は手持無沙汰の手を、同時にウイスキイの酒杯に掛けた。

「實は私は貴方に聞いて貰ひ度い事があるのです。」

飲み干した酒杯を置いて東條の顔を見た。しかし又暫時默してから、やうやく口を切つた。
「私にはどうも、日本に自分の子供が生きてゐるやうに思はれて爲方が無いのです。」
「貴方の子供ですつて。」
東條は老人の言葉を信じ兼て問ひかへした。
「さうです、私の子供です。」
老人は少しふらふらして來た頭を支へかねるやうに頷いた。
「もう昔の事ですがね、兎に角マダム・バタフライが居たのですよ。」
低い聲でつぶやくやうに云ひながら、彼は食卓の上に手を延し、窮屈な袖をたくし上げて、痩せた腕を見せた。何が起るのかと思ふ不安を覺えながらも、東條はその手首をつかんだ。少したるみの出來た老人の二の腕に、彼は櫻の花の刺青を見た。その櫻の花の中に「はな」と女の名の入れてあるのを見た。
「これが日本の記念です、ハハハハ。」
老人は、折柄側を通つて行く他の客を見て、狼狽てて腕を引込ませた。
「私は勿論旅の空の、面白づくの浮氣から、一時雇のつもりで置いたのですが、一年足らず一緒

に暮して、愈々國へ歸らうといふ時、女は既に妊娠して居ました。女つてものは爲方の無いものでゝ」

老人は苦笑して又酒杯を口に觸れた。

「その頃は私も血氣盛りの事だから、女が身重になつたと聞いた時は、厄介な奴だなと、忌々しく思つたばかりで、恰度自分が故鄕へ歸る事になつてゐたのをいい事にして、多少の手切金をやつて振捨(すて)てしまつたのです。」

老人の語るところによると、彼は日本を離れた時、後には何の面倒も悔恨も起らないと思ふ氣易さに、月を越える海洋の長旅を樂しみ、港々の一夜二夜の碇泊には、又新しい切賣の戀を漁つた。

故鄕に歸つてからも、彼の放縱な生活は續いたが、それにも倦怠を覺え初めた時、彼は結婚して家を持つた。ふとした一時の洒落が嵩じて、痛い思ひをする事さへ、強壯な若者の肉體には快感だつた刺靑(いれずみ)の櫻の花が褪せて行く程、一緒に刺した女の名迄、彼には古い物語の中の他人の話になつてしまつた。妻が初めて彼のいたづらの刺靑に目を止めた時、彼は彼女が「はな」といふ日本文字の讀めないのを幸に、櫻の花は日本に行つた時友だちとお揃ひにした物好きに過ぎないと

云つてごまかした。それでも、その後も、妻が刺青を氣にして厭がると、彼の心の底には、妻の知らない祕密の存在、殊にそれが日本といふ遠い異國を舞臺にした事が、面白くて堪らないやうな心持も殘つて居た。だが、その女がどうなつたか、果して無事に子供を生んだか、生まれて丈夫に育つてゐるか、そんな事は問題にならなかつた。瘻痲窒斯の疾患から足こそ不自由になつたけれど、兎に角彼は平和な幾年を父祖の遺産で暮す事が出來た。日本の記憶は石鹼玉よりも淡くなり、彼の頭は白髮になつた。

去年の春の暮、ふとした風のこじれから病づいて、非道く衰へてしまつた妻を病院に送つた頃の、或日曜の朝であつた。彼は日當りの窓の側で、倫敦の新聞を讀んでゐたが、退屈まぎれに見た廣告欄に、ふと彼の目を引くものがあつた。それは日本の一靑年が、非常に異國に憧れてゐて、誰人でも、外國の土地土地の風景の繪葉書を送つてくれれば、自分の方からは日本の繪葉書で返事をするといふのであつた。仕事の無い日を送り兼てゐた老人は、早速幾枚かの繪葉書を日本に宛て出した。月を越えて返事が來た。老人はそれを持つて、岡の上の病院に寢てゐる妻を見舞つて見せて喜んだ。その後度々繪葉書を往復してゐるうちに、老人はその靑年が懷しく、全く遠い無責任な過古になつてしまつてゐた日本へ遊んだ頃の事さへ、時にふと明瞭に思ひ出して、二の

腕の櫻の中の女の名に、人知れず見入る事もあつた。老人は青年に手紙を書いた。自分は曾て日本に遊んだ事のある者だが、今はもう年をとつて、願つても再び行く事は出來ないけれど、若い君は是非一度我が住む土地を見に來てくれと書いた。青年からも返事が來た。今日迄も葉書のやりとりで親しい人に思つて居たが、一度日本に來た人と聞くと尚更懷しい、何をかくさう自分は混血兒である、自分は自分と母を捨てて故郷へ遠く歸つた父の顏を知らない、しかし失禮な事だけれど、貴方が自分の父のやうに思はれて爲方が無い、とあつた。老人は愕然としてその手紙を内がくしに納めた。

其日から老人の平靜な心は亂された。彼は每日々々馬車で通ふ病院の妻を見舞ふ途すがらを、日本に對する追想と不安に費し、一人寢の床の中では屢々自分の子供だと名告る混血兒や、いつそ可愛らしい程無智で無表情だつた昔の「はな」を夢に見てうなされた。

青年からは其後も手紙や葉書が來た。老人はそれを受取る事を恐れながら、しかも今日來るか今日來るかと待つ心持に苦しめられた。青年の年齡も、身分も、その父の國籍も、その母は生きてゐるのか死んだのか、再緣したのか一切わからなかつた。一切わからなかつた丈老人は想像に惱まされた。彼は初めて自分の昔の所業を悔ゐた。たとへ一時雇のつもりだつたにしろ、たとへ

金さへやれば文句を云はない種類の日本の女だつたにしろ、自分のたねを宿した女を振捨てた行爲が良心を苦しめた。若し果してその青年が自分の子だつたら、あらゆる犧牲を拂つても彼を幸福にしてやらなければならない。しかし彼は又病床の妻の存在を憚つた。どうしても死んで行く妻だと思はれる丈それ丈強く憚られた。若し妻が死んだら――とふと考へた時彼は一層苦しかつた。彼は何氣ない風で、自分の年齡を記し、他人の年齡を聞くのは失禮だが、かく離れてゐては、せめてその年齡で人を想像し度いのだといふ言譯を添へて青年に訊ねた。

「ところがどうです。その青年はまだやつと十八歲さ。私の子なら勿論もつと年上でなけれやならない。ハハハハハハ。」

老人はつまらない事に心配をしたものだと、自分を嘲る調子で笑つたが、その實寂しさうな顏付で、話を終つて酒を飮んだ。

「ね、その話はそれで濟んだ。けれども私の心には、殊に妻が死んでから一人ぼつちになつた私の心には、如何しても日本の何處かに自分の子供が、男だか女だかそれもわからないが、兎に角生きてゐるやうに思はれて爲方がなくなつたのです。どうしても何處かにゐるに違ひない。」

老人は最後につぶやくやうに一人言つた。

「貴方にはこの私の心持はわかりますか。」

彼は醉つた手を延して握手を求めた。東條はそれを固く握つて、老人の心持を全く了解した事を表明した。

「難有う、難有う。」

老人は涙をいつぱいためて握手を解いたが、その手を引く時、目の前の酒杯を袖にかけてひつくりかへした。ウイスキイ曹達は白い卓布をぬらした上、老人の膝に容赦なくこぼれた。彼は酒と感激に全く醉つてゐた。

給仕人が馳けつけて老人の膝を拭いた。

「旦那。もうそろそろしまひますのですが。」

給仕頭も來て揉手をしながら云つた。

氣が付くと、あたりにはもう客の影は一人も無く、大概の食卓は總て綺麗にかたづけられ、電燈も半分は消してあつた。隣室の酒場の方は夜更けて愈々賑かに、洋琴に合せて踊るのか、三和土の上に擦れる靴の音が拍子をとつて聞えて來る。

「フム、それでは酒場に行つて飲まう。」

老人は給仕人に助けられながら立上つたが、不自由な足はもう利かなかつた。
「旦那。それよりも戸外(おもて)に待つて居る自動車か馬車に乗つて、お宅へお歸りになつちやあどうです。大分夜も更けましたし。」
給仕頭は東條に嘆願する目くばせをしながら、子供をすかすやうに老人に云つて聞かせた。
「ほんとにもうお歸りになつた方がいいでせう。私も旅の疲れが出たから、旅舍(ホテル)に歸つて寢度いと思ひます。」
東條も寄添つて老人の手を取つた。
「難有う、難有う。」
口の中で繰返したが、長い話の後で、一層舌が廻らなくなつてゐた。
東條と給仕人は、彼を引立てながら戸外に出た。さうして角にたむろしてゐる馬車の一臺を呼んだ。
「難有う。難有う。」
老人は同じ事を云ひながら、東條の手を固く握つて放さなかつた。
「サア旦那、お乘んなさい。」

給仕人が促しても老人は動かなかつた。
「貴方には、明日、もう一度逢へませんか。」
老人は醉つて苦しさうな聲で云つた。
「難有う。けれども私は明日の朝早く立つつもりですから。」
東條は老人を氣の毒に思ひながら答へた。
「もう一日どうです。もう一日丈です。」
老人はしつつこく繰返した。
「何故さう先を急ぐんです。」
「何故つて、私は兎に角二三日中に倫敦に歸らなければならないのです。實は。」
旅費がもう盡きかけてゐると昏迄出たのをまぎらして、
「實は如何しても逃れられない用事があるものですから。」
と云つて、金の無い事をかくした心持を恥ぢた。
「どうしても駄目ですか。」
「エヱ、殘念ですけれど。」

「それではもう私は、二度と貴方に逢ふ時はありますまい。」

老人は改めて東條の手を握りしめたが、彼の目から涙は憚りも無く頬を傳つて落ちた。

「今日はほんとに難有うございました。私はベルファストの一日を永久忘れません。」

東條は寂しい心で老人と手を別(わか)つた。

給仕人のあけた戸口から馬車の中へ、老人を積み込むやうに乘せると、馭者は遠慮も無く鞭を振上げた。

「さよなら。」

東條は窓に顔をさし寄せて、もう一度叫んだが、中からは返事もなかつた。老人を乘せた馬車は、大路を眞直に燈火の中に走り去つた。

暫時(しばらく)はその行衛を見送つたが、一人取殘された果敢ない心と、待設けなかつた事の多かつた今日の一日をかへりみて、まだこれから先、どんな思ひ掛けない出來事が起るかもしれないと思ふ旅人の物好きな心を抱きながら、東條は夏の夜の更けて涼しい大空に、昨夜よりも一層澤山の星の光るのを仰ぎ見ながら、旅舍(ホテル)の方へ歩き出した。(大正七年二月十九日稿了)

汽車の旅

稅關の檢査が濟むと、橫濱以來同船の客ばちりぢりになつてしまつた。

「左樣なら。」

「さよなら。」

口々に云ひかはして、或者は自動車に、或者は馬車に乘つて走り去り、或者は重い荷物をかついで步いて行つた。數分間、その人々の後姿は、思ひ切つて晴れた十月の朝の日光を浴びて見えたが、間も無く、自分の目の前に橫はつてゐる見知らぬ國の見知らぬ市の中に吸ひ込まれてしまつた。

自分は此の二週間の航海中いゝ飲友達だつた船員と一緒になつて、今夜の最大急行の出る時間迄別段何を爲る目的も無い身體だから、此のシアトルの日本町の日本料理屋の一室に別離の宴を張る事にきめた。

自動車で運ばれたその家は、外部は純然たる西洋造たが中には日本座敷もあつて、案内役の船員はよく知つてゐた。

日本の酒が出て松茸の御飯を喰べたが、それでは濟まないで、とうとう夕方迄動かなくなつてしまつた。四十女の癖に白粉を塗り立てた女將を初め、何れも亭主持で此家に通つて來るのだといふ女中が、身體につかない洋裝で出て來た。田舍訛のはげしい言葉つきから、行儀作法を辨へないで、しかもその不作法が客に喜ばれる所以であると思つてゐる女を、自分の痼性が承知しなかつた。

防腐劑で味の變つた酒の醉に一座の聲が高くなつて來ると、彼等は三味線を持つて來て淫らな流行唄をうたひ出した。上機嫌の船員もかはるがはる聲を張上げてうたつた。

「貴方もおうたひなさいな。」

女中の中で一番若いのが撥を取上げて云つた。

此の女は此家の女中の中で一番器量がいゝので、船の人々は未見の者さへ名前丈は聞覺えてゐる位ださうだ。從つて他の女中などを見下して、何から何迄自分が取りしきつてやらうといふところがあつた。

「俺はうたなんかうたへないよ。」

自分は又盃を取上げた。

「なんて野暮なんだらう、此人は。」

女はいきなりいやつて程自分の背中をぶつて、三味線をうつちやるやうに置くと、自分の膝の上に乘るやうにしなだれかゝつた。

盃のふちをあふれて酒がたらたらとこぼれた。

自分は女を突飛した。意外に大きな聲で怒鳴つてしまつたので、少々醉つてゐるなと氣が付くと酒が頭に上つて顏が赤くなつた。

「うるさい。馬鹿ッ。あつちへ行つてろ。」

「マア亂暴だねえ。何がいやなのさ。」

女はまだ冗談めかして故意とらしつゝこく寄添つて來る。その客に馴れて身の程を忘れた厚白粉の面が憎かつた。

自分ははしたなく聲を高くした後の不快をまぎらす爲に手酌で飮んでゐたが、女の此の神經の鈍い圖太い態度が我慢出來なくなつた。

芝居じみて居ると思ふ程きちんと坐り直してから、故意と低い落着いた聲で云つてやつた。

「他ぢやないが、お前達がいやなんだ。其處いらに居られると小汚なくつて酒がまづい。後生だ

から彼方へ行つて貰はうぢやないか。」
一座は急にひつそりした。
「生意氣云つてやがら。」
女はそれでもまだ冗談だかほんとだかわからないので、自分の顏を見詰めてゐたが、思ひ出したやうに立上つて、やけに左右に身體を振り立てゝ出て行つた。
「マア酷い。」
他の女の一人がつぶやいた。
皆が自分を見守つてお座が白けた。自分はてれかくしに酒を飲んだ。女が自分を不愉快にしたよりも、自分が自分を不愉快にしてしまつたのだ。
「ありがたい。よく云つてくれた。小汚なくつて酒がまづいは嬉しい。」
突然、一人が興奮した調子で叫んだ。
「貴樣達も退散しろ。俺達ばかりで飲むんだ。」
「愉快だ。飲め飲め。」
もう一人の男はふらふら立上がると兩手をひろげて踊る眞似をして又直ぐに坐つて怒鳴つた。

それから吾々はさかんに飲んだ。手を叩くと酒が來た。一人倒れ、二人倒れ、三人とも倒れてしまつたのを、自分は妙に醉へないで、窓際の壁に背をもたせて眺めて居た。

　他人と酒を飲むと、その人の苦勞も無く醉拂ふのを見て、醉拂へない自分がなさけなくなる何時もの心持が、今日は殊に強く自分に迫つて來た。二週間の航海の間一度も感觸を害する事なく親しんで來た目の前の人達が、此の壁にもたれて居る自分とは沒交渉に醉倒れて寢てしまつたのが堪へ難き迄寂しかつた。

　其處いらに殘つてゐる德利をひとつひとつ振つて見て、夙に冷くなつた酒をぐいぐい飲んで、悉皆空にしてしまつたが醉へない。一人の男の鼾が正しい韻律を保つて耳について來た。

　よりかゝつた窓の外は眞青な空を頂いた清澄な秋であつた。露に脆い並木の樹木の葉は早く紅葉して絶間なく枝を離れて落ちて、敷石の上をかさこそと風に吹かれて走つた。その青空を仰いでも、その落葉の聲を聞いても、秋だと思ふ心の底に、故郷に遠い事、父母に遠い愁がしみじみと浮んで來る。いやな思ひをして手を叩かなければ、もう酒も無い。自分は孤獨の旅人だといふ感じが胸を壓して來る賴り無い自分一人をなつかしみながら默然としてうなだれた。

　日が沈んで風が冷くなつた時、夕暮はもう窓のそば迄音も無く忍んで來てゐたのである。室内

の電燈がひとりでにあかるくなつたのに驚いて時計を見た。

「さあ愈々お別れだ。」

自分は立上つて醉拂ひの肩をゆすぶつた。

「まだいゝ、まだいゝ。」

と三人は同音に叫んだが、それでも疊の上に正體（しやうたい）も無くぶつ倒れてゐた身體を起して目を見開いた。

「まだ早いでせう。」

ぐらぐらゆすぶれる上半身の中心を取りながら一人は時計を出して見た。

「オヤ、もうこんな時間か。」

その一人は驚いた表情をして皆をかへりみた。

他（ほか）の者もみんな誘はれて時計を出して見て、同じく時間の意外に早く經つたのに驚いた。

「愈々お別れかなあ。」

一人はほんとに別れともない調子でつぶやいた。何となく寂しい心地が半醒の鈍い心に沁みて來て、吾々は互に顏を見合せて默した。

「兎に角もう行かなくちやあならない。」

自分は又時計を出して見て云つた。

「オオイ誰かゐないかあ。」

と一人は圖抜けて大きな聲で叫んで、叫んだ後で欠をした。

「何か御用。」

女將の醜惡な顏が入口から覗いて訊いた。

「麥酒だ。……それから停車場迄馬車を一臺。すぐだよ。」

一人が怒鳴るやうに命じた。

「私達、入つてもいゝ。」

と又女中が二三人來て坐つた。

「この人ほんとに憎らしい人だよ。」

その中の一人は顎で自分を指して、眞面目な顏を作つて云つた。

「お多賀さんたら泣いて口惜しがつてたわ。」

「勝手にしやがれ。」

自分は勢ひよく玻璃杯(コツプ)を取つて目よりも高く捧げた。電燈のあかりで麦酒は金色に輝いた。

「御機嫌よう。」

「御機嫌よう。」

「君の健康を祝す。」

かちりと觸れ合せて滿(まん)を引いた。

「行かう。」

玻璃杯を置くと直ぐ思ひ切りよく立上つた。

荷物は先に停車場へ送つてあるので、何の心配も無く吾々は馬車に乘つた。

「では御機嫌よう。」

「御機嫌よう。」

女將や女中は送つて出て、馬車の上の自分に手を差し延べて握手を求めた。もう此の女達にも二度とは逢ふ時も無く別れて遠く行くのだと思ふと、自分を苛々(いら/\)させた彼等の存在も問題ではなくなつて、唯單に自分が心細い旅に上(のぼ)るのだといふ心持から、いつそ懷しく一々その手を握りかへした。

馬車が動き出すと夜の空氣は冷々と醉覺めの顔に觸れて、街路の燈火が目に沁みるやうに輝き出した。

「さよなら。」

なほ甲高な聲が叫ぶので、ふりかへると、彼等は其處に佇んで半巾を振りながら見送つて居る。

「オイ、あれはお多賀だぜ。」

船員の一人は、彼等に答へて帽子を振つてゐた手を止めて指さした。見上げるとその家の二階の窓に、半面に燈火の光を浴びた女が立つて見下して居る。

船員は何れもその方に向つてからかふやうに帽子を取つて振り立てた。と、向ふも上半身を危い迄外に出して、これも夕闇に白く半巾を振つた。

どういふ心持でその女がさうしてゐるのかわからなかつたけれど、今になつて考へれば自分の所業の非道かつたと思ふ悔が、自分をしてその女を憐れませた。それでも自分の強情は他の人のやうに帽子を振つて答へる迄には自分を誘はなかつたのである。

町角で馬車の曲る時、未だその窓に見える女の姿を活動寫眞の映畫の一部のやうに見たが、それつきり吾々の馬車は大通の繁昌の中に走り入つた。

馬車自動車電車の騷然と入り亂れてゆきかふ間を拔けて、危い迄左右に動搖する馬車の二頭の馬は、白い鼻息をところどころの闇に殘して急ぐ。兩側のあかるい電燈に映し出された店々の飾窓は照り返へすやうにまばゆく、夥しい人出は狹い人道を埋めた上、車道にも波頭のやうにあふれてゐた。

それらの光景が走馬燈のやうに映つては廻つて行くのを、今朝からの疲勞に眠くなつた自分は夢うつゝに見て過ぎた。

停車場に着いて、預けて置いた荷物を受取り、更に赤帽に頼んで汽車に積み込ませ、不知案內の身の不得手な英語を氣にしながら、驛員を捕へて、紐育迄行く途中乘換があるかどうか、又若し氣の向いた場合に途中で下車しても構はないかなどゝ心配になる事々を、それからそれと尋ねてゐる中に僅かの時間は早くも盡きてしまつた。

自分は客車の窓から顏を出し、三人の見送人はその窓にぴつたり寄つて顏を見合せたが、もう誰も口をきく者は無かつた。たゞ別離に伴ふ淡い哀愁が四人の心をひとつに結びつけてゐるのであつた。

汽車は遂に動き出した。

「さよなら。」

「御機嫌よう。」

口々に叫びながら二三間プラットフオオムを走つた三人も及ばなくなつて立止つて、手に手に高く帽子を振り立てたが、間も無くそれも見えなくなつた。窓から乗出して見ると何處が停車場か、それさへわからず、たゞシアトルの町の燈火が、秋の夜の大空に照りかへすうす紅のあかりが漂つてゐるのを見るばかりで、やがて汽車は暗闇の廣野に向つて急速力を出し始めた。

廣々とした客車の中に、自分は心細く默しながらも、初めて乗つた外國の汽車の物珍しさに臆病な好奇心を抱いて居た。自分の乗つた室は意外に空いてゐて僅かに四五人の相客を見出したばかりであつた。それも一人一人の座席が遠く離れ離れになつてゐるので、道連らしい親しさよりも、行手の旅の長い事を一層深く想はせるのであつた。

一人の黒坊が此の客車の前方の扉をあけて入つて來た。その男はその戸口よりも丈も幅も大きかつたやうに思はれる偉大な體軀を運びながら、これは又柄にも無い愛想笑を浮かべて叮重に吾々の切符を改めて、又次の室に移つて行つた。

ふと氣が付くと、あちらこちらに默々として一人を守つてゐる乗客が、自分に對して好奇の目

を以て注視してゐるやうな居心地の悪さを覺え始めた。
自分の方に背中を向けて居るのは別として、坐つたまゝの自分の位置から斜に、向ふ側には一人の老人が居たが、汽車が動き出すと直ぐ新聞を開いて讀み始めた。けれども彼は五分十分間を置いては、新聞のかげから自分の方を物珍しさうに盜み見る。その物珍しさは侮蔑を伴ふ物珍しさである。さうだ、さうに違ひないと思ふと、その老爺の顏を見返へしてやらないでは承知出來なくなつたが、此の反抗心は更に自分を不愉快にした。
向ふの隅には、つばの廣い黑い帽子を斜にしてゐるので、光線のかげになつてゐてわからないが、若い女が一人乘つて居た。重さうな黑い外套に黑い毛皮を襟に卷いて、その中に頤を埋めて、膝の上の赤い表紙の小形の本を讀んで居た。
誰を見ても自分とは全く沒交渉な異國人である事から、此の時は殆んどお互に人間であるといふ同種の意識さへ持つ事が出來なかつた。
時計を出して見たが、まだ寢るには早過ぎるので、鞄をあけて、船中で讀みかけた本を取出したが、開いたまゝでどうしても文字をたどつて行く氣にはならなかつた。汽車の動搖でうごめいてゐる無數のＡＢＣが、ひとつも意味をなさずにちらちらするのを見てゐる中に眠くなつた。

はつと思つた時、手にした本は滑つて落ちて音を立てた。居睡つたなと思つて赤面してあたりを見廻した時、その老爺と視線が合つた。どぎまぎして本を取上げて開くと、それが逆さまだつたので一層氣まづくなつて、二三枚手早く頁を繰つたが、どうしても意味を取る事が出來なかつた。

本を置いて、窓にもたれて外を見ると眞暗で何も見えない。何時の間にか又居睡つて、二度三度窓硝子に額をぶつゝけた。遂に疲勞と睡眠に堪へられなくなつて、呼鈴(よびりん)を押して黒坊を呼んで寢床をこしらへさせた。

厚い布の帳(カーテン)を引いて、横になつて枕に頭をつけたが、眠らうとするとかへつて眠れなかつた。枕の下に響く車輪の凄じい響が耳についてしかたが無い。

上衣(うはぎ)の內がくしに入れてある若かつた頃の母の寫眞を出して枕の下に入れた。自分自身の荒(すさ)んだ心地を厭ふ心の起れば起る程、今でも母の懷に抱(いだ)かれた溫かさを忘れかねる自分にとつて、そのかみの母の寫眞よりも心をやはらげてくれるものは無い。

強く強く枕に顔を埋めて、その寫眞のうらに自分が書いた拙(まづ)い歌を繰返した。

むつかりては母に縋りて泣きし日の

その泣心地忘れかねつも

その母の誰よりも白く、しかもその底にうすく櫻色の血の透いて見える、あつたかい胸に顔を埋めてすゝり泣いた自分の幼かつた姿が明瞭に浮んで來る。父母が旅に出て、祖母と寂しく留守をした時など、たまたま加減が惡くて寢かされてゐても、母が歸つて來てその胸に縋ると、直ぐ心地よくなつた事も思ひ出す。誰よりも誰よりもその頃の自分の目に映つた母は美しかつた。しかしその母も年をとつて、比ぶべくもなく姿のよかつた人が、今では嘘のやうに肥りかへり、何時でも濡れて涼しかつたのが、今では風に當ると涙の出る老いの目になつてしまつた。一人一人子供を生む度に肥つたのだと屢々冗談に言つたけれど……。

それからそれと心を誘はれて行くうちに、いつか自分は心地よく安らかな睡眠に落ちて行つた。

未だ黎明に目が覺めた。窓かけを揭げて覗くと、何處を走つてゐるのか、曉の光のほの白く漂ふ平原の低い岡の中腹の靄の中から無數の羊が草の平に向つて下りて來るのを見た。先頭には一人の牧羊者の少年が鞭を振りながら歩いてゐた。列を離れようとする羊があると、犬が飛んで行つて列の中に追ひ込むのである。

一瞬間その靜な背景の中に蠢く一群の動物を見たが、それからはたゞ見る限りの原の中に、な

だらかに起伏する變化の無い岡を見るばかりになつた。たま〳〵その岡の上に一軒二軒風車の高く聳える農家の屋根を望む時のなつかしさは、恐らくは異郷の旅の孤客にのみ味はれる寂しい喜びであらうと思ふ。

寢床の上に横になつたまゝ、窓外の平原に此の日の朝の次第々々に下りて來るのを、夢よりもうつゝよりも、もつととりとめも無く見て過ぎた。

とかくして日輪は原の果ての岡の向ふから現れた。

未だ曾て見た事も無く廣く思はれる空を薄紅に染めて、一寸二寸三寸四寸と見る間に高く登つて行く眞紅の日輪は、此の果てしも無い野原の中に活動してゐるたゞ一つの物體であつた。

右も左も海だつた昨日に比べて、かへつて眼界が廣く思はれる大平原のところどころに、丘陵があり、林があり、稀に農家の屋根を遠く眺める時、無器用に耕された畑地をその邊りに見る事もあるけれども、その他はたゞ白茶けた砂原の小部分を埋めて雜草が茂るばかりで、此の大自然の前には人間の存在が極めて微弱に見える荒寥たる景色であつた。

何處迄行つても何處迄行つても、人間の力の殆んど及んでゐない山野を貫いて走る汽車、殊にその汽車の中に不自由な外國語をはかなみ、顏色の黃色い事、風采のあがらない事を羞ぢなけれ

ばならない自分は、今は哀れにちつぽけなものに思はれた。
あぢきない此の心地は又、一切の事について自分の手足を縛り、一言一行にも幾度となくかへりみさせるのであつた。他の人がまだ寝てゐるのに起きるのも羞しいし、他の人が皆起きてしまつた後迄、一人寝てゐるのも氣まづいどつちつかずの躊躇が心の底に漂つてゐた。

熟睡の後の腐つたやうな心地よさは、汽車の動揺をもかへつて親しいものに思はせ、特別に何を考へる氣力も無く、うらはかないやうな、かと思ふと、そのうらはかなさが懐しくて震へるやうな心持で窓外の平野を眺めるよりしかたが無かつた。

そのうちに一重の垂帳の外に足音が聞え出した。誰かゞ話してゐる聲も聞える。誰か起きたに違ひない。そんなら自分も起きたつて羞しくないと考へながら、なほそれを確める迄は安心出來ないで、又暫時愚圖々々してしまつた。

今度は誰かゞ誰かに向つて長々としやべり出した。何か云つては You see? You see? と念を押すのが確實に聞きとれるばかりだけれども、太く濁つた聲が、どうしても昨夜のあのぢゞいに違ひないと思ふと、又起き出る氣が無くなつた。耳をすますと、その濁つた低い聲はしきりに續いてゐたが、ふと途切れると、今度は思ひ切つて大きな聲で、

Yes, sir. All right, sir.

と答へたのは黑坊らしかつた。

そのまゝ二人ともつれ立つて向ふに行つてしまつたので、急いで衣服を着て、氣怯れをまぎらす爲にわざと威勢よく垂帳をあけて出た。

大概の人が起き出た後の亂れた寢床が、あからさまに東からさし入る日光に曝されて、何となく、蒸れた人いきれの漂ふのを、あけ放たれたばかりの窓から吹き込む冷い朝の風が窓外に吹き拂つて行く中で、黑坊は忙しく寢具をたゝみ、寢床を元の通りの座席に直して居るのである。

「お早う。よくおやすみになりましたか。」

彼は叮嚀に帽子を取つた。

顏を洗ひ、髯を剃つてから自分の座席に歸らうと、客室の扉をあけると、半分あげた自分の寢床のところに黑坊と老爺が頭を寄せて立つて居た。

何かしら思ひも掛けない事が其處に起つてゐるやうに、些細な事さへ大事に思はれる其時の心狀は、自分をして一歩退かなければならないやうな氣怯れを感じさせた。けれどもそのまま何處に引きかへしてい ゝかもわからず、又彼等の爲に逃げ出すのも氣がとがめるので、咄嗟の間では

あつたけれども惑亂した心を無理に抑へつけて、平氣を裝つて步み進んだ。足音にふりかへつた二人の顏は笑つて居た。それを自分は嘲笑と感じないではゐられなかつた。近づくと黑坊は例の愛想笑ひをして、

「いゝ御寫眞ですね。」

と云つた。彼の手に自分が枕の下に入れたまゝ忘れた母の寫眞がある。

「そりやあ君の愛人の寫眞かね。」

老爺は卑しい笑ひ方をして、無遠慮に訊ねた。

自分はたゞ赫とした。手きびしいうまい事を云ふ丈英語が自由でなかつた。さうしてその言葉の不自由な事が一層自分を苛々させたので、默つて黑坊の手から寫眞をひつたくつた。

「ハッハッハッハ。」

と二人はいかにもわざとらしい高笑ひをした。

自分は言葉が出なかつた。默つて二人の顏を見詰めて立つてゐたが、思ひかへして、寫眞を內懷にをさめ、化粧篋や手拭を其處に投出して直ぐに彼等を後にした。不愉快な室を出ようと扉に手を掛けた時、その扉は外から開かれて、若い娘が入つて來た。昨夜本を讀んでゐた娘だとふ

と思つた時、先方も一寸自分を見てゆき過ぎた。その時又後に二人の男の高笑ひが聞えた。何かなしに癪に障つて、少し狼狽して室を出ると、力任せに扉をしめた。自分の顔は熱かつた。眞赤だつたに違ひない。

客車と客車の間の人の居ないところに立つて、自分は一層顏がほてるやうだつた。自分の所業の極めて拙劣だつた事を回顧する餘裕が出來た爲、かへつて益々恥入つたのである。

一寸の間其處に如何しようかと考へて居たが、食堂の他に行くところもないので、そのまゝ次の客車の戸をあけた。三四人あちらこちらに居る人が皆物珍しさうに自分を見た。さつさと通り過ぎて又次の客車に入ると、此處にも五六人ゐたのが、又自分の一身に視線を集中した。今度はわざとその人々の顏を一つ一つ順々に見かへしてやつたつもりだつたが、その室を出た時は、誰一人どんな顏つきだつたか覺えてゐなかつた。

やうやくの思ひで食堂に入ると、又しても先客は、たゞ一人のこの日本人に好奇心をそゝられたあからさまの光景を、まざまざと見せつけて自分を滅入らせ、同時に昂奮させた。

空いてゐる食卓に着いたが、其處らを奔走して居る幾人かの給仕の黑坊は、殆んど滿員の客に忙しくて、なかなか自分のところへやつて來ない。早く來ればいゝと思ふが來ない。目のやり場

に困つて窓外を見ると、矢張り變化の無い平原の朝である。何處迄も何處迄もこのまゝ續いてゐて、限りの無ささうな波のやうにうねつてゐる岡の背は、あまりに晴れた日の光に霞む程砂が輝いて居る。稀に見る枯草の中の小道が僅かに人の世の遠く無い事を想像させるばかりで、人家も愈々少なくなつた。何となく內懷の母の寫眞を外から抑へて、旅人の心地に沈んだ時、自分の傍に人の氣配がした。給仕かと思つて見上げると、それは彼の老爺だつた。

彼は自分と向きあつて腰かけた。厚ぼつたい隨甲ぶちの大きな眼鏡の下から自分を見たが、直に食籤を取上げて見始めた。上から順々に讀み下しては又讀みかへす間にも、自分の方をぢろぢろ見る。その大きな鼻の頭の赤いのが、いかにも彼の人格の全部を示すもののやうに侮蔑に値ひしたのである。

食籤を下に置くと、彼は急に笑顏になつて、

「君はもう注文しましたか。」

と話しかけた。

「イエまだです。なか／＼給仕人は來ませんよ。」

自分は相手が厭な奴なので、下手な英語を殊に氣にしながら、彼は給仕人が命を聞きに來るの

の遲いのを意味したのだと思つたのである。

「では一緒に注文しようぢやないか。何か君の好きなものを。」

自分は彼の顏を見詰めて默した。まだ日本にゐる時に、米國に長くゐた人から、此の國の汽車の旅では一人前の皿の分量は多過ぎるので、見ず識らずの乘合ひ同志が食堂では組合つて注文し、それを二分して喰べると聞いてゐたが、今日のあたり此の老爺から切出された時は一寸返事に困つた。

勿論いやなんだ。しかし何と云つて斷つていゝかわからない。適當な言葉を知らないのだ。それ程英語は不自由なのだ。默つて居てはばつが惡いと思ひながら、默つて居るよりしかたが無かつた。

老爺は委細構はず、折から側を通つてゆく給仕人の上衣を捕へて呼びつけた。

「サア何にしよう。燔炙肉(ビイフ・ステエキ)は嫌ひかね。」

例の通り眼鏡の下から覗いたが、自分はたゞ彼の顏を見てゐる他(ほか)にどうも出來なかつた。

「燔炙肉。」

老爺は給仕人の方へふりかへつて叫んだ。

「かしこまりました。燔炙肉（ビイフ・ステエキ）でございますね。」

黒坊はそのまゝ行きかゝると、

「待て待て、燔炙肉は二人に一人前でいゝよ。それから麪麭（パン）と珈琲だ。」

彼は自分の方を指さして、二人が組合ひだといふ事を示した。

こんどは食卓の上に半身乗りかゝるやうに、近々と顔を寄せて、いかにも子供を相手にする風で話しかけた。

「英語は話せるかね。」

「イ、エ、全く話せません。」

「そんな事を云つて、それその通り話せるぢやないか。ハッハッハッハッハ。」

彼は彼自身の機智を喜んで笑つた。その聲があたりを憚からず高かつたので、誰も誰も自分の横顔や背中に視線を集めたらうと思つて、思はず顔が赤くなつた。

「イ、エ、全く話せません？　ね、それが英語さ。」

彼は又面白さうに笑つた。笑ふと妙に若々しく見えるのが、胡麻鹽のくせに毒々しい程密生してゐる頭髪と共に、心ある女が見たら淫卑なおやぢと思ふだらうと、ふと想像して僅かに腹いせ

をした氣であつた。

「君は何をしに亞米利加に來たのかね。」

「僕は學生なんです。」

「學生つていふと、それで此の國で何をしようといふんだね。」

「僕は學生だつて云つたぢやありませんか。學校に入るんですよ。」

自分は彼に子供扱ひにされてゐるのが忌々しかつたばかりでなく、しつつこくからかふやうに問ひ質す態度が癪に障つて來たので、突慳貪な調子で答へた。しかしその突慳貪も、ともすれば相手の言葉が聽き取れず、此方のいふ事も云へないもどかしさから來たものでなくもなかつた。

「學校に、フム、何處の學校に入るのかね。」

「ハアヴアアドです。」

「何、何處だつて。」

「ハアヴアアド。」

「何處。」

「ハアヴアアドですつたら。」

それでも彼にはわからない。自分の發音、殊に日本人の癖としてうつかりするとハアヴアアドをハアバアドとやりさうだから、一生懸命で注意したが、矢張りわからない。わざ〳〵形に示して耳を傾けて來るのがもどかしかつた。亞米利加人のくせに、どうして此のぢゞいは彼の有名な學校をしらないのだらう。

燔炙肉(ビイフ・ステエキ)が燒けて來て、大皿のまゝ二人の間に置かれた。老爺はそれを二つに切つて此方(こつち)の皿にのせてくれた。切口からしたゝる赤い血が、添物の馬鈴薯の白々と湯氣を立てゝゐるのにしみてゆくのを見た。兎角目のやり場に困り勝だつたのだ。

「フム、これはうまい。」

彼は一切(ひときれ)を口に入れて、自分の同意を求めるやうに一人言(ひとりごと)つ。此方も肉刀(ナイフ)と肉叉(フオオク)を動かし始めた。

「一體その君の入るといふ學校は何處にあるんだらう。」

老爺は又首をひねつて、考へる樣子をしながら聞き出した。

「それはマサチユセツ州のケムブリツヂにあるんです。」

「ケムブリツヂに、さうするとあのハアヴアアド大學のある近所かしら。」

「そのハアバアアド大學に入るんです。」
「大學に。」
彼は肉を切る手を止めて、けゞんさうに自分を見守つた。
自分は初めて彼の飲み込みの遲い理由がわかつた。彼は自分を東洋の未開の國から來た一少年として見くびり切つてゐるので、大學に入る學生だとは考へる事も出來なかつた爲、ハアヴアアドの名を聞いても解せなかつたのに違ひない。
「だが君は大學に入れると思つてゐるのかい。」
「入れるんです。私は今年日本の大學を卒業したんですから。」
「日本の大學を卒業したつて。」
又今更にしげ〳〵と自分の顏を見守つた。その口邊に寄る皺が深くなると、どうしても嘲笑のしるしだとしか思はれないで厭な氣持がする。
そのまゝ一寸言葉を切つて、最後の肉の一片を片附けたが、今度は麪麭のちぎつたやつに皿の中に殘つた汁をひたしては口にはこび、しまひには麪麭で皿中を拭いて、そいつも口に入れてしまつた。それが濟むと、今はこばれた珈琲に角砂糖を三つ四つ入れ、丹念に匙でかき廻しかき廻

しかき廻した後で、少し熱いのを口を尖がらして吹いて、そこで初めて一口飲んだ。
「一體君は幾歳（いくつ）だね。」
　老爺は改めて此方の顔をのぞき込んだ。
「そんな事を訊ねる必要はないでせう。」
　自分は彼の無禮な態度が癪に障つて、冷々と答へて彼を見かへした。
「フム。」
　視線もそらさずに二人は默つて睨み合つた。一秒二秒三秒、僅かに一分ともたゝないのが、おそろしく長時間に思はれた。
「給仕ッ。勘定ッ。」
　老爺は突然大きな聲で黑坊を呼んでから、又惡叮嚀に勘定書を調べ、一つ一つ蟇口からつまみ出した銀貨で支拂ひを濟ますと、挨拶もしずに立つて行つてしまつた。
　自分は惡く度胸が据つてしまつた。土地には馴れず言葉は出來ず、人種がちがふ上に、それが此國では常に侮蔑の對照となつてゐるヂャップとして、一から十迄びく／＼してゐたのが、彼の老爺の見くびり切つた押付けがましい態度に對抗する爲に、自然とたかぶつて來た感情は、自分

の怯懦を追拂つて、敵愾心に伴ふ心強さを與へてくれた。

此方も勘定をして自分の座席に歸ると、老爺は又昨夜の通り、讀んでゐるのか居ないのかわからない態度で新聞をひろげてゐる。自分の方をそのかげからちらと見たが、又新聞に目を落した。向ふの隅の娘は、窓をしめ切ると、蒸さるやうな室内の蒸氣煖爐に外套を脱いで、海軍紺の上衣の襟に思ひ切つて大幅の白いレエスをつけたのが初々しく、帽子も脱いで、明色のあまり澤山に無い髪を無雜作に結つたちひさな頭を窓にもたせかけて、これも昨夜の讀みつゞきであらう、赤い表紙の本を目の高さ迄捧げて讀んでゐる。

あちこちの他の乘客も、何れも氣の無ささうな、だらけた身體をもてあつかつたやうな風で、大概は窓の方によりかゝつて新聞か雜誌を讀んでゐた。

自分も所在なさに、手さげの中の本を取出して讀み始めた。

誰もたゞ徒然の氣まぐれに本を開いたに過ぎないので、自分も落ちつかなかつたけれど、他の人々も落ちつかないと見えて、長く讀書して居る者はなかつた。立上つて室外を前方に出て行くのは列車の一番前の喫煙室へ行くのであらう。後方に赴くのは最後に連結された圖書室を志すのに違ひない。他の室から來て此室を拔けて行く者も頻繁になつた。長旅の徒然に惱み始めたと同

時に、此の汽車に馴染んで、狹い列車の中を心置き無く步き廻るやうになつたのだ。
いくら讀んでも、意味を取る事さへ出來ない程氣乘りのしない本を腰かけの上に殘して、自分も圖書室へ行つて見た。いくつあつたか知らないが、通り拔け通り拔けした客車は無闇に數多く思はれたが、それは眞に客車の數が多かつたのではなくて、見馴れない日本人の姿の物珍しさが、人々の旅の無聊に鈍り勝な心を刺戟して、ゐたゝまれない程の注視を一身に浴びせかけられた爲であつた。
圖書室には五七人あちこちに散つて、新聞雜誌を讀んでゐた。彼の老爺も若い娘も他の一人の年とつた婦人と、もう一人の若い男と四人一かたまりになつて、風景寫眞帖を見ながら話し合つてゐた。
自分の姿を見ると、老爺は待ち構へてゞもゐたやうに手をあげて招いた。
面ぶせながら近寄ると、老爺は娘の膝の上の寫眞帖を取上げて彼自身の膝の上に載せ、幾枚かあれこれとはぐつて見たあげくに、日本の富士の景色を指差して自分の方をかへりみた。彼は何も云はないで、さも大きな發見をしたやうな得意さでしつつこくその平凡に秀麗な寫眞を指差して見せると、他の者は一齊に自分を見上げて、此方の爲る樣を見守るのである。

「ア、富士山ですね。」

自分は詮方なく聲を出した。

「綺麗ぢやないか。この通りかね、この山は。」

「エ、その通りです。」

「マア此處におかけなさい。」

ともう一人の若い男は其時傍の空席を輕く叩いて促すので、自分も退屈しのぎに仲間に入つた。

「この少年は學生で、ハアヴアアドに入學するのださうですよ。」

老爺は主として二人の女にむかつて、こんな子供が大學になんか入れるものかと云つた調子で可笑しさうにしやべつて高笑ひした。彼は自分を呼んで This boy と云つた程、子供だと一人ぎめにきめてゐるのであつた。

「ハアヴアアドに？」

年とつた非道く肥滿した人の善さゝうな老婦人は、これがその人の聲かと思ふ程若々しく透通つた聲で訊いた。この人も亦自分の柄を見て大學に入る年齡ではない、何か思ひちがひをしてゐるのだらうと云ふ樣子をあり／＼と示すので、自分は進んで說明してやる氣になつた。

「私は日本の大學を卒業して來たので、無試驗で入學出來るのです。日常會話の英語は此の通り出來ないけれど、講義を聽けば少しは解るだらうと思ひます。一體日本人はちひさいものですから貴方がたは私を子供だと思つてゐるんでせう。」

下手な英語の滑(なめらか)には簡單な事さへ言へないのを氣にしながら、冗談めかしてそれとなく自分が大人である事を知らせてやらうと思ふ丈の落つきはあつたのである。

しかし先方は自分を子供だと思つてゐたのが、意外にも對等の口をきいて、こんな事を云つたので、一寸二の句がつげなかつたのであらう。默して自分を見守つた。

「失禮ですが、何の學問を研究なさるんです。」

若い娘は少し鼻のつまつたやうな聲で、しかし人なつつこい調子で訊ねた。

「社會學(ソシオロジイ)をやり度いと思ひます。」

答へながら、初めて正面から娘の顏を見た。小ぢんまりした目鼻の、殊にちひさな口の脣の色の思ひ切つて赤い他(ほか)は、いかにも控へ目な寂しい顏立ちで、遠くから見ると全く人目をひかないたちであつたが、近くで見るとまだいたいけな幼子の無邪氣な美しさを失はない可憐(チヤアミング)な顏である。そのくせ年頃の女に特有な肉の豐饒や色つぽさを少しも持つてゐない人であつた。

「社會學（ソシオロジイ）つていふのはどんな學問です。」
老婦人は老爺にむかつて訊ねた。
「サアどんな學問ですか、兎に角新しい學問ですよ。社會學つてのはなんだね。」
彼は自分の方に顔をむけた。
「社會學とは……」
自分はさう云ひ出しながら後が續かなかつた。なんと云つていゝかほんとに其時は些かの見當もつかなかつた。英語を話す事丈に自分の頭腦の全部が支配されて、他の事は一切考へる事さへ出來ない有様だつた。
「社會學とは……社會學とは……」
自分は今度は英語が不自由なので、うまく云へないやうな様子をつくろつたが、その實頭（あたま）が空虚だつたのである。みんなが自分を見てゐるので愈々困つて顔が赤くなつた。
「社會學とは社會を科學的に研究する學問です。」
兎に角ひとつの言葉を首尾全く（よ）云ひ終へてホツトしたが、いかにも智慧のない空漠とした答へだつたと即座に思ひかへすと、羞（はづか）しくてゐたたまれない心地がした。

みんなが腑に落ちない顔をして自分を見詰めて沈默を續けてゐるので、これは失敗つたと後悔した時、

「ハッハッハッハッハッ。」

と老爺は突然、さも可笑しさに堪へないといつた風で高らかに笑ひ出した。

向ふの方で新聞を讀んでゐた者の目も此方に向いた。二人の女も若い男もあまりに突然な老爺の哄笑に、どうしていゝか困つた樣子で、しかも老爺と自分を見守つてゐる。

「ハッハッ。ハッハッ。」

と咳をするやうに最後の笑ひがかすれて止むと、一座は白けてひつそりした。

みんなが口をきく適當な機會を待ちながら、まづい事も云ひ出せないさつぱりしない心持を抱いて、互に手持無沙汰の顏を見合つてゐた。

老爺はまだ笑ひ足りないのを無理に堪へてゐるのだと云ひたげに、口の邊に下等な微笑を漂はせて自分を見、又女達を見廻した。この顏色の黃色い一人を、彼は女達の座興に供したいのだと自分には邪推された。

もう一人の若い男は、人のよささうな間延びのした顏を、何方の方角に向けていいかわからな

いで困つてゐるのをまぎらす爲に、腹のしつかりしない人間に特有な無意味な習慣性の愛想笑ひを浮べながら、膝と膝の間で揉手をしてゐる。

老婦人は老婦人で、肥れる丈肥つたのが、寄る年にたるみの來た顏をあげては自分を見、自分を見ては濟まないと思ひ返してうつむき、兎角して年にしては白過る手の指の大きな石の入つた指輪に視線を落してしまつた。

娘は自分の眞向きに坐つて居るので、一層困つた顏を窓外にそらして、變化の無い平原の目標の無い一點を無理に凝視してゐる。年頃の娘らしくなく、子供子供した細い頸筋がいかにも脆弱に見えるのに、白過る程明るい髮のおくれ毛が凡そこれ程細い髮の毛があるのかと思はれる細さで少し亂れかかつてゐる。横向きになると瘦せてはゐても女らしく、少し下ぶくれの頰の、光を浴びたうす皮の下の血が透いて見え、空色の眼と櫻ん坊のやうな脣の色とともに、思ひもかけぬ清淨な少女の美しさを見せた。その皮のうすさうな頰つぺたに淺い切傷のあとの殘つてゐるのが、ふと自分の心を引いた。

自分自身は間も無く度胸を据ゑて落ちついてしまつて、手持無沙汰の人々を冷嘲してやり度い優越した氣持が反抗の後に湧いて來た。さうしてこの目の前の人々に一人一人想像の色彩をつけ

て、とつさの間に彼等の性格から日常生活の有様に迄考へ及んだが、殊に娘の横顔の美しさを發見した時は、自分は全く平靜に復して、かへつて此の自分及び自分の生れた國を全く理解しない人々の間にゐる一日本人を客觀化して眺める餘裕さへ生じたのである。

まだ六歳か七歳の頃であつた。遊び友達の兄妹と庭のうら藪の日當りで、飯事をして遊んでゐた時、どうしたはずみか自分が手にしてゐた竹の切れはしで友だちの妹の頰に怪我をさせた。幼い女の子は火のつくやうに泣き出し、傷口からは夥しい血がしたたり落ちて衣服を染めた。自分もそれを見て泣き出した。女中が聲を聞いて馳けつけ、母もはだしでかけて來た。女の子も自分も大人の姿を見ると安心して、又一段聲を張り上げて泣いた。

その人の傷は一生殘るものとして二人の子の母になつた今も消えない。初めのうちは赤く一筋目について、自分はその人を見、その人の母親にあふ時は馳け出したい氣持に追はれたが、段々ちひさくうすくなり、年頃になつて目立つて肉づきがふくよかになると、それは黶のやうな一點になつて、笑ふ度に目につくのがかへつて可愛らしく、自分はその傷痕の爲にその人をなつかしく思つたのであつた。

その人と殆んど同じ場所で、横を向かないと一寸氣のつかない位のうす傷を、ふとこの亞米利

加の娘の頬に見出して、昔から知つてゐた人のなつかしさを強く覺えたのである。

「アラ、羊、羊、あんなに澤山羊が。」

娘は突然活々した聲で云つて、窓外を指さしながらふりかへつた。

座白けに困じ果ててゐたものは一齊に立上つて窓際に寄つた。その人々の肩越しに覗くと、今過ぎて行く平原の低い岡を灰色の羊の群が上つて行く。その後から馬に乘つた少年が鞭を鳴らしながら追つて行くのである。大風の日には見る間に形をかへてしまひさうな砂の岡の、道も無い斜面を獸は温順に列を亂さず上つて行き、その岡の頂から恐らくは淺い谷にでもなつてゐるのであらう、三足四足五足六足宛上り切つたと思ふと、直ぐ山かげに下りて見えなくなつてしまふ。最後に馬の背の少年の姿がその岡の上に一瞬間、青空を背景にして影繪のやうに見えたが、鞭をふりあげた手をふり上げたまま、砂の中に埋もれてしまつたやうに岡の向ふに消えてしまつた。

「ああ、みんな行つてしまつた。」

娘は嘆息するやうにつぶやいて、腰を下した。

「なんてたいくつな旅なんだらう。」

老婦人は娘の言葉に答へるのでもなく一人言ちつつ、最後に窓を離れると、輕くみんなに挨拶

して、重いからだを左右に揺りながら歩き出した。それと見ると老爺も立上つて、介添人の姿で後について一緒に室外に出て行つた。

若い男は娘の側で又寫眞帖を開いて雜談を始めたが、自分はそのまま窓際に殘つて、今の今羊の群が視界を去つてから、又以前の單調に動かない平原をぼんやり眺めてゐた。何處にも人里らしいものは見えないが、彼の牧羊者の少年の家は何處にあるのだらう。山の向ふの、又これよりも廣い平原の中にあるのだらうか、あの山の向ふには存外樹木の茂つた村里があるのだらうか、どうも見渡す限りこのままの沙漠とも呼び度い荒野だとしか思はれない。やがて自分の空想はさまよへる牧羊者と羊の群の夕暮に縋るべき石もなく行きくれる景色さへ描き出した。

「何を見てゐらつしやるの。」

ふりかへると、若い男の姿は何時の間にか見えなくなつて、娘は自分の隣に來て並んで掛けて窓外を見た。

「天と地、それつきり何もないんですねえ。」

「エエ、だけど先刻の牧羊者の子供なんか何處に住んでるんでせう。」

娘は日本人と口をきくのが珍しさうに、たどたどしく英語を語る自分を見守る時、その幼な氣

な顏の筋肉は好奇心の爲に緊張してゐるのであつた。
「さうですねえ、何處に住んでゐるんでせう。」
娘は小首を傾けて考へて、
「隨分寂しいでせうねえ。」
と云つてその寂しさを想像するやうに心持眉をひそめた。この人のちひさな、面積の狹い顏が極めて自然に表情に富んでゐるのに驚いた。正面から見る時と橫顏とが全く違ふ感じを與へるばかりでなく、その時々の話に心持の誘はれるまま細かく動く表情が、自分をして絕えず盜み見させる誘引となつたが、しかも持前の子供らしい無邪氣さを失はないのが一層可憐に思はれた。
「貴方はかういふ處に一生住んでゐられますか。」
「イイエ、とても駄目です。貴方は。」
「私、私も駄目。私は大變旅行好きなんですけれど、旅に出て二三日すると又直ぐ家へ歸りたくなるんです。今度も半年位は加奈陀にゐるつもりで行きましたけれど、直ぐ又うちが戀しくなつて、やつとの思ひで二ケ月辛棒しました。とうとう辛棒しきれなくなつてしまつて。」
娘は面白さうに笑つた。頰の切傷が靨のやうに愛くるしいのを見た時、自分はあまりよく似て

ゐるのに驚いてその顏を見詰めた。

「加奈陀に行つたんですか。」

「エエ、兄がゐるものですから遊びに行つたんです。ヴイクトリアね、彼處ですよ。」

自分の想像は娘の頰の傷に集められてゐた。矢張り幼い時自分が遊び友だちに於けると同じ出來事の爲にうけたのではないだらうかと考へると、又しても自分はこの人とも子供の時分に遊んだ事があつたやうな氣がして來る。

「私はほんとに世界中旅行して見たいんですよ。歐羅巴には兩親につれられて行きましたが、いつか一度は印度支那殊に貴方のお國の方へ行つて見度いと思ひます。」

「ほんとですか。」

「ほんとですとも。きれいでせうね。なんて云ふんです。櫻ですか、あの撫子色の花が咲いてゐて。」

娘は遠くに憬れる様子で想像の日本を目の前に描かうとしてゐる。

「だつて櫻は年中咲いてはゐませんよ。貴方がたは日本ていふと、それこそ春夏秋冬花が咲き亂れてゐて、蝶々が飛んでゐて。」

「さうしてムスメが扇子を持つて、ダンスをしてゐるんでせう。」

自分はしやべつてゐる中に言葉の不自由に攻められて、どうしても淀み勝になつて來るので、娘は引取つて、からかつて快活に笑つた。

「エエ、それなんです。貴方がたの想像する日本は。」

「けれど私の叔父で昔船長をしてゐたのがよく話しました。それはそれはきれいな國ですつて。瑞西（スヰツツル）よりももつときれいですつて。」

「瑞西は知りませんが、成程山水のきれいな國にはちがひありません。しかしそれだつて貴方が浮世繪や蝶子夫人（マダム・バタフライ）の舞臺で見て想像するやうなものではありませんよ。殊に市街の體裁、家屋道路の不潔狹隘な事、人間の醜惡な事なんかが第一に目について、いやになるだらうと思ひます。」

「そんな事があるもんですか。」

娘は自分が自分自身を醜惡な人間の一人として數へてゐるのに驚いて、目を見張つた。

「ほんとなんです。おまけに亞米利加の新聞や雜誌でよく書きたてるやうに、日本人は邪推深く嫉妬深く、全く不正直なんです。」

自分は一體自分自身の事、身內の事、友だちの事、なんでもかんでも些かの惡意なく客觀的に批

許し得る性質であるが、此の時は少しは語氣も強く、娘の驚くのを面白がつてゐる傾向もあつた。
「そんな事があるもんですか。日本人は大變正直で親切だつていふぢやありませんか。それに亞米利加人のやうに粗野ではないんでせう。」
娘は云ひ得て嬉しいといつた風で、これも亞米利加人である自分達を粗野だと云つて得意氣に笑つて、さうしてわざと濟ました顏をした。
「誰がそんな事を云ひました。」
「私の叔父がよく話をするんです。それからハアンも書いてゐるぢやありませんか。」
「誰ですつて。」
「ラフカディオ・ハアン。御存じでせう。」
「知つてますとも。私はあの人のものが好きで、よく讀みました。」
「アラ、貴方がた日本の方にも面白いんですか。矢張り文章がいいから面白いといふ意味なんですか。」
「イイエ、それればかりぢやありません。」
「だつてあれは小說ではなし、日本の事を吾々外國人に紹介する爲に書いたやうなものぢやあり

ませんか。」

「それはさうですが、ハアンの書いたものを見ると、日本を特にいい國として感じようとする一西洋人、しかもその人は生れつき詩人で、自分自身を置くべき環境を無理にもいいものにしてあくがれ度い心持と、時には眞實その主觀的努力の中に身を沒してしまつて、持前の詩人がうたはないではゐられなくなつたところが面白いと思ふのです。」

自分は言葉の配列を度々考へては直し考へては直しして、どうかして自分の考へを傳へたいとあせつたが、あまり言葉が堅苦しくなつてしまつたので、ゆき詰つてしまつた。

「つまりハアンの書いたものは日本人の見る日本でもなく、さうかと云つて一般西洋人の見る日本でもなく、矢張りハアンの見、或はハアンが創作した日本なんです。だからハアンの傳記を知つて讀むと一層面白さがまして來ます。」

どうしてかうも會話にさしつかへるのだらうと羞ぢながら、矢張りぎごちない言葉しか使へなかつた。

「貴方は話は出來ない出來ないと云ひながら、隨分英語の言葉を知つてるぢやありませんか。」

娘は自分の下手な發音を聽き取るのに努力しながら、それでもどうかかうか意味あひはわかつ

たと見えて、笑つてうなづいた。
「貴方は big words ばかりお使ひになるんですねえ。」
「エエ、それは耳から覺えた英語でなくて、目から學んだ英語ですから。」
自分は初めて亞米利加の娘と話をして、その遠慮の無いいやみのない態度が氣持がよかつた。誰でもこんなに氣が置けないのか、又は此の人は特別なのかわからなかつたけれど、兎に角日本にゐた時の經驗では他所の娘といふものは男と向きあつて話をしてゐると、妙に固くなりながら同時に嬌姿をつくつてゐるのが小憎らしいものであつた。なんでも男といふものは自分達を口說くものだと考へてゐるやうなのが友だちづきあひを妨げる原因なのである。さう思つて目の前の人を見ると、些かも邪念の無い此の人特有の子供らしい顏つきが、眞正面から自分を見てゐたので目を見合せて笑つた。
その時室內に黑ん坊の給仕人が入つて來て、大きな聲で食事の用意の出來た事を告げて廻つた。
「やつとおひるになりました。貴方はまだ食事にはいらつしやらないんですか。」
「私はまだお腹がへらないから後にしませう。」
「私は先刻の年とつた奥さんと約束しましたから。それでは左樣なら。」

娘は立上つて二三歩行きかけたが、ふりかへつて、
「初めて日本の方とお話をして大層面白かつたんですよ。また後程日本に就いて愚かな質問をしますからね。」
笑ひながら娘は足早に出て行く。立上ると脊が高く、脚が長いので、お尻の位置が少し高過(すぎ)るやうな後姿は直に戸口から消えてしまつた。
あたりに誰もゐなくなつた。みんな食堂に行つてしまつたにちがひないと思ふと、自分も食事をしなくては外聞が悪いとも思ふが、事實お腹は空いてゐなかつた。その上又あのぢゞいに押しつけがましく食事を共にして、組合で食べる要求でもされては堪らないと考へると、一層食慾は無くなつて、自分はそのまま其處に積んである雜誌を見たり、窓外の景色を眺めたりして過(すご)してしまつた。
食後第一に圖書室に這入つて來たのは、先刻其處の一隅で新聞を讀んでゐた男である。赤ら顔の大男で、自分を見ると笑顔になつて、つかつか寄つて來た。
「たいくつでせう。」
彼は咽喉の悪い人の聲で挨拶して、自分の前に掛けた。恐ろしく毛もくぢやらな、いかつい手

の指に指環の光るのを膝頭で組合せて、椅子の背に寄りかかりながら話し始めた。何處に行くのか何しに行くのかと、きまりきつた問答が濟むと、
「私は今度日本に行つて來たんです。」
とその男は得意さうに見えた。
「日本に。何しに行つたんです。」
「玩具を仕入れに行きました。私は市俄古の大きなデパアトメント・ストアの東洋部に勤めてゐるのですが、毎年日本に行く友だちが病氣で行かれなくなつたので、急に私が出かける事になつたのでした。エエ、耶蘇降誕祭の仕入れです。」
彼は二ケ月滯在した間の日本の印象を、商店の手代らしい淺薄さで語り出したが、聲の低いのと立てつづけにしやべるので、自分には聽き取れない事が多かつた。
間も無く先刻の間延びのした顔の所有者なる若者や、他の二三人の男が此の室に入つて來ると、彼は急に元氣づいて、彼等とは十年の知己だつたやうな親しさを示しながら、みんなを聽衆に引き入れてしまつた。
彼は秀麗なる日本の風景、富士、日光、箱根、鎌倉、その他見廻つた名所の名をあげて、最上

級の形容詞をつけて話した。しかしその各地の景色を彷彿させる特徴とか、その土地の歴史とか、地理とかいふものについては一切知らなかつた。ただ無闇にほめたてた。most beautiful, most wonderful とか、biggest, largest, finest, loveliest といふやうな言葉がのべつに出て來てその後には又必ず in the world といふ滑稽な響を持つ言葉が續いた。さうして更に自分をして彼が語る事は眞實であると承認させなくては納まらなかつた。淺薄ながらに雄辯であつた。低い聲も段々に力を持つて來て、彼を驚かした未知の世界の奇異なる風俗習慣は明媚なる山水よりも遙かに面白い話材であつた。

木と紙でつくられた扁平な家屋、人間を乘せて人間のひく人力車、轉ばなければならない筈の下駄をはいても轉ばない人間の事、何もはさめない筈でゐて、しかも實際豆でもマカロニでも二本の棒で食べる人間の事、それからそれと人々をして感嘆して目を見張らせた。

突然聽衆の一人は、少しもあたりを憚からない聲で訊ねた。

「吉原を見ましたか。」

「Why, of course.」

彼は一層得意さうに答へて、みんなを見廻した。

「吉原とはなんです。」

何もしらないのが眞面目にきいた。

「夜の世界ですよ。」

「夜の世界です。政府の經營してゐるホワイト・スレエヴです。」

語り手は他の者の聲を押しのけて說明した。

「ほんとですか。政府でやつてゐるんですか。」

「私は見て來たんです。ねエ君、ほんとですねえ。」

彼は自分の方に同意を求めた。

「それはほんとではありません。政府は……」

「イイエ、それはほんとです。」

自分が、政府が商賣をしてゐるのではなくて、政府はただ公許してゐるのだと云はうとするのを、彼は非常なる自信をもつて打消してしまつた。

「それは全く籠の鳥です。晝間でも戸外に出る事は許されてゐません。役人がついてゐて、一歩たりとも家の外には出しません。」

彼の調子では、ほんとにさう信じてゐるらしかつた。

「ハッハッハッハッハ。」

老爺の下卑た高笑ひが突然人々の後から聞えた。

「役人がついてゐて、ハッハッ、いい考へだ。ハッハッハッハッ。」

何時の間に來てゐたのか、人々の間に立つてゐた彼は、今は堪へても堪へても堪へきれないといつた風で、ひき息になつて笑つて笑ひ止まなかつた。

一座の者はすべて、此の無作法に笑ふ老爺よりも、寧ろその笑ひの標的であつたかの如き不見目な位置に置かれた自分を、四方八方からもの珍しさうに注視してゐる。

どうともなれと思つて、自分は正面を切つて端坐してゐた。これらの下等な人間の面白づくに自分を見てゐる幅の廣い面を、此方からも順々に見廻してやつた。

「ハッハッ。ハッハッ。」

老爺の笑ひはまだ止まなかつたが、その笑ひを打消すやうに若い女の聲が人々をかきわけて、かの娘の無邪氣な顏がこの室内に現はれた。

「なんです、何か面白い事があるんですか。」

「イイエ、今此の人が日本の珍しい風俗を紹介したんです。」
間延びのした男が側から差出て、女にはきかせ度ない話を祕しかくす爲の習慣的の譃をついて、
自分の開かうとする口を封じてしまつた。
「マア、此の方は日本を見ていらつしやつたんですか。」
娘は空色の目を大きくして、話上手を見上げた。
「エエ、私は日本を見て來たんです。商用で行つたんですが。」
男は相手が女なので、一層得意になつてしやべり出した。
「マア羨ましい。どんなでせう、日本は。きれいでせうねえ。」
娘は何も疑ふ事なく、その憧れやすい心から、膝を乘出して話を求める。
「ねえ、此の方の日本觀もラフカディオ・ハアンのと同じ部類に屬するのですか。」
娘は輕い樂屋落を喜んで、少しは此方をからかひ氣味にかへりみて云つた。
自分はそのへだてのない態度が嬉しかつたが、同時に此處に多大の侮蔑に値ひする人間の顏の
並んでゐる事が、娘と二人きりで愉快にもの語る事を妨げるのだと思ふ口惜しさを感じた。先刻
からの反抗心に、自分の優越を娘の前で示し度い淺薄な芝居氣もまじつてゐた。

「さうですねえ、兩方とも日本を自分に都合のいいやうに理想化した點に於て一致してゐませう。しかし彼は日本を詩化し、これは日本を俗化した丈が違ひます。」

云ひ切つてから、氣障な事を云つたなと自分で反省したが、わざと平氣な顏をして一座を見た。みんなが驚いて自分を見た。憎惡の色が、異人種の意識と共に、極めて鮮明に彼等の顏面に浮んだ。

睨み合ひとも云ふべき暫時の間の沈默の後に、一座は段々に崩れて散つて、やがて多くの人は室外に立去つたが、彼の老爺は意地の惡い微笑を浮べながら近寄つて來た。

「もうぢき停車場に着きますよ。」

云ひながらぴつたりと娘に寄添つて坐つた。その淫靡な下劣な顏つきを見ると、自分はそこにゐたたまれなくなつた。默つて娘に一禮して立上つて、さうしてそのまま室外に歩み去つた。

自分の席に歸つて落ちつくと、又窓外の荒野の景色を眺める他に爲方が無かつた。本を讀んでも根氣が續かない。三十一字の歌でも作らうと思つても、考が纏まらない。いくつもいくつも切れ切れの文句を書いては消し、書いては消す手帖の幾頁は眞黑になつてしまつた。

白雲は浮びて高し久方の

天津御空もわが知らぬ國

といふ一首を二三度口吟(くちずさ)んで、その簡單な平凡な表現の底に漂ふ、その時の自分の心持の淡い果敢なさをなつかしんだ。

けれどもそれも少したつと、高しと云つた直ぐ後に久方(ひさかた)と續くのは、同じ事を繰返して居るやうに思はれて來た。そんな事は無い、高し久方と續けてこそ力強く心持を云ひあらはす事が出來るのだと、他の考が續いて起つて來る。どつちが正しいのか自分では全く解らなくなつてしまつた。

ああ晝寢をし度いとつくづく思つた。晝寢をした事の無い自分には、此の時晝寢程羨しいものは無かつた。手帖をしまつて目を閉ぢたが、眠れない。意地になつて目をつぶつて居ると、益々眠くなくなるのである。それでも矢張り目をつぶつて居た。目をあいてぼんやりして居ると、乘合ひの誰かに話しかけられさうで、それが嫌だつたのだ。

近々と人の足音がするのに誘はれて、うす目をあくと、あの間のびのした顔の男と、もう一人別の男が、側を通り過ぎて、次の客車の方へ行くのであつた。

「もう直き停車場に着きますよ。」

一人は自分の方をふりかへつて、言ひ殘して行つた。

停車場の近くだと聞いても、窓外の景色は變らなかつた。窓から首を出して行手を見ても、矢張り同じ平原に過ぎなかつた。

十數分の後汽車は荒寥たる草原の孤驛に着いた。こんな人家も無いところに、如何して停車場があるのだらうと、心配になるやうな處であつた。

人々は爭つて下車して、其處いらを散歩した。自分もみんなの後から降りて、草を踏んで歩いた。砂ほこりの多い荒地に生えた草の中にも秋の花が咲いてゐた。名も知らない雜草の白い花と野菊に似た薄紫の花が風に吹かれてゐるのを、哀れと云ひ度い心持で見詰めてゐると、佇む足の下で虫の音がかすかに聞えた。咽喉のかれたやうな細々とした聲で啼いてゐる。

「何を見てゐらつしやるの。」

うしろから聲をかけたのはかの娘で、肥つた老婦人と手を組んで歩いて來たのが、自分の側に立止つた。

「虫が啼いてゐるんです。草の中で。」

娘は上半身をもつたいらしく屈めて、子供らしい顏を横にして、草の穗にすれ〳〵に耳を傾け

た。
「ね、啼いてるでせう。何の虫でせう。」
「エヽ、啼いてます、啼いてます。蟋蟀でせう。日本にはゐないんですか。」
「蟋蟀ですか。若しこれが蟋蟀なら、日本の蟋蟀の方がずつといゝ聲です。」
「マア此の人のお國自慢たら。」
老婦人はからだをゆすり上げて笑つた。
發車の時間が近づいたらしく、あちこちに散つてゐたのが、又乘込むので、三人は自分達の客車の方へ歩いて行つた。すると停車場の中に一かたまりになつてゐたのが、何か大きな聲で罵るやうに云ひかはしながら、引上げて來るのにぶつかつた。その一群の中から、一人の男が驅け出して來て、二婦人に向つて叫んだ。
「ルウズベルトが撃たれたさうです。短銃で。」
彼は自分自身が現場から馳けつけて來たやうな驚愕の表情をして云つた。見張つた目はまたゝかず、息せはしく云ふのであつた。
「なんですつて、ルウズベルトが殺されたんですか。」

娘もせき込んできいた。

「イヽエ、死にはしません。今新聞で見たんです。ミルウオキイで撃たれたのです。」

男は汽車の出るのを忘れてゐる女達を促して乘車させた。あつちでもこつちでも、幾組かの人のかたまりが、此の椿事を中心にしてさかんに論じはじめた。

大統領の候補者として立つたルウズベルトがミルウオキイで演說會場へ行く途中、兇漢の爲に短銃で狙擊されたといふのである。內がくしに入れてあつた演說の草稿の爲に銃丸は深く貫通しないで、彼は一命を取止めたといふのである。

動き出した汽車は又全速力で、此の平調を破つた意外の報道を傳へた一小驛を忽ち後に殘してしまつた。誰が其處に降り、誰が其處で乘つたか、殆んど目にもつかない程寂しく停車場は取殘された。

すべての人が、ルウズベルトの事件の爲に昂奮して、聲を高くして語り合つた。簡單な新聞の記事は充分眞相を傳へなかつたが、それだけ人々に想像の餘地を殘して、話題を多くした傾があつた。

撃たれた彼は自黨の人々の止めるのもきかず、胸部の負傷に悩みながら、なほ吾に演說せしめ

よ、然らずんば死を與へよ、と叫んだといふ。人々は此の古典劇のせりふのやうな一句を、口から口に傳へて繰返した。或者は此の事件が、この度の選擧に及ぼす影響を論じて、殆んど自分が演說をしてゐるやうに調子を張り、身振り手ぶりで話した。すると又一方には、それに反對の說を述べる有志もあつて、思はぬ議論の花を咲かせる一團もある。かと思ふと、自分はルウズベルトの知己ででもあるやうに、彼の生ひ立ちからその閱歷性行迄詳細に語り出す男もある。引いてはその反對黨のウイルソンを論じ、又タフトを論じて、共和黨も民主黨も互にしやべり度い丈けしやべるのであつた。彼等は反對黨であると否とを問はず、自分達がこれらの偉人(グレイト・メン)を所有してゐる事に滿足してゐるらしく見える。日本人が皇帝(ミカド)に對して持つてゐる尊敬は、彼等には解し難い心持であるに違ひない。しかし彼等が彼等の大統領に對して持つてゐる情愛も亦日本人にはわからない。吾々は皇帝(ミカド)の臣民であつて、皇帝(ミカド)の存在あつて初めて吾々も存在してゐるのに、彼等の大統領は彼等の存在の爲に存在してゐるのである。今この汽車の中で論じ合つてゐる男達の口から出る言葉を聞いても、日本の役人は震感(ショック)されるに違ひ無い。

「ルウズベルトはほんとに nice chap だ。」

一人の若い男は滔々と政治論を吐いては、合間々々にかう云つて、一人で滿足さうに一座を見

廻した。

今亞米利加の大平原を走つてゐるこの汽車の中には、ルウズベルトの名がかまびすしく響きわたつた。機關車の中はいざしらず、列車の頭から尻尾迄、乘合ひの米人はもとより、歐羅巴人も猶太人も黒坊も、男も女もすべてルウズベルトと、ルウズベルトを主人公とした戯曲的の出來事に刺戟され、昂奮して居た。その出來事を中心とした群衆心理が、他のあらゆる感情を包含し、融合してしまつた。恐らくは此の時、この光景を旅人のもの珍しい心地で眺めてゐたのは、たつた一人の日本人、自分だつたに違ひない。

汽車は只管走つた。傾いた日に赤く輝いた平原は、何處迄も何處迄も續いたが、最後に日輪は卵の黄味のやうにどんよりと濁つて、遠くの地平線に沈んで行つた。薄明の漂ふ見る限りの荒地に、夜は重たくのしかゝつて來て、風が出て、月が出た。

その宵月の靑い光がうす霧に濡れてしめつぽくなつた時、汽車は又野中の一小驛に着いた。しやべり疲れた人々は又爭つて下車して、子供のやうに輕い足取りで歩き廻つた。或者は停車場の中に驅け込んで、バアに立つて珈琲をすゝり、或者は夜食の爲にサンドウイツチを買込んだりして居る。

自分は一人改札口の傍の灌木の茂みの下草の中に立つて、寂寞の影のやうな自分をいとしがる心持をなつかしんだ。此處らあたりは目にも立たない位ではあるが、少しは傾斜面になつてゐて、遠く近く暗い木立も見える。荷物を持つて五六人の人が下りて改札口から出て行くのと擦れ違ひに、同じ程の人數は乘車したやうだつた。こんな人里遠い土地の何處に此の人々は住居してゐるのかと、停車場を離れてゆく馬車の行衛を見送つてゐると、今その馬車迄荷物を運んで行つたのだらう、小柄な赤帽が馳足で歸つて來たが、自分を見ると、つか／＼寄つて來て、帽子を取つた。

「貴方は日本の方でせう。」

彼は明晰な日本語で云つた。

「汽車が着く度に、若しや日本の人が乘つてやしないかと思つて、列車給仕(ポオタア)に聞くのです。先刻も一人ゐるといふので、客の荷物を運びながら注意してゐると、貴方が此處に立つてゐるので、大急ぎで歸つて來ました。」

小柄ながら頑丈作りの此の日本人の赤帽は、なつかしさうに語つた。自分は驚いて彼を見守つた。誰がこんなところで、同胞に逢はうと考へる事が出來るものか。

「東部はいゝでせうなア。私なんかも、どうかして東部に行き度いと思ひながら、もうやがて日

本を出て十年です。こんな田舍の砂の中に埋つてゐちや爲方(しかた)がありませんからね。」

「僕も驚きましたよ。こんなところで日本人に逢ふなんて。」

「さうでせうとも。此處に來てからでも、もう二年近くなります。エ、その前ですか、その前はシアトルにゐたんです。市俄古(シカゴ)に行くつもりだつたのが、金がなくなつてこんなところへ引掛つちまひました。」

「隨分寂しいでせうね。こんなところにゐると。」

「そりや寂しいですとも。しかし女房も子供もゐるんですから。」

「へエ、おかみさんも來てるんですか。」

自分は更に驚いて聲を高くした。

「イヽエ、日本から連れて來たんぢやないんです。此國(こつち)の女ですよ。」

彼は一寸うつむいたが、急に沈んだ聲になつて、

「以前家庭勞働(ハウス・ワアク)をやつてゐた家で働いてゐた女なんです。うつかり出來合つたところが、子供が生れましてね。長く外國になんかゐると人間も變な事になりますよ。」

自分の空想好きな性質は、忽ち此の男を一篇の小說の中の人間に仕上げてしまつた。さうして

彼の日に燒けた顏を、寧ろ同情をもつて眺めた。
直ぐに發車の時間は迫つて來た。自分は赤帽に促されて草を踏み分けて列車に歸つた。
「どうしても一度は東部に行きます。旅費さへ出來たら、かゝあやがきなんかうつちやつて逃げますよ。」
それが終生の目的だといふやうに、彼は此の時肩を聳かして云つた。
「御きげんよう。」
「左樣なら。」
自分の差出した手を、赤帽は固く握つて振つた。
汽車は容赦なく動き出した。窓から首を出して見ると、赤帽の矮小な姿は、月明の中に黑く佇んだが、見る間に霧の底にかくれてしまつた。
冷々と夜氣の沁む窓をしめて、人工的に暖められた室内の蒸されるやうな椅子にもたれ、自分は意外なところで、僅かに數分間の立話をした赤帽の姿を忘れ去る事が出來なかつた。
誰しもが踏む同じ經路を彼も此の大陸で踏んだに過ぎないのかもしれないが、此の偉大なる平原の單調に疲れ、旅馴れぬ物の怖ろしさに固くなつてゐる自分の目の前に、突如として現れ突如

として消えた事が、此の赤帽を一層鮮明に印象した。

不釣合に肩幅の廣い、脚の曲つた小男の姿も、妙にかすれた聲も、目に耳に殘つてゐる。それにしてもあんな小驛に赤帽としての收入があるのだらうか。彼の語つた斷片的の材料から、自分はあらゆる事を想像した。

女房も子もあるといふみすぼらしい田舍家が想像された。女房は肥りかへつた女に違ひない。子供は亭主に似て、黄色い顔に黒く粗い髪の毛の垂れ下つた貧弱な子に違ひない。その爐邊に毎日毎日起る夫婦喧嘩の光景さへ、自分は活動寫眞のやうに活々と描き出した。

何時か一度は東部へ行くと、蓬萊の島のやうな樂天地をロツキイの彼方に夢見て居る赤帽は、ほんとに妻も子も振り捨てさうな氣勢だつた。捨てられた女房、捨てられた子供の、哀れな有様は更に明かに浮んで來た。逃げてしまつた日本人の父の血ばかりが、うす濁つて殘る子供の不幸な生涯が、此の大平原の物凄い景色を背景にして、彷彿として目に見えるのである。

自分は何時迄も何時迄も、とりとめもなく空想を逞しくして居たが、食事の時間も過ぎさうになつたので、狼狽てゝ食堂に行つた。

朝から晩迄搖られ通しに搖られてゐる人々は、疲れ切つて、寢床の用意を急がせた。自分も早

く床に入つた。
何時の間にか汽車は坂路を上つてゐた。月の光のすさまじい、岩石の切立つた間に、何の大木か矗々と氷のやうな空をついて聳えるのを、窓の硝子に顔を押付けて覗いて見て、心も震へる程寂しかつた。
汽車は今夜ロッキイ山を越えるさうである。
三日目の朝も亦、輝かしい日輪の光を浴びてあけはなれた。疲れてゐる癖に寢苦しく、右に左に寢がへりして、長旅の夜を癪に障る程長々しく感じたが、それでも何時か熟睡した。熟睡のうちに汽車はロッキイを越え、目の覺めた時は、又單調な枯草の野を一直線に貫いて走つてゐた。
雲もない青空だ。僅かに、なだらかな小山を見るばかりで、汽車は秋風の平原に烈しく烟を吹き散らす。それでも昨日に引きかへて、時々は小さな村落を横切るのが、少しは心を慰めた。さういふ時は野に岡に、牛羊の群を懷しみ、窓硝子に顏を押付けて見た。鳥でも獸でも生きてゐるものはすべて、此の廣過る天と地と、その間にはびこる砂地の雜草より他には目に觸れない汽車の旅では、恰もそれが自分の骨肉だつたかのやうな情愛を感じるのである。
その癖同車の人間に對しては、自分は矢張り異人種だといふひがみを忘れる事が出來なかつた。

誰を見ても自分を絶えず注視してゐるやうに思はれて爲方が無い。彼等に對する無意味な畏怖と反抗が、交々自分を不愉快にした。

朝の食事の卓についても、運動不足の鈍い胃の腑は、一片の鹽豚さへ負擔だつた。苦い珈琲を半分でやめて席に歸ると、自分は極端な所在なさに伴ふ我儘な腹立しさに惱まされた。

汽車は退屈を乘せて走つてゐる。誰も彼も安逸に疲れた、油の浮いた顏をして、本を開いたり、手紙を書いたり、獨骨牌をしたりして、どうかして此の押しつけがましい倦怠から逃れようとあせつてゐるが、何をしても十分とは續かない落ちつきのない心狀にゐた。

自分は平生嗜まない煙草を頻りにふかした。幾本の紙卷煙草が、見てゐる間に煙になつて、喫煙室の窓から、大平原の秋風の中に、ちぎれて飛んで消えて行くのを、ぼんやりと眺めた。

それでも緩慢な運行を續けてゐる太陽は、午を過ぎて次第に傾いて行つた。ちつとも喰べ度いと思はないばかりでなく、寧ろ苦しい程胸に堪へる食事の後で、自分は又長い時間をもてあつかつた。早く今日も暮れて、寢床に入る夜が戀しい。夜になれば、誰にも顏を見られずに、橫になる事が出來る。眠つてしまへば退屈も無い。夜だ夜だ、夜に限ると思つたけれど、日はまだ赤々と平原に照りわたつて、黃ばんだ雜草に覆はれた行手には、何の變化も起りさうにもなく思はれ

た。

一時、二時、三時と、長い時間を刻む時計を、忌々しく思つた。

又しても本を開いた。直ぐに又根氣がなくなつて、それを伏せた。爲方が無くなつて、骨牌卓子を取寄せて、獨骨牌を始めた。三四種類しか知らないのを、繰返し繰返したが、どうしても成功しない。成功しなければしない程苛々して、骨牌を切る手も汗ばんで來た。王、女王、兵隊のやうな人間の形象をした札の出る度に、その顏面に、自分を嘲笑する表情があるやうに思はれて癪に障つた。今度成功しなかつたら、此の骨牌を窓から投捨ててしまはうと、ふと考へた。クラブもハアトも、スペヱドもダイヤモンドも、五十二枚の骨牌が、人の子の住まない平原の秋風に亂れて飛散る景色を想像すると、その一枚々々の王、女王、兵隊はもとより、一から十迄の數札のひとつひとつに靈魂があつて、此の大空と平野の間を、不思議な姿をして踊り狂ふやうに感じられた。きつと何か、大きな不可思議が、窓から捨てられた骨牌から起るに違ひないと思つた。それが又所在ない心の隙間に乘じて、やめる事の出來ない誘惑になつた。ほんとに今度しくじつたら、捨ててしまはうと思ひながら、自分でも驚いた程手際よく札を切つた。

「獨骨牌ですか。」

その時、向ふの隅で、先刻から、例の赤い表紙の本を讀んでゐた娘が、立つて來て、活潑に自分の隣に掛けた。
「エヽ、如何しても成功しないのです。今度こそ今度こそと、一生懸命なんですが、幾度やつても駄目です。」
「間の惡い時はそんなものですよ。」
娘は、自分が一枚々々めくつては並べる札に見入りながら云つた。
「エヽ、ほんとに間が惡いんです。今度出來なかつたら、憎らしい骨牌を窓から捨ててしまはうと思つてゐます。」
自分は娘を驚かすつもりで云つた。
「エヽ、捨てておしまひなさいよ。」
娘は面白さうに手をうつて贊成した。きつと、止めるだらうと思つたのに、意外にも一も二もなく捨ててしまへと贊成して興がる娘の子供々々した樣子が面白かつた。
「捨てちまへ、捨てちまへ。」
自分は繰返して云ひながら、骨牌をめくつた。狹い腰掛に二人並んだので、肩と肩とは汽車の

「サア、お捨てなさい。窓をあけてあげますから。」

とからかひ氣味に促し立てる。

「殘念たなア、もう一度やれば屹度大丈夫なんだけれど。」

自分は骨牌を取集めて、パラパラ切つて見せた。

「なんといつても駄目ですよ。兎に角今のは不成功だつたんですから。」

娘は圖に乘つて、それを捨ててしまへといふのである。

「なんなら私が捨ててあげませうか。」

堪らなく面白さうに、子供のやうに笑顔を傾けて迫つた。

「エエ、捨てて下さい。」

自分はわざと音をさせて、骨牌を卓子の上に置いた。

「ほんとですか。ほんとに捨てますよ。」

「よござんすとも。」

自分は眞正面から娘の顔を見て、笑ひながら云つた。

「それぢやあ一寸退いて下さい。窓をあけますから。」

云ひながら娘は自分を押しのけて、窓をあけた。冷たい風が威勢よく流れ込んだ。

「サ、捨てますよ。」

「お捨てなさいとも。」

「ほんとですか。」

「ほんとですとも。」

娘は卓子の上の骨牌をつかんで、高く手を振りあげたが、流石に顔を赤くして、ためらつた。

「ほんとですか。」

「ほんとですとも。」

同じ問答を繰返した時、娘の振上げた手は勢よく前に延びて、五十二枚の骨牌は木の葉のやうに窓外に飛んだ。

「アレアレ。」

二人はその窓から首を出して見た。一條(すぢ)になつて流れるやうに飛び散るのが、風に吹かれて舞上つて、夕日の中を蝶々のやうに飛散した。

「フレエ。」

娘は風に亂れた髮を氣にして首を引込めると、もう一度嬉しさうに叫んで笑つた。
「ハッハッハッハッハ。」
二人の騒ぐのに氣がついて、新聞に顔を埋めてゐた例の老爺は、眼鏡越に此方を見て、又しても氣になる高笑ひを送つて寄越した。
「何をしてゐますね。」
「今骨牌を投げ捨ててしまひましたの。この方が獨骨牌(ソリテア)をしても、決して成功しないのですもの。」
「ハッハッハッハ。それは面白い。」
老爺は面白さうに身體を搖(ゆす)つて笑つた。
娘はそれには頓着なく、又窓の外に首を差し延(のば)して、遠く後の方を見送つた。
「今頃はもう白い蝶々になつてゐませう。」
自分は、それが飛散した時の印象を、口に出して云つた。
「マア、貴方は詩人ですね。」
娘はまだ、ふざけ足りない様子で、窓をしめると、自分の顔を覗き込んでからかつた。

「日本人は誰でも詩人なのですつてね。誰かが書いてゐましたよ。」

「アア、あの十七音の詩を作る事でせう。さういふ手輕な意味では、吾々も詩人かもしれません。」

「ですが日本には、人を罵るやうな野卑な言葉は全く無く、言葉そのものが本來詩なのだといふではありませんか。」

「そんな事があるもんですか。全くいい加減な事ですよ。」

「だつて何かの本にちやんと書いてありましたもの。」

「どうしてどうして、日本人は人の惡口を云つたり、人を罵倒したりしてお茶を飲んでる國民です。惡口雜言の言葉は有過る程あります。第一吾々は嫉妬深いもんだから、眞心から人をほめる事は、如何しても出來ない位です。」

「ほんとですか。私の讀んだ本には、日本人は人を罵る言葉を持つてゐないばかりでなく、言葉は叮嚀で花のやうに美しいと書いてありました。」

「それは、世辭追從の言葉を好むといふ事實を、皮肉に云ひ廻したのではないのですか。」

「又そんな事を。——そんならほんとに日本にも人を罵る言葉があるなら、それを云つてごらん

なさい。」

娘は說破し得て嬉しいといふ樣子をして、笑ひ度いのを堪へる顏つきをして見せた。

「だつて、いくら私が貴方の惡口を云つたり、貴方を罵倒したところで、それが日本語なら、ほめてゐるのか、惡口を云つてるのか、わかりますまい。」

「イイエ、わかりますとも。第一語氣が違ふでせう。響が違ふでせう。」

娘は怜悧さうな目附をして、それは確にわかる事だといふ自信を示した。

「ネ、左樣でせう。ためしに云つてごらんなさい。羞かしいんですか。貴方は羞かしがりん坊。」

「馬鹿ッ。」

自分は自分でもハツとした程大きな聲で云つて笑つた。

「結構。」

娘は手を叩いて踊り上つた。

「ベケッ。」

わざと怖い顏をして、眞似をして喜んだ。

「ネ、上手でせう。ネ、ベケッ。」

娘は両手の中に顔を埋めて、身を揉んで笑つた。
「べケぢやありませんよ、バカですよ。」
「バカ。」
娘は云ひ憎くさうに、バとカの間を句切つて云つて得意がつた。
「ネ、上手でせう。バカ、バカ、バカ。」
「うまい。その通り。」
自分は娘をおだてて、その調子を直してやつた。
「ですが、馬鹿つて如何いふ意味なんです。」
「馬鹿つていふのはいろんな場合に使へるんです。ですけれど、意味なんかわからなくたつていいぢやありませんか。その調子さへ飲み込めば。」
「左様ですね。その調子丈で大凡はわかりますね。バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ。」
娘は止度なくバカ、バカを繰返し始めた。面白くて面白くて堪らないと云ふやうに、足踏をして拍子を取つた。

「バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ。」
自分もそれに合せてつぶやき始めた。
「バカ、バカ、バカ、バカ。」
二人は眞赤になつて笑ひながら、意地になつて繰返した。
とかくして、窓の外の平原には夕暮が迫つて來た。昨日にも増して赤い夕日が、遠くの岡の向ふに吸ひ込まれるやうに沈んで行くのを、はかないものに思つて見送つた。
食事の用意の出來た事を知らせに、給仕人の黑坊が、大きな聲で觸れて來た。他愛も無い話を物珍しさうに聞いたり聞かせたりして居た娘は、それ迄其處に興がつて居た。
「サア、やつと食事になりました。私は又あの老婦人と約束がありますから、食後に又何か面白いお話をきかせて下さい。」
云ひながら立上つて、
「屹度ですよ。」
とふりかへつて笑顔を見せたが、
「バカ、バカ、バカ、バカ。」

と口の中でつぶやきながら、自席の方へ身支度をしにかへつて行つた。
アアア、とうとう夜になつてくれた、と暗い夜に感謝して、平原をつつむ暗がりを、窓硝子を通してなつかしんだ。
昨日に比べては、樹木の茂りの多くなつた景色を、月は陰影多く照らしてゐた。あからさまに照らされた部分は、凄い程青く、物の影は怖ろしい程黒かつた。終日待ち暮した夜のその景色は、自分の苛々した心持を、全く落ちつかせたばかりでなく、知らず識らず感傷的ならうらはかない寂しさをさへ誘ひ出した。さういふ時に限つて感じられる故郷の遠い事、父母(ちゝはゝ)の遠い事が、異郷の旅の孤獨感を、一層強く色濃くするのであつた。何とも云へない涙ぐましい心持の自分を、吾ながら無上になつかしんだ。
「どうです、日本の紳士。」
驚いてふりかへると、例の老爺が、其處に近々と側に來て立つてゐた。
「どうも大層話がもてたやうだね、あの娘さんと。」
老爺は持前の淫靡な笑ひ顔をして、愛情のつもりなのか、からかふつもりなのか、自分の肩を人差指で一寸突つついた。

「あの娘さんはなかなかいいぢやないか。あれは君が好きなんださ、ハッハッハッハッ。」

彼は肩に波を打たせて笑つたが、自分が不愉快な顔をして見返したので、直ぐに眞面目な顔にかへつた。

「どうです、まだ食事には行かないかね。」

「エエ、もう直き行きます。」

うるさいとは思ひながら、自分も爲方なく返事をしなければならなかつた。

「若しも差支へが無いなら一緒に喰べようぢやないか、その方が餘程經濟だ。」

又組合ひで食事をしようといふのだなと、自分は此間の不愉快な經驗を思ひ出して、老爺の顔を見詰めたまま返事をしなかつた。

「それとも、あの娘さんと一緒といふ約束でもしたのかね。ハッハッハッハッハッ。」

明かに自分を侮蔑した態度をかくさずに、あくどくからかつた。

「ハッハッハッハッハ。」

彼は反りかへつて、高々と笑つた。

「どうなさつたの。何か面白い事でもあるのですか。」

娘は身じまひを終つて、遠くの方から聲をかけながらやつて來た。
「貴方がたは、まだ食堂にはいらつしやらないの。」
「直き行きます。」
自分は、老爺に取りあつてゐる忌々しさを逃れる爲にも、娘を歡迎したかつた。
「行きませうよ。」
先きに立つて、引張つてでも行かうとするやうに、娘ははしやいだ調子だつた。
「エエ、行きませう。」
云ひながら自分が立上らうとした時だ。老爺は自分の肩に手を掛けて、耳に口を寄せてささやいた。
「ごらん。あの娘さんは君に惚れてるよ。ハッハッハッハッハッハッハ。」
こらへても堪へても堪へられないといふやうに、全身をゆすぶつて笑つた。
「ハッハッハッハッハッ。」
「馬鹿ッ。」
自分は老爺の手を振拂つて怒鳴つた。

「オウ。」
驚いて娘は目をみはつた。息も出來ない程驚いたのか、幼な氣な顔には不安と驚愕が一時にあらはれた。それを見ると自分も、アアはしたない事をしたと、心底から悔いた。
「ハッハッハッハッハッハッ。」
老爺は又取つてつけた高笑ひをしたが、憎悪にみちたながしめを殘して、わざとらしく落ちついて、食堂の方へ歩み去つた。
「マア貴方つて方は。」
娘はまだ息をはずませて、嘆息するやうに云つて自分を見守つた。
「サ、私達と一緒にいらつしやい。サ。」
今度は、子供をいたはる親しさで、そのくせ心配さうに、自分をなぐさめた。
「エエ、直ぐ後から行きます。」
自分は涙の浮んで來るのを感じて、娘の視線を避けた。
「屹度いらつしやい。待つてますよ。」
娘は繰返して云つて、

「貴方はバカ。」

となぐさめ顏に、首をかしげて微笑して、さうしてこれも食堂へ急いだ。

自分は冷たい窓の硝子に額を押付けて、目頭に浮んで來る涙を堪へようとした。はしたない自分の行爲を後悔する心は、やがて異人種の孤獨と寂寞を限りなくはかなく思はせた。

「馬鹿ッ。」

自分で自分の意氣地なさを罵つてみたが、何の甲斐もなかつた。

明日も明後日も、まだ先の見えない此の汽車の旅の遠い行手を思つた時、涙は遂に頰を傳つて落ちた。（大正七年五月十六日稿了）

火事

頭の上の大時計は四時を打つた。幾度も幾度も、ふりかへつては仰ぎ見た時計の針の、正確に四時を指し示してゐるのを見て、正太郎は帳簿を閉ぢた。

「もうお歸りですか。」

隣席の給仕上りの古參の社員は、立上つた正太郎を皮肉な目付で見て云つた。

「エヽ、お先きに。」

彼は少しは差しくも思つたが、何時もの事で馴れつこになつてゐるので、平然として答へた。

「おさきに。」

「さよなら。」

「さよなら。」

「さよなら。」

人々の間を通りながら、正太郎は一々頭を下げて室の外に出て安心した。

戸外に出ると、廣々とした丸の内の空は、お城の向ふに沈んだ日の名殘をうす紅く殘しながら

次第に暮れてゆく。お堀の水の面にも、堀端の枯柳にも、夕方の冷い風は白く吹いてゐた。正太郎は妙に涙ぐましい心持で、塒に歸る鳥の飛んでゆくお城の上の空を見た。

子供の時分から、夕方になると正太郎の心は涙ぐむ癖があつた。彼は今その幼かつた頃の自分の姿を懷しく想ひ浮べた。芝の自宅を午前に出て、本郷の叔母の家で從兄達と遊び暮らし、遊び疲れた夕方は、たつた一人車で送られて歸るのであつた。本郷臺を下りて、水道橋を渡つて、丸の內へ入る頃は、暮れ切つた空の色に包まれたお城の景色が、彼の心ををののかせた。幼い正太郎は、別れて來た叔母や從兄達は、今頃あかるい燈火の下で樂しい夕餉の膳に向つてゐるであらう、行手の遠い我家には、父母が自分を待つてゐるだらう、と思ふと車の上の自分の一人ぼつちが悲しくなつて、叔母に貰つたお菓子の紙包みを抱へながら、自然と流れて來る涙に頰ぺたを濡らした。

正太郎は電車に乘つてからも、ふた昔も前の自分の姿が目に浮んで來てしかたがなかつた。無邪氣に幸福だつた幼時からづづいて、はちきれる程に元氣のよかつた少年期の自分は、別の世界に住んで居たやうに考へられた。それにひきかへて、此頃の倦怠な生活に思ひ至つた時、彼の心は俄に暗くなつた。

毎朝々々、早くから起されて、會社へ出て、日の暮れる迄帳簿にむかつて洋筆（ペン）を持つてゐる自分の姿を客觀的に見る時に、正太郎は馬鹿々々しいと思ふ自嘲の念を禁じる事が出來なかつた。

彼は今巨萬の富の所有者である。何の爲めに會社に通つて、洋服一着つくればなくなつてしまふ位少額の月給を貰はなければならないのか。事務の經驗を得て、將來事業家として世に立つ爲めの修業だとすればまだしも意味はあるけれど、若くして父の遺産をついだが、ありあまる程の親類や、父が生前の知己友人で世に聞えた人間が、彼には月々のあてがひ扶持（ぶち）の外、一切その資産を運用させない方針に定めてしまつた。正太郎にして見ても、默つてゐても利が利を産む巨富を持つてゐる以上、更に儲ける事は不必要に思はれた。彼は甘んじてあてがひ扶持の、若隱居の生涯を送らうと思つた。けれども、若い者が遊んで暮すのは世間體が惡いといふ理由で、父の關係してゐた會社に正太郎を勤めさせる事に人々の評議は一決した。

「これでまあ吾々も故人に對する義理が濟んだ。」

と亡き父と事業を共にした有力な實業家で、正太郎の身のふり方を評議する人の中でも、一番押切つた意見を吐いた阿久澤老人は、正太郎とその母の前で、功名手柄をほこる顏つきをして、からからと笑つた。

「おかげさまで私も安心致しました。」

と母は涙を流して喜んだ。

正太郎はその時の光景を思ひ出して苦笑した。

學校を卒業すると、男の子はたつた一人の正太郎を手放し度がらなかつた兩親に泣付いて、彼は英吉利に渡つた。倫敦大學に籍は置いたけれど、性來學校の嫌ひな彼は、ちつとも教場には出なかつた。毎日々々大英博物館の圖書館に通つて、只管讀書に耽つた。ウエスト・ケンシントンの、子供の多い軍人の家に、旅の孤獨を知らずに暮らしたが、日本を出る時に約束した留學年限は、霧の深い冬を三度迎へるうちに過ぎてしまつた。

一日も早く歸つてくれと、兩親からの手紙の度毎に口說かれても、正太郎は生れた國へ歸り度いとは思はなかつた。もう一年といふ許可を得て、海峽を渡つて巴里に行つた。羅典街のささやかなホテルの六階に、彼は氣樂なボヘミアンの生活を送つた。歸つて來い、歸つて來いと、父母からはしきりにせがんで來たが、正太郎は出來る事ならば、干渉好きの嫉妬深い人間の形造る日本の國には永久に別れを告げて、うるさい世間の無い異鄉に一生涯を過ごし度かつた。彼は飽迄も強情を張つて、これから伊太利に行かうと希つてゐる間に、大街路の並木には二度目の秋か

訪れて來た。

その時正太郎は故郷の父が大病だといふ報知に驚かされた。一刻も早く歸れといはれて、彼はあわただしく旅鞄を整理しなければならなかつた。汽車が巴里を離れる時、彼の目にはほんとに涙が浮んだ。

太西洋を越えて亞米利加を經由する途を擇んだが、船が横濱に着く前に、正太郎は船中で、父の訃を無線電信で知つた。二度とその溫容に接する事は出來無いのだと思つた時、心から親の戀しさを知つた。その親の心にそむいて、長い間外國で放縱な生活をしてゐた自分の不孝を悔みながら、折柄月の明るい甲板で、正太郎は涙を止める事が出來なかつた。

正太郎はその當時の心持を今もそのまま持つてゐて、彼は父の事を思ひ出す度に、悔恨の念に惱まされた。

電車は芝の山内を拔けて、四十分の後には、正太郎の何時も下りる橋の袂の停留場にとまつた。とつぷり暮れた川添ひの貧しい町にも燈火はきらめき初めた。

「今日はあの娘は居ないかしら。」

彼は橋を渡りながら考へたが、角の八百屋の店の前を通るのは、樂しみでもあり羞しくもあつ

た。正太郎は大跨に通り過ぎたが、店頭の土間に立つて、箱の中から蜜柑を取り出して勘定してゐる娘の姿は見逃さなかつた。襷がけで、二の腕の眞白なのが忙しく動いてゐた。彼は娘が、通り過ぎた自分を見たかどうかが氣にかかつた。

　魚を燒く臭ひの靄の中に漂つてゐる貧しい町を通りぬけると、間も無く廣い往來に出る。その突當りが正太郎の親讓りの邸宅である。

　門を入つてから一丁ばかり、だらだら坂を上る高臺に、母とたつた二人住むには廣過る彼の家はあつた。鬱叢と茂る杉木立の中の池に落る水の音を聽きながら、正太郎は疲れた足を引ずつて坂道に上つた。

　若い主人が歸つたと見ると、いつものならひで、牝牡のビイグルは、長い耳と長い尻尾を振り立てて、前後から飛びついて來る。正太郎は人間に對するよりも、より多く人間らしい溫情を、忠義な動物に感じながら、玄關で靴を脫いだ。

　年とつた、腰の曲つた用人や、女中の後から、息子の歸宅を待ちわびてゐる母もわざわざ出迎へた。

「只今。」

と挨拶して、さつさと自分の居間に引上げる正太郎の後姿を、母は涙の溢れる程嬉しく見送つた。死んだ夫の若い時に酷似なのが頼母しくもあり、抱き締めてやり度い程可愛らしくも思はれた。

湯に入つて、着物を着換へて茶の間に行くと、毎晩一本ときまつてゐるお銚子をとつて、最初のひと猪口だけ母がお酌をするのである。それは亡き父が幾十年の間一日も變らなかつたおきまりであつた。

「どうです、此の頃は。會社のお仕事にも大分馴れたでせうね。」

母は毎晩きつと同じ質問をした。それは息子の會社に於ける執務振りや、評判が氣にかかるわけではなく、晝の間最愛のものが其處に終日働いてゐる事が頭を去らないので、話の緒口には必ず會社が出るのに過ぎなかつた。

「エエ、會社の仕事なんて易しいものですよ。」

正太郎も亦同じ返事を毎晩繰返した。彼はどうせ母の此の質問が無意味なものである事を熟知してゐた。それでも母は、その返事が又なく頼母しく安心に思はれるのであつた。

「今日はね、阿久澤さんがわざわざ來て下さつて、正太郎さんも無事に勤めてゐるさうで、會社

の方達も感心してゐるつて云つてゐらつしやつたよ。それにいろいろ御親切に心配して下さつてね。」

母は息子の手酌で飲んでゐる手つき迄、限りなくいとしく思ひながら一人でしやべつた。

「それについては後で又ゆつくり聞いて貰ひ度い事もあるのですよ。」

何か事あり氣に云ひはしたものの、其處にお給仕に控へてゐる女中の方に氣を兼てロをつぐんだ。正太郎は又してもうるさいおせつかいが自分の身に迫つて來た豫感に惱みながら、盃を置いて飯にした。

食事が濟むと、正太郎は二階の自分の居間に歸つて、本を讀むのがならはしだつた。去年の秋歸朝した時、久しぶりで手にした日本の雜誌で、人道主義といふ文學上の新運動が勢力のある事を知つたが、素人ながらもそんな事に深い興味を持つ彼は、それが如何いふ事を主張する主義なのか明確に知り度かつた。いろいろの雜誌を買つて來たけれど、人道主義とか人道主義的とかいふ空漠たる無數の文字を隨所に發見しながら、主義そのものを筋道を立てて主張した論文は見當らなかつた。ただ彼はそれらの雜誌によつて、人道主義者と呼ばれる小說作家の姓名を覺えた。彼はその人々の著作を集めて、此頃は每晩それを讀む事にしてゐた。だが今日迄のところでは、

どの作品も、特に人道主義者の書いたものだといふ特質を持つてゐるとは思はれなかつた。彼は失望しながらも次ぎから次ぎと讀んで行つた。

彼が今半分讀みかけてゐるのは、所謂新進作家の中でも、人道主義者的色彩の最も鮮明な作家として、多數の青年に渴仰されてゐる一人の、「生きるための愛」といふ長篇小説であつた。社會的に地位名望の高い富家の子が、同じく富家の娘と許婚の間柄でありながら、青年期の怖しい慾情の壓迫から、ふと自家の召使を犯してしまふ。彼は親々の取決めた許婚の相手を懷しく思つてゐたので、それに比べてはあらゆる點に於て遙に劣る召使と關係した事は、單に悔恨を伴ふばかりであつた。しかしその召使の若い娘にとつては、一度許した若い主人が忘れられない人になつてしまつた。無智な女の盲目的に強い戀愛は、一時の衝動からかうした事になつてしまつたのを悔る男の良心を、更に複雜に惱ました。そのうちに日數はたつて、男は兩親から許婚の娘と正式に結婚する事を迫られる。彼は意志と感情の紛糾の中に狂ふ迄煩悶してゐるといふ場景が、著しく漢文調の勝つた誇大な文章で描かれてゐた。

まだ半分きり讀まないのではあるが、正太郎にはその男が、家庭を中心とした世間の脅迫に反抗して、彼の良心の叫びに聽き、召使と結婚する大團圓があまり容易に推察された。あと二百頁

も殘つてゐる部厚な本が、悉く倦怠であつた。正太郎は「生きるための愛」を閉ぢて欠伸をした。
その時、
「若旦那さま。奥樣がお召しでございます。」
と女中が襖をあけて、かしこまつて云つた。
「お書齋の方でございます。」
正太郎が立上つて居間を出てゆく後から女中は注意した。
書齋といふのは亡き父の書齋であつた。父の死後も生前の通り、幾十年父が倚り馴れた文机も、和漢の書籍のぎつしりつまつた數多い本箱もそのままにしてあつた。床の間の横手のちがひ棚には父の寫眞を飾つて、母はよくその前で日を暮す事のあるのを正太郎は知つてゐた。
「何か御用ですか。」
正太郎が入つて行くと、母は果して父の寫眞の前に、ちよこなんと坐つてゐた。
「マア其處にお坐りなさい。」
自分の體內から生れて來たとは思はれない程大きい正太郎の立姿を見上げて、母の目はもう細くなつた。

「實はね、今日阿久澤さんがいらつしやつた御用といふのは、矢張り貴方のお嫁の事なのですがね。」

母は目の前に坐つた息子の方へ膝を乘出しながら、手に持つてゐた服紗を大事さうに解いた。

「今度のは私には申分の無い緣談だと思はれるけれど、こればかりは一生の大事だから、親が氣に入つたからといつて押付けがましい事は出來ませんし、兎に角當人の意向を聞いた上で御返事を致しますと、阿久澤さんには申上げたのだよ。」

と樂しさうに云ひながら、紙に包んだままの寫眞を正太郎の手に渡した。

開いてみると、二つ折の大げさな臺紙に貼付けた無光澤の寫眞の主は、斜めに椅子に腰掛けながら顏は正面に向いてゐて、誰が見ても美人と呼ぶのに躊躇しない娘であつた。多過る程の髮を思ひ切つてふくらませた廂髮の下に、色の白さうな楕圓形の顏が濟ましてゐる。切れの長い目も、なだらかに延びた鼻梁も、少し大き過るとも思はれる口も、その大柄な楕圓形の顏面に均齊の美を保つてゐた。

「ね、綺麗なお孃さんでせう。ちつと年齡はとつてゐるけれど、此頃は昔と違つて、二十一ならそれ程遲い方でもありませんよ。」

母は側から覗き込んでほれぼれと見入つた。
「ね、此間の寫眞なんかとは比べ物にならない程いいでせう。」
「エエ、綺麗な人ですね。」
正太郎は氣の無い返事をして寫眞を母の手に返した。
「今度こそは貴方の氣に入るだらうと思つてね、今お父様にも御目に掛けたのですよ。」
母は父の寫眞をかへりみて云つた。亡き父は臨終の際迄、正太郎に一日も早く妻を持たせてくれと、母はもとより、親類や知己に繰返して頼んださうである。
「ひとつゆつくり考へさせて頂きませう。」
正太郎は暗い心持になり、父の寫眞を仰ぎ見ながら云つて、其處に母を殘して二階に引上げた。
彼にとつて結婚は、一生の大事だと思はれると同時に、一夜妻を購ふのと同程度の些事たとも考へられた。一大事だと思ふ時には、結婚から生ずる面倒が堪へ難く思はれた。一些事だと考へる時には、結婚が馬鹿々々しくなるのであつた。曾ては誰彼を擇ぶ事なく、女といふものが美しい魅力を持つて彼の心を惱ました時代もあつたが、三十歳に手が屆く前に、女性を輕侮する心が自然に彼を捕へてしまつた。饒舌で、陰險で、嫉妬深く、慾張りで、奸譎で、愚痴つぽい特性が、

彼をして厭惡と侮蔑の對象にさせたには違ひないが、それよりもその特性を、猫撫で聲や白粉で塗りかくしてゐる惡賢さが強い倦怠を誘つたのである。西洋の女を娼婦と看做し、日本の女を奴隷と思へば、哀れなものに對して持つ愛憐から、女もいとほしくなる事もあるけれど、對等に取扱ふ事を強要する近代の文明國に於ては、憐れまれて愛される事に滿足する淑女はゐないのであつた。

正太郎は父の忌日も濟まないうちから、それが父の遺言だといつてせがまれる結婚に惱まされた。幾枚も幾枚も集つて來る若い娘の寫眞を並べて見てゐると、どうしても賣買される品物のやうに思はれた。しかもそれは、一度購はれた以上は、品物としての重寶さを失つて、今度は積極的に自分の慾張つた慾望を滿足させる爲めに、亭主を虐使しないでは承知しさうもなく思はれる。富も地位も名譽も、衣服寶石と共に慾求するのである。正太郎は寧ろ贅澤を知らない貧しい家の娘ならば貰つてもいいと思ふのであつた。

その時彼は橋の袂の八百屋の娘を思ひ出した。

それは正太郎が會社へ通ふやうになつてから、毎朝電車の停留場へ急ぐ時、店の前を過ぎるうちに、その可憐な姿を見出したのである。年齢はまだ十七八らしいが、殆んど毎日見るうちに、

正太郎は娘を十七と極めてしまつた。十六にしては少し女になり過ぎてゐるし、十八にしては些か初々し過ぎた。十七だ、十七に違ひないと彼は思つた。

娘は何時も銀杏返だつた。小ざつぱりした服装をして、紅い襷をかけて働いてゐた。冬の寒い朝でも、露出の手はつやつやとして白かつた。正太郎は最初のうちは、その店頭を通つて娘の姿を見ない朝は、何となく物足りなかつたが、此頃では娘の居ない時は、その日のうちに或る凶事が起るやうな不安を覺えて來た。きつと歸途には逢へるに違ひないと、それを樂しみにして電車に乘つた。

その邊は一體餘り繁昌した町ではなく、どつちかといふと安い月給取や日傭取の住む區域であるが、八百屋の店はその邊では有福さうに見えた。大概の時は帳場に坐つてゐる頑丈造りの親父と、時々店頭に出てゐる足の惡い母親の間に、娘はたつた一人の愛子だつたらしい。他には八百勘と染抜いた印袢纏を着た二十歳位の中僧が、いつでも娘の手足のやうにまめまめしく働いてゐた。

正太郎は毎日見る癖に、娘の顏を正確に分析する事は長い間不可能だつた。それは彼が相手を正視した事が無く、持前の急速な歩調で通り過ぎながら、見ないふりをして盜み見る丈だつたか

らである。銀杏返に結つた髪の癖のない事、ふつくりとした頰を持つ顏の色の白い事、その白い皮膚の下にうす紅く血の色の透いて見える事、少しお凸の額にうつりのいい地藏眉、小鼻の柔かさうな鼻、無邪氣にちひさい口もとなどは餘程の日數を經てから、ひとつひとつ切離しても想ひ浮べられる程確め得たのである。けれども彼がその娘の造作の中で、一番の特徴だと思つたのは目と耳だつた。はつきりした二重まぶたの瞳の黑い目が、物を見る時は目眩しさうに細くなる癖を持つてゐた。その癖を發見した時に、正太郎は他人の顏のかくれた表情を探し出す強い興味に滿足した。娘の耳は大きかつた。厚ぼつたい耳たぶが、正太郎にとつての誘惑だつた。彼はその厚ぼつたい耳たぶを、指のさきでつまんだり撫でたり彈いたりしたら、さぞいい氣持だらうと思つたのである。

正太郎は長い間の海外生活と、生れつき羞しがりなので、往來を歩く時は正面を切つて早足で歩いた。ゆつくり歩いてゐると、人に眺めてゐられるやうな氣持がして困るからであつた。彼は八百勘の前を通る時は、その娘の存在の爲めに、一層羞しくて步調を早くした。横目を使ふのは卑しい所業だと思ひながら、どうしても娘の方に視線を惹かれた。

娘の方でも、毎日々々同じ時刻に店頭を通る彼を、心に止めたに違ひないと正太郎は考へた。

心なしか自分の通るのを見ると、働いてゐる時も手を休めて、例の目眩しさうな目つきをして見迎へ、見送るやうに思はれた。ふと二人の視線のぶつかつた時には、正太郎は狼狽てて目のやり場に困つて、顔を赤くして電車に急いだが、娘はちつとも正太郎の視線を避けるやうな素振りをしなかつた。それは自分にはやましい心があり、先方は無邪氣な心を持つてゐる證據だと考へた時、正太郎は人知れず自分の卑怯を輕蔑した。

けれども、一體自分は彼の娘に惚れたのかしら、と彼は眞面目に自問した。否、といふ答が何等の澁滯も無く胸に湧いた。正太郎は毎日その店の前を通る時、まめまめしく店頭に働いてゐる娘の姿を、面白くも無い會社へ通ふ途すがらの風情としてなつかしんだ。彼は彼が平生顔を合せる種類の女、たとへば貴夫人令嬢藝者などと呼ばれる階級の女に比べて、その娘が無邪氣に可憐な風姿を備へてゐる點に於て、如何に牽引的であるかを思つた。けれども正太郎は、曾て一度も猥らな心持をもつて娘を見た事が無い。寧ろ厭ふ可き貴夫人令嬢藝者等に對しては、時に淺ましい浮氣な慾情を誘はれる事が無いとも云へなかつたが、八百屋の娘丈は、聖母の繪を見る時の心持しか起らなかつた。それはその娘には、貴夫人令嬢藝者等の持つてゐる淫猥な所作表情が皆無だつたからであると、正太郎は勝手な推理の結末をつけた。

若しも自分が、此頃讀んだ人道主義者の書いた小說の主人公のやうな芝居氣を持つてゐたら、自分はあの娘に結婚を申込まなくてはならないのだと、机の上の小說本から惹起された空想に誘はれた時、正太郎はそれらの小說のすべてが馬鹿々々しく思はれた。矢張り野における蓮華草といふ通俗な洒落が續いて腦裡をかすめた時、彼はそんな駄洒落を想ひ浮べた自分自身を一層馬鹿々々しく思つた。

正太郎は先刻母に見せられた美しい令孃の顏や、今日迄に澤山見た他の候補者の顏の渦を卷く只中に、無邪氣に笑つてゐる八百屋の娘の顏を幻に描きながら、冷いけれども氣樂な獨り寢の床にもぐり込んで、無責任な熟睡に落入つた。

寒さは次第にうすらいで行くけれども、正太郎には退屈な日ばかりが續いた。朝は八時少し過に家を出て、八百屋の店頭に娘の姿を見る事を祈りながら電車に急いだ。九時から四時迄は、たつた四十五分間の晝休みに煙草をふかす丈で、憎々しく重たい帳面に細かい數字を記入したり、幾度やり直しても安心の出來ない算盤を彈いてゐなければならないのである。退出時間の四時になつても、勤務振りを見せ度い會社員根性から、大概の人はなかなか仕事をしまはないのである

が、正太郎は頭の上の大時計が四時を打ち切ると、直ぐに机の上を片附けて立上るのであつた。

「大槻さんは外國流ですな。」

或時太鼓腹の課長は、一人先に歸らうとする正太郎を後から呼止めて、腹に波を打たせて笑つた。

會社を出ると電車に乘つて、眞直ぐに家に歸る日が多かつた。時にはふいと氣が變つて、一人で夜を更かす事もあるけれど、月並な洒落の外には話の解らない癖に、無闇に高慢ちきな藝者などを相手にしてゐると、愈々退屈して欠伸の出る事が多かつた。その上いくら遲く歸つても、母は茶の間に待つてゐて、彼に一杯の茶をすゝめるのである。正太郎はさういふ時は、慾ばかり張つてゐる藝者なんかを相手に、無駄な時間を費した自分を顧みて冷汗を覺えた。それよりも家に歸つて、母と二人差向ひの、寂しいけれども氣持のいい食膳につく方が、心を亂されない丈でも遙かによかつた。彼は電車を下りて、又八百屋の前を通るのを樂しみにして、寒い夕暮を家路に急いだ。

此頃正太郎は自分の春着の外套について、思ひも掛けなかつた不思議な心の動搖を覺えた。空の色も次第に藍が深くなり、往來の土も輕い埃に白んで來たので、冬中着てゐた厚ぼつたいのを

脱いで、彼は旅鞄の下積みになつてゐた薄い外套を取出した。それは巴里でこしらへた短い紺の外套で、後に帶がついてゐた。彼は火のしを當てて貰つて、鏡の前に立つた時、形の惡い日本出來の外套の、どういふわけか引擦る程裾の長いのを着てゐる世人に對して、自分の服裝の氣の利いてゐるのを密に誇りとした。

ところが往來に出て見ると、誰もの視線が彼の外套に集つてゐるやうに思はれて爲方が無い。縕袍のやうなだぶだぶの、身體に合は無い外套の足にまつはる裾を蹴返して、亂れた步調で步いてゐる多勢の間では、形のついた膝きりの外套を着た自分一人は、人種が違ふやうに見えるのかしらと考へた。電車の中でも乘合の視線はどうしても彼の外套を離れなかつた。丸の內で電車を下りた時はホツとして、彼は會社の石段を大跨に上つて事務室に入つて行つた。

「お早う。」

「お早う。」

既に仕事を始めたのも、まだ其處いらにかたまつて無駄話をしてゐるのも、きまりきつた朝の挨拶を交しながら、一齊に正太郎の姿を物珍しさうに見た。

「大槻さん、貴方の外套は彼地の最新流行ですか。」

頭をピカピカ油で光らしてまん中から分けてゐる、平生高襟々々と呼ばれるのを得意にしてゐる若い社員は冷かすやうな調子できいた。

「イイエ、極く當りまへのものなんです。」

正太郎は眞赤になつて、それつきり何も云ふ事が出來ずに、狼狽てて外套を脱ぐと、机に向つて帳簿を開いた。

毎日々々會社への往復に、正太郎は短い外套を氣にしながら、それでもお引擦りのだぶだぶの外套を新調する氣にはなれなかつた。あんなみつともない風をして、そのみつともなさをさへ知らないで得意になつてゐる多數者と同じ水準に下るよりは、笑はれても不思議がられても構はないと彼は考へた。外套の短いのを氣にすればする程歩調は自然と早くなつて、彼は靴の音を高くさせて歩いた。

けれども正太郎は、八百屋の前を通る時丈は殊に混亂した心持を外套の爲めに惹起されて困つた。あの娘も、矢張り見馴れない外套を特に物珍しさうに、通り過ぎてゆく後姿を見送つてゐるやうな氣がして、ひとりでに顔の赤くなるのを覺えながら、彼はわき見もしずに急いだ。

或朝正太郎は少し寢坊したので時間が危なくなり、殆んど馳足で門を出た。駄菓子屋荒物屋豆

腐屋魚屋貸本屋などを挾んで並ぶ職工や日傭取の住んで居る長屋の、傾いた庇の下を通つて、八百屋の方へ曲る溝のふちの電信柱にぶつかるやうに勢ひよく左へ折れる出會頭だ、危ないと思ふひまも無く自轉車にぶつかつた。

「どうも濟みません。」

横倒しになりさうなのを片足土に下して堪へたのは八百勘の小僧だつた。

「どうも濟みません。」

同じ事を繰返して額の汗を拭きながら頭を下げる度に、腕に引つかけるやうに提げてゐる竹籠から芋や玉葱が落ちて地面にころがつた。

「イエ、此方こそ氣が利かない、ツイ急いでゐたもんだから。」

正太郎はただ驚いたばかりだつたから、先方が平あやまりにあやまるのを見ると、氣の毒になつて赤面した。

「どうも濟みません。」

小僧は自轉車を電信柱に寄せ掛けて置いて、落散つた商賣物を拾ひながら、幾度もあやまつた。

正太郎はそれに會釋して、歩き出したが、氣が付くと八百勘の店頭に娘が出てゐて、馳出して

來さうな樣子をして氣遣はしさうに今の出來事を見てゐるのであつた。正太郎は混亂した心持を、わざとすました顏でかくしてその前を通つた。

「まことに御氣の毒さまで。」

娘は通りかかる正太郎の横からちひさな聲で詫びた。

「イイエ、此方こそ。」

正太郎は不意に、思ひも掛けない娘に聲を掛けられて、どぎまぎしながら帽子を取つた。さうして橋を渡つて電車に急がうと一歩踏み出した時、

「アノ失禮ですが、外套に泥がついて居ります。」

と云ひながら娘は馳け寄つて來て、短い裾を捉んで揉み落した。

「難有う。」

正太郎はやり場に困つた目を落すと、目の前に近々と頸を延ばした娘の、その細い頸筋から頰迄眞赤になつてゐるのを見た。殊に大きな耳は血の色が透通つて朝の日に光つた。

「難有う。」

彼はもう一度挨拶して歩き出したが、その時彼を目眩しさうに見上げた娘の、左の目の下にち

ひさな黑子のあるのを見出した。

彼は折よく來てくれた電車に救はれるやうに思つて、橋を渡ると馳出して飛乘つた。

會社に行つて帳面をつけながら、正太郎はその帳簿の白紙の上に、八百屋の娘の顏が屢々浮き出すのを見た。初めて氣の付いたちひさな黑子が、人を見る時に目眩しさうな目を一層活かしてゐるやうに思つた。自分の店の小僧の粗忽を詫びる時に、いかにもへりくだつた態度で、しかも心から詫びないでは濟まないと思つてゐる風情だつた事を、正太郎は忘れなかつた。

夕方歸宅の途中、彼は今朝の出來事が自分と娘との間を、今迄とは違つて何か親しい關係に持來したやうな氣持で、その店の前を通るのを樂しんだ。けれども、彼が電車を下りて橋を渡つた時、八百屋の店には娘の姿は見えないで、小僧が寒さうに火鉢を抱へて店番をしてゐるばかりだつた。正太郎を見ると、間の惡さうな顏をして一層寒さうに火鉢に囓りついてしまつた。

翌朝、正太郎は又何時もの時間に家を出て電車に急ぐみちみち、今日こそは娘は店に出てゐるだらう、出てゐたら挨拶をするだらうか、挨拶をしたら此方は如何しよう、などと種々思ひ迷つた。昨日自轉車にぶつかつた曲角迄來ると、彼の胸は動悸して來た。

もう一度自轉車にぶつかりたいものだと思ふ氣持もあつて、正太郎は電信柱の角を勢よく左に

折れた。

早春の野菜果物に、朝の日光の輝いてゐる店頭を掃き清めた後に、手拭を吹流しにして娘は打水をしてゐた。正太郎の靴の音に何氣なく顏をあげた一瞬間、挨拶をしようかしまいかと氣迷ふ混亂が明かにその表情にあらはれたが、どうしていいか困つた顏に、困つた事をかくす時に浮べる微笑がほの見えて、娘の手が頭の手拭を取らうとした時、正太郎はハツトして帽子に手をかけた。けれども、若しも娘がほんとに自分に挨拶しようとしてゐるのかどうかが疑はれた。正太郎はチラと見合した目をそらして、帽子にかけた手を放すと、眞赤になつて店頭を通り過ぎてしまつた。

橋を渡つて電車に乘る迄、彼は強ゐて後をふり向かなかつたが、電車が動き出してから窓を通して見ると、娘はもう何のかかはりも無い樣子で、バケツの水を往來に撒いてゐた。

失敗つたと思ひながら、自分と娘との間には、此の好機を逃してしまつた以上、永久に近付く事の出來無い溝渠が出來てしまつたやうに感じて、正太郎はふさいだ顏をして脣を嚙んだ。

春になつた。灰色に包まれて冷くかじかんでゐた空も地も、何時の間にか驚くばかり豐富な色

彩にいろどられて、空は青く晴れ、草は緑に萌えて來た。

けれども正太郎の生活には些かの變化も無かつた。朝はきまつた時間に起され、きまつた時間に家を出て會社に行き、きまりきつた仕事をきまつた時間迄こつこつ續けた。その會社への往復には、八百勘の店の前を樂しみにして通るけれど、一度逃した機會はそれつきりで、娘は何時迄たつても路ばたの風情に過ぎなかつた。正太郎は短い外套を、此頃は腕にかかへて默々として歩いた。

或日會社で、いつもの通り帳面をつけてゐると、同僚の一人が後から肩を叩いて、

「大槻さん、貴方に奢つて貰ふ事がありますぜ。」

と笑ひながら云つた。

「サアそんないい事がありますかしら。」

正太郎は振返つて答へながら、何も心當りが無いので首をひねつた。

「諸君、大槻さんに是非奢らせなくてはならない事があるんです。」

その男は、自分一人が奢らせる理由を握つてゐる事をほこる顏付をして室内を見廻した。

「歸りに松本樓で麥酒ですか。」

向ふの隅から一人が面白さうに聲を掛けた。

「いかんいかん、大槻さんの御馳走なら麥酒なんぞでは濟まされない。少なくとも平野家だね。」

小僧上りの社員も彈き終つた算盤を置いて、意地の悪い笑を浮べて云つた。

「實際平野家位は奢つて貰つてもいい種なんです。」

最初の男は愈々得意になつて、

「どうです大槻さん、平野家ときめようぢやありませんか。」

と云ひながら、又彼の肩を叩いた。

正太郎は、平生から自分一人を別物扱ひにして、白い目で見てゐる同僚達が、何かからかふ材料をつかんだ面白さに浮かれてゐるのを、苦々しく思ひながら默つて冷かされてゐた。

「實はね。」

最初の男は口は切つたものの、矢張り正太郎の思惑が氣遣はれて、

「よござんすか、云つても。」

ともう一度念を押した。

「よござんすとも。」

正太郎は無理に愛嬌づくつた態度で答へた後でその態度を不愉快に思つた。
「實はね、大槻さんの縁談の事で今興信所から調べに來たんです。」
男は正太郎よりも他の多勢を相手に、さも面白さうに廣告した。
「支配人に面會を求めて來たんだけれど、支配人は、一緒に仕事をしてゐる者の方がよく知つてゐると云ふので、僕が呼ばれて興信所の人に逢つて來たのさ。」
「へエ、どんな事を調べるんです。」
「そりやいろんな事を調べるさ。會社に於ける執務振り、評判ね、それから交際、品行、酒を飲むか煙草を吸ふか、趣味はなんだなんて事迄聞くんです。」
「で、君はなんて答へたんだ。」
「大槻さんの事だから勿論學術優等品行方正、事務には精勵、交際は圓滿一點非の打ちどころが無いと云つたさ。だから奢つて貰はうつて云ふんですよ。」
誰も彼も仕事の手を休めて、苦り切つてゐる正太郎を取巻いて、それからそれと噂話を止めなかつた。
正太郎は口を動かして居る者も、耳を鋒てて居る者も、すべて其の場に居る人間を憎んだ。當

の自分がどんな事を考へて居るか少しも察しないで、他人の事を無責任な放談の材料にして笑ひ興じて居るのが面憎かつた。けれども、此の教養の無い月給取の戯弄物に自分をしたのは、何處の誰だらうと考へた時、彼は興信所に頼んで、自分の素行を調べさせた人間を一層忌々しく思つた。誰がそんな奴の娘を貰つてやるものかと憤りながら、まだ取沙汰を止めない同僚達に背を見せて、せつせと帳面をつけた。

夕方四時が鳴ると、正太郎は何時もよりも殊に手早く仕事をしまつて立上つた。

「大槻さん、大槻さん。」

後から呼止めたのは、先刻興信所の人間に逢つた男だつた。

「平野家はどうしました、逃げ出しちやいけませんぜ。」

彼がニヤニヤ笑ひながら云ふと、そこいらに居る者全部が、同じやうな笑ひ顔を正太郎の方に向けた。

「いづれ話がきまりましたら。」

正太郎はさう云つて頭を下げると、直ぐに室の外の廊下へ出た。

電車の中でも、家に歸つてからも、正太郎は或娘を持つ或親の爲めに、非常に侮辱を受けたや

うな氣持がして癪に障つた。いかに娘が可愛いいからといつて、相手の男を探偵根性で根掘り葉掘り取調べないでもいいではないか、娘がほんとに可愛いいのなら、そんな不見不知の男になんかやらなければいいんだと、彼はあらゆる點からその親の所業を不滿に思つた。一本の酒も妙に利いて、醉の廻つた正太郎は、母がいつもの取り止めの無い話の相手になるのもうるさく、自分の部屋に引上げて、寢床に入つてからも、まだむしやくしやした氣持を忘れる事が出來なかつた。

それから四五日たつた或日の午後、正太郎が會社で下手な手付で算盤を彈いてゐるところへ、阿久澤老人から電話が掛つて來た。

「大槻さん、第六銀行の阿久澤さんから電話です。」

給仕が大きな聲で呼んだ時、銀行會社の重役の肩書を二三十背負つてゐて、自分でも何銀行に關係してゐるか一寸勘定する事も出來無い程顏の廣い當代一流の實業家から、電話のかかつて來る正太郎を、同僚の者は羨望の目を以て見送つた。

阿久澤老人は自分で電話口に出て來て、別段用事があるわけでは無いけれど、庭の櫻も咲き初めたから、今日は息子とその嫁を主人役にして若い連中を集めて遊ぶつもりだ、若し差支へが無ければ會社の歸りに御飯を喰べに來てくれないかと云ふのであつた。

「若いきれいな令嬢を二三人御目にかけるから是非お出でなさい。」

と如才ない事を云つて、からからと笑つた。相手の背中を叩いて、いかにも腹藏の無いところを見せるつもりで、腹をゆすつて笑ふのが、此の勢力絶倫の老人の世間受のいい所以だと人は云ふが、正太郎はその見え透いた技巧が嫌ひだつた。

「難有う御座いますが今日は先約がございますので失禮致します。何卒御宅の皆樣にも宜敷くおつしやつて下さい。」

正太郎はまざまざと噓をついて電話を切つた。彼には阿久澤老人の詐謀が一切明白にわかつた氣がした。頭の鉢の開いた、花柳界では「きぬかつぎ」と呼んでゐる息子と、借金で有名な子爵の家から來た派手好な嫁をだしにつかつて、その嫁の友だちかなんかを、自分に押付けようといふのだらうと、正太郎は裏を見透してやつた皮肉な快感を禁じる事が出來なかつた。彼はつい此間阿久澤老人が持つて來たといふ美しい娘の寫眞を想起した。さうだ彼の娘に違ひ無いと思つた。母の話によれば、それは矢張り實業界で名を知られた家の娘であつた。學校と家庭で受けた通り一ぺんの教育の他に、音樂と文學に深い趣味を持つて居ると云ふ事を媒介人口は自慢さうに吹聽したさうだ。

ふと正太郎は興信所の事を思ひ出した。若しかすると、彼の娘の親の所業かしらと疑つたが、瞬間に興信所と娘とを結び付けて、彼は一切の事が不愉快になつた。

その日も漸く四時近くなつて、そろそろ仕事をおしまひにしようとして居ると、

「大槻さん電話です。お宅から。」

と又給仕は大きな聲で正太郎を呼んだ。電話は母からで、今日は出掛けには何處にも行くやうには云つて居なかつたが、歸りに何處かに廻るのかときいて、

「實はね、今阿久澤さんから電話で、是非正太郎さんに來て頂き度いが、先約があるさうで殘念だとおつしやつてね、それでもどうか出來る事なら都合して貰ひ度いとしきりにおつしやるので。」

母はくどくどと、正太郎が折角の招待を斷つたのを取消すやうに迫つた。

「別段用事が無かつたら、行つてあげなくては、第一義理が惡いぢやありませんか。」

「エエ、ですけれどね、今日は友だちと約束してしまつたものですから。家を出る時にさう云つて置くのを忘れてしまつたんですが、此間からの約束でどうしても斷れないのです。」

正太郎は又嘘を重ねて電話を切つた。

夕方會社を出て堀端の柳の下に、春の空の生温かく暮れかかるのを見上げた時、正太郎は別段行く目的も無いのに、其場逃れの嘘をついてしまつた爲め、家にも歸れなくなつた其身をもてあました。彼は暫時其處に佇んで考へながら三四臺電車をやり過ごしたが、遂々自分の家とは反對の方角にむかつて所在なささうに歩き出した。

黄昏に彼は或裏通りの待合の格子を開けて入つた。洋服の膝を窮屈に折曲げて面白くも無い酒を飲んだ。大臣や金持の他にはお客は無いと思つてゐるやうなその家の女房や、お客に機嫌を取られつけてゐる爲めに高慢にすましてゐる藝者が、人を馬鹿にしながら月並な洒落や世間話をしてゐるのをぼんやり眺めながら、他所の家で彈いてゐる三味線を聽くとも無しに聽いてゐた。日本の音樂は殆んどすべて、音樂堂やお座敷で聽くべきものではなく、通りすがりの往來か、縁も由縁も無い他所の座敷から聞えて來るのを、無責任に聽いてゐるのが一番いゝ、つまり音樂そのものよりも、四圍の景色殊に聽く人の心持によつてその價値は主として定まるのだと、所在ない正太郎は盃をふくみながら考へた。

「ねえ貴方、貴方はまだ奥さんは出來ないんですか。」

不意に呼びかけられてハツトした。其處に藝者のゐる事さへ彼は一瞬間忘れて居た。

「エ、何の話。」

「マア、何の話だなんて、貴方聞いてらつしやらなかつたの。今皆で貴方の奥さんにはどんな人がいいだらうつて話してたんぢやありませんか。」

相當に容貌がよくて、その容貌のいいのが災になつて無闇に氣取つてゐる若いのが、一語々々に妙な嬌態をして甲走つた聲で云つた。

「私はね、貴方は矢張り西洋仕込みだから、ハイカラさんでサンキュウ、アイ、ラブ、ユウつてなお孃さんがいいと思ふわ。」

朝鮮金魚のやうなのは無責任な顏をして云ひながら、臺の上の江戸土産に手を延して口に入れた。

「そりやあ違ふわ、まあちやん。私はね此方には御容貌は二の町でもいいから、當節には珍しいつて云はれるやうな溫順なしい娘さんでなくちやあ勤まらないと思ふよ。」

二言目には江戸ッ子だと云ひ度がる年增は泳ぐやうな手付をして他の者の話を遮つた。

「大きにさうかもしれないねえ、此方も隨分變つてらつしやるから。」

「だつて姐さん、いくら此方だつて御面相が二の町ぢやあ嬉しくないでせう。」

正太郎はそれが自分の話だとは思へない顔付をして、幸福な藝者達を見守つた。誰の顔にも自分達の御面相は二の町ではないといふ滿足が現れてゐた。

どういふつもりで世の中の人は、餘計な世話を燒いて、若い男と若い女をくつつける事ばかり考へてゐるのだらう、數多い親類達も、阿久澤老人其他の人も、待合の女房や藝者達も、みんな同じ物好きな興味を持つてゐるのだ。往來で犬のたはむれを取卷いて見てゐる人間と同じ事だと考へた時、正太郎は自分自身がその見守られてゐる畜生の位置に在る事を思つて不愉快になつた。

夜更けて家に歸つた正太郎は、茶の間の長火鉢にもたれかかつて、寂しさうに息子の歸宅を待つてゐる母の姿を見た。

「只今。」

と云つて頭を下げた時、彼はしたたか酒氣を帶びて居る自分を恥ぢた。何時でも自分に對して無我の情愛を持つてゐる母に、出たらめの噓をついて、何の興味も無い癖に生意氣な女達を相手にして馬鹿にされて居た自分がなさけなくなつた。

「今日はどちら。」

「學校時代の友だちと一緒に御飯を喰べて來ました。」

正太郎は母が手づからすすめるお茶を飲みながら洒々として答へる自分の態度を憎んだ。

「それぢやあ爲方が無いけれど、阿久澤さんの方では殘念がつてねえ。大丈夫來て貰へると思つたので、つい前以て都合をきかなかつたので手違ひになつてしまつたが、今度の日曜には私と一緒に來てくれつて、奥さんが電話で繰返して云つてらつしやつたよ。」

母はいかにも殘念さうに云ふのであつたが、正太郎は又此の次の日曜をそんな事でつぶされてしまふのかと思ふと、機嫌のいい顏をして居る事は出來なかつた。彼は母との對話を避ける爲めに夕刊の新聞を開いて讀むともなしに見てゐた。

「實はねえ。」

母は暫の沈默も待ち切れ無いやうに切出した。

「今日はあの此間の寫眞のお孃さんね、あの人を呼んで貴方に見せるといふので、阿久澤さんでは待つてらつしやつたのだけれど、ほんとに惜しい事をしてしまつて。——まあ一度見て御覽なさい、それはそれは綺麗なお子でねえ。」

長々と說き出して、母は亡き父に對しても早く身を固めて貰はなければ後に殘つた女親の務が果されないなどと云ひ出した。

「ほんとに彼のお嬢さんなら私も此上無しだと思ふけれど、どうでせう、貴方の氣には入らないかしら。」

阿久澤夫人と打合せをして、母は三越でその娘の下見をして、一から十迄氣に入つてしまつたのだと云ふ。

「お母さんさへお氣に入つたのなら結構ですよ。」

正太郎は自分でも驚いた程突慳貪な調子で答へた。

「イ、エ、それはいけません。いくら私の氣に入つたからつて、かんじんの貴方が嫌ひなら爲方が無いのですから。ただ先方でも大變乘氣になつて、是非貰つて貰ひ度いとおつしやつてるさうですからね。」

正太郎はふと興信所を思ひ出して不愉快になつた。

「まあ急ぐ事ではないから、貴方もゆつくり考へてごらん。其上で厭なら厭で構はないのだから。」

未練らしく母が話を切上げないのが正太郎の面白くない心持を一層苛々させた。阿久澤夫婦が小細工をして親切がつてゐる態度も、母が三越なんかでその娘にそれとなく引合はされて來た事

も、彼に取つては面白くなかつた。

「ではもうおやすみにしませうか、大分遲いやうだから。——兎に角阿久澤さんの方には、今度の日曜に伺ひますと返事をしてもいいでせうね。貴方も一度見て御覧なさい。」

「私は見なくたつていいんですよ。どうせあんな娘は嫌ひなんですから。」

正太郎は思ひ切つた事を云ひ捨てて立上つた。

「おやすみなさい。」

彼はそれでも母の顏を見るに忍びないやうな心持で寢間に入つた。

高臺の家から見下す山の手の町の、若葉の中に咲きまじる櫻も、埃を浴びて色が褪せて散際になつた。正太郎は久し振りの故國の春を珍しく思ひながら、短い外套を抱へて會社へ通つた。歐羅巴の春は肉體の力を増し、心の勇躍が精力の横溢と共に人を押包むやうに思はれたが、日本の微妙なる季節の推移は、冬から春に向ふ時には肉體も精神も狂暴ならしめ、やがて春も暮れて行く頃は、散る花の一片にさへ淚を催す程人を感傷的にするやうに思はれた。正太郎は母の心にそむいて、阿久澤夫婦の持つて來た緣談も斷つてしまつた氣樂な身で、寂しい家の庭に立つて、行

く雲や流れる水にさへ、世の中の果敢ない心持を屢々誘はれる事があつた。

彼は此間の縁談を斷る時に、決して自分は獨身を主義として居るのでは無いと、悲しがる母を慰める爲めに云つた。

「いづれ近いうちにはきつと貰ひます。」

とさへ公言した。

「私はもう誰でも貴方の氣に入つた人ならどんな家の娘でもいいのだから、どうか早く身をきめておくれ。」

母は涙ぐんでかき口說いた。

正太郎は其時眞實に誰とでもいいから結婚してしまはうかと思つた。自分の方から進んで妻にし度いと思はない人と結婚する事は、彼自身の道德から云つて心苦しい事であつたが、同時に彼の心に喰入つてゐる女性に對する輕侮の念は、一生に一度の筈の結婚も、今日迄に彼の半生を色どつた時折の浮氣と同じ程度の手輕さで取扱つても構は無いとも考へられた。

一層あの八百屋の娘を貰つてやらうかしらと、或時彼は考へた。身分や家柄は問は無いと口では云ふものの、母は驚きと悲しみに打たれるであらう。名聞好きの親類はこぞつて喧しく反對す

るであらう。親切を盡し度がる知己はその親切を買つて貰へないのを怒つて罵るであらう。彼はふとその紛亂した光景の中に立つ自分自身の姿を想像した時、近頃讀み馴れた世に謂ふ所の人道主義の小說の主人公を思ひ出して、地上に確固たる足場を持たない輕卒な芝居がかつた行爲を唾棄した。

そればかりでなく、一般に面白くない屬性ばかりが目につく女性の中で、清淨（ピユウリテイ）を崇敬する正太郎の詩情をまじへた心持を無理にもあてはめようとする唯一の對象とも云ふ可き八百屋の娘を、たとへ相手は自分自身にしても、男の慾情の目的として考へる事は好ましくなかつた。更に一度人妻となると、どんな女でも娘時代よりも一層人間が下等になる事實を考へると、正太郎は一日でもいいから延ばせる丈は平靜な獨身生活を續け度かつた。

正太郎には又變化の無い日が變化の無い日の後に續いた。彼は每朝同じ時刻に家を出て、八百屋の前を通りながら、娘の姿を見るのを樂しみにして、同じ道を電車に急いだ。會社では每日々々同じ帳簿に同じ文字を記入して日が暮れた。家に歸つて湯に入つて、母とさしむかひでおきまりの晩酌の後の食事が濟むと、彼は母の相手になつて世間話をする事もあるけれど、大概は自分の部屋に閉籠つて本を讀んだ。此頃は人道主義の小說にもあきて、法律書を研究し始めた。人間

が寄つてたかつてこしらへた社會の、相對的の關係を絶對のものとして規定して居る成文法規の中に、どの位古來からの習慣道德が取入れられてあるかと云ふ事に彼は興味を見出したのだ。殊に家族制度の根強く主張された日本の相續法は、必ず面白いに違ひ無いと考へた。かういふ見解で見ると、乾燥無味に思はれた條文さへ、自分達の生活に密接な關係のある、血もあり肉もある情趣の豐なものになつて來た。毎晩々々遲く迄彼は机を離れなかつた。けれども彼の心に喰入つてゐる倦怠は神經衰弱症ではないかと思はれる程正太郎の肉體迄だるくしてしまつた。何でもいいから何か大きな驚異が自分の上に落て來てくれればいいと願つた。或は此の變化の無い生活を、不愉快でない限りに於て變更してくれる事件が起きてくれればいいと祈つた。それでも何も珍しい事は起きさうもなく、彼は毎日會社へ通つた。

或夕方、正太郎は會社の歸りに電車を下りて、橋を渡つて來ると、八百屋の店頭で珍しく多勢の笑聲がして居る。見ると一人の醉拂つた車屋が何かろれつの廻らない口で卑猥な事をしやべつてゐるのを取巻いて、近所の長屋の女房達がからかつてゐるのであつた。正太郎は娘もまじつてゐるなと思ひながら、何氣ない風をして通り過ぎようとした。

「大槻さんの若旦那だよ。」

憚り氣も無い年增の聲がさゝやいて、女房達の目が一樣に彼の方に向いたのを感じた。

「ナニ、大槻の若旦那だ。若旦那ぢやあねえや、馬鹿旦那でえ。」

醉拂ひは何と思つたのか大きな聲で怒鳴つた。自分の姓を高聲で云はれたので思はず知らず振むいた正太郎の方に、其男は威張つた見榮をして拳骨を突出した。

「およしつたら、定さん。」

誰かゞその手を振拂つた。

「なにを、構ふもんかい。」

と後で怒鳴つてゐるのをうつちやつて正太郎はさつさと步いた。丁度電信柱の角を曲らうとする時、度をはづした高笑がどつと起つた。いかにも嘲笑的に聞えたので、彼はそれが自分に對してなされたものだと一人できめて癪に障つた。

けれどもあの娘も一緖に笑つたらうか、正太郎は考へてそれが心配になつた。あんな愼み深い娘だからそんな事は無いだらうとも思つたけれど、その時の彼の心持では、どうしても矢張り自分を嘲笑した一人だと疑はれて面白くなかつた。

その晚は雨氣を含んだ暗い夜で、湯上りの晚酌のよく利いた正太郎は、庭の木立の闇に散る幕

春の花の白いのを見ながら緣端に母と並んで話をしてゐた。崖の下の池に落る水の音は近々と聞えて、靜に重たい山の手の寂しい家は世の中に遠く思はれた、かういふ時彼はいやな世間の人間に妨げられない、自分を限りなく可愛がつて吳れる母とただ二人の世界がいとしかつた。

何時になく正太郎の人なつつこい態度が母を無上に嬉しがらせた。亡き父が正太郎の留守中、いかに歸朝の日に待焦れたか、嫁を迎へたら自分達は逗子の別莊に引込んで本宅は若夫婦の住居にすると云つて、父は洋行歸りの息子の爲めに洋風の室を建增す計畫をしてゐたなどと、母は濕つぽい調子で云つた。

夜更け迄二人は沁々と親子の情合にひたりながら話し續けて、淚ぐましいやうな心地で別れ別れに寢間に入つた。

正太郎は寢床に入つてもなかなか眠れなかつた。靜に昂奮した彼は幾度も枕をしかへながら、親と子の關係の切つても切れない事を考へた。あらゆる事を犧牲にしても子の爲めに盡す親の情愛に對して、たとへ時には願はしくない結果を持來す事はあつても、それも我子の可愛さから起るのに違ひないのだから、子も亦甘んじて親の爲めに一切を犧牲に供さなければならない。それが眞に愛情から出る時は、いかなる犧牲も結局は滿足に終るに違ひない。

それからそれと正太郎は自分自身の事を中心として思ひ惱んで居るうちに、雨戸の外は何時の間にか、しめやかに降る雨になつた。

眞夜中にふと正太郎はただならぬ物音に驚かされた。牝牡のビイグルの物におびえた遠吠が絶間無くすると氣の付いた時、近々と半鐘が聞えた。多勢の人の聲や足音が入りまじつて、階下の廊下から臺所の方へ馳けてゆくのが聞えた。起上つて雨戸をあけると、その目の前を無數の火の子が流れるやうに飛んだ。

「正太郎、正太郎。」

梯子段の下から母のかすれた細い聲が呼んだ。彼は寢衣の上に羽織を着て下りて行つた。

「火事は近いけれど、大丈夫かしら。」

母は息子の袖に縋るやうに寄添つて云つた。

「大丈夫です。」

正太郎はさも確信してゐるやうな態度で答へながら玄關の方へ急いだ。下駄を突掛けて出ると、裏手の崖の杉木立の間から、燃え上る火の手は近々と見えた。雨の晴れた後のうつすりと蒼味を帶びた夜の空に、吹上る煙と共に亂れ飛ぶ火の子は、目の下の町の家々の屋根に降りかかり、風

になぐれては自分の家の庭先にも絶間なく落ちた。近くのすり半鐘にまじつて遠くの三半鐘が聞えた。

「川向ふだらう。」

「イイヤ、此方にうつつたらしいぜ。」

下男や女中や出入りの者の群は正太郎を取巻いて、心配さうにその癖面白さうにしやべり合つた。ビイグルは主人の足下に尾を垂れて震へた聲で空に向つて吠えた。

「火事は何處だい。川向ふかい。」

正太郎は出入りの車夫の馳けつけて來たのにきいた。

「ヘイ、川向ふでございます。電車の昇降場の前の湯屋から出たんだつて云ひます。」

正太郎は驚いて、初めて火事の光景の中にある八百屋の店を想像した。若しも此方川岸に火が移れば、眞先に燒けるのは八百屋でなければならない。幅十間も無い川を距てたばかりだから、きつと飛火するに違ひない。さう思つた時、彼はその夕方醉拂ひの爲めに受けた不愉快な心持を思ひ出して、長屋の女房達の意地の惡い笑聲が未だに耳に殘つてゐるやうに思つた。燒けてしまへ、燒けてしまへ、八百屋は勿論、あんな女房達の住んでゐる長屋を一掃してしまへと、不思議

に緊張した心持で尙燃えさかる火の手を見た。

「アラ、又あんなに燃えて。」

「危ねえ危ねえ。此方川岸にうつつたかしら。」

「此方川岸にうつつてゐ、大丈夫ですか。」

「大丈夫とも。此處迄燒ける程の事はない。」

男女の聲が同じ事を幾度も繰返してゐるのをよそにして、正太郞はひそかに坂道を門の方へ下りて行つた。出入りの商家からの火事見舞の提灯のいくつかと擦れちがつて、彼は人知れず門外に出た。崖の上のビイグルの聲は悲し氣になほ聞えてゐる。

正太郞は每日會社へ通ふ時通る長屋の間を火事場へ急いだ。雨上りの泥濘を低い下駄でびしやびしや踏みながら、彼の想像は樣々の場景を描き出した。靑々としてゐた野菜や、赤く熟した果物が油汗を流して火氣に苦しむ店頭には、もう炎が廻つたらう。その炎の中を煙にむせびながら危く逃れ出る娘の姿は、錦繪のやうに鮮かに想ひ浮べる事が出來た。彼は更にその危急の場合に娘を助け出す役割を自分自身に割振つて、一刻も早く現場に行かなければならないと思つて馳出した。

少し行くと、狭い路は少數の避難者と多數の彌次馬で埋まつて居た。行かうとする者と來ようとする者とがかち合つて、渦卷のやうに揉んでゐる。彼はその渦卷の中に飛込んだ。昂奮した甲走つた途切れ途切れの人聲の罵りかはす中で、押しつ押されつして居ると、忽ち彼も彌次馬の心狀になつて來るのであつた。

「まだ此方川岸は大丈夫かい。」

「どうだか知らねえが、橋は燒け落ちちやつたつていふぜ。」

息せき切つて二人の男が人波を押わけて行く後について、彼もつき當る人間を手當り次第につき飛して進むと、曲角の電信柱迄行かない中に、非常線に遮ぎられてしまつた。自分より前に居る人間の頭の間から、巡査の叱咤してゐる姿がちらちら見えた。

近くの長屋が邪魔になつて、火事場はちつとも見えなかつた。かへつて高臺の家から見下した時の方が、燃えて行く方向も火勢も、よく見えた。

「アアア、棟が落ちた。」

突然頭の上で大きな聲がした。屋根の上に立つてゐる男が叫んだのである。火柱のやうに炎が空に湧上つた。

「オイオイ、もう此方川岸にうつつたかい。」

正太郎の目の前の男は振仰いで叫んだ。

「どうだかわからねえが、危ねえな。」

屋根の男はいい場所を占めてゐるのが自慢さうに答へた。

「どいた、どいた。」

箪笥や蒲團を運んで來る男や、風呂敷包を抱へたのが、絶間なく火事場から逃れて來た。

「危ねえ、危ねえ。」

「退いた、退いた。」

海嘯のやうに前の方の人波を崩して、五六人屈強なのが、大八車に家財を積込んだのを押して來た。狹い往來にぎつしり詰まつてゐた彌次馬は逃場が無いので腕づくで押合つた。

「どけ、どけ。」

「馬だ、馬だ。」

大八車は容赦なく人ごみに曳込んで來た。長屋の露路の中に雪崩れ込む者も、知らない家の中に飛込む者も、自分で道を開いたのか突飛ばされたのかわからないやうな狀態だつた。正太郎は

何方に行く事も出來ないで、渦巻の中の丸太棒(まるたんぼう)のやうに泳いだ。
「危ねえ、危ねえ。」
　耳の傍で怒鳴られた時、大八車は彼の身近に迫つてゐた。正太郎は夢中で人々を押(おし)のけた。彼は突飛ばした。さうして突飛ばされた。危ないと思つた時、誰かしらに横からつかまれたまま、長屋の軒下に積重ねてあつた夜具蒲團の上に倒れかかつた。
「ワツショイ、ワツショイ。」
　大八車は暴威をたくましくしながら、なほ人波を押分けて通り過ぎた。ああ通り過ぎたと思つて、正太郎は危く蒲團の山で支へられた身體を起さうとして氣が付くと、彼に取縋つて一緒に倒れたのは八百屋の娘だつた。彼はハツとして狼狽てて起上りながら、
「大丈夫だ。」
　と娘にむかつて安心するやうに云つたけれど、それは何の意味も無いてれかくしに過ぎなかつた。
　娘は起上つて正太郎を仰ぎ見たが、
「オオ怖い。」

とちひさい聲でつぶやいて火事場の空に目をうつした。

蒲團のかげから娘を呼ぶ聲がしたので、ふりむくと、長屋の土間の暗い中から八百屋の女房が氣遣はしさうな顔を差出してゐた。

「お千代、大丈夫かいお千代。」

正太郎は思はず知らず二三歩歩き出した。

八百屋の一家の男手は荷物を運び出し、足の惡い母親は他所の家に避難し、娘は運び出した家財の傍に番をしてゐる樣子だつた。寢衣の上に紺がすりの上つぱりを着た娘の心細さうな立姿を、正太郎に此上も無い風情に思つた。けれどもその娘の姿も、直ぐに長屋の土間に消えてしまつた。

正太郎は暫時其處に佇んでゐたけれど、娘はもう出ては來なかつた。彼は泥だらけになつた足を引擦つて家に歸つた。門を入つて、坂を上つて、崖の上からもう一度火事場の方を見たが、火の手は次第に衰へて、そこいら迄は火の子も飛んで來なくなつた。

翌日は晴渡つた青空で、寢不足の正太郎は、庭前の潦に、散り盡した櫻の花片と一緒に、昨夜の火事の名殘の灰の沈んでゐるのを見た。

彼は狼狽しく食事をして家を出た。八百屋は燒けたのたらうかと疑ひながら何時もの道を電車

へ急いだ。橋は燒落ちたと、昨夜火事場で聞いたけれど、彼は兎に角八百屋の安否を知る爲めにも別の道は取らなかつた。電信柱の角を曲ると燒跡の灰の臭ひが鼻をついて來た。

八百屋の店は無事だつた。泥濘の往來に踏み躙られた野菜果物の無慘な有樣を、春の日光は溫く照らしてゐた。家の内を片附けてゐる家人にまじつて、白い手拭を姉さんかぶりの娘の、赤い帶も赤い襷も赤い前垂も、忙しさうに働いてゐた。正太郎は昨夜の出來事が、二人の間を親しいものにしてくれた氣がして、或る期待を持つて步いた。初めて知つた娘の名の、お千代といふありふれた、しかし可愛らしい名前も彼を喜ばせた。

娘は又目眩しい目附をして彼の近附くのを待つやうに立つて居た。正太郎は娘はきつと挨拶するに違ひないと思つた。娘は彼の間近く來たのを見ると、頭の手拭を取つて笑顏をしたやうたつたが、顏を赤くして躊躇した。その一瞬間の躊躇が、正太郎の帽子のふち迄觸れた手を同じ躊躇に誘つた。しまつたと思ひながら、正太郎はまごついた足取りで八百屋の店頭を通り過ぎてしまつた。

燒け落ちたときいた橋は、欄干を焦したばかりで無事だつた。正太郎はその橋の無事だつたのも面憎いやうな氣がしながら、他所見には何氣ない顏をして渡つて、燒跡の灰の中から立上る煙

の中で電車を待つて乘つた。窓をあけて首を出して見たが、娘の姿はもう見えなかつた。

春は全く暮れて、綠の色の光り輝く初夏が來た。彼の短い外套は又旅鞄の底にしまはれてしまつたが、正太郎は毎日々々同じ時刻に家を出て八百屋の店頭を通つて會社へ通つた。終日帳簿をつけくたびれた夕方は、母親の待ちわびてゐる寂しい景色を想ひながら會社を出て、年中こみあつてゐる電車に四十分間搖られた後で、八百屋の店頭を通つて我家に歸るのであつた。(大正七年七月四日稿了)

新嘉坡の一夜

船は靜に港内に入つて行つた。秋の初めとはいへ、強烈な南洋の日輪は眞靑な大空に光り輝き、毒々しく藍を流した海の面は油汗に惱んでゐるやうに重苦しいうねりを打つてその日光を反射した。斜に照りつける午後の日を天幕で避けた甲板に、六人の一等船客は、その中の一人の日本人上月良太郎を中心にして互に名殘を惜み合つた。

八月の中旬に倫敦を出てからの長い航海の間には、浮留水雷や潛航艇の危險を怖れて、船中のありとあらゆる燈火を滅した心細い事も幾夜かあつた。暑い暑い赤道を過ぎて初めて南亞弗利加のケエプ・タウンに碇を下した迄に、既に三週間は過ぎてゐた。

最初から少なかつた船客の中で、ヨハネスブルグに行く亞米利加の領事夫妻、熱帶地方の衛生狀態を視察かたがた戰時の歐羅巴に遠ざかつて、珍しい地方を旅行しようと云ふ瑞西の門閥の醫師と佛蘭西種の美しいその夫人が、ナタアルの港で下船たので、殘つたのは僅に六人になつてしまつた。チヨホオルの護謨林で働いて居たのが久々で休暇を貰つて故郷に歸つた若い男二人、チヱスタアのちひさな細工物の工場の主人で東洋の取引先を見廻りに行く老人、彼南の護謨林の持

主に嫁いだ姉の家に遊びに行く娘、此の四人の英吉利人の他に、馬來半島の或部落の大金持の酋長の息子で長い間英吉利に居た青年がゐた。その人々にまじつて上月はただ一人の日本人であつた。

性來口が重くて容易に世間話の口の切れ無い彼は、曾て未見の人に此方から氣安く話掛けた覺えが無かつた。しかし狹い船の上のしかも十人の船客しか無かつた爲め、倫敦を出て間も無く、彼も乘合のすべてと心置きなく話し合ふやうになつた。日本の船に乘つて、萬事勝手の解らない人々は、彼を頼りにする心持も持つて居たに違ひ無い。何時何時敵の船に襲撃されるかもわからない戰時の恐怖の一様に感じられてゐた事も、彼等を親しませた原因の一に違ひ無い。殊に十人が六人に減つて、印度洋の十八日を暮し惱んだ間に、お互に別れともない懷しさを愈々深く感じ合つて來たのであつた。

朝は早くから甲板でデツキ・ゴルフをやつた。再び赤道を横切る航路の烈しい暑氣にもめげず、汗みどろになつて勝敗を爭つた。疲れては艙に毛布を敷いて、船に驚いて飛ぶ飛魚の日に光る群を眺め暮した事もあつた。夕方運動の後の汗を流しに、下の甲板にこしらへた水泳場で娘もまじつて水合戰をするのも日課の一つであつた。夜は必ず、僅かばかりの風を求めて、甲板でブリツ

ヂをやる事にきめてあつた。時にはそれにも倦きて、護謨林の若い男Aが彈くバンヂョオを聽くともなく聽きつゝ更かす事もあつた。する事の無いのを嘆じながらも、誰も此の長い航海を享樂した事は疑ひも無い。

親しみが深かつただけに愈々別れの日の來た時は、なほ船に殘る上月に對して、五人は各々別離に伴ふ感情を止める事が出來なかつた。朝の中に荷物の整理をし、最後の晝食を共にした後で、彼等は甲板の日陰に、過ぎた航海の樂しかつた事を語り合ひ、尙ほ將來の文通を約し、時を得て櫻咲く日出る國に行く事があつたら必ず訪れると云つて握手した。

岬を廻ると波止場が見え、波止場にうごめく人の姿も明瞭になつた時、人々は更に上月の手を執つて放さなかつたが、船は容赦なく水を分けて進んで、瞬間に横付けになつた。

「ア、とうとうシンガポオルに着いた。」

と快活なAさへ嘆息するやうに云つて上月を見た。

「愈々これでお別れです。けれども私は生涯の中にもう一度貴方に逢へるやうな氣がします。」

Bは彼と並んで見下すやうな上月の肩に手を置いて云つた。五人は各自に手下鞄を取上げて、船と陸とに掛け渡した板橋を踏んで下りて行つた。

「御機嫌よう。」
「左樣なら。」
「左樣なら。」
口々に云ひながらかへりみ勝に上月一人を後に殘した。
「Mr. Kozuki!」
陸に立つた五人はもう一度船の腹迄寄つて來て、甲板の上の彼の名を叫んで帽子を振つた。
「手紙を忘れてはいけませんよ。」
Miss C. は赤いリボンを卷いた大きな夏帽子のかげになつた顏を振り仰いで、透通る聲で云つて手巾(ハンケチ)を振つた。
「左樣なら。」
「左樣なら。」
「左樣なら。」
口々に繰返したが、間も無く五人とも、群つて來る支那人の人力車(くるま)に乘つて、町の方へ曳かれて行つてしまつた。上月は茫然としてその町のある方角を眺めながら、孤獨の哀感を禁じ得無い

自分の身をかへりみて甲板の椅子に腰を下した。

上陸する客は皆上陸してしまつた。積下す荷物を捲上げては陸へ落す機械の響、積込む石炭の山の崩れる音、立働く支那苦力のわめき騒ぐ聲は入りまじつて、靜な印度洋の航海で波の音ばかりに馴れた耳を驚かし、人の心の平靜を亂し始めた。西日の當る倉庫を背景にして、半裸體の獸のやうな苦力はギラギラ光る石炭を崩しては船に運んでゐるが、だれ一人として人類に對する親しい感情を起させるやうな人間には見えなかつた。その獸は船の中にも侵入して來て、甲板は石炭屑で眞黑になり、上月の白い洋袴も襦袢も襟も見る間に汚れ、顔も手もざらざらする氣持惡さに堪へ難くなつて來た。

「上月さんもとうとうお一人になりましたね。」

事務長と厨房長とは連立つて來て彼に聲をかけた。

「貴方は上陸なさらないのですか。シンガポオルの町も一寸變つてますぜ。」

「エヽ、見物丈はして來ようと思ひますけれど、何分此の暑さですから、夕方から出かけようかと思つてゐます。」

「それでも船は御覽の通りで、やかましくはあり石炭は飛んで來るし、とても御辛抱出來ますま

い。それよりも町へ行つて久しぶりで眞水(まみづ)のお湯にでも入つてらつしやつたらどうです。日本料理で日本酒で、日本の女のお酌も貴方には珍しいでせう。」

事務長(パアサア)は意味あり氣に笑つた。

「左様(さう)ですね、六七年ぶりでそんな景色も見て來ませう。」

上月も調子を合せて冗談を云つた。

「私達もいづれ用事が濟むと出かけますから、とんだ處でお目にかゝるかも知れませんぜ。」

云ひ殘して事務長(パアサア)は立去つた。

「ほんとに船にゐらつしやると堪りませんよ。一晩中此の騷ぎは止みませんから。」

厨房長(チイフ・スチユワア)も親切に勸めるのであつた。

「では思ひ切つて出かけませう。」

上月はやうやく椅子を離れて立上つた。船室に歸つて其處らを片附けて、なほ引立たない心のまゝに暫時寢床の上に腰を掛けて時間をつぶしてゐたが、蒸暑い室内の空氣に押出されるやうに彼は杖(ステツキ)を腕に引掛けて下の甲板に下りて行つた。

「お出かけですか。」

と船員の一人が聲をかけた。
「命丈は無事にお歸りなさい。」
もう一人が後から叫ぶのを聞きながら彼は板橋を渡つて岸に下りた。と見ると四方八方から人力車は集つて來たが、
「いらない、いらない。」
と簡單に追拂つて上月は杖を振りながら、倉庫の裏の草原の中に一筋長く町の方へうねつてゐる赤土の大道を、久しぶりに踏んだ土に、親しさを覺えながら歩き出した。
風の無い乾き切つた土と、その土を埋めて延びるが儘に延びた雜草の蒸れたいきれが鼻をつく。潮の香にばかり馴染んでゐた身には、それさへ珍しく懷しかつた。杖を振上げては無闇にうち叩く道ばたの名無草の花は青臭い匂ひをたてて亂れ散つた。そんな簡單な四肢の運動さへ、彼には物珍しい新鮮な快感を與へた。
行手に見えた町は直ぐ目の前に展開された。軒の低い薄暗い支那町の、臭氣の強い肉類野菜類の燒かれ煮られる臭ひ、果物の腐つた臭ひ、黴臭い賣藥の香などのいりまじつた特殊の空氣が、俄に上月の心に歐羅巴に遠くなつた事を強く感じさせた。如何見ても劣等人種として侮蔑しない

では居られない頬骨の高い鼻の低い唇の厚ぼつたい、その癖目付ばかりは悪智恵のありさうな顔をして、日に焼け垢にまみれた手足をむき出しにし、不潔な衣服を形ばかり身につけた殆んど半裸體の支那人を見て、彼も東洋の人間である上月の心は暗くなつた。物を商ふ者も購ふ者も喧嘩のやうに罵りかはし、長い胴中に肋骨の目立つ不健全な肉體を土の上に横へて煙草に酔つてゐる者も、すべてが規律と秩序を缺いた淺ましい景色であつた。彼等も同じ人類、殊に國を隣接する國民で、顔色から骨格から極めて近しい種族なのだと思ふと、上月の胸は自由に呼吸の出來ない不愉快にふさがつた。彼は幾度も幾度も路上に佇んでは額の汗を拭いた。電車は絶間無く東西に走つて居るけれど、方角が解らないばかりで無く、何處に行かうと云ふ目的も無いので東に乘らうか西に乘らうかと迷ひながら歩いたが、汚ない町は果しなく續いてゐさうにも思はれて、彼は身の處置に困じてしまつた。

その時ふと横手の雜貨店から、思ひも掛けない駒下駄の音をさせて出て來た女があつた。白地の中形の浴衣に唐縮緬の赤い帶が第一に彼を驚かした。先方も物珍しさうに上月を見たが、重たい風呂敷包を抱へて家鴨のやうに歩き出した。まんまるい大げさな廂髪の下に厚白粉の平べつたい顔を、もう一度見度いと思つた程上月は和裝の女を幾年の間見た事が無かつた。浴衣の下に透

いて見える赤いものをちら／＼させながら、不格好な内股で歩いてゐるのを見ると、一種憐愍の情と共に、冷汗を止める事が出來なかつた。

女は停留場の柱の下で電車を待つた。風呂敷包を持ちかへては、空いた方の手で太い頸筋やはだけた胸の汗を拭いたが、間もなく電車が來ると狼狽た姿で乘つた。上月は其時自分の行くべき方向が解つた氣がした。その女の行く處にきつと繁華な町があるに違ひないと考へたのだ。彼は動き出した電車を追かけて飛乘つて、女の隣に空席を見付けて腰かけた。狹苦しい車内の、むさくるしい客の汗の臭にまじつて、白粉の匂ひが漂つて來た。

電車はひよろ長い町の軒にすれ／＼に、うねりうねつて走つたが、と或る町角でとまつた時、白粉の女は膝の上の荷物を一搖り搖つて持直して立上ると、又狼狽しく下りて行つた。その行く方を窓から見送ると、何時の間にか町筋の體裁も變つて、大きな洋風の商店の飾窓の並んでゐるのも見えた。上月は別段の覺悟も無く次の停留場で下りた。

其處は恰度大きな旅館の前で、廣い芝生に面した木造の大きな洋館が四圍を壓して四角張つてゐた。その二階の廻廊に休息ふ人や、青芝の上を逍遙する人の白衣が今通つて來た不潔な支那町の景色に比べて、全く違ふ世界に見えた。憧憬の念を抱いて西洋を想ふ心が自然に湧いて來るの

を彼は止め兼ねた。
上月は不愉快な人間の住む町の方へ行く氣が全く無くなつてしまつた。或時は嵐の浪の甲板を洗ふ事さへあつた大洋の清淨な水と潮の香が只管戀しく思はれた。家々の屋根の間に見える港の船の帆柱の矗々と立つ夕空を懷しんで、彼はその方角に歩き出した。
海岸通に出た時は日は旣に遠くの海に沈んで、乾き切つた南洋の空は紅に紫に美しく暮れて行く頃になつた。早くも燈火の輝き初めた家もあつて、仰げば星が何時の間にか彼方此方に瞬いてゐた。異鄉の旅人に限られてゐる、これと云ふ理由も無い感慨が寂しく胸に流れて來た。
「上月さん――上月さんぢやありませんか。」
不意に後から肩を叩かれて、彼はとりとめも無い哀愁から喚び覺まされた。
「どちらへ。」
さう云つて並んで立止つたのは船の一等機關士だつた。
「目的無しです――貴方は。」
「直き其處に故鄉の者が宿屋をして居るので訊ねて見ようと思つて。――如何です一緒に行きませんか。お湯にでも入つて一杯やらうぢやありませんか。」

快活な機關士は持前の高調子で、上月の腕をつかんで誘つた。

全く目的の無い彼は誘はれるまゝに連立つて、間も無く一軒の雜貨店に導かれた。

「今日は、齋藤さんはゐませんか。」

機關士は大きな聲で、店頭の土間に立つて奧に向つて案內を求めた。

「何方です。」

奧の方から若い男の聲が答へた。

「僕は船の太田ですが、齋藤さんはゐませんか。」

「居られます。只今湯に入つて居りますが、何卒お上り下さい。」

聲に續いてうす暗がりの帳場から袖無しの襦袢ひとつの男が出て來た。

「これはお珍らしい。何卒お上りなすつて。」

「何處か空いてゐる部屋はありませんか。僕一人なら帳場で結構なんだが、船のお客さんと一緒だからね。」

「左樣ですな。一寸今のところ滿員で何處も空いてゐないんですが――マアお上んなさい、どうかしますから。」

「では兎に角上げて貰ひませうか。」

機關士は上月をかへりみて云つた。

紫檀黑檀白檀（びやくだん）などの机椅子その他の細工物、土人の手に成つた玩具、駝鳥の卵、椰子の實などのうづ高く積み並べてある店を通り拔けて、靴を脫いで上つた。

暫時帳場で煙草をふかしてゐると、湯上りの浴衣のままで主人が出て來た。機關士と簡單な挨拶を濟ますと、

「私は當家の主人齋藤で御座います。」

とおそろしく改まつた態度で上月にむかつて名告（なの）つた。骨格の頑丈な老人で疎（まだ）らな胡麻鹽の頰髯をしごきながら、東北の訛の著しい言葉で話した。

「どうも折惡しく部屋がないが、恰度佐川君が來て泊つてゐるから、彼處へ一晩位同居して頂かうか。」

主人は機關士に相談した。

「なに僕は今晩は船に歸る。明日の出帆が早いから。――上月さんも歸るでせう。」

「しかしお若い方が久しぶりで上陸して、その儘船に歸ると云ふ事はありますまい。」

主人は鬚をしごいて豪傑笑ひをした。

「兎に角佐川さんなら僕も逢ひ度いから、ひとつその部屋にお邪魔さして貰ひませうか。」

「よろしい、左様(さう)しませう。」

主人は先に立つて、階段を二階から三階へ螺線狀に導いた。

「佐川君、珍しいお客ですぜ。」

廊下から呼びながら主人は或一室の襖をあけた。

「ヤア晝寢か。」

主人がつぶやいた時、廣い部屋の眞中に六尺褌ひとつで大の字になつてゐた男は、體操をするやうに威勢よく飛起きた。

「ア、寢た々々。」

深呼吸をするやうな欠伸をして太い腕で胸を叩いた。

「佐川君。」

「オ、太田君か。」

機關士と裸體の男は兩方から進んで握手した。

「恰度今朝山から歸つて來たところだ。サア此方に入り給へ。」
佐川といふ男は疊の敷いてある廣い部屋の露臺に近い方に蒲團を勸めて、
「ヤア私はこんな風で許して貰ひます。」
と裸體のままで挨拶した。
露臺の下に見下す廣場の向ふの海には、船の帆柱の上に赤い灯が上つて、暑苦しい夜の空は靜に風も流れなかつた。
「どうです私が先に失禮してしまつたが湯に入りませんか。」
と主人は女中の運んで來た茶を勸めながら云つた。
「是非入れて貰ひませう。上月さん、貴方から如何です。」
「難有う。マア貴方からお入りなさい。」
「そんなら一緒に入りませう。その方が愉快だ。」
機關士は直ぐに立上つて浴衣に着換へた。
「オイオイ、湯殿に御案內しろ。」
主人にいひつけられた女中は手拭を持つて廊下に待つてゐた。

「貴方も浴衣にお着換へなさい。」
「難有う。私はこれで結構です。」
上月は女中の後から機關士と並んで浴室に下りて行つた。彼は人前で肌を脱ぐ事さへ堪へ難く思ふ程きちやうめんな家に育つた爲め、他人と共に裸體になつて湯に入る事は好まなかつた。それでも何故好まないかを説明する場合に、理由も無く他人が不快な顔付をするのを恐れて、彼は強ゐては拒まない事にしてゐた。今も亦迷惑な心持を顔に出しながら、それでも久しぶりの粘氣の無い眞水の湯を喜んだ。
湯から上ると直ぐに酒が出た。佐川は丸裸體、主人と機關士も肌脱で膳の前に大胡坐なのに、上月一人は足は横に投出しても洋服の上着さへ脱がなかつた。
「どうも長い間馴れてしまつたので靴下を脫いでも風を引くやうな氣がします。」
彼は人々に浴衣を勸められるのに答へながら盃を取上げた。一生を主義と規律で押通した父は、彼が外國へ出る時に、一切日本特有の物を旅鞄に詰める事を許さなかつた。日本服が着度い、米の飯が喰べ度いといふ根性のある限りは、到底眞に歐羅巴を理解する事は出來ないといふのがその理由であつた。

「成程、それも一理ある。しかし故郷を忘れないといふのが吾々日本人の強味ではないでせうか。」

機關士は上月に盃をさしながら云つた。

「イヤ私は上月さんの御親父のお說が尤もだと思ふ。」

主人は橫合ひから遮つて、

「殊に吾々のやうに海外で永久的の仕事をしようと決心したものには、まことに思ひ當るところがある。」

彼は自分も投資して、佐川等と經營してゐる護謨林に働く日本人の、殖民に適しない性質を日本服が着度い、米の飯が戀しいといふ心持に結び付けて、此點に於て到底西洋人の敵で無い事を論じた。

口數の少ない上月は人々に問はれゝば、彼が長年滯留した歐米諸國の國情、戰時の狀態、人情風俗等を簡單に答へたが、自分とは全く別の世界に住む人としか思はれない相手に對して、ともすると孤獨感を抱く事を止め兼ねた。

膳の上の刺身、吸物、燒魚などの淡々しい色彩が、彼の感覺を微細にするものゝやうに思はれ

た。何かしら防腐劑でも入つてゐさうな日本酒を、ちひさな盃に受けては飲み、受けては飲んでも、彼の心は浮立たなかつた。何時も多人數の間に出ると、かへつて自分の一人ぽつちを強く感じる習癖が、執念深く心に絡みついてゐた。

三人はよく飲みよく語つた。主人は昔郷里の小學校の校長だつたが、彼の言葉に從へば、

「人間は殖えるが土地は殖えない。」

といふ簡單な理由から海外發展を郷黨の間に說き廻つた末、自ら一門親戚を率ゐて新嘉坡(シンガポオル)に移住した。

「兎に角日本人で護謨林に目をつけたのは私が最初です。」

と共時彼は顎鬚をしごいて昂然とした。今では殖林の方は息子が專ら力を盡してゐて、主人は隱居仕事に雜貨店と、旅館を營業してゐるのだといふ。佐川も機關士も共に主人が校長時代の小學校の生徒であつた。

「實際吾々は單に齋藤さんの驥尾に附して今日に至つたので、日本人殖林の第一着手の功勞は、全く齋藤さんの荷ふところなんです。」

佐川は酒で赤くなつた全身を搖りながら、その持前の癖であらう、しきりに平手(ひら)で胸を叩いた。

酒は後から後から女中の手で運ばれた。盃のやりとりの嫌ひな上月も、三方から強ゐられて、味の悪い酒だとは思ひながら、いける口なので拒まずに受けた。

「オイ酒だ酒だ。」

主人は若い頃の自慢話に自分で酔つて、のべつに手を叩いては女中を呼んだ。

「もうお酒はみんななくなりましたさうです。」

しまひに女中は手ぶらで戻つて來た。

「なに、もうおしまひになつたか。それでは麥酒(ビール)を持つて來い。」

「僕はウイスキイがいい。」

佐川は出てゆく女中の後から叫んだ。

「もう私は駄目です。とても飲めません。」

上月は何時の間にか不意に酔ひが廻つて來たのを感じて、いゝ加減に切上げようと思つた。

「それに明日の出帆は早いさうですから、一等機關士(ファアスト・エンヂニア)もそろ／＼歸らなければならないんぢやありませんか。」

「大丈夫々々々。船の心配は入らない。僕の歸らないうちに出る事はありやしない。」

機關士はもう首も据らなくなつて、醉つた身體を前後左右に動かしてゐた。
「成程、それ程たしかな事はない。機關士(エンヂニア)さへ捕虜にして置けば安心なもんだ。」
佐川は新しく並んだウィスキイの瓶をとつて洋杯(コップ)にそれをついで、上月の手に渡した。
「吾々が引受た以上は醉倒れても大丈夫です。老人も今日は若返つて愉快だ。」
主人は麥酒を飲み干して、これを上月にさした。
蒸暑い夜は次第に更けて行つた。主人は厠にでも立つたのだらうと思はれたが、その儘姿を見せなくなつてしまつた。
「アア醉つた醉つた。」
機關士は幾度と無く倒れようとする身體を支へながら、廻らなくなつた舌で話に相槌を打つてゐたが、とう／＼堪らなくなつて丸太棒(まるたんぼう)のやうにつんのめつた。
「危ない。」
上月が思はず聲を出した時、醉拂ひの手にはらはれてひつくりかへつた洋杯(コップ)から酒は疊をひたして流れた。
「ウウム苦しい――水をくれ。」

機關士はへたばつた身體が水の底にでも沈んで行くやうに感じるらしく、疊に縋り場所を求めてのたうち廻つた。

「水をくれ、水を。」

「よしよし、先生參つたな。」

佐川は面倒臭さうに立上つて廊下に出て行つたが、間も無く水をたゝへた洋杯を持つて歸つて來た。づしんづしん足音をさせて歩く度に、彼の手から水が容赦なくこぼれた。

「サア水だぞ。」

「難有う。」

機關士は友だちの太い腕に縋つて半身起して、殘り少ない洋杯の水を、首を延して飲んだ。

「ア、うまい。」

さう云つたものゝ、實は水は、口の中よりも胸の上に半分以上流れてしまつた。顏は眞靑になつて、額には油汗が滲み出してゐた。

「苦しいか。」

「苦しい。」

吐出すやうに彼は答へた。裸體の肋骨の邊に大きく波の打つのを見て、上月は十年前の自分の愛犬の臨終を想ひ出した。發狂して近隣の人を嚙んだ犬の眉間を射た煙硝の匂ひのまだ消えない短銃を手にして涙を流す主人の足下に、哀れなる畜生は横腹に苦しい波を打たせて死んで行つた。その慘酷な光景をふと想ひ浮べた時、上月は惡酒の醉の猛然と頭に上るのを感じた。

「サアこれから差向ひだ。」

佐川は機關士の頭の下に座蒲團をあてがつて置いて、自分の席に歸ると、又洋杯を取上げた。

「貴方は見かけによらず強いですな。」

「イヽエもう駄目です。すつかり醉拂つちやつた。」

上月はさうはいふものゝ、矢張り差されると受けて、安物の強烈なウイスキイを飲んだ。

「貴方方のやうな學問のある人が見たら馬鹿々々しいでせうが、吾々の現にやつてゐる護謨林の生活もなか／＼愉快なものです。」

佐川は眞赤に酒氣の出た顏をして、林の中の單純な朝夕を自慢さうに物語つた。旅館の主人齋藤老人が幾昔前に渡來した當時の苦心、その後の發展、今後の希望などを、流石に暴飮の結果もつれ勝な舌で、とはうも無い高聲で話した末は、豚鷄などを奪ひに來る野獸に對する恐怖、最近

には猛虎を擊つた事實談迄，話す自身が面白くて堪らなさうに止まるところを知らなかつた。その間にも休みなく飮む酒は何時の間にかウイスキイも空になり，麥酒の幾本もいたづらに疊の上にころがされてしまつた。

「オイ酒だ，酒だ。」

大きな聲で怒鳴りながら，手を叩いても女中は返事をしなくなつた。傍の機關士の鼾が更けた夜の室內に聞えるばかりだ。

「もういゝ加減によしませう。私はとてもつきあへない。」

上月は日本酒，ウイスキイ，麥酒とちやんぽんに飮んだ濁つた醉が胸を壓して，ほんとに苦しくなつて來た。

「駄目だ，駄目だ。今夜は貴方と飮み明かさう——オイ酒を持つて來い。」

いくら佐川が怒鳴つても返事は無かつた。

「チエツ寢てしまやがつた。」

荒々しい聲でつぶやいた。

「爲方が無いから何處かに行つて飮み直しませう。」

いふかと思ふと彼は立上つて、部屋の一隅の衣桁の浴衣を着始めた。
「よしませう、よしませう、私は疲れたから寢かして貰ひ度い。」
「イヤ一寸散歩して直ぐ歸つて來ます。麥酒（ビール）を一杯飲めばいいんだ。」
酒の爲に判斷力の無くなつた上月は、言ひ爭ふ氣力も無くフラフラと立上つた。
危ない足取りで階段を下り、寢靜まつてしまつた階下の帳場を拔けて土間で靴をはいた。
戸外に出た二人は蹣跚として歩いた。佐川が耳もとでしきりに何か云つてるのさへ、上月はわからずに出たらめに頷いてゐるばかりだつた。不意に目の前に二臺の人力車（くるま）が止つた。佐川が辻で呼んだのだらうと思ひながら、その一臺に上月が乘つた。頭はがつくりと大空を向いて、息苦しい鼻や口から、少しは冷えた夜の空氣が熱い腸（はらわた）に通ふやうに思つた。
「機關士は如何したらう。」
　彼はふと心配になつて目をあいたが、旅館を出て來る時、連れは矢張り鼾をかいて寢てゐたかどうか想像さへも出來なかつた。前の人力車に乘つてゐる佐川の浴衣ばかりが眞白く闇に浮んで見えた。その儘彼は又ぐつたり後に反りかへつてしまつた。
　どしんと上から落された氣がして、二度目に目がさめたら人力車は眩しい程明るい町の眞中に

止つてゐた。狹い往來の兩側に同じつくりの家が軒を並べてゐて、その軒下に持出した縁臺には日本の女が澤山涼んでゐた。

「しまつた。」

と思つた時、佐川は上月の肱をつかんで、直ぐ目の前の家に連れ込んだ。土間に並んでゐる丸卓子の椅子に腰を下すと、家の奥からも往來の納涼臺からも、浴衣がけの女が立つて來て取卷いた。

「麥酒を持つて來い。」

佐川は椅子の背に倒れる迄ふんぞり反つて怒鳴つた。

「マア佐川さんですか。」

と意地の惡さうな四十女が出て來て、麥酒をぬいて酌をした。

「お女將か、今日は此の人にお前の所の別嬪をお目にかけに來たんだ。今度英吉利から內地へ歸へる途中で……」

佐川が何か自分の事を云つてゐるのもうつゝに、上月は卓子の上に突伏して酒臭いためいきをついた。

上月はつまらない見榮を張つて、女將(おかみ)のすすめる麥酒を受けて飲んだ。同じやうな模樣の浴衣で同じやうな大きな廂髮(ひさしがみ)の下に、同じやうに平べつたい顏を厚白粉で塗りかくした若い女が、暑苦しく凭れかかつて酌をするのを、彼は機械のやうに飮んだ。身の廻りにどんな人間がゐるのか、その一人一人の特徵などはまるつきりわからなかつたが、晝間町で見た風呂敷包をかかへた女も自分の傍にゐるやうな氣がして爲方が無かつた。

「隨分苦しさうだよ、此人は。」

女將はつぶやきながら肩に手をかけて搖振(ゆすぶ)つた。

「貴方お二階にいらつしやいな。」

「貴方苦しいの。」

「何、まだ大丈夫だ。」

「厭だ。」

上月は自分でも驚いた程力強く、肩にかけられた手を拂つて立上つた。

「歸らう。歸りませう。」

ふらつく足を踏みしめて、椅子の背に身を支へて見下すと、何時の間にか佐川も泥龜のやうに

卓子の上に額をつけて正體も無くなつて居た。
「ちよいと、いゝぢやありませんか。泊つてらつしやいな。」
女將が下から見上げながら執拗く上衣の端を引張るのを、上月は一種の憎惡と輕い危險の豫感を感じながら手荒く振もぎつた。
「私は一人で歸る。」
口の中で云ひながらあつけに取られてゐる女達の間を拔けて往來に出た。
夜更の町の軒を並べた娼家の有樣は、醉拂ひの彼の目には、古くなつて傷だらけになつた活動寫眞のやうに、朦朧と映つては消えた。騷々しい下駄の音が擦れ違つてゆく度に、白地の浴衣の男の姿が通り過ぎては、其處いらの家の中に吸ひ込まれて行くのが見えた。
「今晩は。」
「おたのしみ。」
二人連れで聲を掛けて行つたのがあつた。船の食堂給仕らしかつた。
到る處で彈鳴す三味線や、多勢の聲でうたふ流行唄が、火事場の騷擾のやうに聞えた。
「一體自分は何方に行けばいゝんだ。」

と考へながら矢張り方角も知らずに苦しい息をつき／＼歩いた。
「オオイ上月さん――上月さんぢやないか。」
不意に後から町中に響き渡る大きな聲が聞えて、佐川はしどろの足で追かけて來た。
「ア、矢張り君だつた。」
と酒臭い息であへいで、
「失敬々々、眠つてゐて知らない間に逃げられちやつた。」
云ひながら大男は身を支へかねて上月の肩につかまつたが、つかまられた方も足は利かなくなつてゐて、踏み堪へようとはしながら一堪りもなく、抱合つたまゝ地べたに倒れた。
「危ない。」
といふ聲を聞いたやうに思ふが、氣のついた時は二人とも又別の娼家の土間の椅子に女達に介抱されながらもがいてゐた。
「佐川の旦那ぢやないか。」
「佐川さん。」
彼の顏は此處にも賣れてゐて、女達は口々にその名を呼んだ。

「マアどうしたのさ。そんなに醉拂つて。」
「麥酒をくれ、麥酒を。」
佐川は口癖のやうに怒鳴りながら近寄る女をなぐつたりした。
「旦那、もうお酒はよしておやすみなさいな。」
「麥酒だといつたら麥酒を持つて來い。」
佐川は非道いけんまくで叱つた。二人は又其處でしたゝか飮んだ。
「旦那はもう奥へいらつしやいな。」
今度は上月の方をすゝめた時、彼は又半分無意識に女を突き飛ばして立上つた。
「俺は歸る。どうしても歸る。」
彼は又腹の中で一人で心を決めて戸外に出た。
「待て待て。一緒に行かう。」
と見ると佐川は追掛けて來て後から首つ玉を抱へ込むと、そのまゝ彼を隣の家に引張り込んだ。
「麥酒をくれ。」
とわめきながら椅子に掛けようとしたが、中心を取りそこなつて、彼は再び土間に叩きつけら

れたやうにひつくりかへつた。肩から胸へ腕を廻されてゐた上月も、我慢も無く仰向けになつた相手の胸の上に倒れた。とたんに佐川はしたゝか吐いた。夕方から飲んだ酒のすべてが噴泉のやうに彼の口からほとばしり出て、吐いてゐる佐川自身の顔や胸は勿論の事、上月の顔にもしぶきのやうに飛んだ。烈しい惡臭があたり一面に漂ひ、上月の鼻から頭の天邊迄突上つたと思ふと、彼も亦堪へる氣力も無く、こみ上げて來る胸の苦しい塊を、容赦もなく下敷になつてゐる佐川の上に吐き出した。

女達が寄つてたかつて立騷ぐ氣配を苦しい中にも知りながら、

「苦しい。寢かしてくれ――寢かしてくれ。」

と上月はうは言のやうに云ひ續けた。

眞夜中に上月は胸苦しい夢から覺めた。見渡す限り果てしの無い綠の原を、彼は命の危急に息も絕え絕えに逃げた。逃げた彼も、後から追ひ迫る白刄を手にした女も裸體だつた。時にはその裸體の二個の姿が外光派の油繪のやうに强い日光を浴びて目に映じた。疲れた足に草は執念深く絡んで、彼は幾度もつまづき倒れようとした。それでも力を盡して逃げた。突然目の前の草の中に池を見出した時は、九死に一生を得たと思つた。彼はその池を廻つて逃げた。一度二度三度四

度五度六度七度八度走馬燈のやうに廻つた。廻れば廻る程速度が早くなつて、しまひには誰かゞ心棒を持つて廻してゐる玩具のやうに目にも止らず廻つた。息苦しさは愈々増し、最後には目が廻つて何物も見えなくなつて昏倒した。胸の上に白刃がきらめくと思つて、彼はありたけの力を出して相手の女のふりあげた手首をつかんだ。

惡夢の後の苦しい息をついた上月は、自分の胸の上に重たくのつかつてゐる女の腕を見てぞつとした。全身を濡して滲み出てゐた汗は、一時に冷く凍るかと身震ひして、彼は顏色を變へて四邊を見廻した。

廣く無い室內は亂雜にちらかつて、酷しい暑氣の中に何かしら物の腐つたやうな惡臭が籠つてゐた。その一隅の雪白の敷布で覆はれた寢臺に、彼は素裸で寢てゐた。〔三十九字略〕上月は女の手をそつと胸の上から下した時、その手に匕首の無いのを見て眞實に安心した。

枕頭の水で乾き切つた咽喉を濡らしてから、誰が見てゐないでも淺ましい自分の姿に、寢臺の上から半分床に落ちて居る薄い敷布を取つて掛けた。さうして靜かに、出來る丈寢臺の端の方に身體をずらして、僅かながらも女との間に間隔を置いた。初めてその時身に迫つた危難を免れた心持で、彼はさまざまの事を感概深く想ひ浮べた。

それは恰度今年の春、豫てから一日も早く歸朝しろと促して來る父の手紙が途絶えて、そのかはりに、母親から、父が不治の病にかゝつて、老先も長くないとひそかに醫師に宣告されたと云つて來た。旅館(ホテル)の前のリュクサンブウル公園の樹木(きぎ)の梢は緑に萌え、パンテオン、ノオトルダムの上の大空は眞靑に光り輝き、セイヌの水も澄み渡つて、遠く國境を深く侵された戰場では、夜も晝も絶間なく砲聲が聞え、死屍(しかばね)の上に死屍の山を築く慘憺たる光景を現出してゐるにも拘はらず、巴里の大都は到る處新しい春の光に包まれる頃であつた。異鄕の生活の安易に馴れて、一生歐羅巴で暮し度いと願つてゐた上月の心に、父母の溫愛(おんあい)の絶ち難さがひしひしと迫つて來た。彼は強い執着を覺える巴里の春を恨めしく思ひながら旅裝を整へた。

何れは名殘の惜まれる知る人々との別れではあつたが、就中別離の哀愁を感じたのは、彼が恰も聖母のやうに淸淨な處女として尊敬した佛蘭西語の先生であつた。初めて巴里に着いた時案內役になつてくれた友人にすすめられて、髮の白い獨身の語學教師についたが、その後ちかづきになつた此の國の美術家の紹介で、マドモアゼル・デュポンの家に通ふやうになつた。彼女は元來語學教師ではなかつた。東洋の藝術に憧憬する――若しも謂ふ事が出來るならば――歌はざる女詩人であつた。

生れつき病身なので、一生一人で暮さなければならないと、妙齢に醫師に宣告されたといふ事を、露骨で無い云ひ廻しで話した事があつた。上月よりは二ッ三ッ年齢上に見えた。マルヌの戰に死んだ弟の爲めに、何時も着てゐる喪服の似合ふ白臘の顏に、希臘の彫刻のやうに整つた目鼻や口もとが、不淨な血液や分泌物を體內に持たない人のやうに思はれた。早くから身を汚し、今もなほ獸の生活に馴染んでゐる癖に、清淨な物に憧れる上月は、彼女を聖母のやうに思つた。

彼女は好んで人相を見たが、上月との馴染みも深くなつて、お互に遠慮の無くなつた頃、或日突然眞顏になつて、

「貴方は何か女の事で心配がありませんか。」

と訊ねながら、常に冷く澄んでゐる瞳の深い目で彼を見守つた。その寒い程の目ざしに、上月は何事をもかくしてはならない心で、沈んだ顏をして頷いた。

彼は長い間滯在した倫敦から殆んど毎日二通の手紙を受取つた。發信人の一人は、大英博物館の裏手、タビストック・スクエアのフラットに隱れ住む白耳義生れの女で、他の一人はサウス・ケンシントンに住む……夫人であつた。

旅人の身の氣まぐれに誘はれた一夜妻に、しまひにはその執拗さに堪へ難くなつた迄彼は惱ま

された。惨酷（さんこく）と云はれても爲方の無い態度で振り切つて巴里へ渡つた頃、哀れなる女は著しく健康を害してゐた。日毎に書越す文法にはづれた、たどたどしい手紙によれば、女の病は肺を侵してゐるのであつた。病軀を引ずつて尚且つ夜半の大道に、ゆきずりの蕩児の袖を引く女の姿は幻になつて彼を苦しめた。

……夫人は既に四十に近い年配であつた。上月は一頃陸軍少佐の家に寄宿してゐた事があつたが、…………夫人は度々その家に遊びに來るうちに、初めは單に珍しいと思つた日本の青年に道ならぬ想ひを掛けたのである。何事にも理解のある夫人は佛蘭西文學を好んで、その點に於て上月との話の緒口（いとぐち）を見出したのがそもそもであつた。常識的な、智識慾の無い、自負的な英人の家庭の代表ともいふ可き少佐の家の退屈さに、愈々無口になり勝だつた上月は、藝術に對して羅典民族の持つてゐるやうな純粋の熱情を捧げる夫人を見出したのは限り無き悦びであつた。しかも夫人の上品な落ついた態度や、背も高く肉も豐かな貴夫人らしい姿態（すがた）は、遥に年下だといふ關係からも、まるで母に對するやうな懐しさを感じさせたのである。何の疑ふところ無く誘はれれば誘はれるままに、ハイド・パアクの緑を見下す贅澤なフラツトを屢々訪れた。

〔三十三字略〕子供の無い夫人は召使の他には話相手も無く、愛寵の尨犬（プウドル）を膝の上に、寂しく暮して

ゐるのであつた。

夏の終り、秋の初めの夕べの事、公園の木立をこめて薄霧の迫る窓の近くに、葡萄酒の酔の目ぶちをかけてほのめく夫人は、もろ共に長椅子に掛けた上月に向つて、いつぞや彼がありとあらゆる讃辭を盡して激稱したトルストイの小說「アンナ・カレニナ」の女主人公（ヘロイン）の身の上を如何（どう）思ふかと質問した。アンナの悲慘なる最後は、或は當然罰せらるべき身の行爲（おこなひ）の結果であつたかもしれないが、アンナが罪を犯すに到つた心狀を想へば、寧ろ同情すべきものではないか、といふのが夫人の言葉であつた。故意（わざ）と燈火（ともしび）をつけない薄明（うすあかり）に、夫人の聲の常ならず息せはしく震へるのに驚いた上月は、初めて自分の位置のただならぬ事を知つたのである。

それでも彼は夫人の許を訪れる事は止（や）めなかつた。貧弱な肉體を持ち、醜悪な皮膚を持つ矮小の日本人に、淺ましい念（おもひ）を抱くのは、物好きな亞米利加の女が黑奴（くろんぼ）の強烈な情慾に身を任せ度いと思ふ誘惑に屢々陷るのと同じ程度の、奴隷視された事に他ならないと思ひながら、彼は殆んど毎日夫人と共に散步し、共に食事をし、共に劇場を訪れた。小說の中によく見る危い場景は、その間に幾度となく彼を脅した。夫人の態度は全く變つて、上品な貴夫人らしい樣子は、彼の目の前から次第に消えて行き、時には醜い表情の餘りあからさまなのを堪へ難く思ふ事さへ多くなつ

た。夫人に手を握られたまゝ、強ゐて心を落つけて、平靜な態度を失はずに何氣なく他事を語つた事も度々あつた。無理に振拂つた時の結果は如何なるだらうといふ事を怖れる最も怜悧な爲方だと彼は思つてゐた。

或時は又些かは僞惡的傾向もまじへて、彼は自分のふしだらな行ひを打明け、白耳義生れの娼婦の事さへ物語つたが、それも亦夫人の邪念を拂ふ力は持たなかつた。

遂には夫人は狂暴になつた。毒を仰いで死ぬと迫つた。たゞ一度の接吻を求めて、或夜突然彼の首に手を廻して引寄せた時は、餘りに我儘な執拗に堪へ難くなつた上月は、むら／＼と湧く憤りに驅られて、別段習ひ覺えた技でも無かつたが、押迫る夫人の豐滿な肉體を長椅子の上に投げ倒した。〔七十字略〕

振放して、帽子も外套もその儘に馳出した戸外は、折柄倫敦の濃霧に包まれて東西もわからない闇であつたが、その水底にも似た霧の中を、長い時間を費して迷ひながら宿に歸つた時、冷靜になつた上月は、既に自分の道念は根底から危機に瀕してゐるのを知つて驚いた。彼は夫人の狂暴な情慾に爛れた唇を屢々夢に感じたのである。

彼が倫敦を去つたのは其後間も無い事であつた。それは夫人を逃れたのか、或は自分自身の邪

念を怖れた結果だつたか、彼自らも答へる事が出來なかつた。
知らぬ土地の物珍しさと氣安さに、巴里へ着いた當分は彼は美しい都會を讃美する陶醉のうちに日を暮したが、一ヶ月もたゝぬ或朝、旅舍の部屋の扉の隙間から、郵便配達の差入れて行つた手紙を取上げた時彼の心は不尠惑亂した。他でも無い……夫人からの手紙だつたのである。夫人は大使館に照會して彼の居所を知つたのであつた。
その日から殆んど毎日夫人の消息は海峽を越えて來た。紋切型の恨みつらみの他に繰返して訊ねて來るのは、長く巴里に滯在するか、又直ぐに倫敦に歸つて來るのかといふ事であつた。若し滯在が長引くなら自分も巴里に赴かう、若し間も無く倫敦に歸るなら、歸つた日に直ちに自分を訪れてくれ、今は自分の非を悔いて、以前のやうな親しい友だちの交際を希ふのであるが、萬一自分を疑つて音信もせず、又倫敦に歸る日に訪問もしてくれないならば、自分は絶望の極毒藥を服して死ぬであらうとも云つて來た。
マドモアゼル・デュポンに、女に關する心配事の有無を訊ねられた時、上月は流石に白耳義生れの女の身の上は憚つたが、……夫人との紛糾は、或程度迄小說化して、問はれるがまゝに打明けた。

「貴方には女難の相があります。氣をつけないと大變ですよ。」

いつもの通り優しく云ふ女の言葉を、上月は身に沁みて聞いたのである。

それでも彼は倫敦からの日毎の文に、三度に一度、週に一度、あたり障りの無い近狀を述べて返しをしなければならなかつた。迫られては、再び其地に行く時には必ず訪れる約束さへ逃れる事が出來なかつた。若しそれを拒めば、夫人は忽ちに海峽を越えて巴里へ來るに違ひないと想はれたのである。

けれども日がたち月がたつうちに、冬は春になり、春は夏になり、夏は秋になり、秋は又寂しく暮れて早くも一年近く過ぎた頃には、手紙の數は減らなかつたが、その內容は次第に平和なものになつて、以前夫人との會話の主題だつた文藝美術を中心とした感想批評、又はそれらに關する會合又は展覽會等の消息を傳へるやうに移つて行つた。餘り激しい熱情的な文字が上月を寧ろ自分から遠ざける事を、夫人は漸く氣付いたのである。倫敦に行つたらもう一度逢はうと思はせた程、果して事も無げな消息は彼の心を和げた。

故鄕の父の病氣の報知に心動いて、愈々巴里にも別れなければならなくなつた時、上月の心に更に新に力強く物の怖れを抱かせたのは、彼が聖母の畫像の如く清きもの丶中の清きものとして

縦に理想化してゐた、美しき佛蘭西語の教師マドモアゼル・デュボンであつた。
近く此の骨を埋めても悔いない巴里にも、長い間距てなくつきあつてくれた人にも別れて、南亞弗利加を廻る二ケ月の航海の後に、故郷に歸る身になつた事を告げた時、平生は動き難い處女の表情に強い愛惜の浮ぶのを見た。共に別離の果敢なさをかこつたが、ふと處女は眞面目になつて、何時ぞや彼が物語つた倫敦の……夫人に、船がテェムス河を出る前に逢ふつもりか如何かと訊いた。上月は言下に逢ふと云つた。さうして近頃の夫人の態度の極めて平靜に歸つた事を説明し、一たん約束した上はその約束に背き度無いと云つた。
「貴方は未練があるのですね。」
何時に無く聲の變つたのに驚いて見上げた處女の顏に、たゞならぬ表情を認めて上月は固くなつた。自分の邪推に違ひないと思ひながら、彼は相手の目ざしに嫉妬の念の漂ふのを打消す事は出來なかつた。けれどもそれは矢張り邪推だと直ぐに再び考へられた。一瞬間にして處女の顏は端正な白臘の彫刻に歸つたからである。
「貴方は何時か私が、貴方には女難の相があると云つたのを記憶えてゐらつしやつて。」
いつもの通り沈着いた、靜な聲で、深い瞳に微笑の影を浮べて弟をたしなめる姉の態度で云つ

た。

　何故と云ふ上月の問に對して、處女は彼の相貌に現はれてゐると答へたが、上月の不審がる顔色を見て取つて、極めて當り前の世間話のやうに彼が生れながらに持つてゐる不可思議な魅力を解きあかした。

　上月は自分自身が、決して美しい容貌の持主で無い事をよく知つてゐた。けれども處女の言葉に從へば彼の一寸は類の無い顔、殊に瞬きをする度數の極めて少ない大きな目と、その動かない瞳が、誰人に拘らず一度差向ひになつた人をして怖れに近い一種の感情を起させる。殊に女性にとつては、近づき難い念(おもひ)を抱かせる。然るにそれが日を經るに從つて、不可思議な魅力となつて心の底に自ら喰ひ入る力を自然に持つてゐるのである。しかも常に女性に對して媚を賣る態度を缺いてゐる彼の特別の無關心らしさが、一層女の心を誘ふのである。

「貴方にはほんとに女難の相がありますよ。――オオ怖い。」

と冗談めかした處女の聲は異常に震へて、日頃冷い瞳の色が炎のやうに輝いた。向きあつて椅子に腰かけた彼女のつまさきも、膝の上で手巾(ハンケチ)をなぶつてゐた指さきも、かすかに痙攣して震へた。上月は何かしら抗す可らざる絶大の力に胸(むね)もとを壓へられた苦しさの中に、始めて眞に彼の

身に女難の迫つてゐる事を感じたのである。

「難有う。左様なら。――私は誓つて今後の生涯を女に觸れずに終りませう。」

感激に震へながら立上つて差延した上月の手を、マドモアゼル・デュポンは唇の色も褪せ、眞靑になつた頰に落る涙を拭ひもせず、默つて力強く握りしめた。喪服の胸に首からかけて長く垂れた細い黄金の鎖の先きの十字架も、はげしく波打つてをののいた。

「左様なら。」

上月は意外におちついた聲で云つて、強く強く握りしめた相手の手を振りほどくと、一散に戸外に馳け出した。

彼は再び彼女を見ず、若しも素通りしてしまふならば毒を仰ぐと脅す……夫人にも、血を吐きながらも淺ましい稼業を逃れられぬ不幸をかこちつゝ彼を待つ白耳義生れの女にも逢はずに、恰も逃亡者のやうにテェムス河口から日本へ歸る船に乘つたのである。

荒くれた船乘にまじり、無邪氣な旅客と子供のやうに戯れて、かかはりの無い海洋の旅をつづける間に、閉ざされた上月の心も次第に開けて來たが、時にふと女難の相があるといはれた事を忘れ兼て、暗い心地になる事もあつた。彼女の意味は世間で普通云ふ通りの、比較的輕い意味の

女難だつたかもしれないが、彼自身はその爲めに命を果す運命を荷つてゐるのではないかと疑ふ事が屢々あつた。

彼は泥醉の擧句、知らぬ間に泊り込んだ娼家の二階の一室の寢臺の上に見出した自分を考へて、酒に疲れたにも拘らず、兎にも角にも〔十六字略〕、低い天井を仰ぎ見て、蒸暑い夜半の寢覺めに過去（しかた）の回想に耽つたが、枕に顔を押付けて何も知らないで眠つてゐる女の彈力の無ささうな貧弱な肉體を見ると、それは到底自分とは緣も由緣（ゆかり）も無いものだと思ふ安心から何時の間にか又熟睡した。

二度目に目のさめた時は、あけ放した窓の外の明けゆく空が、白い羅（うすもの）の窓掛を透いて廣々と見えた。何時の間にか又ぴつたりと寄添つてゐる女の全身に、消え殘る電燈と、窓からさし入る黎明は鈍い光りを投げて照し出してゐた。淺間しいその有樣と、夜も朝も風さへ立たない蒸暑い大氣の壓迫る苦しさに、彼は昨夜吐いた時の氣持の惡い心持を再び感じて來た。自分の皮膚に滲み出る汗も、つく呼吸（いき）も、すべて惡酒の臭がした。堪へ難くなつて、彼は又枕頭の水を飲んだ。

その身じろぎを感じたのか、女は初めて眠むさうな目をあいた。

「貴方目が覺めたの。」

まぼしさうに上月を見上げて、女は嗄（しやが）れた聲で云つた。

「もう何とも無い。――昨夜は隨分苦しさうだつたわ。」
「苦しかつたとも。馬鹿々々しく飮まされたんだもの。」
「左樣でせう。佐川さんと來たら何時でもあれなんですよ。厭になつちまふ。」
愛想も何も無い、凡そ此世に樂しみの無い調子で云つた。
「それぢやあ僕も隨分厭がられたらう。吐いたりゝ暴れたりしたんだから。」
「そりやあ全く御難だつたわ。洋服も襦袢も脫がしてやらうとしても、大きな體でじたばたして爲方が無いんだもの。」
さも癪に障つたといふ口ぶりだつたが、流石に女らしく笑つて上月を見た。彼も初めて相手の顏をその時まともに見る事が出來た。
寢亂れた髮の覆ひかかる額の狹い、蒼黃色い顏に、二重瞼の大きな目の疲れてうるんだやうなのが、低い鼻と不調和に著しく目立つのであつた。けれども若しも此の女の顏に、男を引付ける所があるとすれば、それは此の不調和に大きい二重瞼の目に違ひないと思はれた。肋の骨のあからさまに數へられる胴も、艷も無くたるんだ乳のあたりも、すべて不健康に疲れ切つた肉體に特有の不快な聯想を伴ひ易いものに思はれた。殊に女の不見目な生活をまざまざと見せつけるやう

に感じられたのは、貧弱な襟首に瘰癧の痕の殘つてゐる事であつた。

「貴方の目、大きな目。」

女は二重瞼の目を見張つてしげじげと上月を見守つた。

「お前のよりはちひさいだらう。」

「嘘ばつかり――おまけに凄いわ。」

「よせ。」

女がからかひ氣味に差延した手を振拂つて上月は怖い顔をした。

〔五行略〕

寢がへりを打つ反對に向き直つて力任せに相手を押しへだてた。

「まあ非道い。」

驚いて、大きな目を一層大きく男を見詰めた女の顔に、好奇心の動いてゐるのを見て上月はかすかなる不安を覺えた。彼はいきなり女に背を見せて壁の方に向いて敷布(シイツ)を被(かつ)いだ。唯、その紅色の紙の貼つてある壁の上の方に、一枚の古びた寫眞がかかつてゐて、その額縁の周圍(まはり)は新しい黑いリボンで飾つてあるのが目に入つた。年とつた女の半身である。由緒(よし)ありげな様子が心にか

かつて訊いた。
「あの寫眞は誰。」
「お母さん。」
「如何かしたのかい。」
「死んぢやつたの。」
女は吐き出すやうな口調で答へた。
「何時。」
「何時でもいいぢやないか。此方をお向きよ。」
上月は今度は拒まないで、引寄せられるままに向き直つた。
「何時死んだんだい。」
「先月。」
心なしか女の目は一層うるんだやうに思はれた。
「もう親も兄弟も何も無いわ――私一人つきり。」
「悲しいかい。」

「最初は悲しいとも思つたけれど悲しんだつて爲方が無いわ。考へて見ると世の中つて馬鹿々々しいと思ふわ。何の爲めにこんな土地に來て、こんな事をしてるんだらう。」

女の聲は震へて涙は大きな目にいつぱいになつた。少し痙攣る唇のをののきを見て、上月の心も誘はれて優しくなつた。

「悲しい事も、苦しい事も、なさけない事も多いだらうね。身の上話でも聽かせないか。」

彼の本來の感じ易い心は涙ぐましい程蘇へつて、聲も態度も一變した。

女は長崎の漁村の生れだといふ。十三の年の秋の暴風に、五島の沖に漁に出てゐた父も兄も十一になる弟も、難船して行衞がわからなくなつてしまつた。病身の母と二人で佗しく暮してゐたけれど、もとより貯蓄のある身ではなし、母は親類に引き取られ、自分は十四の夏の初め、南洋に出稼ぎに出た從姉が今では立派な料理屋の女將になつてゐて、故郷への仕送りも隨分多いといふ話に釣られて新嘉坡に連れられて來た。從姉の家は料理屋ではなく、肩揚もとれない小娘は直ぐに客を取らされた。二年三年とたゝないうちに、惡い事は覺え放題、自墮落に持崩した身は捨鉢で、彼方此方と渡り歩く事も覺えてしまつた。故郷の母に仕送る筈も、借金が殖えるばかりで、まゝにはならなかつた。何でもいゝから一度は故郷に歸つて母の顏が見度いといふたゞ一つの願

ひを胸に抱いて五年六年もいつの間にか經つてしまつた。
「そのお母さんも死んぢまつたんだもの――もう生きてたつてつまらないわ。」
女は無理に笑はうとしたが、顔面が緊縮して笑へなかつた。いつぱい涙のたまつた目で、壁にかゝつた母親の寫眞を仰ぎ見た。
「よくある話でせう。どうせこんな土地でこんな稼業をしてる者は、みんな同じやうな身の上なんだわ。だけど自分の事だから矢張り自分が一番悲しいわ。」
云ひながら顔を寄せて上月の肩に手をかけた。しんみりした身の上話は何となく二人の間のへだゝりを解いて、上月もむげには振拂はなかつた。
「どうしたのさ。すましてるわね。」
急に媚を含んだ笑顔をしたと思ふと、かういふ種類の女に特有の思ひ切つた姿態で擦り寄つた。
「いけない、いけない。」
「どうして。」
「わけがあるんだ。許しておくれ。」
上月は眞面目な顔をして押戻した。

〔三行略〕

「どうして。」

「どうしてつて。私には女難の相があるさうだよ。」

彼は冗談らしく云ふつもりだつたけれど、どうしてもその語調は冗談とは聞えなかつた。

女がうちとけて身の上話をしたのに對して、彼も別段憚かる心も知らずに、……夫人と佛蘭西語の先生の話をした。

「その……奥さんは毒を飲むつて云つたんですか。」

女は上月の話に聽き入つて、好奇心そのものゝやうな驚いた顏をして訊いた。

「それは脅しだつたかもしれない。けれども自分にしてみるとどうも脅しばかりとも思はれなかつた。」

上月は自分の話を聞いてから、女が自分に對して尊敬に似た或種の感情を持ち初めたのに氣が付いて、つまらない話なんかしなければよかつたと思つた。

「毒を飲むなんて。」

女は一人で口の中でつぶやいたが、二重瞼の目を上月の顏から離さなかつた。その目ざしのた

ゞならぬ色に上月はふと胸騒ぎを覺えた。
窓の外は朝になつた。今日も亦靑々と晴れた空は飮み過ぎて重たい頭の上に輝き初めた。向ふ側の家で鳴くのか、隣家で鳴くのか、階下で鳴くのか、高々と金絲雀の囀るのが聞えて來た。
「オイ僕はもう起きるよ。」
上月は輝きわたる日光を見ると、船の出帆を思ひ出したのである。
「まだ早いぢやありませんか。」
「駄目々々。うつかりしてると船が出てしまふ。お父さんは病氣だし、お母さんは待つてるし、一日も早く歸らなくちやならない。」
わざと子供らしい調子で云ひながら、彼は勢ひよく立上つたが、寢てゐるうちはわからなかつたけれど宿醉の身體は利かず、頭ばかり重たくて、ふらふらと倒れかゝつた。
「貴方のお父さん病氣。」
女は倒れかゝつた彼を支へながら訊いた。
「不治の病たさうだ。」
「不治の病つて。」

「どうしてもなほらない病氣さ。だから一日も早く歸らなければならないんだ。」

上月は靜に寢臺を下りたが、重たい頭は中心を失ひ易く、つんのめりさうな氣がして爲方がなかつた。おまけに立上ると、未だに殘つてゐる胃の腑の物を吐き度い胸苦しさを覺えるのであつた。

「どうしても起きるの。」

「どうしても。」

「それぢやあお待ち。水をとつてあげるから。」

女も寢臺から下りて、其處の椅子に掛けてあつた浴衣を着て、上靴(スリッパア)をつゝかけると室(へや)の外に出て行つた。

「サ、これで一ぺん身體を拭いてあげよう。」

女は大きな水桶(バケツ)を運んで來て、鏡臺の上の洗面器になみ／＼と水を湛へ、その中に大きな手拭(タオル)を浸した。上月は爭はずに背中を向けると、女はしぼつた手拭の冷々するのを兩手でつかんで、痛い程烈しく彼の全身を拭いた。

頭を水にひたし、口中を清めるといゝ氣持になつて、彼は空腹を感じて來た。

「お待ち、今お茶を入れて來てあげるから。」
女が出て行つた後で、上月は一隅に干してあつた衣服を身につけた。汚物に汚した上着は洗つたのがまだ乾き切らず、何となく酒の臭ひが鼻をつくので、鏡臺の上の香水を取つて全身に振り掛けた。
「何もありやあしない。これつきりだわ。」
女は大きな盆の上に二人分の紅茶と、一皿の燒麪麭を載せて來た。
上月は直ぐさま手を出して燒麪麭を取つた。
「私も貰はう。」
女もその一片を手にして、二人は寢臺の上に並んで腰掛けて喰べた。
「不思議なものねえ。これつきりお互に二度とは逢へないんだから。」
女はバタの油で光る脣をなめながら、沈んだ顏をして云つた。
「逢へるかもしれないさ。お互に長生すれば。」
上月は一心に燒麪麭を喰べながら無責任に答へた。
「その奥さんは如何したらう。あの毒を飲むつて云つた。」

女は急に上月の肱をつかんで下から顔を覗き込んで訊いた。態度も眞面目に、狹い額に憂ひ皺といふのか、靑ざめて見える程眉を寄せてひそめいた。その態度が喚び起したのか、上月の胸は理由も無く波を打つて彼は答へる言葉を擇び出せなかつた。

とんと音をさせて床に立つと、其場をまぎらす爲めにも、又眞實乾いた咽喉を濡す爲めにも、彼は卓上の紅茶の茶碗を取上げた。

その手を後から輕くつかんで、女は震へた聲で訊いた。

「貴方にはお父さんもお母さんもあるんだわねえ。」

「アアあるよ。」

上月は何氣なく頷きながら、女の手を放させて紅茶を口に持つて行つた。

熱い湯氣の立つ茶碗の緣に唇の觸れた時である。

「いけない。」

低い迫つた聲と共に茶碗は彼の手から叩き落された。白い襦袢の胸からサツト紅茶を浴びたが、茶碗は床に碎けたのである。

「いけない。飲んぢやいけない。」

女は見る見る顔の色を失つたが、そのまま寝亂れた寢臺の上に突伏して激しく歔欷した。
「どうしたんだ。馬鹿ッ。」
上月はあつけにとられて、それつきり言葉も出なかつた。
「許して下さい。」
すすりあげ、すすりあげ泣くひまに、女はきれぎれに謝まつた。
「許して――毒を入れたんです。毒を。」
「毒。」
「お茶の中に入れたんです。」
女の背中は波を打つて、蒲團に喰ひついて泣く聲は上月の胸を刺した。彼は半信半疑で足下に落ちて碎けた紅茶茶碗を見て佇立した。
「どうしたつていふんだ。」
彼は一人言のやうにも、又訊問するやうにもつぶやいたが、女は頭を振つて答へなかつた。ただ息も絶入るばかり休みなく咽び泣いた。
たつた一人の戀しい母親も死んでしまひ、暗い半生と、希望の無い身の上に絶望して、どうせ

死ぬならとゆきあたりばつたりに自分を擇んだのだらうか。……夫人が毒藥を飲むと云つて迫つた話が更にその一因になつたのだらうか。第一毒茶を勸めたといふのは眞實(ほんと)だらうか嘘たらうか。眞實とすれば、自分に對して行はれたものとして餘りに前後の關係が薄弱過ぎる。嘘とすれば何の爲めにこんな嘘を構へるのであらう。上月は默念として女を眺めながら不可解の謎に疲れた。

「どうしたんだい。ほんとに私を殺すつもりだつたのかい。」

彼は女の後から抱起すやうにして優しく訊いた。

「許して下さい。」

女は強情に身をひねつて、寢臺にしがみついて離れなかつた。

「歸つて。――歸つて。」

又一層激しく咽び泣きながら、女は上月の手を振拂つた。

彼は如何したらいいのか途方にくれた。少し離れた窓際に寄つて、亂雜な室内の有樣を眺めながら、彼は誰でもいいから人を呼ばうかと思つた。他には物音一つしない靜かな朝を、囀りかはす金絲雀の聲が室内の女の歔欷にまじつて聞えた。

遙かに遠く港の方で、出てゆく船か入つて來る船か、青空に太くぼやけて汽笛が聞えた。彼は

驚いて時計を見た。
女はまだ全身を震はして忍び泣いてゐた。その後から兩肩に手を掛けて、頰と頰と觸れ合ふ迄近々と顏を寄せて上月は云つた。
「話しておくれ。ほんとに毒を飮まさうとしたのかい。」
女はもう振切らうともしないで、彼の兩手の中に身をすくめたが、思ひ出したやうに一際激しく泣き出した。
「どうしたんだ。ほんとに毒を入れたのかい。」
女はただ泣くばかりで答へなかつた。
上月は立上つて、なほ一杯殘つてゐる紅茶を匙でかき廻して見た。果して毒藥が入つてゐるかどうか、彼にはわからなかつたが、そのまま窓から往來にむかつて撒いた。
もう一度女の耳に口を寄せた。
「私は歸るよ。船が出るから。」
金貨二三枚を鏡臺の上に置いて、
「左樣なら。」

と云ひ殘すと彼は靜にその部屋を出て、階段を下りて戸外に出た。

二階の窓を仰ぎ見たが、女の姿は見えなかつた。町角迄歩いて人力車を見つけて乘つた。

烈しい疲勞は何事をも追及して考へる力を奪つてしまつた。彼はたゞ大なる災難を逃れた氣がしたが、何時か一度はほんとうに自分は正當でない死を遂げる運命を荷つてゐるのではないだらうかと、暗い心で疑つた。

町を出端れると一層廣々とした青空に、日輪は目もくらむ迄光り輝き、雜草の茂る草原の向ふに、あふれるばかり盛上つて見える港の海には、彼が乘つて行く船が見えた。（大正七年八月九日稿了）

霧の都

空氣の乾燥した亞米利加の、晴れわたつた秋の空に、光り輝く日輪を浴びて、ハドソンの河口を出る船に乘つたのは九月の末だつたが、平穩無事な大西洋を越えて、リヴアプウルに着き、倫敦に足を踏み入れた時は、底知れぬ海のやうな世界の大都は、夙く既に霜月の、濕つぽい霧に濡れてゐた。

これも名物の、煤烟に汚れ古びた灰色の町の、不規則に無計畫に曲りくねつた大路小路を、案内記を手にして歩き廻る自分は、屢々霧の中に道を失つた。

ウヱスト・ケンシントンの靜な裏通りの、陸軍中佐の家に居た自分は、往來に面した二階の部屋の玻璃窓に顔を押しつけて、霧の晴れてゆく戸外を、外套に身を包んで、足早に急ぐ人々を見て暮す事もあつた。

いづれは冬空の、靑々と澄む事は無いにしても、たまには雲の無い空を見る事もありさうなのに、濡紙のやうな薄雲は煤烟を含んで濁り、すべての物の色と共に、人の心をもわびしく沈ませる。たださへ灰色の都を、一層灰色にするものは霧であつたが、時にふと霧のかからぬ倫敦を想

像して、更に遙に單調な景色を目に浮べる事もあつた。

夜の間に露霜の降りて濡れた敷石を踏む靴の音もしとしとして、街路樹の梢から落て腐つた木の葉に滑る事もある。厚ぼつたい外套の中に、身動きも出來ない程うづまり、襟にも手にもふかふかした毛皮を巻きつけて、病氣づいた雀のやうに見える癖に、踵の高い靴をはいて、氣取つた足取りで歩く伴侶の女の、幾度となく滑るのを支へて行く若い男を見る事は、輕い情趣に可笑しさをさへ添へて、冬の日のそぞろ歩きの興味であつた。

家の主人の中佐は、郊外の岡の上の營所に住んで、兵隊の教練を勵んでゐた。月に一度か二度、休暇を貰つて、一晩泊りで歸つて來るばかりだつた。英吉利人――殊に英吉利の陸軍士官によく見る型で、少し猫背の、小柄な好々爺であつた。日に焼けた皺の多い顔に薄髯をはやし、極端な近眼に鼻眼鏡をかけてゐた。相當な身分で、相當な家構へをしてゐる癖に貧乏で困つてゐて、見ず知らずの日本人に部屋貸しをする程なのに、主人は久しぶりの家庭の食卓には、必ず三鞭をぬいて、娘や息子、犬に迄お愛想を云ひながら、忽ちいい機嫌になつて他愛なくなるのであつた。

「日本の海軍も近頃は、日本人を士官にするやうになつたさうだね。實に驚くべき進歩だ。」

などと、途方もないお世辭を眞面目に云ふ程呑氣だつた。彼の信ずるところによると、日露戰

争當時の日本海軍は、士官としては英吉利人を雇つてゐて、彼の日本海の大勝利も、英吉利士官の力によるものだといふのである。そんな事はないと云つても、飽くまで自說を信じて、夫人や子供達にも、これを信じさせようと、しちくどく說いて飽きなかつた。勿論彼等は、取るに足りない一日本人の言葉よりも、尊敬すべき父親の言葉を疑はなかつた。

食後は客間で珈琲を飲んで、子供達が洋琴(ピアノ)を彈き、バンヂョオを合せ、骨牌(かるた)を弄ぶのを、嬉しさうに眺めてゐるが、直ぐに二階の寢室に上つてしまふ。

翌日は朝早く立つて、郊外の岡の上の、その營所に歸つて行く。雨に濡れ、霧に濡れ、雪に埋もれて塹壕を掘り、地雷を敷く演習を繰返すのだと、妻子に別れて行く時の中佐は、流石に年とつた皺の多い顏を暗くして云ふのであつた。

夫人は堅肥り(かたぶとり)に肥つた大兵(だいひよう)で、若い時分は綺麗だつたと自分で吹聽するけれど、今年十九になる二番目の娘が母親に生寫しで、それから推察してみると、若い時の美しさといふのも、餘りあてにはならなかつた。家柄のいい家に生れ、貴族的の敎育を受けた事を、二言目には自慢する丈あつて、何よりも威嚴を保つ事に腐心して居た。

朝の食事が濟むと、お化粧をして、立派な服裝(みなり)をして、將校夫人會に出かけ、募兵につとめ、

繃帶巻を樂しむ貴夫人にまじつて、押も押されもしない、一日を送り、夕方歸つて來ると、晝間の疲れで機嫌が惡く、子供等や女中を口汚なく叱り飛ばす。それでもまた晩餐の卓に向ふと、溫かいスウプにいい心持を回復して、繰返し繰返し、昔の贅澤な生活を說いて得意になつた。

時には貴夫人仲間の骨牌遊びに誘はれて夜を更かし、財布の中の乏しいお小遣を減らして歸つて來る時は、翌日一日機嫌が惡く、目のふちは黑み、筋肉は弛んで、頭痛がすると云つて寢込む事も多かつた。さういふ時には、平生よりも一層むら氣に、神經病的(ヒステリック)になつて怒鳴りちらすので、女中は幾度となく出替り、子供達はびくびくしながら、ひそかに反抗の氣勢を示して、客間の隅に集つて、母親の惡口をささやきあふ。

廿三になる父親似の姉娘は、呼吸器の弱さうな、胸のうすい體軀(からだ)で、近視眼の癖に、本を讀む時でなければ眼鏡を掛けないしよぼしよぼした目、つまみあげたやうに見える少し出齒のちひさな口もと、乳酪(クリイム)をかけた苺の色の淡紅い頰ぺたが、赤坊のやうに見えた。女學校を出ると、直ぐに獨逸に行つてゐたといふ丈あつて、此の家では一番の物識りで、母親や妹が安小說を讀んでゐるのに飽き足らず、自分の留守にも部屋に來ては、本箱から勝手に、露西亞物の小說などを拔き出して行つて讀んでゐた。

次女は又、まるつきり母親をひと廻りちひさくした、まるまるした體つきで、顔もまあるく、目もまんまるく、お尻も完全なる圓を描いて、はち切れる程發達してゐた。病身な姉と違つて、血の氣の多い體軀は、長い間默つて椅子に腰掛けてゐる事を許さない程いきいきしてゐた。讀書嫌ひのお轉婆で、何によらず考へ事は、氣がくさくさしていやだと云つてゐた。その癖頭腦は明敏に働く質で、家中の學者として許されてゐる姉よりも、かへつていい判斷力を持つてゐた。外出好きの身が、地位ばかりよくて、その實貧しい家の事情に阻まれて、思ふやうに飛び歩けないのが、何よりも氣に喰はないのであつた。

「ああ男になり度い、男になり度い。何故女になんか生れて來たんだらう。」

と、持前の齒切れのいい物言ひで、女に生れたその身が、第一に癪に障つて堪らないといつた調子で、いつもいつも、ままならぬ身をはかなんだ。

三番目の娘は、これは一番おとなしく、誰人にもさからはずに、朝も早くから女中を助けて、甲斐々々しく拭掃除をした。色の黒い、白目勝の、頑丈な柔味の無い顔や、出尻の形の惡い體つきが、母親をして行末を心配させる種であつた。

男の子はこれ一人のヂョオジは、末つ子の身の果報に、父母の愛を一身に集めて、姉達にそね

まれながら、何處迄延びるのかわからない、ひよろ長い體軀をぐにやぐにやさせながら、むやみに母親にこびりついて甘つたれてゐた。セント・ポオル校の生徒だつたが、軍國氣分に唆されてO・T・C(Officers' Training Corps)に屬し、カアキイ服に軍帽をかぶつて通學するやうになつた。彼の軍人姿は、母親の何よりの自慢になつた。

霧の都のあつちこつちにちらかつて仲善の友達がゐた。郊外のストレタムには、三十にして鼻を垂らしてゐる出齒の娘と、心臟の惡い、肥り過ぎて身動きの出來ないお婆さんと二人暮しの二階に、獨逸から逃げて來た小泉君がゐた。その筋向ふの家には從兄がゐた。

ストレタムの公園の、なだらかな岡の、濕つぽい草の上を踏んで步き廻つた後で、小泉君の宿のせせこましい食堂で、煖爐にあたりながら、五時のお茶を飮むのであつた。うす馬鹿の娘や、肥り過ぎて息苦しく、ふんふん云つてるお婆さんも出て來て、英吉利人の慰樂のひとつかと思はれるお國自慢を始め、頓珍漢な事を云つては身の愚かさをあからさまにするのを、友だちは根氣よく、何事につけても、說き敎へる態度を取つてゐた。獨逸を憎む事、獨皇帝を憎む事、さうしてキツチナア元帥の偉大さが、お茶うけにはつきものであつた。

三度三度相當に御飯を喰べながら、更に乂牛酪をつけ、果蜜をぬり、幾片の麪麭をむさぼり、

幾杯の紅茶をすする慣習に馴染まない自分は、お茶のもてなしは餘り嬉しい事でなかつた。それを知つてゐる小泉君は、特に自分の爲めに麥酒をぬいてくれる事もあつたが、お婆さんも娘も、酒煙草に對して偏見を持ち、あからさまにその害を說いた。殊にお婆さんは、何の疑念も無く、親代々うけついだ基督教徒である事を、何よりの幸福とし、且つ基督教徒で無い者を、憐むと同時に卑しむ傾向を、露骨に示した。麥酒を飮む自分を捉へて、お婆さんは胸苦しく息切れのするせかせかした聲で、繰返し繰返し酒の害を說き、基督教に歸依する事を勸めた。しまひには自分は、その無反省に、世間的に信仰して得意になつてゐる態度をうるさく思ひ、先方は又、いくら云つてもわからない異邦の靑年の強情な面つきを、忌々しく思つたに違ひない。

けれども小泉君は、此の賴り少ない一家の者を憐む心から、その面倒臭い程無智無識なお婆さんや娘に對して、親切を盡してゐた。彼も亦基督教徒ではなかつたが、紳士といふ言葉は此の人の爲めに存在するのかと思はれる程眞に紳士らしい紳士であるから、お婆さんも娘も、極力敬愛してゐた事は疑もない。

彼はこの不自由な半病人のお婆さんが、その郊外の家に、娘を相手に暮してゐて、幾年にも倫敦を見た事が無いといふのを哀れがつて、

「春になつたら一日馬車を借りて、あのお婆さんに倫敦を見物させてやるんだ。」

と、その事を樂しみにして云ひながら、毎日毎日鬱陶しい窓の外の灰色の空を見上げて、やがて春、眞靑に光り輝く一日を待つてゐた。

同じく獨逸から逃げて來た一人の澤木君は、ノツティング・ヒルに住んでゐた。ハイド・パアクやケンシントン・ガアデンの廣々とした草場に落葉の匂ひをかぎながら、梢のすいて寒い木立の上に、安直な油繪の景色のやうな、うす紫の靄のかかつてゐるのを見、さざ波もたたない池の汀を、旅人に特有の感傷的な心地で歩く事もあつた。澤木君は乘合自動車の二階に搖られながら、自分は地下鐵道を利用して、夫々の宿から、毎日毎日、大英博物館の圖書館に通つた。讀書に疲れて館外に出る頃は、黄昏の靄は一面に、大都の隅々迄降りて、寂しい宿に歸るのが、いかにも遠く思はれるのであつた。

さういふ時には、どつちからといふ事もなく誘ひあつて、繁華な町の中心に、たツた一軒ある佛蘭西風のカフヱ・ロオヤルに落つくのがおきまりであつた。其處は、近代英文學に對する特殊の興味を世界の人に起させた詩人オスカア・ワイルドが、異樣な服裝をし、向日葵の花を胸にさして、美少年アルフレツド・ダグラスと共に訪れ、人々を驚かす程ウイスキイ・ソオダを飲んだ

家である。日本の軍人役人勤務人などが、頻繁に出入するピカデリ邊のカフヱのやうに、此處には客を張りに來る女は殆んど入らなかつたが、集る客の多くは佛蘭西人で、一杯のアプサンを前に、終日將棊やドミノをたたかはすのもあり、英吉利人の常客は、藝術家らしい服裝の若者が多く、ウイスキイの醉に聲高く制作を論ふ徒輩であつた。

自分達も話が合つて落ついてしまふと、沒趣味な宿に歸つて、極り切つた天氣模樣や、今朝の新聞の戰報を話材にして圍む食卓がつまらなくなり、一緒に食事をしながらしやべり飽きず、思はず知らず夜を更かす事もあつた。窮民、猶太人、無賴の徒、危險思想抱懷者の巢窟のやうに思はれてゐるソオホオ・スクヱアの、ちつぽけな伊太利料理屋に、キアンテイの一壜を傾けながらスパゲテイを好んで喰べるのが、吾々の身上相當であつた。澤木君は、春になつたら大陸に渡り、常日頃憧れてゐる文藝復興期の美術巡禮の爲めに、伊太利へ行くのだと、心を踊らして待つてゐた。

夜が更けて、愈々霧の深くなつた繁昌の中心は、芝居歸りの男女にまじつて、客を求める辻君が夥しく、ゆきずりの人に聲をかけて過るけれども、何時か十二時近くなつて、人足も途絕える頃、折柄降り出した雨に濡れつつ、旣に今宵の商賣をあきらめて、うなだれ勝に足を引ずつて、

貧民窟の屋根うらを差して、霧の中に消えて行く彼等の姿程、およそ果敢ないものは無い。

冬になると、暗い倫敦は愈々暗く、都を包む霧は更に又濃くなつて、晝もあかりをつけなくては、黄昏よりも暗い家の內では、何一つ仕事の出來ない事も珍しくない、さういふ鬱陶しい日には、誰の心も沈み勝で、煖爐の傍に集つて日を暮す無駄話の聲もものうく、自分などは雨と霧の日が二三日續くと、早くも肉體は骨迄も衰へ、あらゆる感覺は鈍つてゆくやうに思はれる。

二階の、うす汚ない絨緞の白けた水色から第一にうそ寒い部屋に、乏しい石炭を焚いて、何處からか隙もる風の絕えず入つて來るのを感じながら、讀書に送る時も、霧の日は早く頭腦が疲れ、目は痛む。さうかといつて本を閉ぢて、爲る事も無く沈默の壁の中に坐つてゐると、目の前の煖爐の石炭と共に灰になつて行く心地がして、堪へ難く思はれるのであつた。物に怖れた獸のやうに、突然外套を着て戶外に飛び出して、霧にかくれて行手の見えない町を、目的もなく步き廻る事もあつた。彼方此方と步いてゐるうちに、何時かしら立て込めた霧も、身の圍りから次第に晴れてゆくと、思ひもかけぬ眞赤な夕日が、家々の立並ぶ大路の果に、ぽつかりと浮んでゐる事もあつた。さういふ時程太陽を、我が懷の中のもののやうに懷しく思ふ事はない。

怖ろしいのは全くの濃霧の夜で、さしもに繁華な倫敦の往來も途絕する事もある。得意になつ

て走つてゐた自動車、馬車、荷車も、一寸二寸刻み足で進む他はなく、霧の危險を警める巡査の呼笛が、遠く近く、賴りなげに聞えて、此の大都の面積の廣ければ廣い丈、もの凄さは深かつた。かういふ時は、自分々々の家の在處さへわからないで、同じ處を幾度となく迷ひながら、歸るに歸られぬ心細い目に逢ひもする。

雪はあんまり降らないで、たまたま二三寸積つても、大雪らしく人々は噂した。テエムスの濁流の色は一層濁り、議事堂も、ウエストミンスタア・アベイも、トラファルガア・スクエアの高い圓柱の上のネルソンの像も、うすく雪を頂き、往來の踏まれてとけて流れるのに比べて、白々と淸く美しい。公園や、辻々の綠地ばかりに殘る雪に、翌朝は意外にも晴れわたつた日の輝く景色も稀にはあるが、その靑空も何時の間にか、又しても執念深い霧にかくれてしまふのである。

何にしても散步は——それも目的がなければない程、心嬉しい事であつた。濕氣を含む冷たい風にも怖れず、晴れた日はもとより、曇日でも降りさへしなければ、讀書に疲れてぼんやりしたのが、半分は無意識に廣い都の一隅を、車馬のあげてゆく馬糞まじりの輕塵を浴びながら步いた。ハイド・パアクは勿論の事、到る處の空地で、新しく募集された兵隊が、昨日迄は百姓か職工か、會社商店の番頭か小僧か、或は醉拂つてばかりゐた失業者らしいのが、身につかない軍服を着せ

られ、重たい靴を引ずつて、英吉利人らしい眞面目で鈍馬な格好をして、調練してゐる頃であつた。人出の多い四辻、殊にトラファルガア・スクエアや、ハイド・パアクの角などは、道ゆく人を集めて國家の危機を説き、すべての人に銃劍を執れと、聲を嗄らして演說してゐる頃であつた。一時は巴里も陷るかと思はれた聯合軍が、マルヌの大戰でもりかへしはしたものの、いつも攻勢に出るのは敵で、賴みに賴んだ東部の露西亞も、忽ち旗色が惡くなつた暗い心持の時代であつた。人々は都の霧の底に、ただ春の來るのを待つた。キツチナア軍隊の、日に數を增す事實から、春になれば忽ちに、獨逸軍はラインを渡つて逃げなければならないやうな事を、せめてもの心やりに、此の國の人の持前の重苦しい調子で語り合つた。

　しかしその春になると、自分の家の主人中佐は、或は佛白の戰線か、又はダアダネルスの攻擊にやられて、砲火の下に身をさらさなければならないらしいと、或日營所へ泊りがけで夫に逢ひに行つた夫人が歸宅して、子供達に言ひきかせながら、浮かぬ顏色をしてゐた。

　その晩は食後の珈琲も濟んで、子供達が洋琴とバンヂョオを合せて、うたひ騷いでゐるのをよそに、客間の長椅子に自分と並んで掛けて、今夫に死なれては、自分達はどうにも暮しが立たないと、何時ものとげとげしい神經病的な樣子には似もやらず、極めて物哀れに、夫人は一家の窮

狀を訴へた。

夫人の語るところに從へば、此の家が貧しい暮しをして、子供達の教育にさへ差支へるやうになつたのは、お人よしの中佐が、平和の日のもののつれづれに、骨牌をするのと同じ位の輕い氣込みで手を出した投機の失敗の爲めであつた。自分自身は富有の家に、立派な教育を受けた身だけれど、娘達には小遣取りに、何か卑しい手仕事でもさせなければ、着物を着せる事も出來ないと嘆いた。年とつてよぼよぼしたむく毛の白犬は、夫人の足の下に踞り、戸外には管笛を吹奏して錢を乞ふ盲人の歌の節が、濕つぽく聞える霧の夜であつた。

夜の街路の樂人には、もう一組、提琴を彈くのと、次中音をうたふのと組合つて來るのがあつた。人通りのない更けた夜に、家の前の辻に立つて、もの哀れな小曲を彈き鳴す提琴に、煖爐の火も消えかかる寒い机にむかつて、書き物をしてゐた手を止めて、窓をあけて露臺に出て、一片の銀錢を投げてやる事もあつた。中空にかかつて動かない冬の月の身に沁みる光も、うす霧にかくれて、往來を魚の泳ぎさうな景色の中に、黑い二個の人影は、心に沁みる音樂を殘して、やがて遠くに行つてしまふのである。

初めて獨逸の軍艦が、北の海岸に現はれて、そこいらの町を砲擊し、九十九人の死者と二百三

十二人の傷者を出して、人々を戰慄せしめたのも、我家の姉娘が新聞廣告に應じて、田舍の莊園に引込んでゐる貴族の夫人のお相手として、たつた一個の旅鞄と、手鞄を持つたきりで、親はらからに別れて行つてしまつたのも、十二月耶蘇降誕祭(クリスマス)の目の前に近づく頃であつた。

「他人の家に行つて、給金を貰ふのは生れて初めてだけれど、なんだか心細いわ。」と愈々明日立つといふ前の晩には、涙組んだ顏をして、やうやく隔てのとれた自分の前で嘆息した。

昨日迄は喧嘩をした弟妹も、口論をした母親も、遠くに行つた姉娘の身を想つて、時にふと一家の者はその噂から暗い心地を誘はれる事もあつた。

親愛なる君よ。

あなたは矢張り暗い我家の暗い一室に沈默をつづけて、私共が度々貴方にからかつた言葉を用ゐれば、例の「無益な讀書」を續けてゐらつしやるのですか。貴方のお好きな往來の音樂者達も、夜な夜な貴方の六片(ペンス)をあてにして、家の前に參りますでせう。すべてが、私の居りました時と同じ有樣である事を想像しても間違ひは御座いますまい。おゝ昔ながらの我が家よ。それにひきかへ、私は此地に來てから、たつた一週間ですが、早くも我が霧の都が戀しくな

りました。朝寝坊で、晝の間も殆んど何もしないで、煖爐の前の椅子に腰掛けて居睡りをしてゐる僂麻窒斯(レウマチス)の老貴婦人のお相手として、私はこの寒い風の吹きつづける田舍の他人の家に、耶蘇降誕祭(クリスマス)を迎へる身の上になりました。昨日も今日も齒が痛み、頭痛がして堪へられないので、自分の部屋の臥床(ねどこ)の枕に顔を埋めながら、終日うら庭の林に鳴る木枯を聞きながら、どうしても倫敦に歸らうと思つてゐます。ほんとに春になつたら、私はきつと歸りますよ………

姉娘は自分に宛てても、平生からさうであつたが、知らぬ人の家にゐる身の、一層感傷的になつた心持で、長い手紙を寄越す事もあつた。

人々の心待ちに待つた耶蘇降誕祭も、元日(ぐわんじつ)も、音も無く降る雨に霙もまじつて、心寒い事であつた。正月からは末の娘も、郵便局に通つて、僅かながらもお小遣をとる事になつた。陸軍士官の家柄だといふほこりを捨て兼(かね)てゐる夫人には、耶蘇降誕祭に父母から貰つた、人造の黒斑の豹の毛皮の襟巻をして、朝早く寒いうちに、霜を踏んで出て行く娘の姿は、腹立たしい程いぢらしかつた。二番目の娘も何かしら仕事を求めて毎朝新聞を誰よりも先に手にとつて、職業案内をあさつてゐるが、思はしいのが見當らないので、ただ一人家に殘つて、つまらなさうな顔をしなが

ら、拭掃除に手の荒れるのを忌々しがつてゐた。兎角氣分が勝れないと云つて、此頃は家にばかり引込んでゐて、おそろしく機嫌の悪い母親の目には、遠くに行つた姉娘や、働きに出てゆく末の娘の哀れさが深い丈、家に殘つてゐる娘のする事なす事が、缺點だらけで氣に入らなかつた。神經病者(ヒステリイ)の持前の、前後を忘れた激怒から、時には娘の手を握つて、こづき廻し兼ない權幕に對して、目にはいつぱい涙をためながら、勝氣な娘も負けてはゐず、壓制的な母親に極力反抗した。

哀れなものは女中であつた。むら氣な夫人の、深い考へもなく、云ひつけた用事も濟まないうちに、又新しい用事をいひつけるので、どつちもかたづかないでまごついて居ると、忽ち甲走(かんばし)つた怒りに震へた聲が、頭の上で破裂する。數分間默つて叱られて居れば濟むのだが、うつかり一言でも口返答をすると、夫人はまるで狂人のやうにたけりたち、或時は手近にあつた讀みかけの、アレキサンダア・デュマの小說本をとると、捨ぜりふを殘して行く女中の、後姿を目掛けて叩きつけた。風を切つて飛んだ部厚な本は、愛蘭土(アイルランド)人に特有の凄い目付をしてふりかへつた女中の横面をかすめて飛んで、部屋の壁際の花瓶に當つて、諸共に床に落ちたが、和蘭(オランダ)風の風景畫の描いてあつた大切の花瓶は、粉々に碎けて散つた。夫人の顏は眞青になり、色の褪せた唇は、物言ふ事も出來ずに痙攣して震へた。

夫人の神經は何事にも觸れて惱んだ。夜は何時でも遲く迄本を讀んでゐて、なかなか燈火を消さない上に、雨霧の暗い日には、晝も電燈の光がなければ勉強出來ないので、煌々としてゐる自分の部屋は、遂には見る丈でも腹が立つて來たらしい。

「どうも此の頃は誰が徒費をするのか、毎月の電燈料が嵩んでしかたがない。」

と自分の顏さへ見れば、獨語めかしてぶつくさつぶやいた。

土曜の晩などに、子供達と他愛も無い骨牌遊びにはしやぎ切つて、何時迄も臥床に入らないと、「もうみんなおやすみなさい」と一應子供達を叱つて、それでもきかないと、いきなり默つて燈火を消してしまふ事もあつた。自分に對して餘りに禮を失した母の子である事を羞しがる子供達のおどおどした樣子が哀れで、さういふ時は自分は何事も云はずに脣を嚙んだ。

「春になつたら何處か氣樂な下宿屋に引越さう。」

と何事をもけうとく思はせる霧に包まれた窓外の町を眺めて、暗い二階の一室に、自分は日毎に近づく春を待つた。(大正七年十一月十二日)

倶樂部

一

長い年月の海外生活に別れを告げて、愈々船が倫敦を出た時から、此の日頃馴染み深くたつた歐羅巴の再びは訪れる事もないとさへ思はれる都に遠ざかる心細さは感じながらも、滋郎の心には、日一日と近づいて行く久々の故鄕の父母の家の懷しさが止度も無く湧き起つて來た。此の長い半生に、父母の限り無い慈愛に身を浸して育つた事を思ふと、子供の頃には想ひも及ばなかつた深い情合ひを、彼は老先の短い父母に對して抱きながら、希望峰を廻り、印度洋を越える長途の航海の間、ただ一筋に故鄕の樂しさを夢み續けた。

ところが船が故鄕に着いてみると、想ひもかけない濡衣から、彼は彼の周圍の人々から常に疑を以て見られる迷惑至極な位置に陷入れられてしまつた。何處に行つても、彼は世間の白い目射しを避ける事が出來なかつた。噂を喜ぶ人々に指さされ、嘲笑されながら唇を嚙んで默した。或はそれは彼自身の想ひ過ごしかもしれなかつたが、實際彼の爲めに何物をも犧牲にしてかへりみ

ない程情愛にみちた父母さへ、疑念と心配無しには、丈延びた子の姿を仰ぎ見る事をしなかつた。
自分に對して偏見を持つてゐる事を感じながらも、時には強ひて懐に抱かれ度いと思ふやうな心持で、父母の胸に縋らうと努めてもみたが、如何しても先方の忘れ去らぬ疑念に妨げられて、滋郎は心を打ち開く事が出來なかつた。まして家の外の世間に對しては、彼は物に怖れる獸のやうに身をかくす事ばかり考へた。自然と彼は家にのみ閉ぢ籠り、ままならぬ世を腹立たしく思ふ苛々した心持に惱まされた。
父の勸めに從つて、父の關係してゐる會社に勤務する事になつてからも、彼は面白からぬ人の噂の主人公としてのみ目に立つのが心苦しく、出來得る限り人を避けた。
その態度を見て心配したのか、同じ學校を出た先輩で、今では會社の上役になつてゐる一人が、常々出入する倶樂部に入會する事をすすめた。それは此の國では殆んど唯一の英吉利風の倶樂部で、財産か地位か何かしら世間に名を知られた人間の寄集る場所だと思つたので、學生上りの若輩には似合はしからぬ事たといふのを口實に、實は多人數の前に出て又しても面白くない目を見るのは堪らないと思つて辭退したのであつたが、將來社會的地歩を占める爲めにも得策だといふ先輩の執拗い迄の勸誘と、第一には倶樂部の創設者の一人なる彼の父も、當代各方面の一流の人

物の形造る社交界に、息子が顔出しをするのを希望するので、滋郎も遂に納得して入會する事に決めたのである。

「兎に角一度僕が案内しませう。」

と紹介者の先輩は彼を倶樂部に引張つて行つた。

丸の内を少し堀割の方に寄つた横町に、堂々と聳えてゐる石造の四層樓の入口を、餘り進まぬ心持を抱きながら滋郎は先輩の後について、案内されるままに入り、暗い廊下を奥へ導かれて行くと、球戯場の球の響が聞えて來た。

「一寸覗いて見ませう。」

といつて、先輩は彼をみかへりながら左へ折れて進んだ。

「ヤア珍しいな、一番いかうか。」

入口の球戯臺で、一人で稽古球を突いてゐた中年の紳士は、先輩を見ると、撞棒を床の上にトンとついて、若々しい聲で云つた。

「又負け度いのか。」

先輩は煙草に火をつけて一服してから、壁に立て掛けてある撞棒を執つたが、思ひ出したやう

に、
「一寸御紹介するがね、こちらは柘植さんの御令息で、つい此間外國から歸つて來た方です。」
と改まつて紹介し、
「ほら、君知つてるだらう、此間うち新聞で騷いだ、あれさ。」
と附足して、合圖をするやうな目くばせをした。
「アアさうですか。貴方ですか御艶名は豫て拜聽して居ますが。」
紳士は心易さうな冗談を云ひながら名刺を差出した。それは雄辯と高襟で聞えた某新聞の主筆であつた。滋郎はその新聞の記事の爲めに受けた迷惑と不愉快を思ひ出して、いかにも目前の人が責任者であつたかのやうに、固くなつて相手を見守つた。
二人は直ぐに球戯臺にむかつて、お互に惡口を云ひあひながら、夢中になつて勝負を爭ひ始めたので、滋郎は一人ぽつねんと、傍の椅子に掛けて見物してゐた。
廣い球戯場の、向ふの隅の一臺でも、先刻からの勝負が續いてゐて、そつちは酒場に近い爲めか見物も多く、競技者も見物も、機智をほこる洒落輕口、笑聲に笑聲が續いて賑かだつた。
唯、そのわい／＼騷いで居る連中の中から一人立上つて、大跨に近付いて來たのが、

「柘植君ぢやありませんか。」

といつてぽんと肩を叩いた。

「僕ですよ。仲木ですよ。」

「しばらく。」

滋郎は見忘れてしまつた同窓の友だちの、見違へるのが當然な程肥つた顏を見守つた。

「どうも久濶でしたなア。かうつと。やがて六七年になりますかしら。お歸朝になつた事は新聞で知つてゐましたが、意外でした、今日お目にかゝらうとは。」

學生時代には同級ではあつたが、餘り親しくした事も無かつたのに、仲木は一人で嬉しがつた。

「彼方に赤倉も來てゐますよ。先生もおやぢが船舶であてたものですから、近頃はたいした勢です。如何です、ひとつ驚かしてやりませう。」

仲木は無理に滋郎を立たせて、その手を輕く取つて寄添ひながら、多勢集つてゐる一隅に連れて行つた。

「御無事でお目出度うございます。」

ぞろりとした服裝をした赤倉は、非道く叮嚀なおじぎをしたが、

「又その節はお安くないお噂も新聞紙上で拜見しましてヘツヘツヘツヘツ。」
と衆人の中で、學生時代にはつひぞ聞いた事もなかつた、小商人のやうな笑ひ方をした。
あたりの人は一齊に、見馴れない滋郎をいぶかしさうに振仰いだが、仲木はいきなり近間に居た二三人の一團に向つて、
「栢植君を御紹介しませう。」
と持前の大きな聲で呼びかけた。
「私もおちかづきに。」
「僕も御紹介を。」
其處いらに居た多勢は、名の聞えた政治家實業家などで、雜誌の口繪や新聞の寫眞版で見知つた顏もまじつて、若いのも年とつたのも一齊に立上り、四方八方から名告りかけた。
「貴方が栢植さんですか。御艶聞は承知して居りましたが。」
「吾々も少しあやかり度いもので。」
口々に滋郎の身に傳へられた新聞紙上の艶話材料をほのめかしながら、人の惡い彌次馬の微笑を浮べた眼で見守るのを、彼は苦笑して迎へるより他に爲方が無かつた。

「あんな出たらめを書かれた爲めに、非道い目に逢ひました。」

と誰にともなく辯解してみても、誰一人承知しさうな風には見えなかつた。

「ヘエあれが柘植さんの息子かい。」

「女優とくつついて廢嫡されるつていふ。」

遠くの方の壁に倚つて居る三四人は、指差して私語きあつて居た。滋郎は憮然として默した。

彼はつい一二ケ月前に、足掛け六年目で歸朝した日の光景をまざまざと想ひかへした。その日は、名殘り無く晴れた青空に日輪は高く昇り、おだやかな内海のさざ波に船も搖れず、目の前に横たはる故郷の山を手に取るやうに望みながら、躍る心を止め兼て足を踏みしめて甲板を步き廻つた。

船が港内に碇を下すと、忽ち集つて來る小蒸汽は、同船の客を待つ多數の出迎人を乘せて來たが、彼が神戶の造船所に勤めてゐる兄夫婦をその中に見出す前に、多勢の新聞記者は滋郎を取卷いて放さなかつた。驚いて目をみはつて佇む彼は、忽ち四方から寫眞機をむけられて撮影されてしまつたが、更に彼を驚かしたのは「御同行の御婦人と御一緒のも一枚うつさして頂きませう」といふ彼等の要求であつた。英吉利から同船の客の中には七八人の女客もあつたけれど、多くは夫

と同行で、しかも日本迄來たのは一人も無く、ケエプタウン、ダアバン、新嘉坡、香港と港々で數が減つて、最後の一人は上海で船を捨てた。途中のそれらの港から乘船した人もあつて、今度は日本迄も一緒だつたけれど、東洋擦れのした殖民地の英米人と口をきく不愉快には堪へられないで、彼は遂にそれらの中の誰人とも親しまうとはしなかつた。滋郎は何の疑も無く、右の次第を述べた後で、

「惜しい事をしました。上海迄は綺麗な娘さんが一人乘つてゐたのでしたが。」

と、お愛想さへつけ加へた。すると今度は各々に手帖を開き鉛筆を持つて、四方から彼に質問を始めたが、その質問の悉くが、何の爲めに彼の答へを要するものなのか滋郎には一切解らなかつた。遂々辛棒しきれなくなつて、

「私は何も知りません。」

と言ひ捨てたまゝに、腕を取つて引止めようとする記者達を振拂つて、折柄來合せた兄の方に走つてその手を執つた。

その時だ。彼とはかなり年齡の違ふ兄は、父によく似た莊重な聲で、

「お前一人きりか。」

と詰問するやうに云つた。誰の顏にも彼を迎へる悦びの表情の無いのを、ひそかに怪しんだが、一切の事はその夕方、東京へ行く急行の汽車の中で買つた夕刊によつて明白になつた。驚く可き事には、彼は何時の間にか出所もわからない噂の主人公として、知る人にも知らぬ人にも、當時問題の花形となつてゐたのであつた。

それは恰も彼が印度洋を航海してゐる頃の事、實業界の元勳栢植某の嫡男滋郎は長らく歐米に留學して居たが、最初は神妙に學事にいそしんで居たけれど、何時の間にか馴染んだ倫敦の女優と同棲して、學生たる身の本分を忘れ、今回愈々歸朝するに際しても、その女と別れる意志なく、今や南洋希望峰を廻る船に同船して居る筈である、謹嚴なる事古武士の風ある父はもとより金髮の女優風情を嫡子の嫁として迎へる事は出來ないといふので、栢植家は目下廢嫡問題で大騷ぎであるといふ意味の記事が、都下の一新聞に二日續きで出たのであつた。すると他の新聞も爭つて之を傳へ、中には栢植父子の寫眞を並べて載せて、美文めかした文體で、女優との戀の成立ちから日に見るやうに描き出したのもあつた。

夕刊は右の記事の概略を細かい活字で組んで、扨て今朝その問題の主人公が神戸に着いた事を、挑發的な標題に寫眞を挿入して報じたのであつた。滋郎はその新聞の記者と彼自身との、甲板上

の對談といふものを讀んで、餘りに空々しい虚構を憎んだが、就中驚いたのは、彼が倫敦以來の婦人客中、最後の一人は上海に上陸したと語つたのを勝手に捏造して、「女主人公即ち英京倫敦の女優――もつとも合唱歌女だざうだが――男の後を追つて來た歐風淸姬は、わざと上海に上陸して一船遲れ、ひそかに次の便船で神戸へ着く手筈になつてゐる」と、まざまざと書いてゐる事であつた。

久しぶりの我家に歸つて、幼子のやうに抱きつき度いとさへ思つて逢つた父母にも、疑惑の念のあるのを見た時、滋郎は淚の溢れる迄激しい憤りに震へた。家人の止めるのもきかずに、都下の各新聞に記事取消を請求したが、誰にも氣の付かないやうな紙面の片隅に出た簡單な正誤を誰が注意して見るものか。彼は到る處で人々の好奇心の的となり、到る處で話材に供された。新聞記事が創作した艶話の主人公としての彼意外に、世人は柘植滋郎の存在を考へる事が出來なくなつてゐた。甚だしいのになると逸郎といふ兄のある事を知つてゐる人々さへ、廢嫡問題が唱へられてからは、滋郎を柘植家の嫡男だと思ひきめてしまつたのである。

今日も今日とて初めて顏を出した倶樂部で、彼は又人々の意地の惡い注視を浴びなければならない不思議といへば不思議な自分の身の災難を思ひながら、一切の世の中の人間に對して反抗し

度い心持を抑へて唇を嚙んだ。

日が沈みかけて、夕方の光の斜にさし込んだ室内も黃昏ると、電燈は一時についた。それをきつかけに立上つて、滋郎はまだ球を撞いてゐる先輩に丈挨拶して一人戸外に逃れ出た。人いきれの中の騷々しい一群にまじつて、不愉快なおもひをしてゐた爲めか妙にのぼせて火照る顏を、晩春の風は生溫かく吹いて通る。落日の後の白けた空の下の、暮れ切らない町に漂ふ薄明の中を歩いて、堀割の上の橋にさしかゝつた時、滋郎は取り止めも無い憤懣の念にむしやくしやする胸を鐵の欄干に抑付けて、水の面を見下して佇んだ。此の世の中に、今暮れて行く頭の上の大空と、さゞ波をのせて流れるともなく流れてゆく目の下の水の他に、彼にとつて親しいものは何もないやうな哀感が心に沁みた。けれども矢張り、絕間なく橋の柱をゆるがして通る電車の音に追ひ立てられて、直ぐに又步き出した。

「柘植君、柘植君。」

恰度橋を渡り切らうとした時、彼は後から呼び止められた。中折の庇をぐつと下げて、二重廻の袖をばたつかせながら馳け寄つたのは仲木だつた。

「どうしたんです。何時の間にか君の姿が消えちやつたものだから、受付に訊くと、只今お歸り

になりましたといふので、どうせもう追つくまいとは思つたけれど兎に角私も出て來たのですが、不思議ですなア、電車から見てゐると、こゝんとこを歩いてるぢやありませんか。」
彼は飛下りをして來た爲め息切れのする聲を、平生よりも一層高くしてしやべつた。
「何にしても學校以來ですからな。久しぶりで今日は是非ひとつ一緒に御飯でも喰べようぢやありませんか。」
滋郎は自分の爲めにわざわざ電車から下りて來た相手の言葉を斥けかねて、あいまいな返事をしながら、何時の間にか銀座の大通りを横切つて築地迄歩いた。
暮れ切つた空には星が瞬き初めて、うつすりと靄のかゝつた水の上に、兩側の燈火の映る川岸を並んで歩いて行つたが、ふと曲つた横町の三四軒目の家に、仲木は物も言はずに滋郎を連れ込んだ。
すりがらすの丸ぼやに、喜代川と横に書いた軒燈の出てゐる眞新しい門から少し折れ曲つて導く敷石に、仲木の下駄と自分の靴の音の入りまじつて冴えたのを聞いて、滋郎は久しく足踏みしなかつた世界を思ひ出した。
「マア仲さん。」

正面の襖をあけて出て來た丸髷は思切つて親しげにくだけた調子で呼びかけながら、今度はおそろしく叮嚀に取り濟ましたお低頭をした。

「いらつしやいまし。」

「階下の奥たらう。通るよ。」

仲木はもう一人の若い下働の後について、どしどしと廊下を踏み鳴らして奥に消えて行つたが、滋郎は編上の靴の紐に手間取つた。

「さあどうぞ。」

といふ丸髷に導かれて座敷に入ると、

「いゝかい、それぢやアね、今のそれと、それから電話たぜ。」

「かしこまりました。」

仲木は下働に何かいひつけたのを念た押してゐた。

大胡坐で脇側を引きつけた彼は、

「どうも久しぶりでしたなア。」

と改めて同じ事を繰返した後で、商賣人に特有の、世間馴れた態度を見せ度い爲めに別段考へ

てもゐない事をさももつともらしく話に仕立てゝ、それからそれと引張つては、しかも主として一人でしやべつた。

お酒が出て、四五人藝者が來ると、續いて、

「こちらかい。」

といふ聲を先にして赤倉が入つて來た。

「ヤア柘植さんも御一緒ですか。」

「どうだい驚いたらう。電車道でめつけ出して拾つて來たのさ。」

「マア非道いわ、仲さんたら。」

若いのは手を擧げてぶつ眞似をしたが、さもほんとに可笑しくて堪らないといふ顏をして、一度堪へてみせてから其の顏を袖でかくして笑ひ崩れた。

よくも、かう無表情に綺麗なのばかり揃へたものだと感服する程粒の揃つた、いづれも十七八、いつぽんになりたての若いのが小生意氣にすまして居るのを相手にして、口の達者な仲木と赤倉は、駄洒落と樂屋落をちやんぽんに、ちつとも落つかないではしやいだ。

醉が廻つて、先づお客の聲が高くなると、流石に氣取つた若い藝者達——聲變りのしたばかり

のやうな冴えない音聲のも、お酌時代の癖の抜け切らないきい〳〵聲のも、一調子調子をあげて騷ぎ出したので、煙草の烟の立てこめた室内は火氣と人いきれで暑い位になつた。

ところへ、

「アラそちら、赤さんとお二人。オヤもうおひと方。どなた。」

廊下で甲走つた聲が聞えて、

「今晩は。」

と形ばかり入口で手をついて立上つた脊の高過る程なのが、いきなり滋郎と仲木の間に、すう〳〵裾を引きながら來て、割込むやうに坐つた。

「姐さん今晩は。」

「今晩は。」

若いのは口々に挨拶した。

滋郎は一目見ると、見たやうな女だなと思つたが明瞭と見當はつかなかつた。年配は其處いらに並んで居るのとは桁が違つて三四に見えた。少し鼠がゝつた水色地に、一面に白く張つた蜘蛛の巣に蝶々と櫻の花の絡んだ模様も、銀と黑の大きな石だたみのぴか〳〵光る帶も、ひよろ長い

體によくうつゝて、少し出過ぎた鬢と、少しつまり過ぎて窮屈な氣のする髱を氣にして見てゐる滋郎の方に横顔を見せて、調子の高いしかも濁つた聲で赤倉を相手にしきりにしやべつてゐる。
「オイ〳〵こいつはちつと醉つてるぜ。」
赤倉は何か云ひ負かされて、頭をかきながら滋郎の方に盃をさした。
「貴方、私醉つてて。――赤ござんすか。」
ふり向いて酌をしながら首をかしげて顔を正面から見た時、少し口尻の上に切れた大きな口と目の見當の少し違ふやうにも見える黑目勝の目つきに特徴があるので滋郎は初めて思ひ出した。恰度外國へ行く前に先方もその頃はまだ子供らしい體つきでゐながら、間の拔けた程ひよろ長かつたので「アスパラガス」といふあだ名をつけてやつたお酌上りに違ひ無かつた。確かにさうだと思つた時、その當時の連中の顔が五つ六つ一時に浮んで來た。
「ねえ、貴方つたら、私赤ござんすか。」
醉が出て涙ぐんだやうな目で滋郎を見上げながら返事を促した。
「どういたしまして、ぬける程白いよ。」
「嘘ばつかり、知らない。」

と邪慳に云ひ捨てゝくるりと仲木の方に向きをかへた。
「ねえ、私こちら、如何もお見かけしたやうだわ。」
「エ、エ、こちらかい。こちらは吾々の學校友達でね、世界を跨にかけた色師なんだ。」
「マアこちらは色師なんですか。」
「いろしつてなあに。」
「アラいやだ。色師つて、そらなんてんでせう。色魔ぢやあないの。」
　取巻いてゐる若いのは、此處をせんどと甲走つた。
「それぢやア貴方あちらからお歸りになつたばかりですか。どうしても私お見かけしたやうに思ふんですけれど。」
「さうかしら、私の方には覺えがありませんよ。」
　滋郎は相手が恰度今其處に並んでゐる若い連中の年恰好だつた頃を思ひ出しながら、わざと白ばつくれた。
「どうだい、ひとつみんなで柘植さんの何か彼地の面白いお話でもうかがはうぢやないか。」
　又赤倉のさす盃に酌をしながら、

「アラこちら柘植さんておつしやるの。」
女は大きな目をみはつて、横顔に比べると見劣りのする頰骨の高い顔の筋肉のかたくなつたやうな、あきれた表情をして滋郎を見た。
「誰か柘植さんといふ御親類でもあるんですか。」
滋郎は口にふくんだ盃を干して、すまして云つて女の顔を見かへした。
「いいえ。隨分お珍しいお名前ですこと。」
心持伏目になつて盃を受けたのが、目をつぶるやうに仰向くと一息に飲んだ。
「美事々々。そいつは俺が頂戴しよう。」
仲木は醉つた體を左右に搖すぶりながら見守つてゐたが、いきなり横から手を出して盃を引つたくつた。
「貴方の名は。」
滋郎は實際「アスパラガス」たけは忘れなかつたが、ほんとの名前はどうしても思ひ出せなかつた。
「瑠璃歌と申します。」

女はそれをわざと滋郎は知らないふりをして訊いたのだと考へたのか、ある女形(をやま)の聲色(こわいろ)で受けて、ひそかに彼を睨んだ。

何時の間にか初めからゐた若いのの中には一人づつ影を消したのもあり、又新に來て坐つてゐるのもあつた。夜が更けるに連れて、近所の三味線が聞えて來たが、同じ家の裏手にむいた二階の方でも、誰が歌ふのか客の聲で、無暗に几帳面な長唄が始まつた。

「柘植さん、お願ひですからひとつ貴方の例の艶聞のそもそもからを聞かして下さいな。」

赤倉は酒の爲めに呂律(ろれつ)のあやしくなつた唇を甜めながら顔を突き出した。

「艶聞て、あの女優云々(うんぬん)の事ですか。冗談ぢやない。一體私には如何してあんな間違つた記事が出たのかその理由さへわからないのです。」

「何もさう吾々に迄もかくさなくたつていいやね。」

とろんこの仲木は何と云つても承知しないといふ氣勢(けはひ)を示した。

「かくすのなんのつて、もともと身に覺えの無い事だから爲方がない。第一女優に追かけられる柄ぢやないや。」

滋郎は冗談にして逃げようとした。

「そりやア一緒の船で來たとかなんとかいふのは嘘でせうさ。しかし彼地にゐる間の事は、こいつはまさかまるまる嘘とも思はれないぢやありませんか。」
「それなんです困るのは。第一私にしても、自分の事でなく、誰か他人の身の上にこんな事が起つたのなら、屹度新聞の記事を信じますよ。それ程新聞屋つて奴は上手に出たらめを書くんだからかなはない。いくら辯解しても誰もききませんからね。」
「うまいなア、さうとぼけられちやアかなはない。」
「私がとぼけてるつて。とぼけるもとぼけないもないぢやアないか。覺えのある事なら爲方がないけれど、思ひもかけない出たらめを書かれた丈でさへ迷惑してるんです。何と云つても私のいふ事を信用しないのなら、疑ふ人には疑はせて置くより爲方がない。」
滋郎の聲の高くなつたのは、酒機嫌の爲めばかりではなかつた。彼はどう處置していいか見當のつかない自分の身をじれつたく思ふと同時に、何といつても憎むべき新聞屋を信用してゐる相手が癪に障つた。
「貴方一體、何のお話。」
しつつこく言ひ爭つてゐるのを、何かしらお座敷のこじれだと思つて眉をひそめてゐた瑠璃歌

は言葉の切れ目に割つて入つた。

「何ね、柘植さんのお馴染の西洋の女優の話を仲公は聞き度がるし、御當人はかくさうつていふ苦戰でね、只今火花をちらしてゐるのさ。」

赤倉は引取つて説明して改めて滋郎に盃をさした。

「お安くないわね。こちらが何なの、あちらの女優さんと爲にして、御夫婦のやうに——へええ。」

瑠璃歌はつと滋郎の方に身を寄せて、

「貴方聞かして頂戴よ。おのろけ賃は頂きませんから。」

と酌をしながら左の手で食臺の下の滋郎の膝をそつと捻つた。

滋郎はもう辯解するのも馬鹿々々しい程腹が立つて頭の熱くなるのを感じながら醉の出た顔のやり場に困つて只管酒を飲んだ。

その時ちいつぽけな丸髷を生眞面目に頂いた五十近い、一目見て待合の女將らしく油切つて肥つたのが現はれた。

「一寸御挨拶に。」

さう云つて頭を下げてから、

「こちらが柘植さんでいらつしやいますか。」

と改まつて滋郎の正面に坐り直した。

「近頃はお見えになりませんやうですが、もう以前の事でございましてねえ、私が木挽町の喜代多にをりました頃には、ちよいちよいお客様を遊ばしたりなんかで、大旦那様には御贔負になりましたんですよ。」

女将は一巡盃をうけると、變にねばつた調子でしやべり出した。

「それに又貴方樣のお噂も、手前どもへいらつしやるこちらさまや、ほかさまから伺ひましてね、おかくしになつても何でも承知して居りますよ。」

深い意味のありさうな微笑をだぶだぶした頰ぺたに無理にこしらへて、

「只今もあちらのお座敷で、今日倶樂部で貴方樣にお目にかかつたとかおつしやつて、しきりにお噂が出ました處へ、こちらのお座敷に居りました妓が。」

と切つて盃をなめて、今度は瑠璃歌の方に向いて、

「君勇さんがね、アラ柘植さんてたぶん今階下のお座敷に來てらつしやる方だわつて云ふもんだ

から、それぢやあ是非お目にかからうつて方があつてね、——貴方大變な人氣なんですよ。」

と又滋郎の方に話を戻した。

「誰です、それは。」

「御前(ごぜん)なんですよ。」

と仲木の方に煽(あふ)ぐやうな手つきをしながら答へた。

「なあんだ御前か。御前なら呼ばうぢやないか。」

「だけどおひと方ぢやありませんよ。」

「誰だいお連(つれ)は。」

「なんとかおつしやいましたつけね、ほら新聞の方の。」

「野間口かい。鼻眼鏡の。」

「さうさう、その野間口さんさ。」

「あの酒癖のよくない方でせう。私大嫌(だいきら)ひだわ。」

側から瑠璃歌も口を出した。

「彼奴(あいつ)か。彼奴なら僕が行つて引張つて來よう。」

仲木はいきなり立上つて座敷を出て行つたが、五分とたたないうちに廊下を醉つた足取りでもつれあひながら、洋服の上着を脫いだ、眞赤に醉拂つた、麥酒樽(ビール)のやうな男の手を引張つて歸つて來た。後から一人ウヰスキイの瓶を手に持つた鼻眼鏡がついて來た。いづれも、此の晝倶樂部で球戯(たま)を冷かしてゐた彌次馬の間に動いてゐた顔であつた。

「おいおい誰か紹介しなくちや困るぢやないか。」

麥酒樽は座敷の眞中に突立つたままで、わざとらしい巻舌で駄々つ子のやうにわめいた。

「左樣々々。これは男爵賀古次郎麿君。」

と赤倉がいふのと一緒に、

「僕も、君のやうに長くではないが、一昨年歐米視察に行つて來ました。倫敦も二週間の滯在だが、御承知のピカデリイなんかなかなか詳しいものですぜ。帝國劇場(エンパイヤ)、歐羅巴珈琲店(カフエエ・ユウロオプ)ね——兎に角倫敦の税關を通過(パッス)したんですからなハツハツハツハツハツ。」

彼地(かつち)のさかり場の、よく日本の役人や軍人などが行く、賣春婦の出入する劇場や珈琲店の名前を並べて高笑ひしながら何時の間にか大胡坐になつて、向ふの座敷からついて來たお酌の持つて來た洋盃(コツプ)でウヰスキイを飲み始めた。

「オイお女将。栢植君も立派には立派たが、なんだねえ、かう噂で聞いてると金髪の女優に追掛けられるつてのは、もうちつと色の白い優男かなんかだらうと僕は思つてゐたんたがハツハツハツハツ。」

「マア御前始まりましたね——こちらはお口の悪いので有名でしてね、若い妓なんかよく泣かされるんですよ。御氣性はさつぱりしてゐらつしやるんですけれど。」

女将はとりなすつもりで口を挾んだ。

「全くです。僕は書生流儀なんだ。そのつもりでつきあつてくれ給へ。」

と改めて又頭を下げた。

「色男一杯獻じよう。」

遠くにゐた鼻眼鏡は足場も定らない足取りで寄つて來て、これも手にした洋盃をさしてウヰスキイを迫つた。

「ひとつ大に世を騒がした艶話を承はらう——、おい／＼みんな近くに來ておのろけを拜聽しろ。」

と一座の藝者、お酌を招いて怒鳴つた。

「皆さん、ほんとにお側に來て伺ふといゝよ。」
女將のいふ言葉につれて、頭の數だけ膝を摺り寄せた。
「こいつは聞きものだぞ。」
「是非伺ひませう。」
と仲木も赤倉も一齊に盃をさしつけながら滋郎を取卷いた。
滋郎は默つて人々の顏を見廻しながら、目の前に並んだ盃の冷くなつた酒を順々に飲み干して、洋盃(コップ)のウヰスキイさへ一滴もあまさなかつた。一座はあつけにとられて、人影で暗くなつた室内は一瞬間寂然(しん)とした。
「どうした、どうした。お早く願はうぢやないか。」
御前のがらがら聲について、みんなが又騷がしくせがみ出した。
「駄目々々、新聞屋の書く事なんか、皆悉(みんな)噓だ。若しそんな女がありやあ日本になんか歸りやしません。」
滋郎は流石に醉は廻つてゐながら、妙に冴え冴(さ)えした頭腦(あたま)で、どうかして話をわきみちへ轉じようと苦心した。

「何だつて。天下周知の事實を嘘だといふのか。」
鼻眼鏡は新聞記者らしい口吻で詰つた。
「嘘だとも。みんな新聞屋の出たらめなんです。」
滋郎はかへつて落ついて、鼻眼鏡をからかふ興味さへまじつてゐた。
「ヘン、ごまかしたつて駄目だぞ。」
「誰がごまかすもんか、自分達こそ嘘つきの新聞屋にだまかされてゐるんぢやないか。」
「栢植さん――マアひとつ頂戴しようぢやございませんか。」
女將は二人の間に割つて入つて、滋郎の前の盃を自分から手を延して取つた。一座は妙に白けて、藝妓達は手持無沙汰の息をのんだ。
「下らない話なんかやめだやめだ。今晩はおちかづきになつたんだからお互に飲まう。」
滋郎は知らず知らず聲高くなつたのを反省して、洋盃を記者と御前にさした。
「さうか、そいつは面白いや。」
御前は直ぐに乘つてしまつて、
「此の色男は豪傑だぞ。愉快だ。飲め飲め。みんなも飲むんだ。」

と云ひながらぐつと突き出した洋盃に、側のお酌がウヰスキイの瓶を取つて傾けたが、旣にそれは空になつてゐて一雫も殘つてはゐなかつた。

「無いのか。」

と橫手から記者は叫びながらお酌の手首をむづとつかんだ。

「あなたつたら。」

「お待ちなさいよ。あぶないわよ。」

二三人女達がはら〳〵して一時に聲をかけたにもかゝはらず、記者は素早くお酌の手から空瓶を奪ひ取つて、つと立上ると電燈の下に高くさし上げてすかしてみた。

「なんだ空つぽか。――畜生ツ。」

いきなり疊の上にウヰスキイの瓶を叩きつけた。

「あぶない、あなた。」

女將はその手を押へて、睨むやうな目付をしたが、つと立上がりながら空瓶を拾ふと、物も言はずに廊下に去つた。

「ウヰスキイ。」

記者はその後姿を追掛けてやけくそに怒鳴つたが、故意(わざ)とらしくふら〳〵と滋郎の方に倒れかゝつた。

「危(あぶな)い。」

一齊に藝者が立上つて、二人の間をへだてるやうにしながら、半分横倒しになつた記者を介抱した。滋郎はその光景を忌々しく眺めたが、默つていきなり立上つた。

「はばかり。」

後から追掛けて來て訊いたのは瑠璃歌だつた。

「いいえ歸らうと思ふ。」

「まだいいぢやありませんか。久しぶりでお目にかかつて私嬉しいわ。」

「駄目だよ、ああ亂暴に出られちやア。」

「ほんとに御氣の毒ね。」

滋郎はそれを聞き流して、どしどし玄關の方に歩き出した。

「柘植さん。」

「エ。」

「随分久しぶりだつたわねえ。私ほんとに驚いちやつたわ。」
「私も驚いたよ。」
「貴方又逢つて下さらない——昔のお話がし度いわ。」
瑠璃歌は技巧が自然になつたやうななつかしさうな聲で云つて、滋郎の背中に縋るばかり近々と寄添つた。
「いづれね。」
「いづれつて……」
女が何か云はうとした時、
「オヤ貴方どうなさつたの。」
と傍の襖をあけて丸髷の女中が顔を出した。
「お先きにお歸りになるんですつて。」
「マアおよろしいぢやありませんか。」
と口では云ひながら素早く擦りぬけて玄關に出て、そそくさと預り物を整へた。
「瑠璃歌さんはこちら御存じなの。」

「エヽ、もう一昔だわ姐さん。」
　と滋郎に外套を着せながら、
「まだ私が、お酌時分でせう。柘植さんも可愛らしい坊ちやんだつたわ、西洋の女優さんなんか夢にも御存じない頃だわ――ねえ柘植さん。」
　滋郎は不愉快な心持を禁じる事が出來ないで默つて靴をはいて立上つたが、充分醉の廻つた體は重く、足下(あしもと)がきまらずにふらふらした。
「あなた大丈夫。」
「大丈夫々々々。」
　瑠璃歌が後から聲をかけるのに答へながら、彼は一寸取つた帽子を阿彌陀にかぶつて歩き出した。
「柘植さん。」
　又呼ばれてふりかへると、
「ぢやあね。」
　と障子に手をかけて立つたひよろ長い瑠璃歌は首をかしげて、念を押すやうな風情をした。

「馬鹿ッ。」

口の中でつぶやいて、滋郎は蹣跚と敷石を踏んで門を出た。

「醉つてらつしやるわ。」

女中の高い聲が聞えたが、往來に出ると更けた夜の濕つぽい靄に包まれた河岸つぷちは、冷々として氣持がよかつた。

何處の家からか聞えて來る三味線の間に、流を下る船の船側を打つせせらぎが、醉拂つた彼の心をさまし、靜におのれをかへりみる方へ誘つた。彼は河岸に佇んでふとした事の間違ひから、思ひもかけない濡衣を着せられた一人の男を他人の姿にして目に描いたが、その時又、遙なる春の夜の大空と、佇む足下の行く水の他に、自分の心に逆らはぬ親しいものは何もないと思ふ孤獨の哀感が、醉眼に涙を浮ばせる程底の底から沁々と心のうちに湧いて來た。

二

久しぶりの故郷の、狼狽しく暮れて行く春の後から、光り輝く夏の追迫る季節の推移の微妙さを、肉體の組織に迄も影響を受ける程滋郎は身に沁みて感じながら、しかもなほ彼の心ははれば

れとしなかつた。

誰にあつてもその人の目ざしは好奇心に輝き、何處に行つても噂の種となるのが絶間なく彼の心を苛々させた。朝から夕方迄會社の事務室で、上役の與へて呉れる仕事をして、退出時間を待ち佗びて家路に急ぐのであるが、その父母の家にさへ、一擧一動を疑ふ目ざしばかりが彼の一身に注がれるのであつた。自然と彼は行き所の無い放浪者の心持で、安氣な場所を求めては夜の更ける迄さまよひ歩く事が多くなつた。

如何いふものか何時の間にか、苦々しい屬性ばかり目に付くやうになつて、女性に對しては餘り好意を持たなくなつてしまつた滋郎は、曾てはその擧姿を職業的に精練されたものとして粹だとも思ひ美しいとも思つた藝者に對しても、此の頃では、無智無識の癖に、馬鹿々々しい人間ばかりを相手にして世を渡つてゐる結果、ひどく知つたかぶりで高慢で、納まりかへつてゐるのを見ると、そんな者を相手にしてゐる自分自身がなさけなくなるばかりで面白くなかつた。その癖さういふ者の出入する家の他に適當な場所を見出す事は出來なかつた。

彼は直に、何時か友達に誘はれた時偶然逢つた昔馴染の瑠璃歌のひよろ長い姿を思ひ出した。

夕方會社の退出時間に、まだ暮れ切らない空を些かはれがましく思ひながら、足は自然と築地

の方へ向いて、ゆつたりと日の沈んだ後のうす紅の天地に、何時しか冷え冷えとした海の風の通ひ初めた黄昏頃、とある露路の奥を突當つたささやかな家の二階に落着いた。

顔馴染の無い女中を相手に、面白くもない世間話の相槌をうつ馬鹿々々しさを思ひながら、瑠璃歌の他に誰でもいいから二三人賴んで置いて、所在なさをまぎらす盃に唇を觸れてゐるうちに、夜の空には星が瞬き初め、何處からともなくぽつんぽつんと、さもおつとめらしく倦怠さうな三味線が聞えて來た。

若い藝者が前後して入つて來て、見馴れない無口の客をまじまじと見ながら、何となく浮立たない、暗い影の漂ふやうな氣ぶつせいな座敷をもてあましてゐる樣子で、二人で何か符牒めいた事を云ひながら、背中を叩いたりうなづきあつたりして居るのを、滋郎は見るともなく見ながら、上等の着物を着て、綺麗な髮を結つて、電燈のあかるいお座敷に出る身の上を、さも位がついたやうに得意になつて、おすましで鼻を高くしてゐる育の悪い女達の幸福を、羨しくも面憎くも思つた。

「姐さん、こちらね、誰かに似てゐらつしやりあしなくつて。」

「似てゐらつしやるつて、誰にさ。」

女中は若い妓の方に答へながら改めて滋郎の顏を正面から見直した。
「音羽屋さんに似てらつしやるわ。」
もう一人の藝者が側からさし出て、くるくるした目をみはつた。
「アラさうぢやないわよ。高島屋さんだわ。」
最初のは自身の發見を侵害されたやうに、むきになつて自説を主張した。
「噓よ、音羽屋さんだわ。ねえ姐さん。」
「高島屋さんでせう、姐さん。」
「さうねえ、さういへば何處か音羽屋にも似てらつしやるし、高島屋にも似てらつしやるわ。」
女中は兩方から迫られるのを捌きながら、三人は一齊に滋郎の顏を見守つた。役者に似てゐるといふのがお客をよろこばせる唯一の途だと考へてゐる藝者に共通の智慧の無さが、その女達の無表情な顏にあらはれて居た。
「さうかい、そんないゝ男に似てるかね。」
滋郎は馬鹿々々しい話相手になりながら、餘りぞつとしない男がいゝ男に比べられる時に感じる面はゆさをまぎらす爲めに盃をふくんだ。

「エエ、似てるわ、ほんとに。」
「そつくりよ。」
冷やかすやうな調子で云つた。
「ただ此方(こちら)はずつと下等な模造品なんだらう。」
「よかつたな。」
よくはわけもわからないくせに、二人は甲走(かんばし)つた聲を揃へて笑つた。
「今晩は。」
とその時襖を靜にあけて手をついたのは瑠璃歌だつた。
「アラ誰(どなた)かと思つたら貴方だつたの。先日は。」
とさも馴々しく傍に來て寄添つた。
「今晩は。」
「姐さん、今晩は。」
若いのは今笑つたのも忘れて、けろりとすまして挨拶した。
「なんだか大變賑かね。」

「エエ、今ね、私はこちらは音羽屋さんに似てらつしやるつていふし、福ちやんは高島屋さんに似てるつて大騷ぎなのよ」

「アラこちらが役者に似てるつて。役者になんか似てやしないわ。」

瑠璃歌は少し酒氣のある卷舌で云ひながら、戯弄ふやうに滋郎の顏を下から覗き上げた。

「あなたはいゝ男つていふんぢやないわ。たゞもつともらしくて頼母しく見えるのよ。」

「左様かね。頼母しく見えるかい。」

「見えるわ。そのくせ西洋の女優をだましたりなんかして――賓はなかなか凄い人なのよ。」

と他の女達の方に話を向けた。

「へエエ、西洋の女優さん。――洒落てるわねえ。カチユシヤかはいやつてな事をいつて舞踏なんかしてらつしやつたの。」

「貴方洋行に行つたんですか。」

「エエ、まだ歸りたてのほやほやなの。しかもその金髮の婉麗なる女優が後から追かけて來たつていふ騷ぎなのよ。」

他の者に對して、自分丈が消息に通じてゐるのだと云はんばかりに得意だつた。

「嘘だよ、そんな事は。」

「嘘なもんですか。卑怯だわ。——私ちやんと皆さんから聞いて知つてるんですよ。」

と滋郎の口をふさいで置いて、いゝ機嫌で盃を干すと、倶樂部の連中にでも聞いたのだらう、ありもしない噂に紅白粉を塗つて、手もつけられない程濃厚な話にしてしやべり出した。

勿論それは新聞が書き立てた根據の無い材料に、その根據の無い三面記事を信じたばかりでなく、自分達には關係の無い他人の身の上の出來事を喜ぶ世の中の無責任な噂を、いやが上にも附加へたもので、そもそも倫敦の夜更けの芝居歸りの馴れ初めから、同棲の長き月日の間には、海を越えて來て大都を襲ふ敵國獨逸の飛行船が投げた爆彈の下に、死なばもろともと相抱いて眠つた事も幾夜かあつたなどと、瑠璃歌は活動寫眞の辯士の口吻で、それが趣味なのか屢々美文めいた形容を用ゐて、それ相當に雄辯に物語つた。

「ヘエ、君は文學藝者かい。まるで小說ぢやないか。」

滋郎は自分が主人公にされた話のあまりに綿密なのが愈々馬鹿々々しく、おしやべりの女の口もとを見て居るうちに、しまひには苛々して腹が立つて來た。彼は不愉快な顏をしながら、退屈をまぎらす爲めに冷くなつた酒を飲んで居た。

「オイオイ、いゝ加減な出たらめはよしてお酒でも飲まないか。」
「頂くわ、いくらでも。」
と輕くうけて苦も無く飲み干したけれど、話はそれで止まないで益々微細な描寫を始めたが、就中滋郞を驚かしたのは、何處から仕入れて來た話なのか、或は女が自分自身のおしやべりに調子づいて勝手にこしらへた話なのか、その倫敦の女優といふのは、滋郞との別離を悲しんで、一層男を殺して自分も死んでしまはうと、朝の紅茶に劇藥を投じて何も知らぬ男に飲ませ、自分も一杯を服したが、分量が少なかつたので二人とも生命だけは取り止めたといふ一節であつた。
「オオ怖い。」
「貴方、毒を飲まされた時は苦しかつたでせう。」
と若い藝者は眉をひそめて身震ひした。
「それでも命拾ひなすつたんだから矢張り運がいゝんだわ。」
「けれど西洋人て怖いのねえ。」
「だつてほんとに惚れた人なら無理は無いぢやありませんか。私だつて自分の好きな人が薄情な眞似をしたら殺してしまふわ。」

「さうねえ、異人さんだつて人情に變りはないのねえ。」
女達は沁々感じ入つたやうな口ぶりで、滋郎をそつちのけにして、物語の中の男女の行爲を非難したり同感したりした。
「瑠璃歌さん、お電話。」
「難有う。」
折柄襖の外で女中の呼ぶ聲に、女はまだしやべり足り無い話を中絶するのが殘り惜しさうにためらひながら立上つた。
「あの女は話がうまいね。嘘だと知つてゐても目に見るやうだよ。」
滋郎はひよろ長い後姿の消えて行くのを忌々しく見送りながら、今迄の話は嘘だといふ事を、知らない者に知らせ度かつた。
「そんなにかくさなくたつていゝぢやありませんか。」
唇のうすいのは憎々しく横目で睨んでたしなめた。滋郎は默つてうつむいて、冷い盃に手を觸れたが、ふと馬鹿々々しさに堪へられなくなつて欠伸をしながら立上つた。
「どうなすつたの。」

と若いのは様子が變だと思つたのか、二人とも一齊に立上つて滋郎の背中にくつついて來た。
「歸るんだよ。眠くなつちやつた。」
何もかも面倒臭くなつて、片隅の亂れ箱にたたんである外套と、その上の帽子をひつつかむと、二人を振りはらつて廊下に出た。
とたんに梯子段をとんとんと馳上つて來たのは瑠璃歌だつた。同い年位のづんぐり肥つた藝者の手をつかんで引張り上るやうにしながら、もう一人更に後からついて來た若いのをかへりみて、
「しいちやんもいらつしやいよ。構はないのよ。」
と醉拂つて差しい氣もなくなつたのが高調子で叫ぶのであつた。
「だつてなんだか變ぢやないの。」
「いいのよ、遠慮のいらない方なんだわ。」
と云ひながら、ひよろ長い半身が梯子口からせり上つた時、目の前に立つ滋郎に初めて氣がついて、段々の中途に足を止めて呆れた顏をして仰ぎ見た。
「姐さん、お歸りなんですつて。」

若いのは味方を得て氣が強くなつて、滋郎の後から引止めるやうに外套に縋りながら叫んだ。
「アラまあ、お歸りになるの。」
と瑠璃歌は吃驚した表情をした。
「アア歸るよ。」
「隨分だわ。私今お友だちを引張つて來たんぢやありませんか。是非貴方にお目にかからせてくれつて大變なのよ。」
と云ひながら肥つたのの手を引いたまま梯子段を上り切つて、滋郎の前に立ちふさがつて通せんぼをした。
「なには、此の方なの。」
「エエ左樣なの。貴方考へてゐたのと違ふ。」
瑠璃歌も、肥つたのも、もう一人のも、正面から滋郎をしげじげ見守つた。
「マア室内に入つてもう一度お坐んなさいよ。力丸さんもしいちやんも、あちらのお座敷なんですけど、是非貴方に逢はしてくれつていふんでしよ。」
「柘植さん、私瑠璃歌さんや、他のお客樣方からもいろいろ伺つて貴方のお話はよく知つてるん

ですよ。」
他の者も瑠璃歌と一緒になつて、滋郎の肩に手を掛けて、室の内に押入れようとした。
あんまり思ひもかけない事だつたので、如何していゝかわからないで、思はず知らず室の内迄連れ込まれたが、勝ほこつた女達の顏色とはしやいだ聲を張上るのを見ると、滋郎はむらむらと癪にさはつて、どうしても振りもぎつて歸らなくては男が立たない氣持がした。
「貴方お坐んなさいつたらお坐んなさいよう。」
瑠璃歌のひよろ長いのが更に爪立つて、後から兩肩に手を掛けて、無理にも坐らせようとした時、滋郎はいゝ機會を見つけたとばかり、むづとその手首をつかんで、女の蛇のやうな身體の重量を背中に感じながら、ほんとにはふり出す氣勢を示して、背負投の型を見せた。
「アレェ。」
「危ないわよう。」
當の瑠璃歌も他の者も、狼狽てて滋郎に噛りつき、既に高く疊を離れた女の長い足を後からしつかりと押へた者もあつた。
「アア怖かつた。危ないわ、貴方。」

手を放すと瑠璃歌は胸を撫で下しながら、滋郎を輕く突飛して置いて睨んだ。
「左様なら。いづれ又來るよ。」
あつけにとられてぽかんとして居る女達の間を擦りぬけて廊下を出ると、滋郎は威勢よく梯子段を下りて玄關に出た。
藝者達は爲方なく後について送つて來た。
「お近いうちにきつとよ。」
瑠璃歌は靴をはいてる後にひつついて、
「貴方は矢張り昔の通りだわ。歸るつていひ出すとどうしても歸つちまふのね。ほんとに強情張りよ。――憎らしい。」
と云ふかと思ふといやといふ程滋郎の背中を叩いた。
「柘植さん、此の次の時は私達もお目にかからして下さるんでせう。女役さんのお話が伺ひ度いわ。」
肥つたのは好奇心に胸の躍るやうな様子で、これも寄添ふ迄近々と來た。
「難有う、いづれ又。」

滋郎は捨ぜりふを殘して立上つた。

「左樣なら。」

「御機嫌よう。」

「左樣なら、お近いうちに。」

口々にいふ聲を後に聞いて、露路の奥から往來に出ると、水に近い町の上の廣々とした夜の空には、無數の星屑が、人の世には何のかゝはりも無く光り輝いて居た。彼はその高い高い大空を仰ぐと、あまりに馬鹿々々しい目にあつた自分の慘めさを一層強く感じて忌々しくなつた。ふと足下にころがつてゐた石つころを見出して、力任せに蹴飛ばしてやつた。罪科も無いまあるい石は、眞直ぐにけしとんで、河岸つぷちの柳の根つこに當つたが、はねかへつて横にそれると、暗い川水に落ちて沈んだ。

水面に起きた波紋の、見る間に遠くひろがつたのが音も無く消えて行くのを見てゐるうちに、夙に醉のさめてしまつてゐる滋郎の心には、どうする事も出來ない孤獨の寂寥が堪へ難く忍び込んで來るのであつた。彼は涙ぐんだ顏をして欠伸をした。

三

滋郎は遂に行く場所がなくなつてしまつた。他人の噂を酒の下物にしてゐる巷の狹い世界では、あらぬ噂を立てられた本人を知つてる者はもとより、未だ一度も顏を見た事も無いのさへ「アアあの女優さんの」といふ迷惑な前置きをして、何から何迄知つてる顏付をしてうなづくのであつた。

その後も二三度大勢の宴會で、面白くもない盃のやりとりをした事もあつたが、彼を見知つて居る藝者が居るか、でなくても一座の客のうるさい口から一寸でも女優云々の噂が出ると、忽ち滿座の視線を集め、殊に行儀の惡い藝者達は、物珍しさに目の色を變へて、滋郎を取卷いて動かなくなるのであつた。

「貴方そんな眞面目な顏をしてないで女優さんのお話でも伺ひませうか。」

「流石に柘植さんは色男だ。」

などと藝者も客もはやし立てる中で、面をあげる事も出來ないおもひをして、面白づくの世の中を憤りながら、機を見て座をはづす事ばかり考へた。

彼は自分自身甚だしく邪推深くなつた事を感じた。人の澤山集るところでは、誰も彼も意地惡く自分を見守つて居るのだと、絶えず疑ふ心を持つて居た。家にゐては父母召使ひの言葉の端々に迄心を煩はし、會社に在つては上役、同僚、給仕、小使の目ざし迄氣にかかり、彼は何時しか人を正視する事の出來ない癖さへつき初めた。

かうして全く行き所のなくなつた時、彼はふと倶樂部の二階の一室に、人の知らない安らかな居場所のあるのに氣がついた。

何時でも彌次馬の集つてゐる球戲場は勿論、碁將棊の競技室、新聞雜誌室などの出入の多いのとはうつてかはつて二階三階の小部屋は小人數の會合、相談事などの爲めに設けたもので、其處には殆んど人影を見る事も無いのであつた。殊に此の國の倶樂部の特色として、晝間は金と時間のありあまつてゐる人間や、高等遊民、高等幇間、高等無頼漢が集つて、世間を憚らず氣焰をあげて居るが、日が暮れて燈火がつくと、或者は妻子の待つ家庭に歸りを急ぎ、或者は更に仲間をかたらつて、何處か馴染の待合などに飽きもしないで、押出して行くので、夜に入つては、會員は殆んど姿を消して、閑暇になつた給仕が撞棒を執つて見やう見眞似に球を突いてゐる位のものであつた。

滋郎は一大發見をしたやうな滿足と安心に、此頃つひぞ知らなかつたのびのびした心持で、夕方會社の歸りには必ず倶樂部に立寄つて、なるべく人目に觸れないやうに、こそこそ二階に上つて、狹い一室に唯一人靜に夜を更す事になつた。外國にゐた間に興味を持つた社會學の參考書を繙く事もあり、肩の凝らない戀愛小說を無責任に濫讀する事もあり、時にはたゞ、誰人にも平和を亂される事なく、幾時間でも一人で居られるのが氣持がよくて、何をするともなくぼんやりと窓際の椅子に腰かけて、夏の夜の風に吹かれて居る事もあつた。明い食堂に出て人々と顏を合せるのを避ける爲めに、食事時には外出して、近所の小さい西洋料理屋で手輕な食事をして、又戾つて來るのであつたが、段々と此の一室の人の知らない生活に馴れて來るに從つて、いろいろと便利な工風も湧いて、會社から此處迄來る途中で、サンドウヰツチなどを買ひ込んで、それで濟ましてしまふ事もあり、時には懷中ウヰスキイを忍ばせて來て、ほろ醉になる事もあつた。いづれにしても、思ひもかけなかつた此の倶樂部の一室に、暫時ながらも安住の場所を見出したのであつた。

七月の或る夕暮、終日會社で繁雜な書類の取扱ひに汗を流した後で、自分自身の體になつた事を強く感じながら、丸の內の落日の頃の遙かに高い空の下を急いで、滋郎は間も無く倶樂部の入

口を入つた。
いつものやうに人目を避けて、直ぐにとつつきの階段から二階をこころざして中途まで上つた時、
「柘植さん。柘植さんぢやありませんか。」
と後から呼びかけられた。しまつたと思ひながらふりかへると、階段の下の電話室から、恰度今出て來たところらしい赤倉がニヤニヤ笑ひながら會釋した。
「いかがです其後は、階下には大分連中が集つて居ますがお出でになりませんか。」
「難有う、いづれ後程。――今一寸調べ物のひつかかりがあるので。」
出まかせを云つてしまつたのを少し後悔しながら、滋郎はもう階段を上り初めた。
「では後程。」
赤倉は云ひ殘して、球戯場の方へ立去つた。
「十五ゲエム。」
ふと給仕の聲が、やけに甲走つたのに續いて、靜に冴えた球の音が斷續して聞えたが、滋郎は二階に上り切ると、直ぐに此頃馴染んだ一室に閉籠つて、窓際の椅子に落ちついた。暮れ方の風

の吹くともなく吹いて來るその窓の下の廣い景色を見下しながら、何をしようとも思はたい、休息を喜ぶ心持で、彼は煙草に火をつけた。

消えるともなく消えてゆく紫の煙は、小一時間も斷續して、夏の夜の空にまぎれて行つた。

ふと何かしら戸に觸れる輕い物音に、うすぼんやりした平和を亂されてふりかへると、入口の戸を開けてづかづか入つて來たのは仲木だつた。

「驚きましたねえ、こんなとこにたつた一人で何してるんです。」

「此處はいゝ風が來るものですから。」

「風流過ぎますな、そいつは。――調べ物の方はもうお濟みですか。」

「エ。」

「何か調べ物をしてらつしやるつて、階下で赤倉が云つてましたが。」

「アアあれですか。あれはもう濟みました。」

又しても出まかせを云はなければならない機會になつたのを不愉快に思つて、吸ひ盡した巻煙草を窓の外の夜の中に叩きつけるやうに投げ捨てた。

「何しろあんまり久濶ですから是非一度お目にかかり度いと思つて居ましたんですが。」

仲木は持前のがらがらした調子で、
「調べ物といふと何か會社の方の仕事ですか。」
「エエ、まあそんなものです。」
滋郎は面倒臭くて爲方の無いのを外面にはあらはすまいとする世間並の努力をしながら、油切つて肥つた相手の顏を見かへした。
「如何です、實は今赤倉とも云つてたんですが、先日はあんまり失禮したから、今日はそのおわびかたがた御一緒に御飯でも頂戴して、ひとつ靜にお話でも伺はうかと思ふんですが。」
と切出した話の中途に、
「オイオイ、此處かい。」
と云ひながら先に立つて入つて來たのは御前で、後には赤倉がついて來た。
「どうだ君、今晩はつきあつてくれ給へ。」
御前は麥酒樽の體を運んで、手をつき出して握手を求めた。
滋郎は握り太のその手を受けて、
「ですが私はまだ用事もありますから。」

「用事。用事なんか明日にし給へ。」
御前は無雑作に押つかぶせながら、握手の手をその儘に、滋郎を引張つて廊下につれ出した。
「ゲエムはどうだつたい。」
「いけない、いけない。あんまり甘く見過ぎたもんだから、ラスト・ヘビイがきかなくなつちやつた。」
「なにしろ三番たてなげですからね。今晩はどうしてもゝ御前持だよ。」
仲木も男爵も赤倉も、滋郎をそつちのけにして球戯場の話をしはじめた爲め、かへつて逃口上を切出す機會がなくなつてしまつた。
「マアいゝさ、たまには勝たしてやらないと初心者は忽ち意氣阻喪して、撞棒を執らないといふやうな事になりかねないからね。」
「御尤も、ごもつとも。」
お互に駄洒落をいふのが社交界の人士の一資格だと思ひ込んでゐるらしく、あたりの天井や壁や廊下に反響する高聲でしやべり合つた。
「兎に角私は、近頃めきめき技倆をあげたでせう。」

「なあに君があがつたんぢやなくて御前の方が下つたんだ。」

階段を下り盡してもまだ無駄をたゝかはしながら、滋郎を眞中に圍んで押合ひながら玄關に出たが、その時恰度奥の方から忙しさうな足取りであらはれたいゝ年配の紳士が滋郎を認めると立止つて、

「柘植さん、一寸。」

と顎でしやくつて呼び止めた。

「何か御用ですか。」

「エエ、如何でせう、手間は取らせません。」

と馴々しく肩に手を置いて、

「一寸貴方に話し度い事があるんだが――しかしお連れがあるのかね。」

「イイエ連れといふわけでもないのです。」

滋郎はこれを幸に、若手の誘引を避けようと思つた。

「さう、それでは五分――まあ十分ばかりつきあつて下さい。」

「では一寸斷つて來ますから。」

既にもう門の外の往來に出て待つてゐる連中のところに小走りに戻ると、彼等は世間を憚らない高調子で、遊びに行く相談をしてゐるところであつた。
「どうしました、古いところにつかまりましたね。此方はうまい話で、これから何處かに行かうといふんですが。」
「勿論會計は御前持です。三度も續けて負けたこらしめの爲めにも。」
狹い往來をふさいで笑ひ合ふ。
「それは殘念ですね。實は私は沼口さんにつかまつたんです。さうと知つたら無理にも斷つて來るんでしたが。」
さも殘念さうに云つたものゝ、面白くもない馬鹿遊びのおつきあひで、又しても不愉快を購ふ迷惑を逃れるのを喜んだ。
「オヤオヤ、折角待つてたのに駄目か。此間の若い奴等が、是非又君を連れて來てくれつて、お安くない騷ぎなんだがね。」
「さうですか。さういふ事ならこつそり一人で出かけませう。今日はどうも爲方がないから失禮します。」

輕く頭を下げると、滋郎はさつさと入口の石段を上つた。
「ではね、行く先は喜代川だから、用事が濟んだら後から來てくれ給へ。」
男爵の濁つた聲の、無遠慮に呼びかけるのをそのまゝ聞き捨てゝ、滋郎は沼口の待つてゐる奥の一室に入つて行つた。
「イヤどうも飛んだお引止めして濟みません。」
と滋郎が椅子に掛けるのを待つて云つたが、
「どうです日本の倶樂部は變だね。夜になると誰も居なくなつてしまふぢやありませんか。」
と他所(よそ)に話を向けて葉卷の煙を吹いた。
「倶樂部の生活といふものが不必要なので、要するに家庭を樂しむので結構でせう。」
「家庭を樂しむ。なあにそんな事があるものか。燈火(あかり)がつくと倶樂部を引上げて、眞直ぐ家に歸るなら結構だが、これがみんな待合に行つてしまふんだから面白い。彼地(あちら)の倶樂部なんかはこんなものぢやない。」
實業界に於ける數へ切れない程の肩書をしよつてゐる活動家の沼口は、三四年前に歐米視察の旅に出てから、俄に英吉利風の紳士を以て任じる事になつた。麹町の高臺の家は宏大な亞米利加

風の洋式の建築に變つた。家庭に在る時も大概は洋裝で、洋式の禮儀作法を知らない訪問者は甚だしく主人の不機嫌を購ふ事になつた。日本の紳士の態度の紳士らしくないのを憤慨して、二言目には「英吉利では、英吉利では」と云ふので、口性ない俱樂部の連中は、密に彼に「アングロ」といふあだ名をつけて喜んでゐる。「アングロサクソン」から由來したのだが、その油光りに光る面貌にも勿論因緣をつけたものであらう。

「アラくろあんて番町さんの事なの。」

とそこいらのお酌が黃色い聲で甲走つてから、更に「黑餡」とも呼ばれる事になつた。何れにしても彼は彼が有する巨富と、日本第一流の實業家で、且つ英吉利風の紳士であるといふ自覺を、片時も忘れない幸福の中に忙しく暮してゐた。

暫時の間、現代の日本の非文明的な事を口を極めて罵つた後で、

「さて本題に入るが。」

と恰もすべて煙となつた葉卷を灰皿に捨てた。

「君は一體結婚はしないのですか。」

かういつて昵つと見詰める相手の顏を、意外の質問に驚かされた滋郞も正面から見守つた。

「どうしてです。」

「どうしてといつて、實は先日御宅へ伺つた時、大人のお話で、滋郎も無事に外國から歸つて來て、勤務先きも極つたが、まだ嫁が無いので、あれこれと心當りをすゝめて見ても、まだ欲しくないといつて氣乘りがしないと云ふ事で、果して結婚する氣が無いものとすれば、これは甚だ怪しからんと思つてね。」

沼口は冗談めかして、わざと誇張した言葉を用ゐて、しかも愛嬌笑を面上に浮べながら、半白の粗い髯に覆はれた厚い唇を甜めてしやべつた。

彼は先づ、明治の實業界の元老の一人である滋郎の父に意外な引立てをかうむつた事から話し出した。學校を卒業すると直ぐ、沼口は滋郎の父のところへ行つて、その部下の一人として奉公し度いと申込んだところが、滋郎の父は――沼口の言葉によれば――彼の才幹を惜んで、こんな男を安月給で抱へては國家社會の損失だから、もつと將來の爲めになる口を探してやらうと云つて、親しく口をきいて、此の國の大富豪に紹介した上、その頃殆んど比類の無い、ひとつ話になつた程の高給を、當時一介の書生だつた彼に、最初から與へるやうにはからつた。

「つまり我輩の今日あるは、一に大人の御厚情によるので。」

と沼口は思ひ切つて改まつた態度で云ひながら昂然とした。今では隠居してしまつたけれど、むかしの先輩なる滋郎の父よりも、殆んど比較にならない程の富を積んだ自分自身に、彼が満足してゐる事は明白だつた。

その父に荷ふ恩義に對しても、その子の爲めに些かなりとも盡し度い。卽ち此の場合に於ては、滋郎の結婚問題に關して眞面目に相談相手にならうといふのであつた。

「ほんとに君は結婚はしないつもりですか。」

と改めて詰るやうに訊いた。

「イイヱ私は獨身主義ではありません。」

滋郎は躊躇しずに答へた。

「しかし君は諸方からの緣談を、いやだいやだと云つて斷つてしまつたといふぢやありませんか。」

「方々からつて、たつた三口か四口なんです。」

「たつた三口か四口はよかつたハハハハ……」

何がをかしいのか沼口は全身を搖ぶつて笑つた。

滋郎が歸朝してからの數箇月の間に、一日も早く妻を持たせて身を固めさせようと、兩親の自分勝手な、しかし純粹の愛情は、周圍の人々の物好きと合して、三四人の候補者の寫眞を、滋郎の手に渡したのであつた。しかし滋郎は、その几帳面な性質として、結婚は必ず戀愛に基くべきものだといふ理想を持つてゐた。單に人間が或る時期に到達すると、男女とも互に異性の相手を慾求する情念を抱く時、その慾情を滿足させる爲めに、人々が寄つてたかつて配偶をきめる世上の慣習が、彼には甚だしく不潔な淺ましいものに思はれるのであつた。曾て一度も口をきいた事もなければ顏を見た事もない女を、一生涯抱いて寢なければならない妻として引取る事は、それ程簡單な事とは考へられず、人々が手輕に、見ず知らず同志で結婚するのを見ると、彼の心は他人事ならずびくびくした。「誰でもいいから持つてみると、存外惡いものではない」などと人のいふのを聞いてゐると、自分の心が納得しない限りは何事をも承知しない傾向の彼はそんな慣習的な出たらめをいふ人間を憎まないではゐられなくなるのであつた。

その上又、彼が新聞の三面記事の爲めに着せられた惡名は何處迄もたたつて、仲人口をきく人も、先方の親達も第一に掛念するのは、ありもしない噂の女主人公、倫敦の女優とのその後の關係がどうなつてゐるかといふ事であつた。興信所の手をかりて、滋郎の身邊の者の口から探り出

さうとする手段(てだて)を當の滋郎は極端に憎んだ。誰も彼も、彼とその女優との關係を過去に於ては疑ふ餘地の無いものとして考へ、ただ現在手が切れてゐるかを探索しようといふのであつた。さういふ不愉快な目にあふ事も、彼をして緣談を厭はしめた原因の主なものであつた。

けれども一方に於て、極めて人情脆い滋郎は、年老いた父母(ちゝはゝ)が自分の爲めに心配し、日夜その事ばかりを歎いてゐる樣子を見ると、たとへ自分はどんないやな目にあつても構はないから、兩親の望むがままにならうと思ふ心弱さもあるのであつた。彼にとつて父母は、時に屢々彼自身よりも尊く、いとしくなつかしく思はれた。

「私も、兩親の壽命も長い事は無いと思ひますから、いづれ良緣がありましたらと思つて居りますのですが。」

彼は語尾をあいまいにして、神妙らしく沼口に答へた。

「イヤ、さう來れば我輩も大に張合ひがある。」

と膝を乘出して、

「實は是非君のやうな人に娘を貰つて貰ひ度いといふ人がありましてね、それは私などが考へても此上も無いいゝ緣だと思ふのだが、これ丈は君の意志を尊重しないといけないのだから――ど

うです、ひとつその娘さんを見る丈は見る事にしては。又その上で西洋風に交際して見るといふやうなのも文明的で面白いでせうハヽヽヽ……」
沼口は、若い男と女とを夫婦にするといふ此の新しい消閑の慰樂を夢想して、心地よげに笑つたが、ふと太い眉を心配さうにひそめると、
「しかし君、例の女優とは全く手が切れてゐるのかね。」
聲も俄に低く落して訊いた。
滋郎は突然夢からさめた心地で、愕然として相手の顔を見た。
「イエなに現在關係さへなければ構はないさ。ただ將來面倒が起ると困るのでね。」
と沼口は話を續けようとしたが、滋郎の不機嫌に氣がつくと、
「ではいづれ我輩が萬事を都合するから、君はただ時間をさいてくれゝばいゝ。今日はわざと先方の名は云ひますまい。その方が樂しみが多いでせうハヽヽヽ……」
と愛嬌笑ひをして滋郎の肩を叩いた。
「どうもお引止めして濟みませんでした。一緒に食事でもし度いのだが、今夜はこれから一つお座敷があるのでね。ヤ、いづれ近いうちにゆつくりお目にかゝりませう。」

沼口は夥しい事務を敏活に處理してゆく彼が驚くべき才能を此の場合にもあらはして、至極く手輕に後日を約すと、直ぐに椅子を離れて立上つた。

戸外に出ると夏の夜は降るやうな星を大空に散らして、遠くの海の方から吹いて來る風に少しは冷々とし初めて、此のだゞつ廣い都の、人の出さかる頃であつた。晴い丸の內から銀座に出ると、夥しい燈火の中を泳ぐ人の群に、滋郎も忽ち捲き込まれた。

兩側の商店の裝飾窓の人目を引き易い色彩は、強烈な瓦斯、電燈の光を浴びて輝き、その商品に心を引かれて、浮ついた足を引摺る男女の下駄の音は、電車の軋る雜音と入りまじつて、それが夏の夜の人出には特殊のものに思はれる一種の音響を起し、遠くの空に響く迄騷然としてゐる。華美な浴衣を自慢さうに步く女の風俗の、近年殊に千態萬樣に亂れたのが、久しく故國を離れてゐた滋郎には何處か外國の町を步いて居るやうな氣持さへ起させた。擦れ違ひ、突當る人々の汗、白粉の漂ふ中に、時折強烈な安香水の香が鼻を突く。この混亂した音響と色彩の中に、靑々と茂つた柳の蔭に、ものゝみじめに並ぶ露店が滋郎の興味を引いた。彼は唯或る古道具屋の店頭の佛像火鉢茶道具錦繪いろ／＼の物の並んでゐる前に佇んで、どれといふ目的も無く、ひとつひとつ珍しく見てゐると、隣の蟲屋の蟲籠から、松蟲鈴蟲がちや／＼の入りまじつた聲が湧きかへる程

賑かに聞えるのであつた。

ふと彼の横手に、同じ古道具の店に目を引かれてゐるらしい女の姿が立止つた。ふりかへつて見るのは禮を失しると思ひながらも、何となく向ふも自分に視線を向けてゐるやうに感じ、默つて居るのも落つかない氣持がして、どんな女か確め度いとは思ひながらそれを思ひ捨てゝ歩き出した。

「貴方。」

うしろから追ひ縋るやうにちひさな聲で呼ばれたやうに思つて、思はず足を止めた時、

「柘植さんぢやありませんか。」

と馳け寄つて覗き込むやうにふり仰いだ若い女の顏を、驚いて見返つた滋郎も忘れてはゐなかつた。

「小志津さんですね。」

「矢張り貴方でしたわ、よく似た方だと思ひましたけれど、若しか人違ひだつたら如何しようと思つて。」

目の大きな人で、少し權高に見える程整つた顏立ちだが、笑ふと目尻の皺が深く、その大きな

瞳が消えてしまふ特徴が、數年前の、もつと若々しかつた面影を殘して、滋郎に親しさを感じさせた。

「柘植さん、私此間お芝居で瑠璃歌さんに逢つたんですよ。その時いろ／＼貴方のお噂を伺ひましたの。」

鑿然とした丸髷に結つたのが、目を細くして笑ふのを、滋郎は物珍しく見守つたが、又してもとんだ噂を信じてゐるらしい女の微笑を、邪推深く心に止める事を免れなかつた。

「瑠璃歌つて人も隨分變りましたね。私も一寸思ひ出せなかつたが、先方は全く忘れてしまつて、さうと知つた時は驚いてゐましたよ。」

「貴方はよくあの人の事をアスパラガス、アスパラガスつておつしやつたぢやありませんか。」

二人は並んで歩きながら、どつちが先に出るともなく大通りの雜沓を避けて暗い橫町に入つた。

「ですけれどね、貴方も隨分お變りになつたわ。」

さうかしら。貴女こそ變つたと思ふけれど。」

「私ですか。そんなに年をとりましたかしら。」

「第一丸髷になつてしまつたぢやありませんか。」

「非道いわ、柘植さん。そんなんぢやないんですよ。」

輕い冗談を云つてゐるうちに、わざとらしい行儀は消えてしまつて、昔馴染の親しさが二人の心を輕くした。

中形の浴衣の上にうす羽織を着た女の服装や、少し大き過る丸髷から見ても、どういふ身の上であるか滋郎には大凡想像がついた。彼はかうして主ある人と並んで歩いてゐながら、たとへお互にやましい事は無いにしても、どうしても人目を避ける心持を持つてゐた。

流石に歩くと汗ばんだが、間もなく二人は河岸の荷揚場の暗く動かない水に臨んで、廣い星空の下に雜沓を遠く離れた時、熱した肌に觸れる涼しさに思はず知らず立止つた。

「貴女はどつちに行くの。」

「私ですか、私一寸買物に出たとこなの。――貴方は。」

「私は倶樂部の歸りだが、何處かで御飯を喰べようかと思つてゐたのです。」

「アラまだ御飯前なんですか。」

「エエ隨分お腹が減つちやつた。貴女もつきあひませんか。」

滋郎は別段本氣で誘ふ氣もなかつたが、何時迄も河岸に立つてもゐられないので、目的もなく

歩き出しながら訊いた。

「だつて私、もう濟んだんですもの。」

女は遠慮して云ひながら、

「けれどもお話は伺ひ度いわ。」

と習慣的に手に入つた嬌態をして滋郎に寄添つた。

「それぢやあ何處かに行きませうか。けれども旦那に叱られやしませんか。」

「いやな柘植さん。」

以前にかへつて馴々しく男の背中をぶつた。

滋郎は久しぶりでほんとの友だちに邂りあつた氣がして、珍しく素直な心持を抱きながら、銀座のうら通りを連れ立つて歩いた。相手の女が女なので、うつかりした場所に連れ込んで、うるさい人目に疑はれるのを怖れ、彼はわざと通りがゝりのちいつぽけな西洋料理屋に入つた。

折曲つた階段を二階に上ると、うす汚ない食堂に三つ四つしかない小卓の中の一つに、男ばかり三人の客が麥酒の醉に高くなつた聲で談笑してゐた。二人はその横を通り拔けて、奥の一隅に卓に向きあつて腰かけて、何故ともなく顔を見合つて笑つた。

「柘植さん、いくら貴方でも喜美代さんの事は忘れないでしよ。」

小志津は小刀(ナイフ)を置いた手に取上げた麦酒に型ばかり口をつけて云つた。

「喜美代さん、喜美代さんてあの木彫(きぼり)の人形のやうな顔してた人かしら。」

「非道い方。」

女は思ひ切つて嬌態(しな)をして滋郎を睨んだ。

「可哀さうに、貴方を想(おも)ひ死(じに)に死んぢやつたわ。」

「嘘云つてら。」

「そりやあほんとに涙の出る話よ。」

と小志津は又麦酒に唇を濡らして、

「なんぼ貴方だつて彼の人の事丈は忘れちや済まないわ。」

少し紅くなつた顔を斜めにして云つた。

「どうして。」

「どうしてつて随分だわ。」

女のいふところによると、小志津瑠璃歌などと同い年(おないどし)位のお酌上り(しやくあがり)の若手の一人だつた喜美代

は、滋郎が外國へ旅立つた年の秋肺を病んで、湘南の病院で死んだが、その病床を屢々訪れた小志津にむかつて、滋郎の事を口にしてはままならぬ世をはかなんだといふのである。

「ほんとに彼の時ばかりは私も涙がこぼれたわ。」

女は眉を寄せて、さも感じたらしい顏をした。

喜美代といつたその女は小志津の大の仲よしで、大概の時二人は一緒にやつて來たが、小志津のはきはきしたのとは反對に、陰氣な程内氣な性質で、笑ふ時はきつと伏目になる癖を滋郎は心に止めて忘れなかつた。物堅い家の風で、薩摩飛白の着物に小倉の袴をはいて居た頃の滋郎のだつ子らしい樣子が、地位や金力を自慢にする傾きの多いお客ばかり相手にしてゐる連中には物珍しく、その頃有名だつた小說の題から思ひついて「坊ちやん」といふあだ名をつけ、お互に學校友たちのやうな態度で騷ぎあつたのである。

「ほんとにお目にかかつて嬉しいわ。」

麥酒の醉に目のふちの上氣したのが、愈々昔馴染のなつかしい心持に驅られて、一人でいろいろと追懷を語り出した。

「喜美代さんも私も若かつたでせう。二人とも貴方に岡惚れしてゐながら、お互に遠慮してどう

にもならなくなつたんだわ。」

「冗談云つてら。坊ちやん坊ちやんて人を馬鹿にしてゐたぢやないか。」

「さうさう、貴方が彼地にいらつしやる時、送別會だつて喜美代さんと三人で御飯を喰べに行つた事があるでせう。貴方がお歸りになつてから、もう五六年お目にはかかれないんだわねつて、二人で顏を見合せると、兩方とも涙がいつぱい溜まつちまつて、それがをかしいつて抱きあつて笑つたんですよ。あれがほんとに泣き笑ひつていふのね。」

次から次と話す話の何處迄がほんとなのかは解らないが、滋郎は心置きの無い話ぶりと、昔なつかしい人の情から、額に汗の溢れる迄紅くなつた女の顏を見守りながら、こころよく酒杯を擧げた。

しまひには女は訊きもしないのに身の上話を始め、さる人に圍はれてゐる氣儘の出來ない身を歎いた。

「そりやあ不思議なんですよ。いつぺん藝者なんかした者はどうしても駄目なんですねえ。夕方になると寂しくつて寂しくつて爲樣がなく、出てゐる頃なら今時分はお座敷に行くんだと思ふと、あんなに嫌だつた藝者に又なり度くなるんですよ。」

「だつて夕方になると旦那が來るでせう。」
「知らないわ、柘植さん。」
女は手を擧げてぶつ眞似をしながら、
「若しか又私が出たら、貴方逢つて下さる。――今度こそは貴方を口說いちまふわ。」
と大きな瞳に微笑を湛へてからかつた。
「そんな事をいふと此方から口說きますよ。」
「だけど、柘植さんももう昔の坊ちやんぢやなくつて、凄いんですつてねえ、瑠璃歌さんが云つてたわ。彼地の女優さんと大變だつたんですつてね。――いやんなつちまふわ。」
小志津は持前の齒切れのいゝ言葉づかひで、うつちやるやうに云ひながら睨んだ。
「瑠璃歌つて奴は出たらめな奴で、あんな事ばかり云つてるんですよ。」
「だつて彼の人新聞の切抜を持つてましたよ。お客様に頂いたんですつて。」
滋郎は手にした酒杯を落すばかり、冷水をぶつかけられたやうに興が覺めて、目の前の女の存在さへ面白くなくなつた。以前から話上手の話好きだつた小志津が、瑠璃歌から聞いて來た噂を、當の滋郎について確めようとする好奇心にみちた顏つきを忌々しく思ひながら、爲方無しに麥酒

を飲んだ。
食事が濟んで、冷い紅茶を飲みながら暫時時間を消した後で、滋郎は女を促して立上つた。戸外に出ると夏の夜も漸く冷々と露めいて來た。
「貴方の家まで送りませうか。」
「後生だからよして頂戴。」
「成程、旦那のお目にでも觸れては大變ですね。」
「いやな方。」
女は滋郎を突飛ばした。それをきつかけに、
「それぢやあ左樣なら。とんだおつきあひを願つて濟みませんでした。」
と彼は帽子をとつた。
「ほんとにお歸りになるの。」
女は云ひながら殘り惜さうな風をして見せた。
「だつて爲方が無いぢやありませんか。」
「左樣ならにしなくちやいけないのかしら。」

「左樣なら。」
滋郎はもう一度挨拶すると思ひ切つて歩き出した。
「柘植さん一寸。」
うしろから追かけて來て、
「あのねえ、貴方もう一度逢つて下さらない。一緒に喜美代さんのお墓詣がし度いわ。」
小志津は近々と滋郎の胸に寄添つて別れともなかつた。
「ではいづれ、貴女の都合のいゝ時手紙でゞも電話でゞも知らして下さい。」
「きつとですか。」
「エエきつと。」
「それぢやあ左樣なら。」
「左樣なら。」
滋郎は大通りの方へ歩き出して、曲り角で一度ふりかへつたが、その時恰度女も後をふりむいて、立止つて輕く頭を下げた。
滋郎は何時かしら、何といつてはつきりしない感慨に身を任せてゐた。お座敷の洒落輕口に等

しい程根も葉も無い藝者の岡惚れ騷ぎを、話上手の小志津の口から話されたので、愈々あてにはならないとは思ひながらも、流石に惡い氣はしなかつた。ふつくりと盛上つた額に長く引く地藏眉、極立つた二重まぶた、元來賑かさうな造作の癖に、いかにも陰氣に沈んで見えた喜美代の伏目になつて笑ふ時、深い靨の目立つた事などが、つい幾年か忘れてゐたのに、まざ／＼と思ひ出されるのであつた。

何處かに冴々しない陰影の漂つてゐた內氣な人が、胸の病で死んでゆく時の、やつれた哀れさも想はれて、此頃殊に孤獨を感じてゐる滋郎は淚ぐましい心持にさへなつたが、大通りへ出ると忽ち押合ふ人の波に、靜な追憶は亂されて、彼もあかるい燈火の中を、夜が更けても益々多くなるやうに思はれる群集に追かけられるやうに狼狽しく步き出した。

恰度四辻の交叉點迄來て、山の手の自分の家の方向へ行く電車を待つてゐると、ふと向側の交番所の前に黑山のやうな人だかりのしてゐるのに氣が付いた。彼は彌次馬の氣持になつて、人だかりの頭越しに覗くと、眞中には若い外國の女が一人泣き出しさうな顏をして立つてゐて、時々上ずつた高調子でしやべるのを、相手の若い巡査は困り切つて口もきけず、取卷いてゐる彌次馬は、わけもわからずに冷かしたり笑つたりして居るのであつた。海外の旅に出て、言葉の不自由

な爲めには泣き度い思ひもした滋郎は、此のうす汚なく黄色い下素な顔付の彌次馬のおもひやりのない態度を憎むと共に、言葉が通じないで困つて居る女に同情して、いきなり人を押分けて前に出た。

すると女は賴りになる人間だと思つたらしく、いきなり彼の方に向いて早口でしやべり出したが、それが、露語に違ひ無いと思はれる丈で、滋郎には一切了解出來なかつた。

「貴方は英語は話しませんか。」

彼はかう英語で訊いて見たが女には通じなかつた。

「それでは佛語(ふつご)は。」

「オオ、話します。話しますとも。」

女は躍り上つて喜んで滋郎よりももつと拙い佛蘭西語を頭を捻(ひね)つて考へ考へ話し出した。

年配は四十近くらしいうす汚い此の露西亞の女は畫家だと云つた。革命騷ぎで紛亂して居る故國を捨てゝ、たつた一人で日本へやつて來たが、曾て莫斯科(モスコウ)で親しくした日本の美術家を一人知つてゐて、それを心賴りにして來たのだけれど、此の廣い東京の何處に住んで居るのか一切知らないのであつた。露西亞人らしい呑氣(のんき)さを物珍しく思ひながら、滋郎はその畫家の名を訊ねたが、

未だ一度も聞いた事の無い名前だつた。巡査も彌次馬も、勿論さういふ畫家の存在を知らなかつた。自分の身の處置に困つて片言でしやべり立てる女の相手になつて、彌次馬の注視の的になつてゐるのが、漸く苦痛になつて來た。つまらない通辯なんかしなければよかつたと悔みながら、一刻も早く此の役目から逃れようと思つた。

「兎に角今晩は旅館へ行つて、明日ゆつくり探したらいゝでせう。」

「でも旅館は出費でせう。私は少しつきりお金を持つてゐないのです。」

女は自分は、これから描く繪を賣るより外に金を得る見込みの無い身の上たから、當分はその舊知の日本人の畫家の厄介になるつもりでゐたのださうだ。

「明日になつたら私も盡力して、その畫家を探し出しますから、今夜は旅館にお泊りなさい。安い家を教へてあげませう。」

滋郎は不安心がる女を促して、事の次第を巡査に告げた上、まだ後からついて來る群集を忌々しく思ひながら、さつさと歩き出した。

簡短な服裝をして男のやうな飾りの無い帽子をかぶつた大女は、ちひさな手鞄の外には何も持つてゐなかつた。今の事を繰返してくど／＼云つてるのに取合ふのも面倒になつて、滋郎はろく

ろく返事もしずに急いだ。直ぐに彌次馬の群集に離れたが、通りすがりの往來の人は何れも珍しさうに、二人を無遠慮にかへりみて過ぎた。

暗い丸の内に入つて日比谷に出ると、その公園の角の安旅館に彼は露西亞の女を連れて行つた。

「では此の家の支配人に萬事頼んで置きますから、明日は大丈夫その畫家を探し出す事が出來ませう。」

と心配さうな顔をしてゐる女に懇々云ひ置いた上、萬一の時は力にならうと云つて、名刺を渡して別れた。

「難有う、々々々。」

感激した聲で、大女は滿身の力をこめて握手をした。

戸外に出ると、更け渡つた大空の星は一層數を増して、冴々と光り輝いてゐた。彼はその蹈りの無い空の景色を仰いで、思ひもかけない事の多かつた一日の終りに、又しても自分一人疲れて歸る家路の寂しさを思つた。

四

翌日は殊に蒸暑い日で、流れる汗に惱みながら、いつもの通り終日會社で雜務に追はれた後、彼は又倶樂部に出かけた。

入口に入(はい)ると受附の給仕は二人ともさゝやきあつて彼の後姿を見送つた。直に二階の一室に上らうとは思ひながら、あまり乾いた咽喉を麥酒で濡らさうと酒場(バア)に行くと、球戲場(たまば)の一隅の壁に向つて、大勢の會員が口々に何か云ひながら群つてゐた。彼が入つて行くと、一齊にふりかへつた人々の顏には人の惡い笑が一樣に浮んでゐた。

「柘植さん、昨晩はお樂しみ。」

「えらいところを目つかりましたなあ。」

と二三人わけのわからない挨拶をするのをその儘聞き流して前に出ると、目の前の壁には一葉の夕刊新聞が貼つてあつて、大きな活字で「廢嫡問題の主人公、柘植氏子息の戀」と題した記事を二段にわたつて載せてゐた。言葉も出ない程吃驚した彼は努めて平靜を裝ひながら、嘲笑の只中に立つてそれを讀んだ。

彼は最初、昨夜小志津と連れ立つて歩いたのを、人の惡い新聞屋にでも見つけられて、あらぬ噂を立てられたのだらうと、相手の女の身の上を氣づかつたが、事實は意外にも全く違つてゐた。

その記事の概略は、昨夜銀座の夜涼に、滋郎はうら若い外國の婦人と手を組合つて歩いてゐたが、それが先頃新聞紙上で噂の高かつた倫敦の女優で、人の噂の遠々しくなつた此頃、豫ての手筈通り密かに上海から後を追つて來たのである。靑々と柳の茂つた銀座の夜の人込みに、記者はふと二人の姿を發見して、誰知る者もあるまいと思ひながら日比谷の方へ喃々と語り合つてゆく鴛鴦の後をつけて行くと、二人は前後に氣を配りながら、或る旅館の入口を入つて、三階の一室に身をかくすと、直に內から錠を下した。後はどうなつたか知らないが、近き將來に於て栃植家には、過般本紙が報道した通り廢嫡問題が起るであらうと挑發的な書きぶりで結んであつた。

「栃植さん、とう〳〵かくし切れなくなりましたね。」

仲木と赤倉は彼に近づいて面白さうに笑ひながら聲をかけた。何がをかしいのかあたりの人は一齊に聲をあげて笑つた。

滋郎は憤然として人々の聲を見返したが、何か云はうと思つた唇は痙攣して震へた。彼は手近の人々を突飛ばすやうに押のけると、二度と再び此の俱樂部には足を踏み入れまいと思ひながら、勢ひよく出口に急いだ。

「栃植さん、栃植さん。」

後から誰か用事あり氣に呼びかけるのを聞き流して玄關に出ると、出あひ頭に入つて來たのは沼口だつた。滋郎は帽子をとつて挨拶したが、先方は苦り切つた顏をして、手に持つてゐる新聞を意味あり氣にふりながら物も言はずに通り過ぎた。

往來に出ると何處といふあてもなく、急いで歩いたが、何時の間にか彼は、いつぞやも佇んだ橋の上に胸の動悸の止まない、憤に唇の乾いた自分を見出した。

夕暮はいつしかしら夏の日の燒けついた町の片かげからはびこつて、黄昏かゝる都には限りも無い燈火がきらめき初めた。ひとしきりうす紅に夕燒の名殘を止めた晴れ切つた廣い空も次第に暗くなると、足下の川水はとつぷり暮れて棹してゆく舟の苫から物を煮る煙が立上り、遠くの方には篝火を焚くのも見えた。

彼は呆然として佇んで嘆息した。仰げば宵の明星は高く高く輝き、細かい星屑は今日も亦ゆく水に影をうつしてきらめき初めた。

彼はその時ゆく處も無い自分の身に限りなくなつかしく思はれるものは、此の夏の夜の晴れた星空と足下によどみながら流れて行く暗い水の外には何も無いと思ふ哀感に、いつかしら心弱く目には涙さへ浮んで來た。（大正八年一月十九日）

日曜

お斷り――東京に生れ東京で育つた作者にとつて、けつたいな上方言葉をば綴ることは不可能である。此の小說の中の會話は自分があゝでもない、かうでもないと無駄な骨折をして綴つたのを、友人梶原可吉氏に賴んで訂正して貰つたものである。梶原氏は元來上方の生れではあるが大阪の人では無い。殊に同氏の言葉遣といへば、友だち仲間で評判の變てこなもので、生れた土地の神戶、ながらく學生々活をして居た東京、明治大正の紳士學生の言葉を極端に卑しくした九州、暫く行つて居た滿洲、各地の言葉が入りまじり、ごつたがへした言葉を、氏は氏獨特の內證話の出來ない高調子で、之は又意外にも澄みわたつたいゝ聲で話すのである。從つて氏が訂正してくれたからといつて、決して安心の出來るわけでは無いが、茲に特にお斷りするのは、氏が極めて繁忙なる身にもかゝはらず、こゝろよく此の面倒な仕事を引受けてくれた厚意に對し、一言感謝の意を述べ度い爲めである。元來作物中の會話などは、必ずしも實際世間に行はれるものと同一なる事を要さない。ただ餘りに甚だしい間違ひを避け度いと思ふ自分の希望から、強ひて梶原氏を煩はしたまでの事である。その心得で、梶原氏が、よりよく訂正しようとする時も、自分はかへつて間違つた儘の方が、自分の描かうと欲したところを現す爲めに、力強いと信じた場合には、頑固に抗辯して、間違つたままにして置いた。卽ち訂正者は梶原氏であるが、なほ誤れる上方言葉の使用に對する責任者は、矢張り自分に外ならぬことを乍末申し添へて置き度いのである。(作者)

日曜

正太郎にとつては、寢坊の出來るといふ事も、日曜を待兼る心持の大部分を占めて居た。彼は自分の肉體で溫めた親みの深い蒲團の中で、一週間のうち六日迄眠い思ひをして早起をして、朝から日の暮迄帳面をつけて居なければならない銀行へ、行かないでもいゝ一日を、無上に懷しんだ。

朝早くから雨戶をあける女中のかけて行つた火鉢の上の鐵瓶は、無闇に沸騰して、白い湯氣を立昇らせて居たが、彼が起出たのは十一時近かつた。窓の障子にはかんかん日が當つて、其處いらの屋根や物干には、雀が澤山囀つてゐた。

楊子を銜へたまま、錢湯に出かけようと、梯子段を下りて行くと、

「マア旦那さん、ようやすみやはりましてんなあ。」

と暗い帳場から、下宿の女房さんが聲をかけた。

「ウムお早う。」

楊子を銜へたままの口で、うつかり返事をしてしまつたので、いつぱい溜つてゐた齒磨粉と融合つた唾が、たら／＼と胸に溢れた。

彼は狼狽てて下駄をつつかけて、往來に出ると、なんだか馬鹿にされたやうな癪に障つた氣がして、ぺつぺつと唾をした。朝日の照りわたつた土の上に、齒磨粉はべつとり落ちて白々と散つた。

「彼奴はなんだつてあんな厭な聲を出すんだらう。」

胸に溢れた齒磨粉を忌々しく思ひながら、正太郎は女房さんを憎んだ。

湯屋は中途半端な時間なので、存外すいてゐた。何時もの事だけれど、番臺に坐つて居る娘の視線が、妙に氣になつて氣持が惡かつたが、わざと思ひ切りよく素裸になつて、

「俺は人前で裸體になるのは嫌ひなんだ。」

と腹の中では考へたけれど、如何にも爲方がなかつた。人一倍立派な體格が、斯ういふ時にはかへつて羞かしい氣がするので、それをまぎらす爲めに、亂暴な程威勢よく湯槽の中に飛び込んだ。

「チョツ、溫いなあ。」
とロに出して言はうとした時、
「若旦那、大分ごゆつくりですな。」
と湯氣の中から聲を掛けられた。同宿の中村といふ保險會社の勸誘員で、正太郎には将棋敵だつた。
「およしなさいよ、若旦那々々つて、みつともないぢやありませんか。」
正太郎は他の知らない顏を氣にしながら云つた。
「アアア、此奴が居ちやア湯は溫い筈だ。」
と同時に不平に思つたのである。
「どうです、昨夜はお歸りが遲かつたやうだが、南ですか北ですか。」
「イイエ、そんなんぢやありませんよ、寄席に行つたんです。」
「へエ、誰と。」
「一人で。」
「さては若旦那、近頃金廻りが惡いと見えるなハハハハハ。」

中村は四十男によく見る、脂肪のありあまつた、だぶだぶした身體を、半分湯の外に出して、たるみの來て居る半平腹を、ぺたぺた拍子を取つて叩いて居る。

「いけないなア、若旦那々々つて此頃は下宿の女中迄戯弄ぢやありませんか。」

「だつて爲方がありませんや。若旦那に違ひないんだ。」

中村はしつつこく笑ひながら、お腹を叩くのを止めない。

「勝手にしやがれ。」

と思ひながら正太郎は默した。

つい十日ばかり前に、以前東京の彼の家の用人をしてゐた老人で、今は神戸の商館番頭をして居る息子に引取られて氣樂に暮して居るのが、正太郎が大阪に寄越されたと聞き付けて尋ねて來た。下宿屋の汚い濕つぽい疊に額を擦りつけて、四角張つた挨拶をし、二言目には若旦那々々といふのを、隣室の中村に聞かれてしまつた。

「何分若旦那様も御修業中の事でもあり、旅先の御身體だから、間違の無いやうに、萬事氣をつけて頂き度い。」

爺さんは、昔は身分は低くても士分だつたといふのを自慢にするだけ鯱こばつて、歸り際には

下宿の女房さんをつかまへて、正太郎の身の周圍の事を懇々と賴んで行つた。それ以來中村は、若旦那々々々と云つて、正太郎を厭がらせた。

「如何です若旦那、御修業中の事でもあり、ひとつお手柔かに負かしてあげませうかね。」

などと將棋盤を持込んで來る。

「オツトそつちの王樣は旅先の御身體か。」

兎角駒よりも口の達者な將棋をさしながら冷かした。

下宿の待遇の一變したのは事實だつた。長い間父親の持つて步いた古ぼけた大鞄と、スウト・ケエスの他には何も荷物の無い、身輕な正太郎を、下宿ではそれ迄あまり買つてゐなかつた。三月前に下宿してから、唯の一度も呼鈴を鳴らした事も無く、手を叩いた事も無く、小言も云はなければ挨拶もしない勝の、むつつりした取付場の無い、變な男としか考へて居なかつた。何處へ行くのか、夜遲く歸つて來る事の多いのは、戶を閉める事の出來ない女中の不平に思ふところだつたが、一週間のうち半分以上は、他所で御飯を喰べて來るのは、女房さんの歡迎するところであつた。何れにしても、居るのか居ないのかわからない程沒交涉な、風變りの御客だつたのが、律義なおやぢの芝居がかりに平つくばつた樣子を見てからは、何となく尊敬の念を誘はれて來た

のである。今迄のやうに、うつちやらかして置いて呉れないのが、彼の心を亂し、正太郎をして、下宿を一層面白くなく思はせる事だとは、誰も氣が付かなかつた。
「アア溫まつた、溫まつた。」
中村は、今度は首迄どつぷり浸つて居たが、大きな身體中から雫をしたたらして立上つた。
「若旦那、お先に失禮。」
あたりの人が皆正太郎を見守つた程大きな聲で云ひながら、湯槽の外に出て、彼が常例としてやる、頭から冷水をザアザアかぶつてから、又落ついて、ゆるゆると身體を拭いた。
「お先に。」
もう一度繰返して、やうやく上つた。
その時正太郎は流場で、體中が眞赤になる程手荒くこすりながら、頭から足の尖迄石鹼だらけになつて居た。
湯から上つて、角の煙草屋で朝日を買つて、紙くさい安煙草の煙をふかしながら、下宿に歸つた。
吸ひ盡した煙草を火鉢の中の灰に埋めて、空腹を感じながらお膳を待つて居るところへ、女中

が廊下を仰山にばたつかせながらやつて來て、火鉢の向ふに行儀惡く坐りながらきいた。

「旦那さん、お家内はんがな、今朝三田さんは御飯喰べてだつか如何か聞いといでと、こない云うてまんね。」

「喰べないよ。」

正太郎は癪に障つた顏をして答へた。

「アア左様だつか。」

女中は立上ると、くるりと後を向いて、大きなお尻を遠慮も無く、上下左右にゆすぶりながら馳けて行つた。

正太郎は平生から嫌ひな「アア左様か」が、此の時は一層適切に響いたので、一人でむつとして、

「馬鹿ッ。」

と口に出して云つたが、それは自分自身を罵つた言葉のやうにも聞えた。

一體全體、いくら時間が遲いからつて、默つて居てもお膳は持つて來べきものなのに、いきなり喰べるか喰べないかと、不人情に聞かれては、誰だつて喰べるとは云へやあしない。大體やり口が贅六だ。癪に障つて、しきりに煙草を煙にした。

正太郎は、毎日銀行へ通勤するので、晝飯は一切下宿では喰べない勘定にして、日曜も例外にはしなかつた。一體に飲食物に對して意地の汚ない性質なので、日曜の晝を樂しみにして、彼方彼方と、うまい物屋をあさり歩いた。勿論安い月給と、東京の母が、父には内證といふ名義で、その實は父親の命令で送つて吳れる若干の小遣が何時も足りない勝だから、主として安直な家を專一にしたが、高い、安い、うまい、まづいよりも、もつと本質的に彼にとつて大切なことは、その家の待遇の善惡であつた。

彼は性來、身の周圍の事に人手を借りるのが嫌ひで、殊にその世話を燒いてくれる人間が、氣に喰はない時は、如何にも斯うにも我慢が出來なかつた。慾張りで、口喧しくて不親切な下宿の女房さんの存在の爲めに、一週間と居つかずに出替る女中のお給仕にも閉口したが、それよりも、女中の手の足りない時に、女房さんが自分でお膳を運んで來て、これは又極端に空々しいお世辭を正面から浴せながら、お盆を持つて目の前に控へて居られると、たださへ不味い濕つ氣の無い御飯は、愈々咽喉を通らなくなるのである。或時彼は思ひ切つて、お給仕は不用だから、御飯櫃を其處に置いて行つて吳れと、眞面目な顏をして、女房さんに頼んだ。

「マア旦那さんのおつしやる事。私がこないな婆でなかつたら、どないしやはりまんねやろ。」

と云ひながら、お盆を持つたまま、つつと寄つて、

「愉らし。」

と聲を甲走らせたと思ふと、正太郎の背中をいやつて程叩いた。

不意を喰つて正太郎は、口の中に入れた飯粒を、不覺にも膝の上にぼろぼろとこぼした。

彼は非道い屈辱を感じながら、殘つたやつは茶漬にして、やうやく箸を置いたが、片手に膳を持ち、片手で御飯櫃を抱へた四十女の女房さんの、肥つた姿が部屋の外に消えると同時に、如何したのか正太郎の、人並はづれて大きな目の中に、涙がいつぱい浮んで來た。彼は父母の家に遠い事を、その時沁々感じたのである。

それ以來、彼は下宿で御飯を喰べる事が苦痛になつた。機械のやうに休息なく、變化の無い事務室の一日をしまつて退出するのは、待遠しい事には違ひなかつたが、これから下宿に歸つて、彼の女房さんのお給仕で飯を喰ふのかと思ふと、彼の足は重くなつた。重い足を引擦つて、下宿の方へ志しながら、ふと氣が變つては、馴染も無い料理屋に上り込んで、あんまり強くもない酒を飲む事が多くなつた。出勤先の船場を中心にして、附近の飲食店は、名のある料理屋から、うまい物屋、川魚、蠣船、下つては天ぷら屋、蕎麥屋、壽司屋、關東だき迄、彼は順々に訪れた。

その中で正太郎が一番氣に入つたのは、川筋のちひさい家ながら、名に聞えた金ぷらを喰べさせる家だつた。けれども彼は、其の家で喰べさせる物が、特別氣に入つたといふよりも、その家の待遇が氣に入つたのであつた。三室か四室しかない座敷の、これはあんまり感心しなかつたが、何處も入れ込みで、誂へ物を並べて、お銚子が出ると、一寸お愛想にお酌をして置いて、後はうつちやらかして、女中は階下に下りて行き、客は手酌で飲んでゐる。その癖呼べば心よく返事をして、氣輕く梯子段を上つて來て用を聞く親切が、正太郎は氣に入つたのだ。よく料理屋にはあり勝の、お世辭づくめのしつこい扱ひには似もやらぬ、つかず離れぬところが嬉しかつた。

「今日も彼處に行つてやらう。」

と朝飯を喰ひそこなつた彼はその金ぷら屋を思ひ出して、更に空腹を痛感した。

詮方なさに、別段好きでもない煙草をふかしながら、二三日前に丸善の出店で買つた亞米利加の通俗小說の讀みかけを、讀み續けようとしたが、如何しても本を讀む方に心が集中しなかつた。

優しい母が死んでから、父は娘と同年の女優と結婚し、その女優上りは、娘と相愛の約婚までした男に想ひをかけ、此頃はその男の心も動いて來たやうに疑はれて、百萬長者の家の美しい娘が、ライラックの花紫に咲き匂ひ、鶯の聲しきりなる春の夜に、おもひ惱むといつた風な身の上

話が次の頁の心配になるやうな、事件に事件のつゞく書き方で書いてあつたが、正太郎は、どうせ最後には波瀾重疊の戀の絡れのその後で、女主人公の娘は、約婚の男と抱合つて接吻して大團圓になるにきまつてゐると、活動寫眞の戀愛物の大詰の景色を想像して、馬鹿々々しくなつてしまつた。彼は本を閉ぢて力無く欠伸をした。

「旦那さん、お手紙。」

吃驚して振向くと、女中が廊下から亂暴に、手紙をはふり込んで行つたところだつた。

「お母さんの手紙だな。」

正太郎はその細々と、しかも行儀よく書かれた封筒を見ながら、

「何んだつまらない。」

といふやうな、横着な心を持つ事を止めかねた。

其許いつもお變りなく、御丈夫にて御勤めお勵みの事と存じ上げ――と書出して、さぞ不自由ではあらうけれど、それが修業といふものだから暫時辛棒して居れば、きつと東京へ歸れるやうにはからふからと、お極り文句が並べてあるに違ひないんだと、多寡をくゝりながら封を切つた。

其許いつもお變りなくと、推察通り書出してあるのを見ると、正太郎はもう讀む氣がしなくな

つたが、一行々々厭々ながら、お義理で讀んでゐるうちに、何時の間にか、母の手紙の眞實さに思はずしらず引込まれた。

「先頃當地御出立の際、父上様より其許へ御申聞け被遊候縁談、又々御承知無之、親は此度のは是迄の諸方よりの御話よりも、殊に願はしき縁邊と存候處、例によりて、妻はまだ欲しく無しとのみ、あまり罰の當る申狀と父上様にも御立腹被遊候が、何を申すも後取りの其許なれば、獨身主義とやらはかなはずと父上様の仰せに、其許も、いづれ氣に入りたる者あらば貰ふべしと申され候が、われらも最早老先き短き身に候へば、一日も早く優しき嫁女を迎へ……」

母親の手紙は長々と、同じ事を繰返して、男の子はこれ一人の正太郎の、氣に入つたものならば、相手の身分も家柄も問はないから、早く身を固めて貰ひ度いと何時にも增して念入りにかき口說いた。

「其許は何故か大家の娘は大嫌ひとの事、如何なる心か母には確とわかり兼候へども、それも心任せに候へば、いかなる裏家の娘にても、心だに優しき者に候はば苦しからず候間……」

正太郎はいつか身に沁々と、母の手紙を感じて居た。度の強い近眼鏡をかけ、巻紙に取縋るや

うにして、どうしたら息子の心を動かす事が出來るかと、思ひ惱みながら認める、干物のやうに小づくりの母の姿が、まざまざと目に浮んで來た。

「獨身主義はいかん、斷じていかん。」

と震へる程怒つた聲で、高壓的な態度で叱りながら、內心は息子の反抗心を非道く怖れてびくびくしてゐる老年の父の哀れさも、正太郎の心には忘れられなくなつた。

「一層思切つて結婚しちまはうかしら。」

と彼の心はふとしをらしく動かされたが、

「駄目だ、駄目だ、そんな事をして、一度結婚してしまつたら、厭になつたからつて取かへしがつかなくなる。」

と直ぐに平生の心がもりかへして來て、正太郎は又冷靜になつた。

彼は學校を卒業してから外國に行き度かつたが、恰度其頃大病の揚句だつた父は、氣の弱い母と共々に、如何しても一人息子の正太郎を、遠い異鄉に手放してやる氣にはなれなくて、賴むやうにしてその志望を曲げさせた。正太郎はその代償として、もつと勉強し度いと云ふ口實の下に、引續いて學校に籍を置いて研究生になつた。彼は決して人に勝れて學問が好きだつたわけではな

かつたが、學校と緣が切れて世間に出て、父が關係してゐる銀行や會社に、勤めに出されるのが厭だつたのだ。正太郎は每日學校の圖書館に通つて、性來何事にもひととほりの理解力は持つてゐる性質なので、經濟法律の本も讀めば、文學美術に關する本も讀み、東西の作家の小說戲曲などとも手當り次第に讀んだ。その癖彼の心を捕へて、全力を盡して研究しようと思はせるものはひとつも無かつた。

彼に實際、何時からともなく、此の人生の ennui に惱んだ。何事にも心を震はして憧れる程の希望も目的も無い自分自身が只管果敢なまれた。富家に生れた悲しさには、彼は財を積む欲求を持たなかつた。幾多の同窓生が金儲を唯一の目的として、世の中に出て行く時、單純な希望を持つ友だちを彼は心底から羨んだ。生れながらに虛僞虛飾を嫌ふ心持の強い彼は、位階も勳章もただ馬鹿々々しく思はれるばかりで、難有いとは如何しても考へられなかつた。あらゆるもの事に興味を見出す事の出來なくなつた時、彼は女といふものに對しても、同じ倦怠を感じたのである。先天的に女性の持つて居る媚を賣る態度のわざとらしさが、殊に彼を惱ました。一夜妻ならいざしらず、共白髮迄もといふやうな女を、此の世の中に見出せようとは、如何しても考へられなかつた。殊に彼の妻の候補者として、諸方から賣付けようとする所謂良家の娘の、勳章と金力

ばかりを難有がる男にとつての良妻として、家庭に於ても學校に於ても、育てられてしまつた樣子を見ると、どうあつても抱いて寢る欲求は起らなかつた。嫉妬深く、愚痴つぽく、慾張りで、意地悪の女性に對して、彼は結局好感を持たなかつた。その女性の中から一人を選び出して、一生一緒に暮す程面倒臭い事はないと、彼は沁々感じたのである。

「矢張り女房なんか無い方がいゝ。」

と正太郎は、母の手紙を卷納めながら、獨身者の氣樂さを、今更に思ひ出した。と同時に此の世の中の退屈さも、彼の心は忘れる事が出來なかつた。

「中村はん、あんた御酒上りまつか。」

急に梯子口から半身乘出した樣子で叫ぶ女中の聲が聞えた。

「アア一本つけてくれ。たまさかの日曜だ。」

壁一重隣の中村の、返事をして居るのが續いて聞えた。

「アアやつと晝飯になつたか。」

正太郎は待兼た時間の到達を喜ぶ丈の氣力も無く、習慣的に立上つて帶をしめ直した。

「若旦那。お出かけですか。」

その部屋の前を通る時、中村は何時もの通りお愛想に聲をかけた。
「エエ一寸。」
「今夜は御在宿ですか。なんなら一番御指南にあづかりたいと思つて。」
梯子段を中途迄下りた頭の上で彼の聲は追掛けて來たが、正太郎は構はずにどんどん馳下りた。
「旦那さん、お出かけだつか。」
女房さんは自分で馳出して來て下駄を揃へた。
「晩にはうちで御飯上つてだつか。」
と下から見上げるやうに顏を覗き込んで云つた。
「エエ、ウウン。」
正太郎は迷つて、どつちつかずの返事をした。
「お歸りだつか、マアお珍しい。私なア、今日はお休みやさかい、南の方へお顏見せに行つてのんかと思うてましたんだつせ。」
今日は又あの肥つた旦那が來るのだらう、女房さんは、いゝ年をして薄化粧をしたのが、そばかすの多い顏を一生懸命愛嬌づくつてしやべつた。

「マアほんまに珍しい事だんな。貴方さん日曜にいつもうちで飯喰べへん癖に。」
いかにも仰山に云ふのを、正太郎は不愉快に聞流して往來に出た。
「馬鹿ッ。」
腹を立てるのも馬鹿々々しい、なさけない心持だつたが、それでも今の今後に残した下宿の主婦の變に白々と幅の廣い面上に、吐きかけるやうな意氣込で唾をした。
正太郎は日當りのいゝ、風の無い、靜な今日を喜んだ。寒がりの、風の嫌な彼にとつて、塵埃の舞立たない往來を無責任に歩く丈でも氣持がよかつた。だらだら坂を下りて、橋を渡つて、毎朝寢坊しては狼狽々々驅足で急ぐ同じ道を、下駄を引摺りながら、懐手で歩いて居られるのが彼の心を長閑にした。
「アア日曜はいゝ。」
と痛切に日曜の嬉しさを感じながら、足下の小石を思ひ切つて蹴飛ばした。まんまるく光つた石ころは、人通りの途絶えた往來を斜に飛んで、遠くの電信柱に當つて跳返つた。さうした所作が、日曜を喜ぶ彼の心持を最も明確にあらはしてくれたやうに感じた。
彼は暫時空腹を忘れて、道筋の商店の飾窓を覗いたり、橋の上に立停つて水の流れを見下した

りして、短い距離に長い時間を費した後で、やうやく志した川つぷちの金ぷら屋の暖簾をくぐつた。

「おいでやす、お上(あが)りやす。」

帳場の方で二三人一度に甲走(かんばし)つた聲でいふのを聞流して、彼は油光(びかり)に光る梯子段を悠々と上つた。往來迄も臭ふ金ぷらの臭ひの漲つた家の空氣が、此の時彼の空腹を自覺させた。

「おいでやす。」

とつつきの部屋から、見知り越の女中が出て來て、

「旦那(だん)さんお一人だつか。」

と聞いた。

「アア一人だよ。」

答へながら正太郎はその部屋に入つて、今客の立つた後らしいのを、女中が片附けて居る縁側に近い食臺(ちやぶだい)につかうとした。

「旦那さん、偉(え)ら濟みめへんが、お一人やつたらこつちやへ來とおくんなはれ。」

狭い一隅に置かれたまるいちひさい食臺の前に座蒲團を直しながら、女中は正太郎の顔を見上げた。

「アア一人で大きい方を占められては困るんだね。」
「偉ら濟みめへんなア。」
「イイエ、何處だつて同じだよ。」
正太郎は壁についた窮屈な一隅のその食臺を前にして坐つた。
「何にしまほう。」
「何時もの通り。」
「左樣だつか、そんなら任せて貰ひまつさ。」
女中はくるくるした目に、無理に愛嬌を浮べながら、
「御酒(こしゅ)だんな。」
と念を押して、忙しさうに梯子段を下りて行つた。
廊下を隔てた表座敷の方は、いつぱいの客と見えて、入りまじつた太い男の高笑ひが絕えず聞える。襖一重の隣座敷は子供連(づれ)の一家族らしく、甲走つた女の子と、片言の男の子の聲を中心にして、人の子の親に特有の甘やかした聲が、のべつに聞えて來た。
「そんな事したらあけへん、それ私(わてい)のや。」

女の子の泣面をした聲がしたと思ふと、どたばた子供の爭ふ物音が、正太郎の背中に近い襖の向ふに起つた。
「お母ちやん、茂坊が私の毬をとりまんねやわ。」
鼻をつまらせて女の子は訴へる。
「サアサア二人とも喧嘩したらいきまへんぜ。」
「坊々、お父ちやん見い、ホウラえゝか、この酒を喇叭のやうに飲んで見せるぜ。えゝか、飲みまつせ。」
子供達の爭ひを止める爲めに、その注意をわきへそらさうとする兩親の、大阪人に特有の太棹の聲が聞える。正太郎は、いゝ年をした男が、子供を喜ばせる爲めに徳利から酒を飲んで見せる姿を彷彿した。
「サアよう見てんかいな、今お父ちやんが象の鼻のやうにして、お徳利から飲むんや。」
「アラそんな事して、あんたいきまへンがな。」
女房の止める樣子も正太郎には明瞭に想像する事が出來た。
「默つとれ。」

男の醉つた聲で、
「えゝか坊。お父ちやんは象や。えゝか。飮むぜ。」
「置いとくんなはれ。」
「何すんのや。滅茶しよる。」
女房の調子から、亭主は折角喇叭にした德利を奪ひ取られたらしく想像された。
「けつたいな人やなア。」
亭主を持つた女に限るとげとげしい調子で女房は叱つた。
何專にも想像好きな正太郞は、活動寫眞の映畫よりも明かに隣室の光景を想ひ浮べながら、煙草をふかして居た。
「お待遠さま。」
女中はお銚子を持つて上つて來た。
「今日はどちらへ。えゝお天氣たんな。」
ときまり切つた愛想を云ひながら、正太郞の取上る盃になみ〳〵と酒を湛へた。
「何處へも行きやしない。今起きて、此處に來たばかりさ。」

「マアあんさん、今迄寢てはりましたの。偉い寢坊助はんやなア。お日様が笑うてゐやはりまつせ。」

鼻の横に皺を寄せて笑ひながら忙しさうに立上つて、又梯子段の下に消えてしまつた。

正太郎は一人になつて、緣側の玻璃戸の外の、日光を浴びていきいきして來た川の景色を眺めながら盃をふくんだ。向ふ岸の土堤の草も、此の前の日曜とはうつて變つて、柔い綠に萌えて來たし、その岸を洗つて流れて行く川水も冬の間の灰ばんだ濁つた色とは違つて、紫がかつた青い色できれいに深くなつた。石造の銀行の大きな建築物の前に並ぶ柳の枝も淺綠に煙り、あるとしもない風に靡いてゐる。その柳の下の水際に、若い女が洗濯をしてゐる姿が目についた。端折り上げた腰から膝迄を危く包む紅と、大きな石に足場を見つけて、思ひ切つて踏張つた太い足の大根のやうに白いのが、切拔人形のやうに鮮明に見えた。

靜寂で、しかも近づいて來る春の明かに漂つてゐる長閑な景色に對して、日曜に特有の呑氣な心地を樂しみながら、正太郎は盃をかさねた。

元來彼はあまり飲める口ではなかつたが、喰べる物をうまく喰べるには、一本のお銚子が是非とも欲しい質であつた。下宿の夜の膳の上にも、おきまりの一本を貰つて陶然とするのであつた。

その下宿の一合入りのお銚子よりもずつと大きい此の家の一本は、彼一人には、充分過る位あつた。殊に空腹に沁む酒の温かさは、直ぐに顏にも出て、正太郎は自分の眞赤な顏が目に見えるやうに思つた。彼は後から順々に運ばれた喰べ物をひとつ〳〵片附けた。

「おあとは金ぷらでよろしうおまつか。」

隣室の用を聞きに行つた女中がついでに顏を出して尋ねた。

「御酒は。」

「お酒はもういらない。まだあるよ。」

正太郎は羞かしい程火照る顏をもてあつかひながら、殘りの酒を盃についだ。

「どら去にませうか。」

隣座敷の聲が大きくなつて又聞えた。

「アア、えゝ具合に醉うた醉うた。」

衣擦れの音や、足音が騷々しくなつて、一時に立上る氣配の中を子供の聲が言葉を成さないでいりまじつた。

「サア坊々はお父ちやんがおんぶしたろ。」

どしんどしんと廊下から梯子段へかかつて踏んで行く後から、引摺るやうな女の足音と、鼠のやうな子供の足音が續いて賑かに遠ざかつた。
その足音がまだ消えないうちに、
「二階の僕の好きな部屋は空いてるかな。」
と一人言のやうに、又聞えよがしのやうにつぶやきながら上つて、正太郎のゐる部屋に入つて來た男があつた。大きな旅鞄を重さうにさげながら、
「空いてる、空いてる。」
と大きな聲を先客の前に憚りもしないで、先刻正太郎が占領しようとして斷られた食臺へ、づかづか行つて坐つた。直後から藤紫の縮緬の羽織を着た若い女がついて入つて來た。
「サアサアお坐り。此方の方がいゝだらう。」
正太郎に背中を向けてゐる男は、歴然とした東北辯で、さも物馴れたらしく振舞ひながら女を導いた。
女はうぢうぢしながら壁を背中にして、蒲團を横の方に押やつて、ぢかに疊の上に坐つた。正太郎の方からは、その廂髮の子供らしい顏付が八分迄見えた。

「なんだ敷いたらよからう。」

「エエ。」

男がすすめても女はなかなか蒲團の上には乘らなかつた。

「こんなけちな處で遠慮する事があるものか。」

男は正太郎の方を一寸振返つたが、とつてつけたやうに、

「ハハハハハハハハ。」

と高く笑ひながら、手を延して女の肩を叩いた。

女は赤い顏をして、人前を憚るやうにして、正太郎の方を盜み見たが、彼の大きな目が眞當面に自分の方に向いて居たので、ハツとしてうつむいた。

「旦那さん、何にしまひよう。」

お茶を運んで來た女中は、若い女客を見ないやうな風をしながら、見ないでは居られない樣子をあからさまに見せながら聞いた。

「何でもよいわ。うまいものを澤山喰はせてくれろ。それから酒だ。」

「ヘイかしこまりました、おあとは金ぷらだつか。」

「勿論だらうぢやないか。君のところに來て金ぷらを喰はないなんて奴があるものか。」

とがさつな聲で冗談めかした。

「ここの金ぷらといふのはな、天金といふ東京一の天ぷら屋の天ぷらにも負けない位だ。嘘だと思つたら喰べてごらん。二人前でも三人前でもハハハハハハ。」

男は連の女に向つて說明した。

「マア旦那さんの云ふてや事、ホホホホ。」

女中は取つてつけた笑ひを殘して、そゝくさ立つて行つた。

正太郎はその男の聲も態度も、一々氣に喰はなかつた。殊にその高笑ひが氣に喰はなかつた。その癖何處かで見たやうな人間に思はれて爲方がなかつた。綿の厚さうな羽織を着て、セルの袴を裾長く穿いたのが胡坐を組んだ後姿は、大きくてしかも何處か隙だらけな、どう見ても雪國の人間の骨格だ。頰骨の高い、耳の薄い貧乏相に、金ぶちのピカピカ光る眼鏡の著しいのさへ、お里が知れる氣持がした。

その連の女の、斯ういふ場所に馴れないおど〳〵した態度が、男の一人よがりの心得顏に對して一層際立つて見えた。正太郎は、喰べる物はみんな喰べてしまつたので、手持無沙汰をまぎら

す爲めに、殘りの酒の冷くなつたのを、苦い顏して口にしながら、好奇の目を以て盜み見た。

「新夫婦かな。」

と正太郎は考へた。何を云はれても、ハイとかイイエとかいふ返事の他は、口を開かない女の、固くなつてうつむいて居る差しさうな態度が、さう思はせたのである。それにしては男の方が、いやにづう〳〵しいのが變だと、直ぐに反對の考へも浮んだが、それは男が世襲的教養の無い田舍漢だから、花婿らしくなく、野面を曝して居るのだと押切つて決めてしまつた。

「兎に角あんまり別嬪ではない。」

と正太郎は、女が伏目勝なのをいゝ事にして、あらゆる雜作を檢査してやつた。

まる顏の、肉置の子供々々したのが、男を知らない女のやうに、少し紫がかゝつた血の色の、底に溜つて居る赤い頰ぺたを持つて居た。鼻もどつちかといふと低い方だつたし、唇は厚ぼつたくて、赤過る位赤かつた。けれども、その顏の上半部は思ひ切つて下半部と違つて、少し廣い額に地藏眉のうつりがよく、時々顏を上げた時に見える睫の長い目の、漂ふやうな瞳の色が、赤坊のやうな無邪氣な愛くるしさを持つてゐた。この顏面の不調和な特徵が、幾度も正太郎の視線を呼ぶと同時に、

「こんな亭主を持つて可哀さうに。」

と思はせた。

そのうちに、向ふの食臺にも女中が誂へ物を並べ始めた。

「旦那さん、おひとつ。」

おきまりの最初のお酌をうけて、

「姐さんのお酌だと又一層だね。」

と男は月並な文句を、さも機智に富んで居るだらうと云ふやうな語調で云つた。

「マア旦那さん、そないな事いうてよろしうおまつか。」

女中はくる／＼した目を働かして、うつむいてゐる女を、廂髪の後から、顎で指して云つた。

「あんさんもおひとつ。」

と今度は男を横目で睨みながら若い女にすゝめた。

「イイエ。」

かすかに答へながら、女は一層困つて肩をすぼめてうつむいてしまつた、赤い顏が朱のやうに濃くなつた。

「そつちはサイダアがよからう。」
　男は引取つて、自分がついで貰つて飲んだ。
「な、サイダアかシトロンがよからう。」
「イイエ私なら。」
　ちひさい聲で女は遮つて、又赤くなつた。
「そんなら先づ君にひとつ。君はなんとかいつたつけね。」
「私だつか、私はそのと云ひまんね。」
　女中はさゝれた盃を、つまむやうな手つきで受けて、顏をしかめて一寸なめた。
「それ〳〵おそのさんだつけ。あとには園がうをおもひかハハハハハハ。」
　男は又自分の機智を喜ぶやうな無遠慮な高笑ひをして、正太郎の方をかへりみた。
「なんだつまらない。」
　正太郎は腹の中で輕蔑しながら、お銚子の底の酒をしたんだ。
「おほけに。」
　女中は男に盃をかへして、もうひとつお酌をして置いて立上つた。

「偉らうおまたせしまんな。」
と正太郎にも挨拶しながら出て行つたが、直ぐに金ぷらを持つて引返して來た。
「あんさんはもう御飯だつしやろ。」
女中は正太郎が此の家に來れば、必ず一本のお銚子の後は御飯ときまつてゐるので、心得顔に云ひ捨て、さつさと行つてしまはうとした。
「オイオイ、お銚子だよ。」
正太郎は後から呼び止めた。妙に度はづれの大きな聲だつたのでハツトした時、向ふの男女は彼の方を見た。
「ヘイ。」
既に廊下に出て居た女中は、梯子段の中途で受けて下りて行つた。
「もう一本飲んでやれ。構ふものか。」
正太郎は一人で景氣づいたが、その實もう酒はちつとも欲しくはなかつた。ただ此のまゝ金ぷらで御飯を喰べてしまへば、勘定をして歸らなければならない。二人の男女を殘して歸るのは、彼の好奇心が承知しなかつた。其處で愚圖々々して居る時間をつなぐ爲めには、もう一本お銚子

を呼ぶ他に方法がなかつたのである。
「どうだ、此の家と川甚とはどつちがいゝ。」
「川甚つて此間の家たつか。」
「さうさ。此處の方が又一段いゝだらう。」
男は手酌で飮みながら、一人で得意さうにしやべつた。
「天ぷらはね、東京が一等だが、大阪でも此の家のは喰へるよ。」
正太郎はその東北者の、すつかり東京がつてゐるのが片腹痛かつた。
「ナアニ此の家の金ぷらは、賣物にはしてゐるけれど、實は結構なものぢやない。他の料理の方が餘程ましなんだが。」
と彼は思つた。
その時不意と正太郎は、その東北者を、何處かで見たやうに思つたわけがわかつた。正太郎が學んだ學校の教授の一人に、聲から態度迄そつくりだつたのである。
「アアあのおつちよこちよいの巴里人だ。」
と合點の行つた時、正太郎は一人で堪らなくなり、微笑を禁じる事が出來なかつた。

その教授といふのは、自分ではすつかり都會人のつもりで、同郷の後進の學生などのお國言葉まるだしを氣にして、

「そんな言葉を使つて居ると、世の中に出て笑はれるぞ。」

と誡めるのが癖だつた。その癖教授自身では、全く振捨てたつもりの東北訛は、彼の鼻にかゝる騷々しい聲と共に、執念深く彼の舌にこびりついて居た。教授は勿論學校時代には勉強家の名をほしいまゝにした優等生だつた。卒業すると直ぐに、學校から選拔されて、巴里へ留學した。彼は自ら巴里人を以て任じてゐる。優等生によくある例で、卒業後は期待された程の事も無く寧ろ學者としては通用しなかつたが、世話人になつて働いた。持前のおつちよこちよいが役に立つて、學校の冠婚葬祭には、必ず選ばれて、世話人になつて働いた。彼は學者としての自己に不安を感じたと同時に、自分は才人だといふ自覺を得た。さうして彼は幸福だつた。彼が滿足して學校の重寶人として、走り使ひの役に任じて居るのは、卽ち此の才人であり、巴里人であるといふ自覺に根柢を持つてゐる爲めであつた。

「フン、そつくりだ。」

正太郎は、女中が持つて來た新しいお銚子の、熱い酒に咽せながら、目の前の男の、自分では

非道く氣轉の利いた風なのを、教授の小典型のやうに思つてさげすんだ。
「なんだ、ちつとも喰はないではないか。うまいよ。この吸物はすつぽんだぜ。」
男は箸をとらない女を促して、わざとらしく大きな音をさせて吸物を吸つた。
「どうしたんだ。眺めて居るばかりでは爲方ないでないか。お喰べ、お喰べ。」
それでも女は箸を執らなかつた。料理屋で食事をする事が、非道く羞しい樣子に見えた。ふくらみのいゝ廂髮の几帳面過るのも、思ひ切つて襟を詰めた着物の着こなしも、此頃は流行らない藤紫の羽織の色の褪せたのも、どう見ても世馴れない娘のやうに思はれた。
「可哀さうに、あんな大男を亭主に持つて。」
正太郎はふと、體格の相違から變な事を想像して不愉快になつた。さうして又盃を口に持つて行つた。
「もう一本飲んでもよからうな。」
男が云つても、女は默つてうつむいて居るばかりで、お酌をしようともしなかつた。其處で彼はお銚子の底の酒を飲んでから、手を叩いておかはりをいひつけた。
「あんた、ちよつとも上つて下さりまへんなア。」

お銚子と金ぷらを持つて來た女中は、女の横顔を覗き込んで云つた。
「この人はね、あんまり御馳走があり過るので、見て居る丈でお腹が張るのださうだ。」
男は引取つて、又平俗な冗談を云つて、高々と笑つた。
「何もおまへんが、どうぞちつとめしあがつておくれやす。」
女中は云ひながら行つてしまつた。
「なんだな、ほんとに眺めて居るばかりで如何したのだ。お喰べ、お喰べ。折角の御馳走が冷くなつてしまふでないか。こんな立派な御馳走よりも、矢張り喰べつけてゐるうちの御飯の方がいゝかな。」
非道い事をいふ奴だなと、正太郎はひそかに憤慨した。
女はやうやく箸を取上げて、吸物椀の蓋をとつたが、矢張りためらつて居るのであつた。
「ほんまに、貴方は木曜日にはお歸りだつか。」
俯向いたまゝで、少し上目を使つて、女は小聲で聞いた。
「アア戻るとも、用事さへ濟めば直ぐ戻るよ。此の次の日曜には、お母さんと三人で寶塚にでも出かけようでないか。」

「お母さんも一緒に連れて行つてくれはりまんの。」
女は嬉しさうに云ひながら、男の顔を正面から見たが、その時正太郎が自分の方を見てゐると氣が付いて又赤面した。
「貴方のお母さんは偉いお方やさうだんな。」
暫時して、女は顔をあげて、一人言のやうに云ひながら、濡れたやうな美しい目をまぶしさうにして男を見た。
「どうして。誰がそんな事を云つたね。」
「島村さんがそないいうてはりました。」
「島村が。フウン。」
男は得意さうにうなづきながら、
「さうさ、兎に角偉いといふのだらうな、吾々をこれ迄に育ててくれたのだから。」
肱を張つて、盃を唇につけて、男はその時昂然とした。女はさも頼母しさうに、隠し切れない崇敬の念を示しながら、男の顔を見て、うつとりした様子だつた。
正太郎は理由がわからなくなつた。新夫婦かと思つて居たら、女は男の母親を他人の噂でばか

り知つて居るのらしい。して見ると夫婦ではないのだなと、醉つて集中力の乏しくなつた頭腦に、物ずきな想像をさへ組織立てる事が出來なかつた。

「なんだ、あいつらは。」

正太郎は漠然と、當りのつかない二人の樣子を、醉眼をみはつて眺めた。

男はその言葉の通り、東北の田舍から出た學生上りの月給取りに違ひないが、女はどうにも見當がつかなかつた。新夫婦でなければなんだらう。極端に野暮つたい樣子が藝者や雇女でない事は確實だつた。酒場や珈琲店の女給にしては、あまりに初心らし過るし、不良少女にしては人怖をする處が合點が行かなかつた。

「さうだ、下宿の娘だらう。」

正太郎は、よくも察し得たと思つて自分自身滿足して酒を飲んだ。下宿にしても、男はその家で室借をしてゐる素人下宿に違ひない。正太郎は其處まで想像をたどつて行けたので、大に安心した。

「俺は今度は如何しても母に話をして來るよ。」

男はふと氣が付いたやうに正太郎の方をかへりみたが、折よく正太郎は視線をそらしてゐたの

で、安心してお銚子をとつて盃をみたした。

「そりやア母は偉い人だけになか〳〵むづかしいさ。しかし氣性を知つてしまへばいゝ人なのだ。母だつて喜ぶよ。一日も早く孫の顏が見度いのだからね。」

女は眞赤な顏をしてうつむいて、袂から出した手巾で口のあたりをかくした。

「今度話がきまつたら、花時分には用事にかこつけて、東京に連れて行つてやらうか。まだ東京を見た事はないだらう。」

男がさも東京は俺のものだといふやうな大きな顏をして物をいふのが癪に障つて、正太郎は紛らかしに、しきりに酒を飲んだ。いつの間にか二本目のお銚子も空になつてしまつた。彼は目の中途醉が廻つて、何を見てもぼんやりして居る癖に、目の前の男のがさつな擧動と、思ひ上つた態度を憎む事と、相手の娘の、そんな男をさへ、さも頼るべき偉い人間として尊敬してゐる無智無識の風情を哀れむ事を忘れなかつた。

會話の樣子から察して、男は今日これから東京へ向つて立つらしい。東京にはその母親が居て、男は母に逢つて此の娘と夫婦になる事の許可を得ようといふのらしい。

「可哀さうに、あんな男をさへ立派な男だと思つて居るのか。」

正太郎は娘の美しい上半部と、鈍い線で組立てられた下半部の不調和なところが、かへつて誘惑になる、無邪氣さうな顏を見守つた。
「サアそろ／＼御飯にしようか。オヤオヤ何も喰はんのだね。折角こんなに御馳走をとつてやつても、これぢやあ無駄でないか。」
「そやかて、私お腹が空いてあれしまへんがな。」
女は差しさうに答へながら、申譯らしく箸を取上げて何か口の中へ入れた。
「よし／＼。それではお母さんの土産にしたらいゝ。」
云ひながら彼は手を叩いて女中を呼んだ。
「あつさりで御飯をくれろ。それから折を一つ。この人は何も喰はないから土産にするのだ。」
「よろしゆおま。」
入つて來て坐る間も無く命をきいて、女中は又立去らうとしたが、正太郎の方にも何か註文でもあるだらうと思つた樣子で、笑顏をして通り過ぎた。
「オイオイ此方も御飯だ。」
正太郎は呼び止めて、又高調子になつた酒の力を忌々しく思つた。

「ヘイ只今。」
女中は同じ返事を繰返した。
「どうだな。つとめは辛くはないかね。」
男は残つてゐる皿の物をがつ〳〵つつつきながら云つた。その様子のいかにも横柄なのを正太郎は又憎んだ。
「イイエ、ちつとも。」
女はそれでも男の言葉を、優しく勞はるものとして、受取つたと見えて、持前の美しい目を細くして、嬉しさうに答へた。
「最初は馴れしめへんよつて、一日腰かけてゐると、肩や腰が痛うて痛うてなりまへんね。」
眉根に皺を寄せて、女は痛いといふ表情をして見せて、
「そやかてもう馴れましたよつて、どもあれしまへん。」
と笑つた。
「椅子に馴れないものだからハハハハハ。」
男は見下した態度で、肩をゆすつて笑つた。

「それから、誰も僕の事を嘲弄はしないか。」
「イイエ別に。」
膝の上の手巾を揉みくちやにしたり延したりして、女は耳迄赤くなつた。
「でも若い奴等は閑さへあると、君達のところへ集まつて何か云つてるではないか。中にはからかふ奴もあるだらう。」
「イイエ別に。」
女は益々俯向いてしまつて、口の中で微かに答へるばかりである。
「いゝさ、いゝさ。今にもう會社になんか行かなくてもいゝやうにしてやるよ。」
男はその癖の、右の肩を聳かして得意の色を示した。
正太郎はこれを聞くと、更に一層その男を憎んだ。同時に二人の關係の一切が氷解した安心を感じる事を止め兼ねた。男は何處かの會社に勤めてゐて、娘は其處の受付か電話係に違ひない。日給取の目から見て、月給取は遙に偉い人物のやうに思はれる心理が、此の娘を捕虜にしてゐる事は明白だつた。正太郎は男が銀行に於ける多少の地位を利用して、娘を弄ぶのか弄んでしまつたのに違ひないと思つて、非道く憤慨した。

「怪しからん。」
口に出して云ひ度いのを堪へた時、自ら手が近づいてお銚子を取つたが、酒はもう先刻空になつてゐたのを思ひ出した。
どうしても此の初心な娘の爲めに、二人の結婚を――若しそれが眞實實現されさうな羽目になつてゐるのなら――妨害してやらなければならないと思つた。それが人道的の行爲だとさへ彼は考へた。
其處へ女中が向ふにも此方にも、一時に御飯を運んで來た。正太郎は胸の苦しい程飲んだ酒の醉に、僅にお茶漬を流し込んで箸を置いた。
「おそのさん、濟まないが、そこらのものを折にしてくれ給へ。」
男は羨ましい程うまさうに、米の飯を大きな口の中へ、行儀作法も無く詰め込んでは舌打ちして喰べた。正太郎は一から十迄其の男を憎んだ。
「アア腹が張つた。」
「もうひとつどうでおますな。」
「あかんあかん、もうこれや。」

男は大きな口を開いて、ゲツ、ゲツと吐く眞似をした。
「オホホホホホ。」
「ホホホホホ。」
娘も女中も心からをかしさうに笑つた。
正太郎は男の粗野を憎むと共にその粗野を憎む事も知らない二人の女を歯がゆく思つた。
「アアもう卅分きり時間がなくなつた。」
男は時計を出して見て娘に云つた。
「どちらへかお越しだつか。」
「アア、名古屋に寄つてね、それから今夜の急行で東京に行くのだ。」
「お二人で東京行、燒けまんな。」
女中は源氏絲で結んだ折を一寸提げて見て笑つた。
「燒けるだらう。こつちは金ぷらを喰ひ過ぎて胸が燒けるよハハハハハハハ。」
「ホホホホ。」
男は又自分の場馴れたところを見せるつもりで、あり觸れた洒落を得意がつた。

「サアサア、おあいそだ。」
「ヘイおほきに。」
女中は氣輕く答へて立上つた。
「こつちもおあいそだよ。」
正太郎は又呼止めていひつけた。
「ハハハハハあの女め、二人で東京に行くのだと思つてる。」
赤くなつてうつむいてゐる娘を覗き込んで、男は得意らしく、更にふりかへつて正太郎の方迄見た。
勘定書が來ると、男は懷中から紙入を出して、どういふつもりなのか一枚々々札を數へて見て、それから支拂つた。
「イヤどつこいしよ。アア腹がくちくて立てない。」
男は娘を笑はせながら、
「サア急がないと俺は汽車に乘遲れてしまふぞ。」
と立上ると、直ぐに旅鞄を持つて、大跨に歩き出した。娘も狼狽てゝ立上つて一寸褄を直すと、

正太郎の前を差しさうに、男の後について、そそくさと歩いて過ぎた。
「モシモシ、お忘れものぢやありませんか。」
　正太郎は其處の折詰を指して娘を呼んだ。
「ハイどうも。」
　娘は又全身眞赤になつたかと思ふばかりの顔をして、引返して折を持つと、廊下に出た男を追掛けて室外に去つた。
「なんだ折詰か。」
　横柄に男の聲が梯子段の中途で聞えた時、正太郎は自ら自身が罵られたやうな氣がして癪に障つた。
　正太郎も勘定を濟して立上ると、目がくらくらする程醉つて居るのを知つた。金ぷらの油で黒光りに光つてゐる梯子段を踏みはづしさうな足取りで下りると、下駄を突掛けて戸外に出た。愈々晴れわたつた青空に漲り溢れる日光に照りつけられて醉の出た正太郎の顔は眞赤になり、とろんと鈍つた目は意識と共に、あまりに明る過ぎる午後の往來を歩くには少し氣羞しかつた。
　今の今、自分より一足先に出た男女の行方が氣懸りだつた。時間のあり餘つてゐる此の午後を、

如何暮さうといふ目的も無く、所在ない迷ひ易い彼の心は、彼の東北訛の知つたかぶりの、才子がつてゐる大男を憎む強烈な誘惑に抗ひかねて、電車道へ出ると直ぐ、目の前で停つた電車に乗つて二人の後を追つた。

正太郎は、行儀の悪い大阪人を滿載した電車の吊皮につかまつて、前後左右にゆすぶられながら、醉拂つた上半身を持て扱つたが、十分の後、梅田の驛前で下りた時は、これから何か異常な事が起るのを待ち切れないやうな緊張した心持で、大跨に停車場の構内へ入つて行つた。彼は直ぐに入場券を買つて、それから待合室を一巡見廻して、二人の姿を探したが見つからないので、切符を切つて貰つてプラット・フオオムに入つた。向ふ側へ越す橋の段々の上り下りに、彼の醉は一層激しくなつて、息苦しい程胸には波を打つた。

彼は其處らにうようよしてゐる旅馴れない男女の幾人にぶつかつたか判らない。誰でもいゝ、憎む可き奴は手當り次第に張飛ばし度いやうな酒の勢が、此頃の平凡な生活に馴染んでしまつた彼の體内に、若々しい學生時代の亂暴な興味を蘇生らせた。

正太郎はさも醉つてはゐないといふ様子を無理に見せて、悠々と歩かうと努めたが、息切れのする身體は、どうしても落つかなかつた。彼はあちらこちらと、自分でもみつともないと思ふ程

きよろついて、漸く先刻の男女を見付け出した。途端に汽車は轟然と構内に入つて來た。

男は旅鞄をさげて二等室に入つた。その頰骨の高い、黃色い顏を出してゐる窓に寄添つて、金ぷらの折をさげた娘は立つてゐた。正太郎は自分も誰かを見送りに來てゐるやうな風をして、少し離れたところから二人の樣子を見守つた。

男は窓枠に肱をつき、鼻の下の薄い髭を捻りながら、何か娘を戲弄ふらしい樣子を見せては笑つてゐる。女は例の通り伏目に、自分の足下ばかり見てゐるが、これもその橫顏は笑つてゐた。正太郎にはそんな些細な事さへ、いかにも男の態度は傲慢そのものだつたかのやうに癪に障つた。

汽車は動き出した。汚ならしい煤煙をプラット・フオオムに吹きつけて、瞬間に行つてしまつた。多數の見送人の中には、未練らしく半巾を振るのもあり、面白さうに帽子を振るのもあつた。彼の娘は暫時汽車の行方を見送つて佇んだが、それが見えなくなつてしまふと、存外何のかかはりも無い顏をして、金ぷらの折をぶらぶらさせながら、人々に交つて步き出した。正太郎も直ぐ其の後について構外に出た。

娘は電車道を橫切つて、急ぎ足で步いて行く。正太郎は暫く停車場の正面入口の石の柱の下に立つて、西に傾きかけた日に輝く町を見て、如何しようかと迷つたが、一の事を追及して考へて

行く力は、酒精の爲めに奪はれてしまつて、少し前かがみに急いでゆく娘の後姿と、その手にさげられてぶらついてゐる金ぷらの折ばかりが、彼にとつての誘引であつた。正太郎は幾らかの距離を保つて娘のゆく方へ歩き出した。

娘が電車線路に添つて、西の方へ裾を亂して急ぐ後から、正太郎はその町が何處だか、よくは見當もつかないのだが、矢張り大跨について行つた。酒の醉の執念深く殘つてゐる爲めか、度々往來の小石にさへ足をとられさうになつた。何といふ橋か知らないが、兎に角橋を渡つた時、水の上を渡る風が頰ぺたから襟首にかけて、ひいやりと撫でて過ぎた。正太郎はあまりの心地よさに、思はずしらず橋の欄干につかまつて、川の面を見た。咽喉が乾いてひりひりして、その水を目掛けて飛込み度いと思つた。しかし又息苦しければ苦しい程、其處で立停つて、娘の行方を見失つてしまふのは、意地としても出來ないやうな心狀にゐた。彼は又砂埃の多い場末の町を、一寸の間に遠ざかつた娘の後を追つて歩き出した。

不意と娘は或町角で北へ切れた。それで見失つてしまつては堪らないと、正太郎は殆ど驚愕に似た動悸を覺えながら馳け出した。

活動寫眞の毒々しい繪看板の出て居る小屋の前に娘は立停つて、その毒々しい繪看板を眺めて、

ぼんやり上を向いてゐた。正太郎は安心して歩度をゆるめた。娘は一つ一つ順々に見て居て、なかなか歩き出さない。今迄の通りに歩いて行けば、如何しても通り過ぎてしまはなければならなかつた。正太郎は素知らぬ顏をして、活動寫眞小屋の前に立停つて、並んで繪看板を仰ぎ見た。仰向くと咽喉の邊が一層苦しくなつて、酒の踊つてゐる頭は、首丈では支へ切れない程ぐらついた。

看板の繪はどれを見ても、刀をふりかざした男と、その刄の下に、命の際の女が緋の色の絡んだ白脛を見せてゐるといつたやうな繪ばかりだつた。中には人間よりも大きい怪猫の姿が、背景の半分をかくしてゐるのもあつた。正太郎は平常ならば、馬鹿々々しいと思ふ繪看板さへ、何か知ら新しい刺戟のやうに思つた。娘は一心に、順々に展開されて行く物語の筋をたどつてゐるらしく見えた。涼しい目と、低い鼻と、厚ぼつたい唇と、可愛らしくくくれた顎とが、をかしいやうな愛くるしさを持つてゐる。活動寫眞に對する正直な憧憬――活動寫眞を無上の快樂と思つてゐるらしい樣子が、娘の無邪氣な美しさを增大した。金ぷら屋の二階で極端に物馴れないうぢうぢした樣子をしてゐたのと違つて、活動寫眞小屋の前の彼女は、いかにもその舞臺に馴染のある世馴れた風に見えた。正太郎は何時の間にか、その横顏の特異な魅力に引つけられて居た。いか

にも町つ子らしい無智な風姿が、生半可な教育に害された、芝居氣の多い上流の、根柢も無くたかぶつた令嬢達を、生涯連添ふ妻にしろと勸められ勝な彼にとつては、如何にもお手輕で、面倒が無ささうで、それが反つて懷しく思はれたのである。

「こんな娘なら貰つてもいゝ。」

正太郎の頭にふと、かうした考へが浮んだ。

「この娘を貰つてやらう。」

次の瞬間には、彼はもう、如何にして父母を納得させ、如何にして此の娘の兩親の承諾を得、如何にして此の娘の心を得ようかといふ問題が、前後の順序も無く、一時に混亂して渦を卷く、冒險的な興味ばかりを考へて居た。勿論その冒險の目的として、彼は打拉いでもやり度い憎む可き東北訛の頰骨の張つた黄色い面付を忘れる事が出來なかつた。

ふと彼は娘が歩き出したのに氣が付いた。今、繪看板に見とれてゐた數分間を取返さうとするやうに、娘は前よりも早足で歩き出した。正太郎も直ぐにその後から歩き出した。彼はあまりに間隔の迫つて居るのが氣になつて爲方がないので、袂から煙草を出して立停つて、燐寸を擦つた。パツト吸ひ付けた時に、目の前の娘の姿は、とつつきの細い横町へ曲つてしまつた。正太郎は狼

狽てて、口中にふくんだ煙を鼻から出し切ると、勢込んでその横町へ曲つた。とその角を曲つた目の前に、娘は佇んで居て、彼は危くぶつからうとして驚いたが、その娘と立話をして居る老人の顏を見て更に驚いた。

「オヤ。」

思はず彼はその驚きを口に出した。

「これはこれは、三田さんぢやありませんか。貴方マア何處へ行きなはる。」

同じ銀行で机を並べて居る牧野老人に出つ喰はさうとは、思ひも掛けない事であつた。正太郎は思はずしらず額の汗を拭いた。

「エ、一寸友達のところまで。」

「ヘエお友達はどちらだんね。」

老人は近々と傍に寄つて來て聞いたが、正太郎はそれよりも、其處に立つて居る娘が、まじまじと自分を見詰て居るのに閉口した。彼は又酒の醉が一層強烈に發して來たのを忌々しく思つた。

「貴方んとこは此方の方ですか。」

彼は何か、うまく其場限りの事を云ひ度いと思つて話をそらした。

「エエ直き此の露路の奥ですがな。今一寸湯に行かうと思うてな。」

老人はぶらさげた手拭を、正太郎の目の前で振つて見せた。

「恰度貴方此娘に出あひましたよつて、一寸立話をしとりましたところだんね。」

老人は娘の方を指して云つた。

「フウム、牧野老人の娘なのか。」

と正太郎はその身元を確めた安心を感じた。

「如何だす、一寸寄つてんか。ぶぶなと上つておくれやす。」

老人は何かしら嬉しさうにいそいそして、正太郎を誘ふのである。

「コレコレお房、何してんのや、阿呆らしい。ちよつといんで、お母んにな、お客様やいうてんか。」

お房といふ名前なのかと、正太郎がうつかり考へて居るひまに、手持無沙汰さうに立つて居た娘は、急に氣が付いて、羞しさうに顔を染めて、うつむいたまま露路の奥に馳込んだ。金ぷらの折は袂に絡んで揺れた。

「そりや困りますよ。折角ですけれど、私は一寸用事があるのですから。」

正太郎は娘の姿が見えなくなると、氣がついて狼狽して斷つた。
「ママえゝやおまへんか、むさくるしい處ですが、貴方のやうな御大家のぼんぼんには、こんなところを見て置くも生きた學問やよつて。」
老人は持前の薄い唇をひるがへして、一人で嬉しさうにしやべつた。
「ママ一寸や、私とこも一度は貴方に見といて貰ひまほ。」
「さうですか、それぢやアお邪魔しませう。ですがほんとに一寸の間ですよ。」
正太郎は最初はあまり意外な成り行きに面喰らつて、如何していゝか困つて居たが、老人に執拗く勸められるうちに、兎に角あの娘の居る所なら、行つて見ようと思ふやうになつた。
「そやけどな、貴方驚きまつせ。偉らいせせこましいところやさかい。」
老人は正太郎を露路の奥へ導いた。
「オイオイ、お客様だつせ。」
つき當りの家の格子をあけながら、牧野老人が大きな聲で怒鳴るより早く、上り口の障子を靜にあけて、先刻の娘が出迎へた。
「サアサ、づんと上つとくんなはれ。かというて貴方のやうな人にづんと上がられたら、壁がつ

きぬけてお隣へ出てしまふもしれん。」

老人は何が嬉しいのか息を引いて笑つて、自分自身の安直な冗談に満足した。

玄關の三疊の次が、うす暗い六疊の茶の間で、それを通り抜けると八疊の、これも思ひ切つて暗い座敷に、正太郎は通された。

床の間には、誰の筆か詮議をしないでもいゝ程通俗な不動様の一軸がかゝり、その横手には白木の祭壇のやうなものがこしらへてあつて、半分捲き上た御簾の下からお燈明の灯がちらちらした。彼は金神様を信心してゐるのであつた。

「如何です三田さん。むさくるしい處だつしやろ、貴方驚いてだつしやろ。」

老人はその癖得意さうに、自分自身の家の座敷から、縁側から、その外の三坪にも足りない庭を眺め廻した。

「オイオイ。ぶぶなとあげんかいな。」

老人は饗應に氣忙しいといつた風で、一刻もじつとしてはゐたかつた。

「氣が利かんさかい、どもならん。」

とつぶやきながら立上らうとする處へ、次の間から娘がお茶を運んで來た。

「何してんのや、早うせんとあかんがな。」

と云ひながら、娘を待たずに手を延して正太郎に茶を勸めた。

「これは私の姪だす。詳しくいへば妹の子やハハハハハ。」

老人は自慢さうに娘を見、ふりかへつて正太郎を見た。

「こちらは、東京の三田さんの御令息や。目下のところは拙者の同僚や。」

彼は益々圖にのつて喋舌つては、一人で氣持よささうに笑つた。

「はじめまして。」

正太郎は變に固くなつて、何かしら咽喉に絡まつて居るやうな氣持に苦しみながら頭を下げた。娘は赤くなつて、默つておじぎをして、そのまま立つて行つた。後姿が襖の向ふに消えた時、

「アアあれはぢいさんの姪なのか。」

と正太郎は自分が、娘だと思つて居た誤解を正した。

彼は先刻からかれがれになつて居た咽喉をお茶で濡らして一息ついたが、手持無沙汰は如何しても免れる事が出來なかつた。ぢいさんは兎に角として、娘は自分が後をつけて來たのだと思つて居はしないだらうか、と考へると、正太郎は身體中汗になるやうな氣持がした。爲方が無いか

ら巻煙草をふかした。たださへ日當りの悪い部屋の中は、午後の日も傾き切つた時分なので、庭先の僅ばかり仰ぎ見られる空の色の、まだ明るいのにひきかへて、黄昏れてしまつた。その暗い部屋の中に、煙草の煙ばかりが、暫時退屈さうに立上つた。

「叔父さん、一寸。」

一二寸襖をあけて、娘は涼しい目ばかり出して呼んだ。

「なんだッ。」

老人が立つて行くと茶の間の方で、誰か年とつた女の聲とまじつて、何か諄々云ふのが聞えた。如何かして、うまい機會を見つけて歸らうと思ひながらも、老人や娘の様子が珍しくて、ゆつくり落着いて居度くもあつた。

「なんの埒も無いハハハハハ。」

笑ひながら又老人は座敷に歸つて來た。

「ナア三田さん。私はな、何もなくてもよろしいさかい、宅で一杯差上げようといふし、妹めはなんぼなんでも貴方のやうな御身分のある方の御子息はんに、こないなややこしいところで、婆の手料理が上げられるものかと、こないいうて押問答や。御大家の御子息さんなればこそ、私と

このやうなのが、かへつて風情やと私はいひまんのや。」

老人は若い正太郎を平常から、金持の息子だといふ簡單な理由で尊敬すると同時に、その金持の息子だといふ事が、即ち世間見ずの證據だと考へて子供扱ひにするのであつた。

「どないなもんだつしやろ。貴方私とこで一杯上つてくれてだつか。」

「難有う、けれども私はお腹が空いてませんよ。お午後が遲かつたものだから。」

正太郎は困つた顏をして、お腹を叩いて見せた。

「さう、さう、姪が貴方にお目にかかつたさうで、あのお方は大層飲まはるというてましてんハハハハハ。」

正太郎は腹の中迄見透された氣がして、赤面した。まだ殘つてゐる酒の名殘を、ごまかす事さへ出來ないで顏が火照つた。

「おひるには御馳走を上つたのやよつて、晩は私とこでぶぶ漬も、かへつてよろしゆおまつしやろ。」

老人は嵩にかかつて勸める。

「イエほんとに難有いのですが。」

「そんならひとつ、ぶらぶら散歩して、お腹をへらして、それから何處か他所へ御案内しませうか。」
それがもてなしだと思つて執拗くすすめる。
「エエ、それぢやアさうしませう。兎に角少し散歩でもしませうか。」
正太郎は斷り切れない心持になつて、納得した。
「そやけど、貴方はお友達の所に行きはりまんのやおまへんか。」
正太郎は不用意に自分の言つたごまかしの言葉を忘れてゐたのでハツトした。
「ナニそれは今日に限つた事では無いのです。別段用事ではないのですから。」
「左様か。そんなら又の時にして置きなはれ。」
老人は苦もなく滿足した。
「オイオイ、お喜世。」
「ヘイ。」
其處で立聞きしてゐたのかと疑はれる程、襖のかげの近いところで、濁つた女の聲が返事をした。

「三田さんは、矢張りこんな所では厭やよつて、好きな酒もよう咽喉を通らんというてはるさかい……。」

「嘘ですよ。」

正太郎が半分は一人言のやうに、牧野老人を止めようとした時、それが切つかけだつたかのやうに襖をあけて、年とつた女が現はれた。極端に禮儀を保たうとする時に必ず浮ぶ可笑しさを、此の女は適確に持つて居た。膝で滑り込むやうに入つて來て、又叮嚀に襖をしめると、そこで正面へ向き直つて、正太郎を上目で見ながら頭を下げた。

「初にお目にかかりまんが、兄が大層御世話になりますさうで、お噂は度々うかがつて居りました。ほんまにようまあ、私とこのやうな、こないなけつたいなところへ來とおくんなはりましたなア。」

牧野老人を女にして、目方を殖したやうな婆さんは、肥つた膝頭の邊のうまく合はない着物を氣にしながら、畏まつて、しかし雄辯に話した。

「折角お越しやしたのだすよつて、何かおもてなしもと思ひまんのやけど、こないな所ではかへつて失禮やと思ひましてなア、それよりか何處かへ御案内申上げた方が、貴方さんも御迷惑が少

なからうと、こない云うてましたのや。」
「イイエ、そんな、迷惑なんて事があるもんですか。」
正太郎は、到底何を云つても此方の心持は飲み込んで呉れさうもない相手の唇の、厚ぼつたい癖に輕快に動くのを見守つた。老人の妹といへば、これがあの娘の母親に違ひないと考へると、皺でたるんだ目元の何處かに愛嬌のあるのさへ、流石に親子だと感心した。あの娘も年をとつたら、こんなに洒々したお喋舌家になるのかしらと、ふと考へて眉をひそめた。彼は女の年をとつたの程憎む可きものはないと平生から思つて居た。
「それでもまあ、これに懲りずに又お遊びにおいでやす。兄も御承知の通りの呑氣やださかい、若いお方が一番好きやいうてなア。」
「サアサ、事がきまつたらぶらぶら出まひようか。私は大分腹も北山や。」
牧野老人は、婆さんのしやべつて居るのを横合から奪つて、煙管を筒に納めると、正太郎を促して立上つた。
「貴方はん、まあお歸りたすかいな。ほんまにおかまひも致しまへんで。」
婆さんは又叮嚀過る程長々とおじぎをしながら、一人でしやべり立てるので、挨拶の拙い正太

郎は殆ど何も云ふ事が出來ずに默つて二三べん頭を下げた。
「房ちやん、お立ちだつせ。」
濁つた聲を重々しく、婆さんは娘を呼んだ。
牧野老人の後から、茶の間を通つて玄關に出ると、娘は其處に下駄を揃へて待つて居た。正太郎は、黄昏の障子のかげに、小さくかしこまつてゐる娘をいとしく思ひながらも、何と挨拶の爲様も無いので、默つて下駄を穿かうとした。
「マアマア、貴方お待ちやす。房ちやん、一寸拭いてあげなはれ。偉い泥だらけや。」
婆さんは親切めかして、眉をひそめて下駄を見た。
「その上ちよつと、前の方が缺けたるがな。三田さんは、こないな事は、ちつとも構ひなはらんさかいなア。」
牧野老人も誘はれて、その穿きへらして横に曲つた上、平生散歩の時に、往來の石ころを蹴飛ばす癖のある正太郎の、安物の下駄を珍しさうに眺めた。
「この坊々は、いたづら坊や。」
婆さんは調子づいて、今度は思ひ切つて馴々しい冗談まで口に滑らし、仰山に愛嬌づくつて笑

つた。
娘は勝手元から雜巾を持つて來てまるまる肥つた二の腕迄見せて、正太郎の下駄を拭いた。
「どうもおそれ入ります。」
彼はその下駄を穿いて、又其處で別れ際の挨拶をして、漸く格子の外に出た。
「そんなら一寸行つて來るぜ。」
老人はさう云ひ殘して格子をしめると、正太郎と肩を並べて嬉しさうに歩き出した。
夕日のあとの薄く殘つて居る空の下の、せせこましい町は、もう黄昏れて、店々の灯は競つて輝き出した。大通りの、先刻娘も正太郎も立停つた活動寫眞は、電氣燈で圍まれて、荒唐無稽な繪看板は、一層色彩を強烈にして來た。日中は春めいても來たものゝ、夕暮はまだ寒い風が出て、晝間の酒でぼやけてしまつた正太郎には、却つて冷々して氣持がよかつた。
「何處に行きまほか。」
老人は電車通りに出ると、町角に立停つて聞いた。
「何處つて何處も知りませんから、何處へでも連れて行つて下さい。」
正太郎はそのまゝ歩いて居度い氣持で、何處でも特別な家になんか行き度なかつた。それより

も廣い野原の草の中で、夕空を見て寢ころんで居度いやうな氣がした。
「何處へでもといふたかて、相手が三田さんの若旦那はんやさかい、うどん屋や關東だきにも行かれまへんやろ。」
「結構ですとも。關東だきは私のお得意なんですよ。」
「偉さうに云ひなんな。」
老人はまるでそんな事は嘘だといふやうに、目の前の金持の息子を見て笑つた。正太郎はいつも坊々扱ひされる時に感じる不平と窮屈に悩まされた。
「ほんとに何處でもいゝんですよ。私はあんまりお腹は減つてゐないのですから、なるたけ手輕な處にして下さい。」
「手輕というて。そんなら私のちよくちよく行くやうな家でも構めしまへんか。」
「結構ですとも。」
「けどな、それにしてもあんまりちいぽけな家だすよつて。」
「構ふもんですか。一體牧野さんが私を金持だと思つてゐるのが間違ひですよ。」
「そやかて貴方さんは金持やないか。」

「冗談云つてら。」
正太郎は腹の中でつぶやきながら、懐中の紙入の中の目下極めて乏しいのを思ひ出して癪に障つた。
「貴方の行きつけの家が一番いゝぢやありませんか。其處に行きませうよ。」
「鳥屋だつせ、構(か)めしまへんか。」
「よござんすとも。」
「ほんまに。」
「エエ。」
老人は其處で初めて安心して歩き出した。
「散歩やさかい、電車には乘らんと置きませう。」
云ひながらその電車の線路に添つて、先刻正太郎が娘の後を追つたのと同じ道を逆に進んだ。
十數分の後、牧野老人は曾根崎の新地に近い、ささやかな鳥屋に、正太郎を連れ込んだ。
「お出でやす、お上りやす。」
三四人帳場にかたまつて居た女中達は、一齊に甲走(かんばし)つた聲を出して出迎へるので、正太郎は缺

けた下駄を、些とばかり羞かしいと思ひながら、牧野老人の後について二階へ上つた。

「マア旦那はんお久しうおまんな。」

座敷へ通ると、案内した女中は、お茶を運んで來て、老人と正太郎の取合せを、不思議さうに眺めながら言つた。大きな丸髷を頂いた鬢の思ひ切つてふくらんだ、平べつたい顔の白粉だらけの女を、正太郎は物珍しく思つた。

「いつも御繁昌でよろしうおまんな。今日はこないな若い人と一緒やさかい、たんと御馳走してんか。」

「しまひよ。」

女中は大きな口をちひさくして笑つた。

「お誂は。」

「三田さんは牛肉あがつてだつか。それとも鳥がよろしうおまつか。」

「私は牛肉はあんまり好きません。」

「そんなら鳥にしときまほか。」

女中はもうそれと定つたやうに、膝を浮かせながら云つた。

「それから御酒や。」
老人は親指と食指を小器用に使つて、盃を口へ運ぶ型を見せながら註文した。
「へイ。」
拔群に身の丈も、幅も大きい女中は、意外にも細い優しい聲で返事をしながら、梯子段を下りて行つた。
「お二人さん、御酒で、鳥ア。」
直ぐに階下の方で、その可愛らしい聲が高く聞えた。
「こないなとこであきまへん。」
老人は煙管を取出しながら、正太郎の氣を兼る様子に見えた。
「いゝ家ぢやありませんか、小ざつぱりしてゐて。」
正太郎はお愛想を云ひながら、そこいらを見廻した。廊下を隔てた向ふには廣間があるらしく、そつちには客がもう立て込んで居ると見えて入り交じつた男女の聲が、牛鍋の煮える臭ひと一緒に溢れて來たが、此の部屋は二組の客を入れるばかりで、しかも相客はゐなかつた。すき焼屋に特有の蒸れるやうな火の氣と、鳥獸の肉のいびられる、あくどい臭ひが、正太郎の顔を火照らせ

て、飲まないうちから彼は醉つてしまつた。
「お待遠さま。」
女中はお銚子を持つて上つて來て勸めた。
かんてきの上の鍋の中の鳥は、見て居る間に沸々たぎつて、油の強い臭ひは部屋中に漲つた。
「マ、マアひとつ頂きませうか。」
牧野老人は押頂くやうな眞似をして、獻酬に馴れない正太郎の武骨な手から盃を受けて、さもうまさうに舌打ちして飲んだ。
「三田さんはちよつとも飲みはらへんかと思うてましたら、貴方偉ういかはりますつてなア。」
老人は盃を返しながら云つた。
「誰がそんな事を云ひました。」
「誰がつて、私とこの姪が今日偶然にも、あこの金ぷら屋で御一緒だつたさうやおまへんか。三田さんいふ方はお一人で、大層上つてだしたと云うてましてん。」
「三田さん。そんなら私もひとつ頂きませうか。」
女中は正太郎の名を聞覺えたのを愛嬌にして、たくましい腕を差延した。

「私は飲めやしないんだよ。直きに醉拂つて、ぶつ倒れちまふぜ。」
といひながらも、矢張り彼は女中に盃をさした。
「倒れたら私が介抱してあげまつさ。」
「イヤもう若い人にはかなはんわ。」
老人はいゝきげんで、一人で大きな口を開いて笑つた。月並を云つてるなと思ひながら、正太郎も、數重なる酒が、晝間の醉迄呼返して、少し頭がふらふらして來た。見てゐるうちに二三本お銚子の空になるのを眺めながら、彼は場末の町の露路の奥の、老人の家を物珍しく回想した。
生れながらにだゞつ廣い家に育つた正太郎は、子供の時分から、ちひさい家に對して一種不可思議な憧憬を持つて居た。友だちの家に遊びに行つて、小人數のつゝましやかな家内の様を見ると、萬事につけて大がゝりな自分の家に比べて、いかにも溫く感じられて羨ましかつた。一言物をいふのも四角張つて、手をついて云ふ召使などといふものゝ居無い家の有様は、殊に彼に懷しいものに思はれた。親が自分で臺所に出て、煮物をするのを、姉や妹も手傳つて、夕餉の支度をするのを見ると、そんな家に生れた友だちが憎らしい程羨ましかつた。家中で一番狹い自分の部屋さへ八疊の間で、寒い程天井の高い我家の、何處に溫情がはぐくまれるものかと、疑ひ深い少

年期の心は、人が見て幸福過る位幸福だと思ふ彼の身の上を、自分自身では、つくづく果敢なんだ。彼は今日見た牧野老人の家さへ、自分の家に比べては、遥に懐しいものに思はれたのである。

それにしても老人には妻も子もないのだらうか、妹だといふ婆さんと、その娘のお房が同居してゐるばかりなのだらうか、正太郎は第一に、娘を中心として、牧野の家を考へなければならなかつた。

「三田さん、貴方どないしたのや。ちよつともいきまへんな。」

「旦那はん、あんたのとこはお眼鏡だんな。」

正太郎は催促されて目の前の盃の冷くなつた酒を飲んで老人に差した。

「こちらはな、こないなところへ來られるやうな輕い身分の方やあれへんぜ。」

老人は赤くなつた顔を突出して女中に云つた。

「今日はお忍びや、お忍びで私とこに來てくれはつたのや。」

「へエ、こちらが。」

女中は何が何だかわからないで、目を見張つて正太郎と老人を見比べた。

「左様や々々々。偉いお金持の坊々だつせ。そやけどな、私とは又お友達やさかいハハハハハハハ。なあ三田さん。」

正太郎は眞赤に醉拂ひながらも、苦り切つて手持無沙汰に鳥の肉を突ついて居た。

「なあ三田さん。いかに貧富の相違はあつても、貴方と私は同僚やさかい、ほんまに友だちと思うて、よろしう頼みまつせ。瘦せても、枯れても卅年勤續の牧野三次郎や。學問は無うてもそろばんなら、貴方より達者だつせハハハハハハ。」

老人は且飲み、且喰ひながら一人でしやべつた。

「お銚子々々々。」

とふら／＼した手を振つて女中に命じた。

「まだ上つてだつか。」

「ヘイ、まだ上りまつせ。金ならなんぼでもありまんね。私には三田さんがついてるさかい、氣丈夫なもんや。」

正太郎は二言目には自分を持上られるのが、擽つたくて厭だつたが、これも醉ひの上つた淡然とした頭腦は、老人の醉拂つた態度が存外可愛らしくも思はれた。

「牧野さんは、奥さんは無いのですか。」

彼は先刻から聞かう聞かうと思つて居た事を、思ひ切つて尋ねて見た。

「嬶だつか、夙の昔に亡くなりましてん。」

「子供さんは。」

「そないなものはあれしまへん。」

老人は何の苦もなく答へながら、しきりに鍋の中をあさつた。

「さうすると、なんですか。先刻の貴方の妹だつていふ人は。」

正太郎は聞き度いことの聞きにくいのに悩んで、これも中途で言葉を切つて、盃を口に觸れた。

「アアあれだつか。あれは私の妹だんね、あれも不幸な女たしてな、早うに亭主に死なれましたよつて、私とこへ娘と一緒に寄食人になりましたのんや。もう一人男の子があつて、これは商船會社の船に乗つてまんね。私等兄妹は揃うてやもめ同志だがな。」

「それでも、あの人にはそんな息子さんや、先刻の娘さんがある丈幸福ですね。」

正太郎は、やつとの思ひで本題に入つたので、安心して又盃を重ねた。

「それだけ私より苦勞も多うおまつしやろ。」

老人は簡單に答へて、恰度其時おかはりのお銚子を持つて來た女中に酌をさせて、盃のふちをなめた。
「大層お話がもてまんな。」
女中は正太郎の方にも手を延して酒をすゝめた。
「矢張り男同志の方が酒はうまいやねえ牧野さん、二人で話したがら飲みませうよ。」
正太郎は自分でも驚く程今夜は飲める酒に、どの位醉つてゐるのか見當もつかないのであつたが、心の底は如何しても、もつとあの娘の事を聞かないでは承知の出來ない不滿足がかたまつて居た。
「マアマ、偉い云はれよう。ほんなら私は去にまほか。」
「アア行つてくれ、邪魔だ〻〻〻。」
正太郎は冗談らしく云つた。
「あの偉らさうに云はること。」
女中は捨臺辭を殘して、空のお銚子を持つて、梯子段を下りて行つた。
「ねえ、私は澤山は飲めませんけれど、酒は女のお酌なんか居無い方が氣持がよござんすね。」

「左様々々。」

老人は、そんな事はどうでもいゝといふ風で、しきりに手酌で飲んで居る。

「だから今日の晝も、私は一人で飲んで居ましたよ。」

正太郎は、無理にも話を娘の方へ持つて行き度くて、きつかけを拵へるのに苦心した。

「左様だすつてな。房がいうてましてん。」

「エヱ私は一人だつたけれど、あの人は誰かお連れがありましたよ。若い男の。」

正太郎は、老人を話に引入れようと努めながら、自分の大膽に落着いた態度と熱心さに、吾ながら驚いた。

「あゝ田附はんだつしやろ。ありや、姪の出てゐる會社の人でな、早稲田大學の學士さんだつせ、偉い房を最負にしてくれはりまんのや。そやけどな、私はそれが面白う無いと思ひまんね。」

「へヱ、私ははじめは御夫婦かと思ひましたよ。」

正太郎は多少厭味つたらしく云つてみた。

「左様か。なんだしらん、先方ではあないなものでもどうかしようと思うたるらしう見えまんねやが、私はそないな事は氣に喰はんと思うとりまんね。私がしつかりしとつたら、一人の姪を奉

公に出さんかてえゝのやけれど、此の頃はなア、何處の娘も、銀行だ、會社だいうて小遣銭を稼ぎくさるよつて妹もついその氣になつて出してまんのや。けどなア、同じ會社の社員が、受付の娘の家へ遊びに來る、つれだつて活動に行く、一緒に物を喰べに行く、とこないしてごらんなはれ、會社の風儀が保たれまへんわ。」

老人は、醉へば、醉ふ程滑になるらしい舌で唇を嘗めながら、喋舌つては飲んだ。

「考へても見なはれ。うちの銀行にしても、あの狆ころをみんなして張合うてみなはれ、銀行の體面にかかはりまんがな。」

「まさかあの狆ころを。」

正太郎は銀行の受付の、その綽名そつくりの顔を思ひ出して吹出した。

「イイエ、これは物の譬へだつせ。よろしか。私は學問も何も無い男やけど、物の道理はわきまへたる。他人の娘を誘ひ出して、給金は俺が心得てる、あげてやる、こない偉さうに云ひくさるのが、土臺氣に喰ひまへん。第一妹めが、あんな奴にだまされてるのが阿呆やおまへんか。」

老人はもう、ろれつが廻らなくなつて、首を虎にして、同じやうな事を繰返した。

「怪しからん奴だ。」

正太郎は、あの頰骨の高い、黄色い顏の、東北辯の男の姿を思ひ出して、その傲慢な態度を憎む忿懣に、思はずしらず拳骨で食臺を叩いた。突然、堪へ切れない程、醉が頭に上つて目がくらくらした。

「三田さん、三田さん。あんたどないしたのや。氣分が惡うおまつか。」

これも醉つて居る癖に、老人は正太郎の崩れた姿勢を見て、眉を寄せて氣づかつた。

「ナアニまた醉つてやしない。」

正太郎は答へながら、それを證明するつもりで、胡坐だつたのを一先づ立上つて坐り直さうとしたが、彼はもう身體の中心を失つてゐた。しかしその漂ふやうな心持の中にも、自分は今一生の大事に遭遇して、しかもそれを押通して行く勇士のやうに壯快な心地を感じて居た。

「實に怪しからん奴だ。私はさういふ種類の人間が一番嫌ひですよ。此の世の中の人間の善良な心持を汚損する奴だ。」

正太郎はどうしても、彼の大男を罵る事を抑へかねる心持のまにまに醉つてゐた。

「そやとも、そやとも、あないな奴に大事の娃を玩弄にされて、どうするもんか。第一わしが不承知や。」

老人も調子に乘つて相槌を打つた。
「私は個人としてその男は知らない。しかし話を聞く丈でも怪しからないぢやありませんか。第一此の吾々の社會の存立の爲めに、さういふ卑劣な奴は許して置けない。」
正太郎の、酒で鈍くなつた頭には、彼の廻らない舌で力んでゐる言葉がいかにも理路整然としたもののやうに思はれた。社會の善良なる風俗を害するものとして、彼の東北辯の男を憎むといふのは、自分一個の私情から排斥するといふよりも遙に立派な事のやうに考へられた。
「こいつは巧い臺辭だ。」
と正太郎は一人で感服したが、同時に又そんな口實を見つけたのは、自分の方が卑怯なんだと思はないわけにも行かなかつた。彼はそんな事を考へると不愉快なので、それを紛らす爲めに又酒を飲んだ。
けれどもどうも氣になるのは、いかに自分が彼の男を罵つても、肝腎の娘が彼の男を慕つて居るとすれば爲方が無い。今日の晝、金ぷら屋で見た樣子では、娘の心も旣にあの男の方へ傾いて居るやうに疑はれる。彼は面白くない酒をしきりに飲んだ。
「一體あの男とお房さんといふ人はもう約束でも出來てゐるのですか。」

彼は思ひ切つて、酒の力を借りて云つた。身體を支へて居る力が無くなつて、横倒しになりさうなのを、食臺に肱をついて危く堪へた。
「なんの、そないな約束が出來てるもんで。」
老人も冷くなつた酒に、習慣的に口をつけながら、
「たとへばそないな約束があつたかて、此の私が不承知や。瘦せても枯ても牧野三次郎だす。」
「偉い。それでこそ牧野さんだ。」
正太郎は老人に盃を差した。
「そんな下等な男に、貴方の姪をやるなんて、それは人道問題だ。」
彼は又、うまい文句を思ひついたなと、自分の機智を喜んだ。
「ほんまに人道問題や。」
老人も肩肱を張つて力みながら、正太郎に盃を返した。
「ほんとにさうだ。そんな男にやるんぢやありませんよ。」
「阿呆らしい。何時私がやると云ひました。」
調子づいてしまつた老人は、自分の潔白な精神を疑はれるのが口惜しさうに、正太郎に突かか

るやうに振舞つた。
彼も正太郎もづぶづぶに醉拂つて、何時の間にか手を取合つて、抱つくやうに膝と膝とをつき合せてゐた。
「斷じてやらないね。」
「くどう云ひなんな。」
「よし、若しあんな奴にやる位なら僕にくれ給へ。僕に。」
正太郎は昂然として云つた。
「阿呆らしい。貴方(あんた)のやうな方にあないな女郎(めらう)を貰うて貰へるかどうか、考へても見とおくんたはれヘツヘツヘツヘツ。」
老人はとろんこの目を据ゑて、正太郎の顏を見詰めながら、さも輕蔑したやうに笑つた。正太郎は、自分をちやらつぽこをいふ人間だと思はれたなと邪推して、その笑ひ方が癪に障つた。
「どうして私ぢやいけないんだ。」
彼は一生懸命になつて、身體の中心を取りながら難詰した。
「どうしてというて。阿呆らしい。貴方のやうな。身分のある方に、私とこの姪などが嫁さんに

行かれはしまへんがな。」
老人は判り切つた事を云つて、嘲弄はれたとでも思つたやうに、これも不機嫌な顔つきをした。
「身分がある。身分なんかないぢやないか。御承知の通りの安月給で、下宿住居をして居る腰辨なんだ。私は。ね、さうでせう。」
「そらあかん。」
老人は正太郎を抱き寄せて背中を叩いた。
「そらあかん。成程只今こそ安月給取だつしやろ。腰辨だつしやろ。けどな、貴方は財産家のしかも一人息子や。そんなものは入らんというたかて、自然と百萬長者になる御身分やおまへんか。釣合はぬは不縁のもと、提灯に釣鐘だすよつてなア。第一貴方の御兩親が御不承知や。華族様でも、朝鮮の宮様でも、貰はうと思へば貰へる身分で、私ら風情の姪を貰はうといふて、土臺世間が承知しまへんが。」
彼は酒に乾く唇をぺろぺろなめながら、正太郎を説服する興味に沒入してしまつた。
「牧野さん、そりアいけない。貴方にも似合はない事ぢやありませんか。成程私の親は金持かもしれない。けれども、金持の息子が金持で無い人の娘を貰つて惡いつていふ理窟はないぢやあり

ませんか。自分が好きで、愛した女なら、それを女房にするのが最も人情に適つた事なんだ。現に私の兩親は僕の好きな人なら誰でもいい、身分なんか何だつて構はない、藝者だつて、女郎だつて構はないといふんです。又それが當然の事なんだ。」

正太郎は此の朝届いた母の手紙を思ひ出して、それを誇張してしやべつた。

「流石に貴方は偉い。」

老人はさも感に堪へないといふ風にうなだれて、重々しい口調で云ひながら、正太郎の手を強く握つて振つた。

「ほんまだつせ。ふだんから私は、貴方丈は銀行の他の若手とは段違ひやと、ひそかに目をつけて居ましたんだつせ。牧野三次郎感服仕つた。」

どうしたのか老人は、雙眼からぽろぽろ涙をこぼして、更に更に強く正太郎の手を握りしめて放さなかつた。

「よろしい。私の姪は貴方にあげた。貴方に貰うて貰ひますわ。」

老人は眞正面から正太郎の顔を見詰めたが、その醉つて据つた目から、涙は止度なく流れて落ちた。

「難有う。」
正太郎は感極まつた樣子を見せて老人の手を握りかへした。
「そのかはり、貴方見捨てたらあきまへんぜ。」
「誰が見捨てるもんか。終生變らない僕の妻だ。」
正太郎は自分でも少し芝居がかつてゐるなと氣がつきながら、どうしても其の場は、さういふせりふやしぐさをしなければならない氣がした。
「ほんまに。」
「くどい。」
正太郎は叱るやうに云ひ放つたが、その癖牧野老人が、あまり眞面目に熱心になつて來たので、心中少し不安になつた。けれどもその場合、自分自身の心を疑ふ事は、彼にとつて此の上もない苦痛だつた。
「酒だ、酒だ。」
正太郎は老人の手を振放して、大きな聲で怒鳴りながら手を叩いた。
「貴方もうおやめなはれ、酔つとつてだんがな。」

老人は、あつけにとられて正太郎を見た。
「ナニもう一本きりです。兎に角こんな目出度い事は無いのだから、祝盃をあげなくちやならない。」
正太郎はさも心底から滿足したといふ風を、故意とつくつて見せて、醉つた身體を立て直した。
「ヘイお呼びでつか。」
先刻の女中が、氣の無い顏をして上つて來た。
「アア酒だ。」
「御酒だつか。」
女中は躊躇つて立兼てゐた。
「もう一本きりだよ。それで歸るから。それから一緒におあいそしておくれ。」
「ヘイ。」
女中は重量のたつぷりある身體を氣倦さうに起して、氣の無い返事をして下りて行つた。
直ぐに新規のお銚子を持つて、その女中は上つて來た。
「大きに。」

さういつて盆にのせた勘定書を、正太郎の膝もとに押して寄越した。
「そらいかん、三田さん。今日の勘定は私や。」
居眠りをして居るやうな恰好で、前後左右に上半身動かして居た老人は、狼狽〳〵手を延して書付の載つてゐる盆を引寄せようとしたが、身體が自由にきかないので、疊の上につんのめつてしまつた。
「マアいいぢやありませんか。今日は僕の心祝ですから、任しといて下さい。」
「そらあかん、そらあかん。」
老人は横になつた身體を起す氣力もなく、ただ口でばかり正太郎を遮つた。
「大きに。」
女中は正太郎から受取つた勘定を貰つて、又階下に下りて行つた。
「そらあかん。私がこないな所に案内しといて……」
老人は何か口の中でつぶやきながら、いゝ氣持で肱枕をして、眠りさうに見えた。
「牧野さん、牧野さん。いゝ加減に歸らうぢやありませんか。大分夜も更けましたぜ。」
正太郎は向ふの座敷も、いつの間にか靜になつたのに氣が付いて、時計を出して見た。

「エヱ歸りませう。」
老人は、答へは答へたものの、起上がる氣力は全くなかつた。
「サア、ぐつと一杯飮んで歸りませう。」
正太郎は相手の肩に手をかけて搖り起した。さういふ風に力を入れると、胸先に何か込みあげて來て、今にも醜態を現はしさうな豫感がした。
「よろしい、わかつた。歸りませう。」
老人は無理に起されて、ふらふらしながら坐り直して、欠伸をした。
「サ、一杯グツト引掛けて行きませう。祝盃です。」
「よろしい、承知だ。」
老人は眠たい目を無理に見開いて盃を取つた。
「いけないいけない。祝盃はコツプに限る。そこの茶碗で飮みませう。」
正太郎は、相手が半分無意識だと思ふと氣が強くなつて、自分の醉つてゐる事なんか忘れてしまつた。
「茶碗。結構。」

老人は圖拔けて大きな聲を出して冷くなつた御飯の入つて居るお櫃と並んだ茶碗をとつて腕を差延した。
「オツトト、熱いおかんやなア。」
正太郎の酌ぐ酒を、老人は夢中で飲んだ。
「貴方も茶碗だつか。」
「勿論。」
正太郎もなみなみと受けたが、口の邊りに持つて行つただけで、強烈な酒の匂ひはツント鼻を刺して、胸が惡くなつた。
「今日の事はほんまだつしやろ。」
老人はとろんこの目を見張つて、正太郎を疑ひ深く見た。
「嘘だと思つてるんですか。」
正太郎はわざと突慳どんな物言ひをして、老人を見返したが、その時の調子で、手にした茶碗の酒を、半分ばかり一息に飲んだ。づきんと胸に堪へて流れ込んだが、先刻から溜つてゐる酒と一緒になつて、彼の全身を馳け廻つた。

「サア、綺麗に飲んで歸ろ。」

今度は老人の方からすすんで出て殘りの酒を、二人の茶碗につぎ盡し、正太郎を促して飲ませた。

「構ふもんか、飲んじまへ。」

彼は目をつぶつて、無我夢中で仰むいて、一滴も殘さずに飲み干した。

「美事美事。」

老人も底を見せた茶碗の雫を切つた。

「サ、歸ろ。」

ふらふら立上つたかと思ふと、又ばつたり倒れたが、やうやく立つて、牧野老人は先きに歩き出した。續いて正太郎も立上りはしたものの、彼は内部から胸を壓して來る吐氣に息も出來ない程苦しんで、梯子段を下りる一歩々々の足取りさへ自由には動かなかつた。

「おかへりだつか。」

肥つた女中は可愛らしい聲で、帳場から立つて來て、

「危なうおまつせ。」

と二人の様子を氣にして眉をひそめた。
「だんない、だんない、まだしつかりしたもんや。」
老人は下駄を突掛けて、千鳥足を踏みしめて先きに出た。
「いづれまた。」
女中が甲走つた聲でいふのを後にして、正太郎も下駄の上に足を下したつもりだつたが、足場がきまらないで踏みかへした。
「オオ危な。」
うしろから女中に胸を支へられた時、今の今迄堪へて居た吐氣は、ひとたまりも無くほとばしつて、正太郎は女中の肥つた手から、自分の着物へかけて、胃の腑で腐つた酒を、瀧のやうに吐き出した。
「えらいこつちや。」
女中の聲がかすかに耳に聞えたばかりで、正太郎は何が何だかわからなかつた。渦巻の中に巻き込まれたやうに目がくらんで、頭の中は滅茶苦茶に波を打つた。
無闇に多勢の人間が――多分それは、その家の女中だつたらう――集まつて來て、介抱してゐ

る中で、

「しツかりせい、しつかりせい。」

と牧野老人の醉つた聲が聞えたやうに思ふけれど、彼は後から後から込みあげて來る吐氣に、前後もしらず身を揉んだ。しまひには吐く物もなくなつて、苦しい苦しい胃液が、非常なる努力の後で、僅に口の外に出てくれた。彼はぐつたりして、人の手の中に身を任せた。

「旦那々々。」

ふと氣がつくと、彼は車の上に、半分外にはみ出して乘つかつてゐた。見覺えのある町らしいところだとは思つたが、それが何處だか明確にはわからなかつた。人つ子一人通らない、暗い景色から、夜も更けてゐることだけは疑ひも無かつた。

「旦那。まだ先きだつか。」

車夫は足を止めて、振かへつて車上の彼を呼びさました。

「もう少し先きだ。」

正太郎は出たらめに怒鳴つて、又ぐつたりと仰向いた。高い高い、ぐらぐらゆらいでゐる大空に、星が冷く光つて居た。兎に角うちへ歸るみちには違ひないと、彼は思つて安心して、又目を

つぶつた。

「旦那々々。」

二度目に呼び掛けられて、ハツとした時、車は下宿の前に止まつてゐた。

「いくらだ。」

彼は車から下りた餘勢で、つんのめりさうになつたのを危く踏み堪へながら、大きな聲を出した。

「エヘヘ、おぼしめしで。」

「おぼしめしたアいくらだ。」

正太郎は馬鹿にされるやうな氣がしながら、長くかかづらつてゐるのは羞かしいと思つて、一圓札の皺くちやになつたのを、車夫の手の平に置いた。

「へい大きに。」

車夫は、いぶかしさうに札を軒燈ですかして見た上で、腹かけに納めた。

「大きに。」

もう一度頭を下げてから、空車を引いて立去つた。

正太郎は門のくぐりをあけ、玄關の障子をあけて、蹣跚として二階の梯子段を上つた。足音は、高く高く寢靜まつた家中に響いた。

やうやくの事で自分の部屋にかへると、寒さうに敷かれた蒲團が主人を待つて居た。彼は枕元の火の消えた火鉢の上の鐵瓶をとつて、仰向いてその口から飲んだ。吐いて吐いて吐き盡した腹の中に、冷い湯ざましは難有く流れ込んでくれた。いくら飲んでも、いくら飲んでも、飲み足りなく思はれたが、間も無く鐵瓶の中には、一雫も殘らなくなつた。彼はその一滴も無い鐵瓶の存在が癪に障つて、疊の上にはふり出した。

さうして、着のみ着のままで、蒲團の中にもぐり込んだ。羽織を脫ぐだけの努力さへ、彼には到底思ひも及ばなかつた。

枕に頭をつけるや否や、今日の日曜の一日に、どんな事が起つたか、さうしてその出來事から、彼の明日の生活が、どういふ風に導かれるか、一切そんなわづらはしい事を考へる氣力は無く、ただ單に吐いて吐いて吐き盡した後の、疲勞した身體を、存外心地よく思ひながら、忽ちにして熟睡した。

次の日曜

翌る朝、正太郎は骨までも腐つた獸のやうに眠つて居た。
「三田さん――三田さん。」
近々と枕もとに坐つて、彼を喚起したのは下宿の女房さんだつた。
「貴方どないしやはりました。今日は休んでだつか。」
いつの間に雨戸を開けたのか、東向きの窓の障子には、一杯に日が當り、明るい光線を受けた女房の幅の廣い顔が、たしなめ顔に眉をひそめて、鈍り切つた彼の目の前に、意地惡く蔓延つてゐた。
「お出かけやつたら、早うせんとあきまへんぜ。」
女房は叱責するやうな調子で言ひ殘して立ち上つた。その手には昨夜正太郎が飲み干した空の鐵瓶がぶらぶらしてゐた。
「あんたお休みやおまへんやろ。」

「今起きるよ――うるさいな。」
正太郎は、うるさいな丈を口の中でごまかして、夜着を引かぶるとくるりと向を變へて、女房さんの方に背中を向けて床の中に潛(もぐ)つた。
「お休みならお休みでよろしうおまんねやけどな。」
廊下に出て行きながら、
「貴方昨夜は偉い醉拂つてでしたなあ。」
と捨臺詞(すてぜりふ)を殘して梯子段を下りて行つた。その言葉の調子が、いかにも自分をさげすんだもののやうに思はれて、正太郎は一層夜着の中に潛り込んだ。頭は今でもがんがん熱く、顔は酒の爲めにむくんでしまつたやうな不愉快な氣持を感じながら、それよりも更に力強い眠たさに、彼は又何時かしら寢込んでしまつた。
「三田さん。」
誰か又人の氣配に驚いてうす目を開くと、今度は女中が、彼の肩に手を掛けて搖振(ゆすぶ)つてゐた。
「貴方もう遲うおまつせ。」
「知つてるよ。」

正太郎は舌うちして、誰が起きてやるもんかと云ふやうな、あても無い反抗心から、又しても夜着を引かぶつた。

「ほんまに休んでだんならよろしうおますけどな、それでなかつたらもう十一時だつせ。」

女中迄も馬鹿にした口調で、

「仰山お酒を飲んで、お頭でも痛んでだつしやろ。」

と覗き込んで云つた。

「今起きるつたら起きるよ。」

酒の爲めに弱つて居るのだと思はれるのが残念だつたので、いきなり夜着をはねのけると、勢ひよく半身を起したが、激しい運動が全身に傳はると、胸にこみあげて來る吐氣が、咽喉の上迄苦い胃液を押上げて來た。默つてゐるとむかむか來さうなので、餘儀無く彼は立上つたが、横になつてゐる時は大丈夫だと思つてゐた足腰が、立上つて見ると意氣地無くきかなくなつて居て、重たい頭を支へ兼ねてふらふらした。

「危なうおまつせ。」

「大丈夫だよ。」

氣づかつて附添つて來る女中を振拂ひ、彼はわざと大跨で厠に急いだ。がたぴしする戸に手を掛けた時、激しい勢ひで逆行して來た胃の腑の物は、口中いつぱいに渦を巻いて、堪へようとしても堪へ切れず、たらたらと口尻から流れ出したが、馳込むと同時に、汚い壁に額を押付けて、朝顏の中にのめずり込むやうな姿勢で、ひとたまりもなく吐いた。昨夜あれ程吐いて吐いて吐き盡したつもりでゐたのに、まだ吐く物が殘つてゐるのには驚いた。幾度も幾度も催して來る度に口中に指を突込んで、無理にも胃の腑をさらつてしまはうと踠いた揚句、彼は全く吐く物が無くなつた安心と疲勞に、厠の中だといふ事も忘れて、大きな口をあいて深呼吸をした。

「三田さん、貴方吐いてだつか。」

戸の外から女中が聲をかけたので、彼は出るにも出られなくなつたが、爲方が無いから無理にも不機嫌な佛頂面をして廊下に出た。

「苦しい事おまへんか。」

「大丈夫だつたら。」

氣づかはれれば氣づかはれる程じれつたくて、正太郎は室に入ると鐵瓶の湯を茶碗に注いでぐつと飲んだ。

「熱ツツ。」

煮えくりかへつて居た熱湯に舌を燒いて、思はず知らず茶碗を取落した。

「三田さん、聢りしなはれや。」

女中は舌うちしながら、ありあはせの拭巾で、正太郎の膝から疊にかけて溢れた湯を拭いた。

「ママ、羽織も足袋も脫がんとやすみはつてだんな。この皺だらけつたら。貴方昨夜は何處へ行つたのや。」

女中は自分自身の事のやうに忌々しさうな口吻で、ぶつぶつ呟きながら蒲團をあげ始めた。

あけ放した窓にぐつたりと凭れかかつて朝の空を仰ぎ見る正太郎には、何の氣力も殘つてはゐなかつた。身支度をして銀行に行かなければならない事も、旣に出勤時間は夙くに過ぎてしまつてゐる事も承知しながら、顏を洗ひに行くのさへ、彼にとつては何よりも面倒臭かつた。お坊ちやん扱ひされるのが嫌で、勤務の方は無理にも整然々々と片附けてゆく日頃の負惜みも、今は影さへ殘さなかつた。彼は疲れた身體を橫たへて、十分疲勞の囘復する迄は、銀行の仕事の如き些事は如何なつたつて構ふものかと思つた。

隣家の密會宿の狹い庭の楓と柳と枇杷の梢には、何時の間にか新芽が吹いてゐて、その淺綠の

向ふの二階の欄干には赤い唐縮緬の蒲團が干してあつた。綿の厚さうな、いかにも溫さうな二人寢の幅の廣いその蒲團いつぱいに、朝の日の照りわたるのが、疲れた目には痛い程反射した。正太郎はふと、その蒲團を日向の草の原に敷いて、此の雲も無い青空を仰いで、大の字なりに寢轉んでゐたいと思つた。

「お風呂には行かんと置きなはるか。」

呆然として青空の下の草の原に憧れてゐた正太郎の肩を叩いて女中は訊いた。

「そして直ぐに御飯をあがつてだつか。」

「湯に行かう。」

彼は折角の夢想の破られた忌々しさに、澁い顏をして立上つた。

「そんなら早う行つて來なさい。御飯の支度をして置きまつさ。」

「飯なんか喰はないよ。」

正太郎は手拭と石鹼を手にして楊枝を口に銜へたまま、廊下に出て梯子段を下りた。うす暗い一段々々を下りるのが、谷底に落ちて行く氣持がして、頭のしんが冷めたくなつた。帳場の前をこそこそ通つて、女房の姿が見えないで、厭味つたらしい言葉をかけられずに濟んだのを喜びな

がら往來に出た。

坂の下の方の遠くの町はうすく霞み、方々の煙突から吐き出される煤煙さへ陽炎のやうに思はれる景色を見ると、朝は必ず早く起きて、促きたてられる心持で銀行へ通ふ習慣に馴れ切つて居る身には、それがどうしても日曜の朝に違ひ無いと思はれる程悠々とした氣持を起させた。

湯屋の暖簾を潛つて格子をあけると、今日も生憎番臺には娘が坐つて居た。

「おいでやす。」

とわざと鼻にかけた聲をかけるのが、何時もの事なんだけれど、今朝は別して彼を羞かしがらせた。

着物を脱ぎ捨てた後の裸身には酒の匂ひがこびりついて居て、彼は自分自身を汚ならしく思ひながら浴槽の中に身を浸した。

溫い湯のぬくもりが全身に行きわたると、今の今迄は胸の鼓動も止つてゐたやうな不愉快な氣持だつたのがさつぱりして、誰一人相客の無いひつそりした浴室に、むらむら立昇る湯氣に濡れた天井から滴る雫の音が、彼をして溫泉場に居る氣持を起さした。すべての感覺の鈍つて居る彼は、自分の身體が石鹼玉よりも輕く浴槽の中に浮んで居るやうに感じながら、曾て行つた事のあ

る伊豆の溫泉場の山の姿や溪川の景色を、明瞭に目の前に描き出して居た。彼は醉拂つた後の不思議に心地よい疲勞が、人の空想を豐富にし、此の煩はしい目前の現實とは緣遠いものにする事を知つた。

今朝起きた時は、睡眠不足と泥醉の疲勞に、だらけ切つた皮膚は光澤がなくなり、他人の顏のやうに黃黑く無感覺になつて居たのが、やがて蟹のやうに赤くなつて逆上せかへつて下宿屋に歸つた。

「貴方まあ昨夜はどないしやはりましてん。」

帳場の奥から飛んで出て來て、女房さんは彼の前に立ちふさがつた。

「私がな、何時も早うに起きなはるのに、今朝に限つてどないしやはつたんやろと心配して、貴方のお室の襖をあけると、あのままあお酒の匂ひいうたら――。」

女房は朝つぱらから眞白に塗つたそばかすだらけの顏をしかめて、今でも胸がむかつくやうな仰山な表情をした。

「ほんまに私も貴方のやうに、ゲツとやりさうになりましてんホホホホホ。」

と可笑しくもないのにとつてつけた笑ひをして正太郎の背中を叩いた。叩かれた彼は、又して

も胸が悪くなつた氣持がして、苦笑したばかりで二階へ上つた。火鉢の前に坐りながら、相手もないのに、

「馬鹿ッ。」

と怒鳴つたが、聲にはちつとも力が無く、おまけにそれは女房を罵つたのではなく、自分自身を嘲つたもののやうに響いた。

座蒲團から疊の上にはみ出したまま、ぐつたりと身體を崩して、其處に置いてあつた新聞を開いたが、どうしても文字を讀む丈の根氣はなかつた。華族の娘が尼になつたとか、金持が寄集つて馬に乘る稽古を始めたとか、何處其處の成上り娘の嫁入衣裳は斯ういふ趣向だつたとかいふ場ふさげの記事ばかりが、そのみつともない坊主つくりの尼や、たゞさへ平べつたいのを更に白粉でのつぺら坊に塗りつぶした花嫁の物欲しさうな寫眞の挿んであるのを、ただ漫然と眺めて居た。どうかして此の世の中から新聞などといふ氣忙しいものをなくなしてしまつたら、さぞかし人の心ものんびりするだらうと、彼は又しても空想をほしいままにした。

ふと何處か近所の家で、ぼんぼん時計が十二時を打つた。

「三田さん、貴方今日はほんまに休んでのんだつか。」

襖の外の廊下を拭いて居る女中が聲をかけたので、彼は自分は銀行員だつたといふ事を思ひ出した。
「いいえ、休みはしないよ。」
と答へたが、その癖立上らうともしなかつた。
「へええ、大層御ゆつくりだんな。」
女中は犬のやうに這ひつくばつて居るのであらう、胸の壓される聲を出しながら、バタバタバタと草履を鳴らして、廊下を向ふに去つた。端折上げた大きなお尻を高く持上げて、幾度となく往つたり來たりして、板敷を拭いて居る女の醜惡な姿が、ぼんやりと想像された。
「三田さん、貴方はお晝飯はどないしなはる。」
今度は襖をあけて、女中は端折つた下に、色の褪めた唐縮緬の紅地の多い模様の襦袢をあからさまに、紫がかつた血ぶくれのした足を出して閾際に立つた。
「何處ぞ他所であがつてだつか。それともほんまに銀行に行かはるのんか。」
「餘計な世話だよ。」
正太郎は自分に弱味がある丈、些細な事迄癪に障るのだつた。

「貴方また醉うてはるのやな。」

女中は負けて居ないで、捨臺詞を殘すと、ぴつしやり襖を閉めて、足音荒く梯子段を下りて行つた。

折角溫たまつた湯上りの身體も漸く冷めると、又以前の通り酒に疲れてたるんだ皮膚になつた。流石に空腹は感じながら、胸が惡くて何も喰べる氣にはなれなかつた。彼は無闇に鐵瓶の湯ばかり飲んだが、何時迄たつても咽喉の乾きは止まなかつた。

勿論銀行には行かなければならないと思ふ心はあるのたつたが、ぼんやり曇つた頭腦と、骨の拔けた身體は、どうしてもいふ事をきかなかつた。第一窮屈な洋服を着て、面倒な靴を穿く事さへ堪へられなかつた。襟に咽喉をしめられる心地を思ふと、彼は又吐氣を催す程厭だつた。電車の便利の惡い下宿屋から、てくてく歩いて、煤煙と塵埃で汚れ切つた銀行の門を潜る自分の姿を想像すると、それ以上貧弱なものはないやうに考へられた。鳥が棲木にとまつて居る恰好で、床迄足の屆かない椅子に掛けて、大きな机の上でそろばんを彈いたり、細かい數字を帳面に書入れたりする仕事の馬鹿々々しさが、今更ながら彼の倦怠を誘ふのであつた。

「たかが一日だ、休んでしまへ。」

口に出して云はんばかり、思ひ切りよく決めると同時に、疊の上に大の字になつて寢た。日向の草原の眞中に雲も無い青空を仰ぎながら、赤い蒲團の上に寢轉んだのとは比ぶべくも無かつたが、冷い疊がかへつて心地よく、うす汚ない天井さへ、かうして見ると遙に高いものに思はれた。彼は無責任な空想のまにまに、勝手な事を順序も無く、とりとめも無く想ひ浮べてゐるうちに、何時の間にかうとうとしてしまつた。

何かの物音に驚いて、正太郎が目を覺した時は、日は西に廻つたと見えて、彼の室は早くも暗く、うら寒くなつて居た。誰が掛けてくれたのか、いつも衣桁にかけて置く丹前が、胸から足迄包んで居た。それでも日のかげつた早春の午後は冷々と肌寒く身に沁みて來た。

「若旦那——若旦那。」

隣室で中村の呼ぶ聲がした。

「もうしもうし若旦那。」

明かに戲弄つてゐる調子で、

「今日はお休みですか。昨晩はえらいこつてしたな。」

と云ひながら立上つて來る氣配がした。

正太郎は狼狽てて起上つて其處いらを片附けようとしたが、中村の偉大な姿はもう廊下から襖をあけて入つて來た。

「そのまま、そのまま。構はずおよつていらつしやい。」

彼はづかづか進んで、火鉢の側にはふり出してあつた正太郎の朝日を一本拔いて火をつけた。

「あれはなんでも一時か二時時分でせう。どたんばたんといふ物音で、家鳴り震動しましたぜ。なんだと思つたら若旦那の御歸館なんだ。」

彼は持前の、一人で面白がつてゐる調子でしやべり、

「時に昨晩はどちらの方面で。」

と肥つた顏を突出してニヤニヤ笑つた。

「何處つて、つまらないところなんです。銀行の人と一緒に鳥屋に行つたのですが、少し飲み過ぎましてね。」

正太郎は空腹の爲めに口を開くのさへ億劫に思ひながら、力の無い聲を氣にして答へた。

「鳥屋ですつて。へええ――しかしあんまりあてにはなりませんな。さのさをうたふ九官鳥や、夜になると眞白に塗りたてる七面鳥の巢ぢやあないんですかハハハハハハ。」

自分自身の洒落に滿足して、中村は大きな腹を搖すつて笑つた。苦り切つて湯ばかり飲んでゐる正太郎には頓着無く、彼は一人で悅に入つて、暫時の間たて續けにしやべつた。
「昨日は一番願はうと思つて待つて居たのですが、お歸りが無いものだから殘念でした。今晚は是非此の間の復讐をさせて貰ひますぜ。」
と云ひ殘して出て行つたが、隣室には戾らないで、梯子段をどすんどすん下りて行つた。直ぐに階下の帳場の邊で彼と女房と女中の賑かに笑ふ聲が聞えて來た。正太郎は、又しても自分の專を種にして笑つて居るに違ひ無いと思つて腹が立つた。
うす暗い室內に燈火がつくと、女中はお膳を持つて來た。
「大きにお待遠さん。」
おきまりのお銚子を手にして、
「三田さん、貴方お腹が空いてだつしやろ。」
と女中は吹出しさうな顏をして正太郎の前に坐つた。
「お給仕はいらないぜ。此の頃は君一人つきりだから忙しいだらう。」
折角一人で樂しみ度い晚酌を、うす汚ない女中のお酌で害されては堪らないと思ひながら、

「それに中村さんもゐるし、表二階の人ももう直き歸つて來るだらう。」
と如何かして女中の坐りのいいお尻を持上げさせようと努めた。
「いいえ、構(か)めしめへん。中村はんは帳場で上つてはります。表二階のお客さんは今夜は遲いというてなはりました。」
「フウム。」
追拂はうと思つてもなかなか退散しない大女の悟りの惡いお凸を見上げて、正太郎は嘆息しながら盃をとつた。
酒だけは特別にいゝのをとつて貰ひ度いと、平生口數の少い男が、幾度となく繰返して賴んでも、瓶詰の貼紙(ペエパア)丈は極上の癖に、中味は合點(がてん)出來惡(にく)いのを飲まされるのであつた。最初は二三度だめを押しても見たけれど、此の頃はあきらめて、鼻先にツンと來る防腐劑の入つた酒を飲む事になつた。
黑塗の膳の上には油つ氣の無いちいつぽけな魚の切身と、牛蒡と蒟蒻の煮たのと、豆腐ばかりのお汁(つけ)が、とつくの昔に冷くなつてのつかつて居た。空腹(すきばら)に酒が沁みると、吐いて吐いて吐いた爲めに、調子が狂つて氣分の惡かつた胸も、吐いた時の苦しかつた事を忘れてしまつて一層食慾

を旺んにしたが、折角のその食慾を滿足させるには餘りなさけない晩餐だつた。その上彼は絕對に、下宿の膳につく魚肉には箸をつけなかつた。初めて下宿した頃の事、彼は何も知らずに口に入れた魚の腐つた臭ひに鼻をつかれて、お給仕の女中の見てゐる前で、一堪りも無く吐き出した事があつた。その後も二度三度ござつた魚に出つくはしてから、彼は一切御免蒙る事にした。爲方がないのでお椀の中の豆腐を肴に盃を重ねたが、その豆腐はたつた二片しか浮んで居なかつた。醉が廻ると共に益々空腹を感じて來る意地汚なさから、今度は牛蒡と蒟蒻を數へて見た。痩つこけた牛蒡は四本、薄つぺらな蒟蒻は二片に過ぎなかつた。彼は泣き出し度いやうな思ひをしたがら一本のお銚子の最後の一滴を盡した。

「御飯を持つて參りましようか。」

「アア。」

正太郎は立つて行く女中の後姿を見送つてから、改めて膳の上のお茶の皆無なのを見て浮かたい心持になつた。一層戸外に出て喰べようかとも思つたが、そのうちに女中がお櫃を運んで來たので、お晝の殘りかと思はれる迄冷く固まつたのにお茶をかけて、澤庵の尻尾で流し込んだ。

「ヘイおかはり。」

「難有う、もう澤山。」

「一ぜん御飯は縁起が悪うおまんねと。」

「悪くたつて構はないよ。」

うつちやるやうに云ひ捨てて、火鉢の方にくるりと向きかへると煙草をとつてやけに吸ひつけた。邪慳に吐き出される煙は渦を巻いて天井に昇つて行つた。

「よろしうおあがり。」

女中は妙に改まつた挨拶をしてお膳をさげて行つた。

正太郎は瞬間に吸ひ盡した煙草を灰にさして所在なさを感じた、それよりも彼は空腹に堪へられなかつた。

「饂飩でも喰べに行かうかな。」

と乏しい懷中を心配しながら考へると、末に元氣を回復しない身體にも拘らず、一刻も我慢が出來なくなつた。彼は机の抽斗から蟇口を取出して勘定しながら、月給日迄の日數を指を折つて數へた。

「若旦那、御飯はもうお濟みですか。」

足音もしなかつたのに、突然中村の聲が聞えた。
「一寸此處をあけて下さいな。」
と襖をがたがた搖振つた。あけて見ると、彼は兩手で將棋盤を支へて立つて居た。
「今日はどうしても一番願ひますぜ。此の間の敵を討たなくちやあ安眠出來ませんや。」
と云ひながら室の眞中の電燈の下に盤を据ゑて、さつさと駒を並べ始めた。
正太郎は口返答をするのさへ面倒に思ひながら、詮方なく差向ひになつたが、習慣的に角道を開けはしたものの、それから先は何を考へる丈の集中力も無い、疲れて空つぽになつた頭腦で、どうにも法がつかなかつた。
「若旦那、どうかしてゐますね。宿醉未ださめずかなハハハハハ。」
苦もなく勝つた中村は一人で面白がつた。三番の勝負に三番とも負けて、
「駄目だ駄目た。今日はとてもかなはない。」
と正太郎は手にした駒を投出した。
「敵が軍門に降つた以上は爲方が無い。武士のなさけだ、今晩は許してあげませうか。」
將棋はそれで片附いたが、中村は一人で駄洒落を連發しながら、自棄になつて煙草ばかり吹か

して居て應答もしない正太郎を相手に長々としやべつた揚句、
「あゝ今日は安眠出來るぞ。」
と大手を擴げて伸びをしながら立上つた。
正太郎は酒の醉も全く覺めてしまひ、饂飩屋に行かうと思ひ立つて居たのも、三番の將棋に氣を拔かれて、噛み殺しても噛み殺しても出て來る欠伸に、涙の出る迄眠くなつた。女中を呼んで床をとらせて潛り込むと、彼は一層疲勞を適切に感じながら忽ちにして目をつぶつた。
次の日、正太郎は曉方から目が覺めた。湯に行つて、髭を剃つて、朝飯を濟ませると素早く洋服に着換へて、まるで一週間も休んだやうに遠々しい氣で銀行に行つた。舊式な建築物の中に入ると、まだ同僚も出揃はない廣い事務室の一隅に、正太郎は部厚な帳簿を開いて、昨日一日誰かしら代理をつとめてくれた細かい洋筆のあとを調べて、下手な手つきで算盤を彈いた。
「三田さん、昨日はお休みでしたね。」
後に來て同僚の一人が訊いた。
「ええ少し頭痛がしたものですから。」
「へえ、そりや用心しないといけませんよ。此の頃は惡い風邪が流行つてゐますからね。どうし

たのか昨日は珍しく牧野さんも缺勤でした。」
「牧野さんも、そりやあ珍しい。」
正太郎は吃驚してふりかへつた。さうして始めて、彼自身の缺勤したのには牧野老人も十分かかりあひだつた事に氣が付いた。
「矢張り風邪でせうよ。」
同僚は云ひ捨てて向ふに行つてしまつた。
「牧野老人も宿醉で頭があがらなかつたのかしら。」
と考へると、酒に負けたのは自分丈ではないと思ふ氣強さが正太郎の心に湧いて來た。彼は前々夜の鳥屋の光景を想ひ出さうとしたが、或る時々の瞬間の有樣の外は、どんな樣子で飲み、どんな管を巻いて居たのか想像さへつかなかつた。彼自身の事さへどんな風に、どういふ道をどういふ風に下宿に歸つたのか脈絡をつけては考へられない位だつたから、牧野老人の醉拂つた程度は全く想像の外だつた。いづれにしてもあの負け嫌ひの老人も、自分と同じ醜態を演じたのだと思ふと、今も尙口中の何處かに殘つてゐるやうにも感じられる苦い胃液を思ひ出して眉をひそめながら、彼は密かに仲間のあるのを喜んだ。

時間が經つて、上役もみんな出揃つても、彼の隣の座席は空いたままに殘つて、幾年の間つひぞ缺勤した事も無いといふのを、卅年の勤續と一緒に自慢にする牧野老人の姿は見えなかつた。若しか何か間違ひでも起つたのではないだらうかと考へると、老人の醉つた姿ばかりが目に浮んで來る。正太郎は終日帳簿の上に、牧野老人の姿を幻に見ながら、ちつとも席を立つ閑も無い忙しさの中に夕方の退出時間になつた。

彼は何時もの通り誰よりも先に銀行の門を出たが、火の氣の乏しい下宿に歸つて、冷め果てた飯を喰べる賴りなさを考へると、如何しても足が進まなかつた。けれども、あまり度々他所で食事をするのは、何となく世間に憚られる氣も強かつた。

「ひとつ牧野老人を見舞つてやらう。」

彼はそれを口實にして、下宿に歸るのを、一時でも免れようと思つた。うまい事に氣がついたと、一人で喜んで、正太郎は大通りへ出ると直ぐに向ふから來た電車に飛乘つた。

場末の方へ行く線に乘替へると客種はめつきり惡くなつた。元來電車嫌ひの彼は、目附の惡い安月給取や職工土方、邪慳な慾張相の長屋女房達と相乘してゐる不安に、昨日は醉つた勢で步いた長い一本道を、砂塵をあげてきしみながら走る電車の十數分を忌々しいものに思つた。

停留場に着いて、人相の悪い乗合が意地悪くぢやぢや張つて居る肱を避けつつ、揉み出されるやうに下車した時、彼は暮方の空を仰いで、せせこましい電車の中の、人と人とが押合つて居る世間とはうつて變つて、遮る物もなく晴わたつた空の廣さを、心地よくも羨ましくも思つたのである。少し寒くなつた春の夕べに、きらめき初めた星の數々を見て居ると、此の世の中の人間のうす汚なさにひきかへて、清く無邪氣に光つて居るその星屑ばかりが限り無く親しいものに思はれた。

正太郎は町角のちひさな西洋料理屋で、麥酒を飲みながら手輕な食事を認めた。心覺えの横町を曲ると、早くも裝飾電燈の赤く青くぴかぴか光り出した活動寫眞の前に出た。刀を振かざした男や、その刄の下に緋縮緬を亂した間から眞白な足を股迄もあらはして悲鳴をあげて居る女などの毒々しい繪が、昨日の通り道行く人の目を引いて居た。正太郎はふと、その繪看板に見とれて立つて居た娘の姿を思ひ出した。

「さうだ、牧野老人の家にはあの娘といふものがゐたつけ。」

彼はすつかり忘れて居た娘の頬ぺたの赤いまる顔を明瞭に想ひ浮べると同時に、その娘の居る家に、たとへ病氣見舞には相違無いにしても、あまり度々行く事は、第一他人の思惑が憚られて、

心の中で躊躇した。それでも何時か彼の足は、再び露路の細道を、廂合の空の星を仰ぎ見ながら奥の方へと進んだのである。

「まきの」と平假名で書いてある軒燈の下に立つと、玄關の障子にはあかりがさしてゐるけれど、物音もしないひつそりした家の內は人氣も無いやうに思はれた。彼は格子に手をかけたまま、開けようか、止さうか暫時逡巡した。

「誰かお客さんだつせ。」

突然臺所の方で、紛れもない娘の母親の嗄れた癖に甲高い聲が聞えた。思はず知らず正太郎は格子にかけた手を放して、逃出すやうに一二歩退つた。

とたんに上り口の障子に人影が大きくうつると、直に現れたのは一昨日の娘だつた。彼は逃げるにも逃げられなくなつて、思ひ切つて格子をあけた。

「今晩は。」

極り切つた挨拶の極めて拙い彼は、彼の訪問を不思議さうに、目をみはつてゐる娘の樣子を見ると、それつきり言葉が出なくなつた。

娘も其處に、あかりの陰になつた顏をあげて、訪問者を見定めると、お低頭もしないで立上つ

た。

「どなたか見えてだつか。」

又臺所の聲がして、流場(ながし)にザアと水を流す音が聞えた。娘はばたばた奥に馳込んだ。

「何いうてんのや、そやつたら早う云はんとあかんがな。」

母親の聲が聞えよがしに聞えた。

何かしらひそめた聲で話合ふのが、二言三言漏れて來たが、再び現はれた娘はおそろしく叮嚀に手をついて頭を下げた。

「牧野さんはお宅ですか。」

相手が何時迄も默つて居るので、正太郎は爲方がなくなつて口を切つた。

「實は昨日も今日も銀行にお見えになりませんので、若しか御病氣ではあるまいかと心配しまして、一寸御見舞に上つたのですが。」

「ハイ宅に居りますけれど。」

娘は云ひながらうつむいてしまつて、言葉を續ける事も出來なかつた。

「こいつ餘程羞かしがりだな。」

と思ひながら、正太郎は廂髮の眞中の渦卷を取卷いてゐる靑貝入りの三枚櫛をあからさまに、下を向いて居る娘の姿を見下(おろ)した。一昨日とはうつて變つて、お粗末な木綿の縞物の古びたのに、唐縮緬の赤い色の褪せた帶をしめて、羽織も着ない貧しさうなのが、かへつて風情に思はれた。

「矢張り御病氣なんですか。」

「ハイ、イイエ。」

曖昧な返事をして愈々うつむいたので、引詰(ひつつ)めて着ては居るものの、襟もとから少しばかり背中の生身(なまみ)がのぞかれた。

「房ちやん、お客さんは三田さんだつしやろ。」

と臺所との間の襖をあけて、母親は前掛で手を拭きながら出て來た。

「まあま、ほんまに三田さんや、……貴方はそれでも御無事でしたのかいな。」

持前の愛想笑ひをしながら、肥つた膝でにじり出て、馴々しい物の言ひ方でしやべつた。

「牧野さんはお風邪ですか。」

正太郎は同じやうな事を繰返した。

「阿呆らしい。病氣ならよろしうおまんがな。貴方に醉はされて溝の中にはまりましてん。」
いかにもそれが面白い事だつたといふやうな輕噪ぎ方で、
「何處を如何歩きましたものか自分でも知らんと云うて居りますけれど、夜さりほつつき歩いて、曉方歸つて來た時は、手も足も擦りむいて、何處で打つたのか腰が痛うて立てんいうて寢込みましてなあ。」
婆さんは眉をひそめたり、笑つたり、目をみはつたり、口を窄めたりしながら話した。
その話によると、一昨日の晩、もがき苦んで居る正太郎を車に積んでから、自分丈はしつかりしたつもりで、牧野老人は家路へ足を運んだには違ひ無いが、何處を如何歩き廻つたものか未だにわけが解らない。
「若い頃とは違ひますさかい、夜泊りする事もあるまいし、お連れは貴方さんの事やし、これ程安心な事はないと思ひまして。」
と話中途にも婆さんはお愛想を忘れなかつた。
どうした事か、つひぞ近年ない事なので、心配しながら寢床に入つてうと／＼した、と思ふと、けたたましく表の戸を叩く音に驚かされた。あけて見ると、何時の間にか曉近くなつて居た格子

の外に、巡査と車屋に送られて來た泥だらけの老人が悄然と立つて居た。帽子も下駄も何處かに捨てしまひ、肩を滑つて地面に引擦つて居る羽織は鍵裂きになつて綿がはみ出して居た。

巡回の途中、或る横町の商家の軒下にうごめく物體に驚いて足を停めた巡査は、石を敷詰めた溝の中にぶつ倒れて居る老人を發見したのであつた。苦しまぎれにのたうち廻つたのであらう、泥だらけの手足を擦りむいたばかりでなく、彼の額からも血が滲み出して居た。

「巡査はんは最初人殺かと思うたというてはりましてん。」

婆さんは仰山な表情をして笑つた。

家に入れて床に寢かしたが風邪を引いたのか發熱して、惡寒の爲めに全身を震はして居た。

「ほんまにええ年をして阿呆らしい。お酒を飲むなら飲むで構めしめへんけどなあ、額迄擦りむかんかてよろしうおまんが。」

婆さんは又長々としやべり續けて、恐縮して居る正太郎を愈々恐縮させた。

「それで、まだ熱があるんですか。」

彼は自分が下手人だつたかのやうな胸とどろきを感じながら、びくびくして訊いた。

「ヘイまださつぱりしませんが熱が大方とれたやうです。別段自分でも差支へないというてまん

ねやけど、何んせ偉う腰の骨を打ちましたよつて、痛うて痛うて立てんというてなあ……」

婆さんの話は又連續して、その大きな口から暫時の間繰出されて來た。

「そないな事やよつて、まあ一寸上つてぢいさまの弱つたはるところを見て貰ひましよとも思ひまんねやけど、この通りのむさくるしい所やさかい、貴方さんのやうなお方には失禮だ、いづれ全快した上で御挨拶すると當人もいうてますので。」

「それでは當分まあ銀行の方はお休みになるんでせうねえ。」

「偉い濟まん事やとは思うとりまんねやけど。」

婆さんは又眉をひそめたり聲を低くしたりして、今の今迄面白さうにはしやいでゐたのとは打つて變つて、老人の容體は一日二日の休養ではちよつと勤めに出られない程度のものだといふ事を、執拗く正太郎に納得させた。彼にとつてはその言葉の一つ一つが、意地悪く胸に應へて相槌を打つ事さへ出來なかつた。烏屋に誘ひ出したのも、酒をしたたか飲ませたのも、泥醉して路上に一夜をあかさせたのも、怪我をさせたのも、發熱させたのも、あまつさへつひぞ休んだ事の無い銀行を休ませたのも、一切彼自身の罪であるかのやうなひけ目を感じさせられた。

「もうわかつたよ。」

と云つてやり度い程同じ事を繰返す婆さんを、つくづく恨めしく思つた。殊にその婆さんの後に控へて居る娘の存在が、一層彼の立場をやりきれないものにした。

「實は一寸でもお目にかかつて、お詫も申上度いのですけれど、かへつて御遠慮申上げた方がいいやうですから、いづれ改めて伺ふ事にして今日はこれで御免蒙りませう。どうもほんとに飛んだ事でした。」

正太郎は重い口を強ひて云ひながら、逃腰になつて頭をさげた。

「なんの貴方(あんた)、お詫も何もありますものか。牧野は又貴方の御身を案じて、甚(えら)う醉うてはつたがどないしなつたらうと、うは言にも云うてましてん。貴方も大分(だいぶん)召上つたさうやが、別段お身體にも障りまへんでしたか。」

「いいえ私は。」

正太郎は醉拂つて苦しんだ醜態を恥ぢながら、その醜態を他人(ひと)には知られ度くないと思つて口が澁つた。

「何ともありませんでした。」

「へええ、それでも仰山反吐(もど)しなはつた、と牧野は云うてましたが。」

婆さんにつけつけ云はれて、正太郎は娘の手前赤面しないでは居られなかつた。
「ええ、少し縮尻ましたけれど、――それつきりです。」
曖昧な返事をして、その出たらめの返事をした己れを顧みて一層赤面した。
「それでは次の日にはちやんと銀行にもお出掛けになりましたのですか。」
「エ、――ヱヱ。」
正太郎は顏も上げられない思ひをしながら、矢張り噓をついてしまつた。顏にも腋の下にも冷汗を感じながら、彼は自分の意氣地無しを忌々しく思つた。
「ではいづれ又伺ひます。牧野さんにもよろしく。」
改めて又頭を下げて、危難を免れた氣持で格子の外に出た。
「銀行の方へは今日お屆を出して置きましたが、貴方からも皆さんによろしうおつしやつて下さい。」
婆さんは後から追掛けて聲をかけた。
「承知しました。」
「左樣なら。」

正太郎は帽子をかぶると、二度と言葉をかけられないうちと、露路の暗がりを狼狽しく往來に出た。小商人（こあきんど）の軒をつらねた町筋の明るい燈火を見た時、彼は始めて救はれた氣持がして、安心して嘆息した。仰げば暮切つた空の星は、何の蟠（わだかまり）も無い光を散（ちら）して、せせこましい人間の世の中の上に輝いて居た。誰を見ても自分のけちな根性を嘲つて居るやうに思はれる往來を急ぎながら、正太郎は彼の一切の頓馬も狡猾も見榮坊も許して吳れる唯一のものは、その大空の星ばかりだと思ふうらはかなさを感じたのである。

變り易い天氣は夜の間に雨になつて、翌朝正太郎が目を覺した時は、雨戸の外には春雨とは名づけにくい冷い雨が降つて居た。味もそつけもない下宿の朝飯を喰ふのもお勤めだと思ふ心持で、佛頂面をして飯を濟ますと、彼は雨外套を着て玄關を出た。門口の郵便受箱を覗いて見ると、何か入つてゐるので引出すと、數通の郵書の中に、自分に宛てた母親の手紙と、何かしら油紙で包んだうすつぺらな小包があつた。それを外套のかくしに入れて歩き出したが、母親の細々と行儀よく書かれた手紙をうるさく思つて、わざわざ苦い顏をして舌打ちした。其許（そのもと）何時もお變りなく、御丈夫にて御勤め御勵みの事と存上げまゐらせ候と、飽きもしないで同じ文句を書いて來るのが、小じれつたくて、彼は母親に可愛がられて居る事さへ忌々しかつた。

高臺から坂を下りて下町へ出ると、狭い往來の泥濘は益々非道かつた。日本の道路は惡いのではない、日本には道路と名付く可きものは存在しないのだと或外國人が云つたといふ話を聞いた時は、何を生意氣な毛唐奴がと思つたが、その泥濘の中をびしやびしや歩いて居る今の彼には、その外國人の一語が、いかにも日本及日本人の全體を適切に罵倒した言葉のやうに思はれて痛快だつた。其泥の海の中を大きな面をして自動車が、傍若無人に泥沫を飛ばして走せ去るのを見ると、平生は、おべつか上手の新聞や、學者や、政治家や、文士などに煽てられて、衆を頼んで威張つて居る當世の貧乏人の我儘勝手な民衆がりを憎むと共に、暴力では到底對抗出來ない、何時何時叩き殺されてしまふかわからない少數の貴族や金持を哀れんでゐる正太郎も、流石に金持を憎まないではゐられなかつた。

「自分も矢張り貧乏なんだ。」

と親の家を遠ざかつて、お小遣に困つてゐる今の自分を思つた時、彼は身の安全を感じたが、それにしてもあの不親切な下宿の慘めな生活を胸に描くと、つくづくなさけない世の中に思はれた。

銀行に行つて机にむかつたが、彼は同じ事務室に仕事をして居る他人とは、自分は全く別の種

族に生れたやうな賴りない氣持に惱まされた。每年きまつて花時分には昇給沙汰があるので、正月の松飾が取捨てられると直ぐに、人々の話題はそれで持切つた。今日も今日とて向き合つて仕事をして居る向側の二三人は、帳簿の手の閑な時は屹度その事を云ひ出して、誰某(たれそれ)の月給は上るだらうと推測しては樂しんで居た。

「三田さんなんぞは月給なんか上がらうと上がるまいとお構ひなしだから羨しい。」

仲間に入らないでこつこつ仕事をして居る正太郎を嘲るやうに、その中の一人は云つた。

「冗談いつちやいけません。私だつて月給で暮して居るんですよ。」

「御冗談でせう。君なんかお父さんさへ死んでしまへば默つて居ても百萬長者(ミリオネヤ)なんだからねえ。」

もう一人の男も敵意を持つた笑ひ顏を差出して云つた。非道い事を云ふ奴だと思ひながら、正太郎は何とも返答が出來ないで、いきなり出たらめに算盤を彈き出した。金持の子に生れた不幸を沁々思つた。

俗にいふ世間に出されてからの、事毎になさけない身の上を思ふにつけても、何の不自由もなく父母の膝下に育つた少年の日の懷しさを忘れる事は出來なかつた。今でも父母の家にさへ引込んで居て、一歩も世間に出なければ、自分は此の上も無い幸福な身の上なのだと、勝手な事を考

へた時、今迄忘れて居た雨外套のかくしの中の母の手紙を思ひ出した。何氣ない風をして、大きな帳面の間に隱れて、彼は其の封を切つた。

其許いつもお變りなくと、又しても書いて居る母親を、此の時の彼の心持は、又無く戀しく思つたのである。いつもいつも同じ文句なのが、卽ち母の愛情の何時も變らないしるしなのだと思つた。

「先日も申上候通り父上樣にも寄る年波は爭はれず、めつきり心弱くお成り被遊、其許の身の極らぬ事のみ御心にかけられ候てつひぞ他人にはさげぬ頭も其許の爲には誰彼に、よき嫁女の御世話願ひ度しと賴み聞えられ……」

正太郞は又かと思ひながらも、友達も無い孤獨感に肩身狹く思つてゐた折柄なので、母の手紙の中に自ら現はれて居る親身の情愛の溫かさを感じたのである。

「申すまでも無き事ながら結婚は一生の大事に候へば、何よりも其許の心に適ひ候人をと吾等も望み候へども、何時迄もながらふべき身にもあらぬ父母は、一日も早く孫の顏も見度く、又してもうるさしと日頃の氣性にて御腹立かとも被存候へども、たま／＼さる御方の御親切にも御すゝめ被下候緣談此上も無き良緣と被存候につき、別封小包を以て寫眞御送附申上候間……」

彼は此處迄讀んだ時、何心なく机の上にのせて置いた油紙の小包の内容を知つて、狼狽ててそれを抽斗の中にかくした。

「御覧の如く美しく、學問も人にすぐれし上、其許が大嫌ひの當世風のはいからとやらには似もやらず、萬事日本風を好み、音曲の嗜みもあり、松柏園の大人のお弟子にて和歌もよくすると申すことにて……」

正太郎は、母は自分を喜ばせるつもりで並べ立てるのだとは知りながら、「萬事日本風を好み」云々に至つては、思はず知らず唇に苦い微笑が浮んで來た。

當世に生れたものなら當世らしい方がいゝ、ただ根性が曲つてゐては堪らないのだ。下手な長唄を聞かされたり、生じつか新しがつた三十一文字で文學がられては叶はないと思ふ皮肉が、心の底の底にうづいた。

幾度もの事なので、どうせ承知はしないのではあらうとも思はれるけれど、それが父母の唯一の願ひなので、萬一の心頼みに爲念送る寫眞なのだと、母は息子に氣を兼ねて、くどくどと同じ事を繰返して手紙を結んだ。正太郎はそれを巻納めて、何喰はぬ顔をして、又算盤を弾いたが、流石に心にかかるのは油紙の中の寫眞だつた。

正午の辨當の時間に、正太郎はわざわざ人々に遲れて、地下室の暗い食堂で、惡油の強い天丼を喰べた後で、一隅の薄暗がりで手早く小包を解いて見た。ねつとりと指に觸れる油紙を開くと、中からは大きな臺紙を貼付けたのと、ちひさい手札形のと都合二枚の寫眞が出て來た。大きい方は高島田の重たい頭をうつむけて、膝の上に開いた本を見て居る横顏ので、寫眞雜誌の口繪にでもありさうな凝つたものだつた。ちひさい方は銀杏返で、はつきりした黑目勝の、鼻のつんと高い、はきはきした顏を正面に向けたもので、平生着の荒い縞の着物に黑襟をかけたのが特に目立つた。正太郎は母が所謂「萬事日本風を好み」云々を思ひ出して、いかにもその島田も銀杏返も、襟つきの着物も、わざとらしい江戸がりに思はれて憎らしかつた。堂々たる新式の生活をして居る役人か實業家の娘が、何も今更襟つきにも及ばないと思ふ反抗心が、その娘が美しい丈それ丈強く湧起つた。彼は手荒く寫眞を油紙に包んで、事務室に歸ると、再びそれを外套の隱しにかくして机に向つた。洋筆を持つて忙しく字を書く間も、算盤の手の動く時も、彼はその美しい娘の顏つきを忌々しく思ひながら、やがて一日の仕事を終つたのである。

銀行を出て下宿へ歸る途すがら降り歇ぬびしよびしよ雨に、愈々こねかへす往來が癪に障つて、彼は大阪を憎んだ。一から十迄慾張つた、溫情の無い人間は、それが自分一人の利得にならない

限りは、如何なる不便をも堪へ忍ぶ根性を持つて居るのであらう。共同の利益の爲めに、此の惡路の改良を計る意志は誰一人持つて居ないのだと思つた。意氣地の無い足取りで、慾の爲めには大きな不平も不滿も無い顔つきで、泥濘の中を歩いて居る大阪人を踏躙つてやり度いやうな心持が起きた。大阪はつくづく厭だと思ふと、彼の行手に控へて居る下宿屋の、不親切極まる女房のあだいやらしい雀斑だらけの顔が幅廣く幻に浮んだのである。正太郎の足は急に鈍つた。此のうそ寒い雨の日に、ぼそぼそした冷たい飯を喰べさせられる事かと考へると、乏しい懷にも拘らず、彼は横道に逸れ度くなつた。暫時は思案しながらも歩いて居たが、兎に角一杯ひつかけてやらうと思つて、時々御厄介になる町角の關東だきの暖簾を潛つて、油障子の中に立つた。

まんまるい鐵の大鍋の中に、葱鮪、飛龍頭、鯨、鮹の足、里芋、蒟蒻などの押合つて、とろとろ煮立つて居るのを前に、惜氣も無くたらたら溢れる迄酌いで呉れる熱い酒に口をつけると、さまざまの安價な不平は影を消して、元來酒には強くない正太郎は、忽ちいゝ氣持になつてしまつた。いゝ氣持になると、愈々下宿屋に歸る氣がなくなつた。

「さうだ、牧野老人を見舞つてやらう。」

ふと自分が手を下して負傷させたやうにも思はれる老人の事を、暫時なりとも忘れて居たのは

濟まなかつたと思つた。

「けれども、二日つづけて見舞ふのも變かしら。」

再び往來に出た彼は電車道に佇んで、思ひ返した。二日つづけて見舞ふといふ事よりも、若い娘の存在が第一に憚られたのだ。

「格子先で歸つて來れば別段變にも思はれまい。」

自問自答しながら、酒の力で向ふ意氣の強くなつた彼は電車に乘つてしまつた。

十數分の後、正太郎は雨の日の暮れ易い場末の町の泥の中を歩いて、何時もとは似もつかず、ひつそりした活動寫眞の前を通つた。横町に曲つて、更に又露路の奥へ入つて行く時は、又しても少しばかり、度々の訪問は心がとがめて、その露路の中途で暫時逡巡した。

ふと奥の方から傘を斜めにして、人がやつて來た。正太郎は引返す事も出來ないので、心中狼狽しながら、さも躊躇しない態度で大胯に歩きながら、此方も傘で顔をかくすやうにしたが、擦れ違つて見るとその人はお房だつた。彼は狼狽をかくし切れず、帽子を取つた。

「如何(いかゞ)です、牧野さんは。」

此の一言で、彼は牧野老人の見舞以外には何も蟠(わだかまり)はない事を示したつもりだつた。

「もうよろしうおま。」

娘は語尾をあいまいにして答へた。袂で庇ふやうにして、胸のあたりに何か持つて居るのが、買物に行く姿らしく見えた。

「一寸お見舞に。」

正太郎は云ひ捨てて格子先に進んだ。娘が往來へ出て行く足駄の音を背後に聞きながら彼はその格子をあけた。

「誰かお客さんやぜ。」

奥から聞えたのは牧野老人の聲だつた。つゞいて皿小鉢の觸合ふ音がして、間も無く臺所から婆さんが出て來た。

「まあ誰かと思うたら三田さんだしたかいな。」

とべつたり其處に坐つてから、手早く襷をはづした。

「如何です、御容體は。」

「難有う御座います。今日は又大層元氣で、もう寢るのにもあきたと見えましてなあ、床の中であれが喰べ度いこれが飲み度いと大きなやゝ子が我儘ばかりいうて爲様がござりめへん。」

不相變表情澤山で話したが、
「あんた、又三田さんがお見舞に來てくれはつたのだつせ。」
と後の襖をふりむいて大きな聲で云つた。
「三田さんか。」
煙管を叩く音と一緒に老人の嗄れた聲が聞えた。ごそごそ物音がして居たが、半分ばかり襖をあけて、這ひ出すやうな恰好で顏を出したのは當の牧野老人だつた。
「如何なさいました。とんだお氣の毒な事で。」
元氣の無い老人の顏を見ると、正太郎は自分自身が責められるやうに感じた。
「ほんとに非道い目にあひました、ハハハハハ。」
老人は力の無い聲で笑つた。
「どだい何が何やら皆目わかりまへんのや。ええ年をして夜さり、溝の中を這ひ廻つとつたさうで。」
と膝つ子の出さうな寝衣の前を氣にしながら恐縮して、
「何せまあ一寸上つておくれ。」

と話好の本性をあらはして、怪我をして悄氣て居たのが、味方を得たなつかしさでいそいそした。

「ほんまにまあ貴方お上がりやす。今一寸寢間を片附けますさかい。」

婆さんはばたばた立上つて奥に引込んだ。

「でもお加減の悪いところですから、いづれ全快なさつてからゆつくり伺ひませう。私はなんですか心配だつたものですから、一寸御見舞に伺つたばかりなんです。」

正太郎は困つた事になつた、と思ひながらもじもじしてゐた。

「お見舞などと云はれる程の事はあらしまへん。ほんのそこ此處擦りむいた丈の事やさかい。」

と額に滲んで居る血の痕を指さして見せた。

「まあま、暫時上つておくれ。」

「ですけれど起きて居ると身體に障りはしませんか。」

「阿呆らしい、何いうてんのや、そないな重病人扱ひされて堪りまつかいな。」

「それでは一寸お邪魔させて頂きませう。」

無理に振拂つても歸られず、多少恨怯しながら、正太郎は靴を脫いで上つた。

「こんな雨降りに、ほんまによう來て呉れはりましたなあ。」
老人は心底から懷しさうに奥へ導いた。今迄敷いてあつた床を片附けた後に落散つてゐる紙屑などを拾ひ集めながら、婆さんは火鉢を眞中に二つの座蒲團を置いた。
「ちよつと掃出すとよろしおまんねやけど。」
「構めへん、かめへん。」
老人は婆さんの言葉を打消して、
「三田さんは御大家のぼんぼんやけど、吾々同様平民主義やさかい、牧野三次郎の城郭はこんなものやいふ事は、よう知つてはるわ。」
と腹に力の無い聲ではあるが、持前の頓狂な調子で冗談を云ひながら正太郎を上座に据ゑた。
「どうぞお樂に。貴方のやうに洋服で整然と坐つては膝が痛うて堪りまへんやろ。私も御免蒙むりますさかい、胡坐でもかいておくれやす。」
先づ自分から胡坐になつて、
「こないしようむない風をして居ますさかい、いつそ御免蒙りまつさ。」
と云ひながら手を延して、其處に疊んであつた丹前を引寄せて寢衣の上にはおつた。

「それでも兎に角早くよくおなりで私も安心しましたが、そんな事をしてらつしやつて又惡くなりはしないのですか。」

「なんのそないな事があるもので。もう全くようなりましたのや。實は全快祝をやるつもりで、今先刻に一寸これを買ひにやつたところですぜ。」

と老人は盃を口に持つて行く形をした。正太郎は今しがた、娘が胸に抱いて行つた物を想像する事が出來た。

空腹の底迄入つてゆく煙草をさも美味さうに吸ひながら、あの晩の出來事を、それが他人の身の上に起つた事のやうに面白がつて老人は話した。

「いやもう途方もない醉ひ方で、どないしたもんやらさつぱり判りまへん。」

と二言目には云ひながら、しかも自分が泥醉して、夜更の町を歩き廻り、擧句の果が溝の中でのたうち廻つて居たところを巡査に發見されて取調られた一部始終を、今目の前で起つた事のやうに詳細を極めて話した。その話の餘り精密なのを少し馬鹿々々しくは思ひながら、正太郎は話そのものよりも、その話をする牧野老人の態度を、輕い興味で喜んだ。

そのうちに臺所の方では、娘が酒屋から歸つて來たと見えて、親子がひそめいて話して居る聲

が聞えて來た。
「貴方。あのなあ。」
襖をあけて入つて來た姿さんは、老人の傍に擦寄つて、囁くやうに、その癖正太郎にも聞けがしに、
「折角來てくれはりましたのやけどなあ——どないしましよ。」
とはつきりしない物の言ひ方をした。
「ええわ、ええわ。三田さんは私等の身代はちやあんと知つたるわ。」
老人は苦勞の無い笑ひ方をした。
「なあ三田さん、貴方も掛り合ひやさかい、私の全快を祝つて貰ひまつさ。」
「私ですか。いいえ、私はもうお暇します。」
正太郎は坐り直して斷つたが、かういふ羽目になつてはもう逃げられないと思ふづうづうしさも心にあつた。
「なんの貴方、貴方が來てくれはるとは知りまへんやろ、御馳走も何もあれしめへんぜ。唯私の、な、全快祝やさかい、迷惑でもつきあつて貰ひまつさ。」

「ほんまにしよむない御馳走だつせ。」

交る交る勸める二人の言葉に、正太郎はむざむざ食事時にやつて來たのを赤面しながら、有耶無耶のうちに又胡坐を組んでしまつた。

間も無く婆さんは小さい食卓を運んで來て二人の間に置いた。後に續く娘は羞かしさうに上氣した顏を伏目にして、盃洗、盃、箸などを並べた。

「ほんまに何もおまへんが、まあお一つ。」

と老人は待兼ねたお銚子が來ると直ぐに盃を正太郎に差した。

「三田さんのやうな方には、却て失禮かとも思ひましたのやけど、こないな無遠慮も許して貰うて、貴方あがつておくれやすや。」

海苔、玉子などを並べて置いて、婆さんは又臺所に引込んだ。

「まあ一つお上り。」

正太郎は雨の往來を歩くうちに、夙にさめてしまつた關東煮の酒の氣が又顏に出て來る思ひをして、側にお銚子を持つて控へて居る娘に氣兼ねしながら盃を受けた。

「私も早速祝ひましよ。」

牧野老人は飮まない先から舌なめずりをして、盃の中に顏を突込む形で、

「ホウ久しぶりでええ匂ひや。」

と一口つけた。

「感心に酒だけは吟味しておまつせ。」

と自慢しながら、さも美味さうに干した。

正太郎は二三杯重ねると、忽ち目の緣が赤くなつて、羞かしがりの癖に、此の薄暗い家の、ちんまりした饗應が、いかにも氣樂で氣持よく思はれて來た。一々何かお愛想に無駄を云ひながらやつて來る婆さんは、大根、人蔘、百合根等の煮たのと、何だかしらないが背中の靑い魚の切身の燒いたのを持つて來た外に、俄の客に思ひついたらしい、蒲鉾をうすく切つて浮かした吸物を出した。

老人も酒が廻ると、今迄はどう見ても附元氣だつたのがほん物になつて、又しても先夜の醉拂つた時の話を、功名手柄を物語る得意さで繰返すのであつた。忙しく海苔を頰張り、生玉子を啜り、出て來るものを片端から平げて腹が出來ると、聲は一段高くなり、舌は益々滑になつた。

一本――二本、お銚子は見る間に空になつて、細工物のやうに默つて坐つて居る娘は、機械の

やうにおつとめのお酌をした。油氣の無いぱさぱさの束髪の廂の陰になり勝なまる顔は、うす暗い電燈の下に柔かい線を描いて、上半部と下半部の釣合のとれない特徴が、相も變らず正太郎の氣にかかるのであつた。絣の着物に絣の羽織でその羽織の細い赤い紐が一種の刺戟だつた。此の間の日曜の身につかない他所行よりも、態とらしくない平生着は遙に風情を增した。時々お銚子の變目などに立つて行く時、少し短い裾から見える足袋の汚れてゐるのは氣になつたが、しかしその貧しげな様子が、いつそしをらしくも考へられた。

羞かしさうに俯向いたきりで、冷い疊の上に坐つて居る娘の存在が、何となく窮屈にも感じられ、あまり酒を飲む自分自身を見て居られるのが羞かしくも思はれた。

「三田さん、貴方まだまだいけまんがな。」

老人は娘を促して酌をさせるのであつた。

「駄目ですよ。そんなに飲むと又此の間のやうになりますからね。」

「なつたかて構しまへん。此處は私の家やさかい、貴方が倒れたかて、なんぼでも介抱してあげまつせ。」

「冗談いつて。もう私は駄目ですよ。第一お酌をしてる方にお氣の毒ぢやありませんか。」

酒で大膽になつた正太郎はかう云つて娘の方を見た。娘は愈々俯向いて、手にしたお銚子を持て餘した風情だつた。

「これの事だつか。阿呆らしい。」

老人は呆れた顏をして、

「なんの氣の毒な事があるもんで。」

と問題にもしないで盃を口に持つて行つた。

「ですけれどね、わざわざお酌をして頂かなくても、其處に置いといて下されば手酌で頂戴しますよ。」

「それもさうやな。」

老人はつまらない事に感服して見せて、

「それでは其處に置いて去にななはれ。あんたのやうな愛想も無いお酌では飮まれんと云はははるさかい。」

「噓いつてら。そんな事云やあしないぢやありませんか。」

正太郎はむきになつて詰つた。

「ヘツヘツヘツヘ。そやけどな、まあまそないなもんや。」

老人は愈々上機嫌で、

「けどなあ、せんどは貴方も醉うてだしたぜ。何いうてのかと思ふたら、貴方此の此處に居るお房を嫁さんに貰うたる云ふてなあヘツヘツヘツヘツヘ。」

老人は何の惡氣もない冗談として口にしたには違ひなかつたが、正太郎はぎやふんと參つて言句も無く悄氣た。

娘もこれは冗談とは知りながら、思ひも掛けない冗談だつたので、眞赤になつてしまつたが、如何していゝか所作に困つて、また殘つて居るお銚子を振つて見たりした。その困り切つて居る樣子を見ると、正太郎は氣の毒と羞かしさに愈々てれて、爲方無しに目の前の盃の冷たくなつたのを干して老人に差した。

「ヘツヘツヘツヘツ、其處が酒に醉た時の面白いところや。考へてもみなはれ、貴方のやうた金滿家のぼんぼんに、私とこの娌などが冗談にも貰うて貰はれる筈がおまへんのや。滅茶云ひたんなとその時私が云ひましてん。すると貴方は僕はほんまに貰ふのだ、と偉さうに云はつてなあ。」

老人の機嫌がよくなればなる程正太郎は恐縮してしまつた。殊に娘は身の置所も無いやうに逡巡して居たが、漸く思ひついて、食卓の上の空いた小皿を二つ三つ盆にのせると、救助船に飛乗つた狼狽しさで室の外に立去つた。

「貴方はそないな冗談は皆目覺えてゐなはりまへんやろ。其處が酒に醉ふ時の面白いところや。あないなけつたいな小女郎を嘘にも貰ふいうてはるのが面白いのや。」

老人は呂律の怪しくなつた舌が廻らなくなつて、うるさい程諄く正太郎を戯弄つた。

「なあ、貴方はどえらい金持の若旦那さんだつしやろ。私とこのお房は牧野三次郎の姪で、日給四十五錢の會社の受付はんや。」

誰憚らない高調子でしやべり立てる執拗さに、正太郎は一時に醉が出て來たのを感じながら、あまりに遠慮氣の無い老人の爲めに、娘はどんなに羞かしい思ひをして居るであらうと考へて、夫もこれもみんな自分自身から出た事で、罪は一切此方にあるのだと思つた。妙に責任感の過重に苦しまされる性質の正太郎の頭腦には、ふと其の己れの罪を責める心持から、牧野老人に對して、自分の立場の立派な事を、無理にも見せてやり度くなつた。

「どのやうなええ女子でも、どないな身分のある人の娘でも、私が氣に入つた、貰つたるツと一

言いへば濟む人や。その貴方が自身の口から、私のやうな學問も無い、貧乏人の家の食客――姪というたかて人の家に厄介になつた以上は食客だつしやろ、そないなしよむない者を嫁さんにするいうてきかんところが酒の味といふもんや――このお藥がキュウツと腹の中へ沁み込むと、身分も地位も忘れてしまうて、四民一切平等になるのが私や嬉しうてかなはんわ。」

飲酒家に限つてゐる、別段心底から考へて居る事でもない事を、ただ單に反覆する興味に乘せられて、とろんこの目を据ゑて相手を見ながら諄々いふのであつた。正太郎は老人が、あまりつけつけと、若い女にとつてはさぞかし堪へ難い事だらうと思はれる事を、大きな聲で云ふのが、自分自身を罵られてゐる程難儀だつた。臺所に居る娘の耳にも、此の高聲は聞えないわけはないと思ふと居たたまれなかつた。

「三田さん、貴方のやうなおとなしい人でも、酒に醉へばかくいふ牧野三次郎も同い事や。いいや僕はあの娘さんを貰ふのだツと、こない云はははつてなあ――貴方はもう覺えても居てはれしめへんやろが、貴方のやうな人と、小便臭い私の姪と比べて見なはれ、提灯に釣鐘どころやなうて、天子樣の馬と溝鼠や。」

「およしなさいよ牧野さん。」

正太郎は堪り兼ねて遮つた。酒の上とは云ひながら、あんまり執拗い相手の冗談と、その高聲をかげで聞いて居る娘の存在の爲めに、彼はほんとに腹が立つたのである。憤ると血の上る頭には酒の醉も諸共に漲つて、胸の動悸は非道くなつた。

「貴方にはわからないんだ。私は醉拂つてあんな事を云つたんぢやありませんぜ。」

流石に聲は低くしたが、正太郎は一生懸命力強く云つた。

「ヘツヘツヘツヘ。醉うてでなくてあないな事が云はれますかいな。阿呆らしい。」

益々上機嫌の高調子で、平生から嫌ひな大阪言葉の「阿呆らしい」を、嚙んで吐き出すやうに云はれたので、正太郎は一層癪に障つた。

「わからない人だなあ。それやあ僕だつて此の間の晩は醉つて居ましたさ。しかし僕が――。」

彼はふと氣がさして、襖の向ふに氣兼ねしながら、低めた聲を一層低くした。

「僕があの人を貰はうつて云つたのは、ありや冗談ぢやないんですよ。」

「何いうてんのや。」

老人は笑ひ消さうとしたが、又してもも大嫌ひな「何いうてんのや」に出つくはして、正太郎は愈々熱中した。

「僕は嘘はついた事の無い人間なんです。貴方は人を信用しないからいけない。此の間の晩だつて、僕があれ程確かだつていふのに、身分がどうだとか金がどうだとか下らない事ばかり云つて居て逃げようとしたぢやありませんか。」
「私が逃げようとしましたつて。」
今迄胡坐だつた老人は、突然立上つたかと思ふと、俄に整然と坐り直した。
「へへえ、何時私が逃げました。牧野三次郎は嘘僞は微塵も云はん男や。貴方のやうな御大家のぼんぼんが、私とこのあないな者を貰ふいうたかて、誰が信用しますかいな。第一世間が承知しまへんわ。」
「世間。そんなものは承知しなくたつて構ふもんか。」
「それやあかん。世間はたとへ承知しても第一貴方とこの親御さんが承知しなはるわけがおまへんわ。」
「冗談いつてら。親父も母も、僕の欲しいといふ相手さへありやあ誰だつて構はないつていふんです。」
口ではかう云ひながら、正太郎は年とつた兩親の事を考へると、少し深入りし過ぎた自分を悔

いた。
「一體俺は本氣であの娘を貰ふ氣なのかしら。」
と反省した時、彼は彼の出たらめを恥ぢた。若しも牧野老人が本氣になつてしまつたらどうしようと危む念が忽ち彼を捉へてしまつた。
「失敗つた。俺は又醉拂つたぞ。」
と思ふと、自責の念と共に酒の醉は深くなつて、彼は身體の中心がぐらついて、目の前が暗くなるやうに感じた。
「三田さん、貴方ほんまに嘘やおまへんのか。」
突然牧野老人は咽喉に絡んだ低い聲で訊いた。正太郎は愕然として相手の顏を見たが、あまりまともに先方も自分を見詰めて居るので、腹の中迄見透かされた氣がした。彼はその弱味を紛らす爲めにも、飽迄力強く云はなければならない羽目になつた。
「牧野さん、僕がこれ丈云つても信用しないんですか。」
少し芝居じみてゐるなと思ひながらも、些か聲を高くして勢込んだ。
「なんの貴方、貴方のいふ事なら疑やせん――けどなあ。」

老人は到底信じられない顔付をして、正太郎の身を氣づかふ様子を見せながら、

「貴方(あんた)、後になつて厭やいうたつてあきまへんぜ。」

とこれでもかと云はんばかりに正太郎を見上げた。

「およしなさい牧野さん。くどいぢやありませんか。」

事の結果はどうならうとも、その場のきつかけで、きつぱりと相手の口をつぶらせた事が、限りなく正太郎を滿足させた。

「よろしい。わかつた。萬事は牧野三次郎が承知だツ。」

ふらふらする上半身を立直して妙に氣取つた聲を出して、薄つぺらな胸を叩いた。

「けどなあ、今夜は酒の席やさかい、眞面目な相談事は面白うない。これは明日にも改めてお目にかかつて話すいふ事にして、まあ一つうんと飲んで貰ひましよ。」

と暫時閑却されて居たお銚子を取上げて正太郎に盃を強ひた。たらたらと、二三滴德利の口から滴(した)つたばかりで、何時の間にかそれは空つぽだつた。

「おい、お房。」

老人は襖の向ふの人を呼んだ。

「なんだんね。」
と云ひながら出て來たのは、娘ではなくて婆さんだつた。
「偉いお話がもてまんな。」
と正太郎に愛想を云つた。
「御酒だんがな。」
老人は空になつたお銚子を突出して振つた。
「まあま、ようあがつてだんな。」
と婆さんは呆れた表情をして見せて、
「實はな、後がちと心細うなつたさかい、今先刻お房に取りに行つて貰ひましてん——やがて戻る頃とは思ひますけどな。」
「何いうてんのや、後が無うなつたら早うに取りに行つたらええのやないか。」
老人は無闇に不機嫌な顔をして叱つたが、その時臺所の方で娘の歸つて來たらしい物音が聞えたので、
「ヘイヘイ、ちつとも氣が利かんで濟みめへん。」

と婆さんはわざと恐縮した風をしながら、立つて行つた。
「阿呆め。」
老人はその一言で、僅かに威厳を保つた落つきを見せて、又立上つて胡坐にかへつた。
正太郎は婆さんの出て來た時、聲を潛めて居たにしろ、今迄の二人の話を聞かれたに違ひ無いと思つて、年寄つた女のづうづうしい顔付を見ながら、今にもその厚ぼつたい唇から、とんでもない事を切り出されはしないかと怯々して居たが、幸にも無事に退散したので安心した。彼にとつては牧野老人よりも、婆さんの方が遙に苦手たつた。女の古ぼけた奴程始末の悪いものはないと、正太郎は其の時も、つくづく感じたのである。
「オイオイ、お喜代。」
老人は乾いた唇をなめながら待ち切れなくなつて呼んだ。
「なんだツ。」
「お房はまだ戻つたらへんのか。」
「お酒だつか。今持つて行きまんがな。」
婆さんのとげとげしい聲が應じた。續いて親子がごそごそ云つてるのが聞えたが、

「何いうてんのや、やや子やあれしめへんで。」
と娘を窘める婆さんの聲がはつきり聞えた。
靜に襖をあけて、耳の根迄も赤くなつた娘がお銚子を持つて來た。下ばかり向いて居る樣子を見ると、どうしても先刻からの此の場の問答を聞き知つて居るのだと思はれて、正太郞も赤面した。
「はきはきとお酌してあげんかい。」
老人に云はれて愈々固くなつた娘の目の前に盃を差出す正太郞の手も震へた。溫かい湯氣をたてて德利の口から出て來る酒は、盃のふちを越えてたらたらと膝に溢れた。
「しつかりせんかいな。」
老人は見るに見兼ねたといふ風で舌打ちした。
娘は狼狽ててお銚子を下に置くと、袂から手巾を出して正太郞の膝の濡れたのを拭かうとしたが、長い袂は疊の上を滑つて、今置いたお銚子を見事に倒した。金色の酒はうす汚い疊の上を踊るやうに流れた。
「阿呆めが。」

老人は娘の手の手巾をひつたくると、狼狽てて其處いらを拭いた。
「早う雜巾を持つて來んかい。」
呆然として見て居た娘はハツとして立上がると、これも狼狽てて雜巾を取りに行つた。
「此の通り氣が利きまへんのやさかい。爲樣がおまへんわ。」
と老人は辯解らしくつぶやいた。
お代りのお銚子を持つて來てからも、膝の前の濡れた疊を氣にして、袂から出した半紙で拭いて居る娘の悄氣た様子を、正太郎は自分の爲めに叱られて居るのだとしか考へられなかつた。
「滅茶しよる。此の頃の高い酒を仰山溢されたら、私等見たよな貧乏人は堪らんわ。」
まだぶつぶつ云つてる老人の思ひ切りの惡さが憎らしく、それ丈恐縮してゐる娘はしをらしかつた。
何時の間にか醉の覺めかかつた正太郎の頭腦には、ふと母親の送つて寄越した令孃の寫眞が思ひ出されて、目前の娘と比べて見た。二重瞼のはつきりした目にも、筋の通つた高い鼻にも、悧巧さうに締つた口もとにも、良家の娘に限る品位の現はれて居た寫眞の令孃は、誰が見ても抜ん出て美しかつたが、正太郎はその令孃が、自分自身の美しさを自覺してゐて、その美しさを活か

す爲めに苦心をし、江戸がつてゐる根性が憎らしかつた。それに比べると目の前の娘は、姿も形も見るかげもなかつたが、少し足りないのではないかと思はれる迄無邪氣に見えて、世の中の美人の持つてゐない美しさを持つて居た。低い鼻も、厚ぼつたい唇も、お凸の額も、まんまるい顔も、すべてが善良なその性質を示してゐるもののやうに考へられた。

「いつそほんとに此の娘を貰つてやらうかしら。」

正太郎はさう思ひながら盃を口に運んだ。

買ひ足した酒も盡きて、正太郎が其の家を辭したのは夜も更けた頃であつた。雨の止んだ空はうつすりと青み渡つて、雲切れのした間からは、冴え冴えと光る星の數が見えた。彼はその遙かなる空を仰いで、あてども無い憧憬に心を誘はれたが、思ひ出したやうに發して來る酒の醉に、背中迄もはねをあげながら、雨後の泥濘をぴしやぴしや歩いた。

大通りへ出て、電車を待つて居る間に、回數切符を探らうとしてかくしに突込んだ手は、先づ油紙の包に觸れた。彼はそれを取出して、街燈の暗い光で見た。自分の美貌に滿足してゐる令孃の顔が、醉拂つて常軌を逸した彼の愚かさを嘲笑してゐるやうに思はれた。

轟と物凄く音を立てて、夜更の電車は泥水を兩側に飛ばしながら來て止つた。彼は狼狽てて寫

眞をかくしに突込まうとしたが、大判の四角い角がつかへて、樂には入らなかつた。
チンチンと車掌は容赦なく鈴を鳴らして、電車は動き出した。その無遠慮な電車の態度が彼をむかつかせた。正太郎はいきなり手に持つた寫眞を引裂いて、往來の泥濘の中に叩きつけた。さうして既に動き出した電車を追つて飛び乘つた。がらんとした車內に腰を下すと、又しても頭に上る酒の酔に、彼は苦しい息を吐いた。さまざまの事の取止めも無く浮んでは消える頭腦の中に、今日の一日の彼の行動を非難する反省と、無理にもそれを肯定する我意が混亂した。
晴れわたつた朝、正太郎は何時もの通り寢過ごして、狼狽てて身仕度をして下宿を出た。往來はまだ乾いては居なかつたが、一雨毎に空の色も藍を深くし、一切の物に惜氣も無く光を投げる太陽も赤々と輝きわたる春の景色を、うす汚い人間の住む大阪の町にも認める事が出來た。正太郎は寢ぼけた目には殊に眩しい朝の日輪を仰ぎ見ながら、暗い銀行の內に入つて行つた。
「お早う。」
「お早う。」
「お早う。」
あつちからもこつちからも同じ挨拶をするのを、此方も「お早う」で受けて、さつさと自席に急

いだ。

墨汁壺の蓋をとり、帳面を揃へ、算盤を目の前に置いて、鳥の棲木のやうな高い椅子にかけて仕事を始めた。洋紙の上を滑る洋筆の音、機械のやうに動く算盤の音が、靜に高い事務室の天井に響いて聞え始めた。

「牧野さんは今日も休みかしら。」

ふと正太郎の後で、課長の太い聲がした。

「さうですなあ、まだ見えませんが。」

一人の同僚が引受けて答へた。

「どうしたのか誰か知らんかね。」

正太郎は自分一人が問ひかけられて居るやうな氣がしたが、押を強くして默つて居た。

「屆は出てゐませんのですか。」

と側の一人が横から口を出したので、責任を免れた安心を感じて、ごまかしにそそくさと帳面を引繰返した。

「それは出てゐる。家事の都合により二三日缺勤といふのだがね。病氣ぢやないかしら。」

と課長は一人で首を捻つて、

「あの老人が休むなんて珍しい事だ。」

と獨語を云ひながら立去つた。

正太郎は背中に冷汗を感じながら、彈かないでもいい算盤を忙しさうに彈いた。彼は心中一方ならずやましかつた。鳥屋に誘ひ出したのも、酒をしたたか飲ませたのも、泥醉して路上に一夜をあかさせたのも、怪我をさせたのも、發熱させたのも、あまつさへ、つひぞ休んだ事のない銀行を休ませたのも、一切彼の罪だつたかのやうな退目を感じた。課長も同僚も、何も知らない顏をしながら、實はその出來事をちやあんと知つて居るに違ひ無いと思はれて爲方がなかつた。自分と牧野老人の間柄よりも、老人の姪の介在してゐる事實を知り盡されてしまつたのではないかと云ふ根柢の無い疑念に、彼は人知れず赤面した。

終日不愉快だつた。第一牧野老人もいゝ加減に銀行に出て來ればいゝのだ。初めて見舞に行つた時、あの氣に喰はない婆さんが、命にかかはる大事のやうに大袈裟にしやべりたてたので、本氣になつて心配したが、昨夜行つて見ればあの通り、ちつとは靑しよびれてもゐたけれど、全快祝ひだと稱して、二三杯酒が腸に沁みると、忽ち平生に變らない元氣になつて、づぶづぶに醉拂

つてしまつたぢやないか。病人なら病人らしくして居るがいゝのだ。何時迄も愚圖々々怠けて居るものだから、餘計な仕事は殖えるし、課長や同僚は自分に疑をかけて居るのだと、正太郎のさつぱりしない心持は、あらぬ邪推を逞くした。

壁の上の大時計が、ぼあん、ぼあん、ぼあん、ぼあんと四つ打つのを待兼ねて、彼は手早く机の上を取片附け、

「お先きに。」

と誰にともなく頭を下げると、第一番に銀行の門を出た。

「一體俺は何の爲めに銀行になんか勤めてゐるんだらう。」

とその舊式な石造の古び汚れた建築物の、面憎い程どつしり構へてゐるのを顧みて、癪に障つて唾を吐いた。

つい此の間の新聞に、二日續で出て居た「大洞男令息の丁稚奉公」といふ記事を思ひ出した。三助や、米つきや、宿場女郎の出て來る北陸道の片田舍から天秤棒を擔いで出て來て、貪慾と吝嗇で小金を蓄めたのが、持つて生れた惡運と押の強さで御用商人になりすまし、牛肉の罐詰に石つころを詰込んで戰地に居る兵隊にあてがつたり、其他惡事の數を重ねたのが、助平な大臣に女を

取持つたおかげで縛られもしないばかりか、彼が不正の手段で蓄めた惡錢の百萬分の一ばかりをお上に獻上した功によつて皇室の藩屏になり上つた男爵の息子が、贅澤に昵まず、勤儉の美風を學ぶ爲めに大阪へ來て、或る商店に奉公し、生れながらの丁稚小僧と同じ待遇に甘んじて、こき扱はれて居るといふ事が、例の無責任な筆で、讃辭の數を盡して書き立てられてあつた。男爵は模範的の父で、その息子――實はお話にもならない道樂者――は模範的青年であつた。正太郎は其の記事を讀んだ時は、その男爵の愚劣さを片腹痛く思つた。どうせ二三年たてば家に呼戻して、いくら放蕩をしても使ひ盡せない程無駄な金持になると極まつて居る息子に、見せかけばかりの丁稚奉公なんかさせなくてもいい。若しもほんとに貧乏暮しが藥になるものなら、いつそ其の數千萬圓の身代のありつたけを、一代のうちに使ひ果して、息子を一文なしにしてやるがいゝ。何から何迄やる事が、名聞好きの根性に根ざして居るのだから堪らないと、他人事ながら腹が立つた。

「しかし俺も大洞の息子の亞流かな。」

　とふと其の時、正太郎は考へて苦笑した。不正を憎む彼の父は、もとより大洞の富の足下にも及ばない財力しか持つて居なかつた。役人や軍人に頭を下げる事の嫌ひな彼の父は、勿論皇室の

蒸昇には成り切れなかつた。しかし此の貧乏人のうごめいて居る社會から見たならば、矢張り無駄な金持の一人に過ぎないのであらう。一人息子の正太郎は、否でも應でも、やがてその富の所有者たるべく此の世の中に生れて來た張合ひの無い身の上なのだ。何もわざわざ溫情の無い、人の悪い人間ばかり住んで居る淺薄蕪雜な商業地に寄越して下宿住居をさせて見たり、別段出世しても爲方がないと考へて居る者を、安月給取にしなくたつていゝんた。正太郎はかう考へた時に、何かしら親達の思ひもかけない事を爲出かして困らしてやらうといふ、ふてくされた悪戯心を止め兼ねた。

「なにしろ銀行と下宿屋は面白くない。」

と思つた時、今出て來たばかりの銀行は彼の背後に聳え、行手の町の一隅には、そのなさけない下宿が控へて居るので、行き所の無い賴り無さに惱んだのである。何處かに行つて、一人で靜かに御飯を喰べようとも思つたが、彼は甚しく懷中の不如意な事を思ひ出した。

悄氣切つた心持で、暗い顏をして下宿に歸つた。

「三田さん、貴方今朝はお風呂に行つてやおまへんでしたやろ。」

「おまへん。」

「けつたいな物言ひせんと置きなはれ。」
洋服を脱いで、襟をはづして、着物を着換へて居る後で、女中は火鉢に炭をついで居た。
「そんなら一寸流しておいでやす。」
「うるさい奴だな。」
と腹の中で思ひながら、正太郎は返事もせずに手拭と石鹼箱をひつつかんで出た。
湯上りのいゝ氣持も、下宿の薄情そのものの象徴のやうな夜食の膳をさしつけられると、忽ち心寒くなつてしまつた。
「今日はな、お家内はんが留守で、一寸手が足りまへんさかい、偉い失禮ですけど、置いといて去なして貰ひまつさ。」
と女中はお櫃を殘して行つてしまつた。
「又あのでくでく肥つた旦那が來て、一緒に芝居にでも出かけたのだらう。」
と正太郎は、いゝ年をして白粉を塗り立てて、他所行の着物を着て出て行つた女房さんの姿を想像して、よくもあんな厭らしい女を妾にしてゐられるものだと、世の中の男の意地汚さを、寧ろ羨ましい程感心した。それにしても女房さんの留守なのも、女中が忙しくてお給仕について居

ないのも難有かつた。彼はのんびりした心持で、膳の上のお銚子を取上げた。
大根を細かく刻(きざ)んだつまの夥しいのに、肌寒さうに寄添つて居るうすつぺらな四五片の刺身は、例に依つて彼の箸の觸れないものであつた。貧弱な湯葉(ゆば)の漂つて居るお汁(つゆ)と、鶉豆の煮たのがぼろぼろに乾いて居る小鉢を眺めて、正太郎は味の悪い酒を飲んだ。
又しても澤庵の萎び切つたのでお茶漬をかつこんでゐると、
「三田さん、貴方御濟みでしたらな、お櫃を貸して貰ひまつさ。」
と、つかつか女中が入つて來た。
「オヤまだ濟んではおまへんでしたかいな。」
と云ひながら、矢張りお櫃に手を掛けた。
「もう濟んだよ。」
正太郎は憮然として箸を捨てた。
「もうひとつ如何(どう)だす。」
「いらない。」
さういつて彼は火鉢の方に向いて煙草を吹かした。

「よろしうおあがり。」

女中は頓着なくお櫃を抱へて、さつさとお膳を下げて行つた。

正太郎は默然として、自分自身の鼻の孔からゆるゆる立昇る煙の行方を、何かしら果敢ない心持で見送つた。

「自宅に居ればこんな思ひはしないで濟むんだ。」

と思ふと彼は年とつた父母の姿が目の前にありありと見えるのであつた。父も母も今頃は食後の果物でもむきながら、遠くに居る一人兒の身の上を考へて居るであらう。父は氣強く手放しては見たものの、息子の行爲に間違がなければいゝがと懸念して居るであらう。母は時には涙ぐんで、息子のお小遣の乏しい事をも心配して居るに違ひない。正太郎は自分に都合のいゝ事ばかり考へながら、愈々父母のなつかしさに心を震はせた。

彼は思ひたつて、硯の蓋をとつて巻紙を延べた。性來筆不精の上に、親讓りの無類の惡筆なので、三日にあげず細々と書越す母の長い手紙に對しても、いつしか返事を出さない勝だつた。今日こそは此の慘な下宿生活を、如實に兩親に知らしてやらう、と思ひながら筆を取上げたが、先づ冒頭の一句にさへつかへてしまつた。

「拜啓陳者……」

と書いたばかりで續かなくなつてしまつた。

「實に拙い字だ。」

とつくづく嘆息して、彼は亂暴に筆を捨てた。

「三田さん。」

梯子段の途中から不作法な聲をかけながら女中が上つて來た。

「今な、こないなお方が見えてだつせ。」

と正太郎の肩越に名刺を出して見せた。

「通しておくれ。」

牧野三次郎と刷つてある名刺を受取つて、正太郎は狼狽てて火鉢や蒲團の位置を直した。

「御勉強中御邪魔させて頂きます。」

老人は室に入ると叮嚀に、可笑しい程改まつた挨拶をした。

「サアどうぞお敷き下さい。昨日は又大變遲く迄御馳走になりまして。」

正太郎も、相手の態度に誘はれて固くなつて坐つた。

女中が置いて行つたお茶を飲んで、煙管を取出し、悠々と落ついて老人は煙を吹いた。
「三田さん、貴方さぞかし御不自由だつしやろ。」
怪しげな波に日の出の一軸のかかつて居る床の間から、すべて室内の器具のお粗末なのを眺め廻して、同情した顔をして眉をひそめた。常日頃金持の息子として、尊敬もし又馬鹿にもしてゐる正太郎の生活の、あまり手輕なのに驚いた様子だつた。
「下宿も呑氣でいゝのですけれど、ただ無闇に不親切でしてね。」
「さうだつしやろ。さうだつしやろ。」
老人はあまたたび領いて同意を表した。
二人は火鉢を中にして向合つて坐つて居たが、別段何も面白い話も無い手持不沙汰に惱んだ。殊に正太郎は、牧野老人が平生に似ず整然とした服裝をして、行儀よく坐つて、言葉つき迄他所行なのが、底の知れない氣味悪さを感じる原因になつた。今にも何か困つた事が起きて來さうな不安な豫感に胸を壓されて居た。
「もう氣分は全くいゝのですか。今日銀行で一同が、牧野さんは如何したんだらうツて、しきりに心配してゐましたよ。」

「左様だつか。おかげさんでもうすつぱりようなりました。今日は出たらうと思うとりましたのやけど、何やら休み癖がつきましてな、ええもう一日休んだれと夜着をかぶつて正午迄寢てしまうたハハハハハハハハ。」

老人は調子づいて喋舌つたが、その笑さへ何となく態とらしく思はれるのであつた。

二人は又火鉢の火を見詰めたり、吹き出した煙草の煙に引かれて天井を仰いだりして、所在無い對坐を續けたが、

「三田さん、實はな。」

と餘程永い沈默の後に、老人は一膝乘出して正太郎の顏を見た。愈々豫期してゐた困つた事が押迫つて來たのを感じて、正太郎は胸を躍らせた。

「實はその、私はな、ほんの冗談事やと思うとりまんねやけど。」

火鉢の縁を煙管で叩きながら、老人は恐縮した形で云ひ澁つた。

「貴方あれは本氣でいうてのだつか。——あの私の姪なあ、あないなしようむない者をと、私は初手から信じられまへんのや。三田さんは醉うてゐなはるよつて、なあに僕が貰ツたるつと、こない云ははるのやけど、それはその場の座興といふものやさかい。」

老人は幾度も唇を舐めながら、言葉もしどろに同じ事を繰返した。正太郎は、これは困つたと思ひながら只管うつむいて聞くより他に爲方がなかつた。

「誰しも同じ事で、酔うたる時は途法ない元氣がええさかい、日頃思はん事かてぺらぺらと口に出してしまふのやけど、先度の時もいうてだつたし、昨晩もあれ程はつきりとおつしやつてだつしやろ、それに貴方は若い方に似合はず、冗談も云はれん眞面目な方だすよつて、これはひよつとするとほんまかいなと、私もええ氣なもんだつしやろ、正直に頭を捻りましてん。」

老人は其處で腕組をして、頭を捻つて考へ込む恰好をして見せた。

「けどな――いやいやこれは間違ひだ。よしんば三田さんはあないな事を本氣で云はれたにしろ、失禮ながらまだお若いお方や、うつかりした事を云うて、御身分のある親御さんに御迷惑をかけては第一此の老人がええ年をして羞かしい。萬一本氣で云うてなはつたるにしろ、これはお止め申すが本筋やと、私もとつくり考へましてなあ。」

と今度は思案のついた形で、腕組を解いて、一服した。

「ところが。」

と煙管を力強くとんと叩いて、

「お喜代——私の妹の婆さんだ。あの婆奴がしやしやり出て、三田さんはどないうふてなはりましたか知れしめへんけど、ああいふ整然した御方やさかい、心にも無い事は仰しやるまい、ひよつとしてあないな娘でもお氣に入つてだしたら、こないな話といふものはきつかけが大事だによつて、貴方行てしつくりとお話を伺つておいで……」

老人は何か心にやましい事でもあるやうに肩をすぼめ、聲をひそめてぼそぼそ話した。彼自身の言葉をかりていへば、御身分のある正太郎が、貧しい家の娘を本氣で嫁に貰ふとは思はれないし、果してそれが本氣とすれば、それこそかへつて一大事である。正太郎の兩親を初めとして、世間といふものが承知しない、これは——萬一本氣だつたとすれば——思ひ止らせるのが年長者の責任であると老人は考へた。しかし若しそれが眞實正太郎の希望ならば、むざむざお斷りすべき事ではないから、酒の氣の無い眞面目な時に、とつくりと眞意を確めなければならないと婆さんが智恵をつけたのであつた。

「ほんまに失禮な事を聞く奴とお考へやつたら幾重にも謝りますさかい、此の老人に免じて、貴方の思うてらつしやるところを、隱さんと聞かして欲しうおまんねやが……」

彼は言葉をあいまいに濁して、煙草の煙にむせたのか、ごほんごほん咳入つた。

正太郎は默つて聞き終つて、何と返事をしていゝか當惑した。彼は熱心にあの娘を貰ふ氣でなかつた事は確かだつたが、しかしその時のはずみで、少くとも一時的には貰つてやらうと考へた事も否定出來なかつた。正太郎は自分の輕率を悔むと共に、あまりに出鱈目を云ふ人間だと考へられることは殘念で堪らなかつた。どうとも返事の出來ない自分の意氣地無しと、かりそめの脫線した行爲の怖ろしい結果を忌々しがる不愉快な心持で、強情に沈默を續けて居た。

「三田さん、そやつたら貴方があないにいうてなはつた事も、矢張り冗談でしたのやな。」

牧野老人の詰るやうにいふ言葉の調子が、むらむらと憤り易い正太郎の心持に手痛く觸れた。

「それで私も安心しました。」

老人はさも安心したといふやうな口吻だつたが、正太郎は彼自身を、飽迄も見下げられたやうに感じて聞捨てにならなかつた。

「安心ですつて。」

「へイ、ほんまに安心しましてん。貴方のやうな金持の若旦那さんと、私とこの姪なぞが緣組出來るものかどうか考へても御覽なはれ。」

「一寸待つて下さい。」

正太郎はむつとして、息ぜはしく老人の言葉を遮つた。
「それぢやあ貴方(あなた)は僕の云つた事を、みんなちやらつぽこだと思つてるんですか。」
「サア私はどないなもんか知れしめへんけどな。」
「冗談ぢやない。僕は嘘は云はないつてあれ程云つたぢやありませんか。身分がどうだ、金がどうだ、世間の思惑が怖ろしい、親の意向が氣になると、愚にもつかない事を云つて、當人の此の僕がどうしても貰ふといつたら誰が何てたつて構ふもんか。」
「けれどもなあ、貴方の御兩親の御意向丈(だけ)は、これはちやあんと承はらんとあきまへんぜ。」
「たから僕は今その事で、兩親に手紙を書いて居たとこぢやありませんか。」
正太郎の悪がしこい頭腦の働きは、とつさの間に思ひついて、机の上の巻紙を指差した。
「へええ、ほたら矢張りほんまだしたんかいな。」
老人は驚嘆(びつくり)して、一人つぶやいた。
「ほんとですとも、どうしても、あの――お房さんを貰ふつて、今恰度書かうと思つて机にむかつたところなんです。」
正太郎は嘘から出た眞實(まこと)に感激して、息をはずませた。

「三田さん、勘忍しておくれやす。偉い濟まん事を申上げまして。」
老人は坐り直して疊の上に手をついて頭を下げた。
「イイエそんな事は。」
正太郎は相手を目の前に屈服させた得意さに元氣付いた。
「嘘だと思ふなら僕は貴方の目の前で手紙を書いて見せませう。」
いきなり立上がると机の上の巻紙と筆を執つた。
「三田さん、貴方そないにせんかてよろしうおまんが。」
老人は彼の手をつかまんばかり狼狽てて、膝頭で歩いて擦寄つた。
「ナアニどうせ出さなくちやならない手紙ですから。」
正太郎は止められれば止められる程自分の優越を確實にし度かつた。
「滅茶やな。」
と口では云ながら、老人は片唾を飮んで覗き込んだ。
威勢よく筆の穗先にとつぷりと墨をふくませた正太郎は、眞白な巻紙を見て逡巡した。今書下す一文によつて、自分の運命はきまるのだと思はれる程、彼は身の上の危機に迫られた思ひをし

た。ふとした事のはずみの怖ろしさを痛切に感じたと同時に、自分の輕率とおつちよこちよいを憎む念に苛々した。

「サア何と書いたものかしら。」

彼は老人に相談するやうに顧みて云つた。

「私は學問もないさかい、そないな事はあきまへんわへツへツへツへツ。」

彼の難澁してるのとはうつて變つて、老人は氣樂に笑ふのだつたが、それさへもせせら笑つて居るやうに思はれて正太郎は癪に障つた。

私儀今日迄御兩親樣の御言葉にそむき獨身生活を續け……

正太郎は惡筆を羞かしいと思ひながら、その惡筆をごまかす爲めに、わざと達筆らしく書流したが、獨身生活といふ四字が、妙にとげとげしく思はれて、いかにも父母にむかつて書く可き文字では無いと考へられたので、ぴりぴりと裂いてまるめて捨てた。

「私儀今日迄御兩親の御言葉にそむき御心配相掛け候へども種々熟慮致候末愈々妻帶可致決心仕候」

かう書いて來て、正太郎はさて行き詰つた。母の勸めに從つて親を安心させるのなら、昨日迄

つて寄越された美しい令嬢をめとらなければならないのだと考へると、夜更の電車路の水溜りに引裂いて捨てた寫眞の主に些か彼は未練を感じた。どうでも此の手紙を書かなければならないはめに自分を陥れたやうに思はれる目前の老人が、非道く面憎く思はれたので、從而其の姪のお房も厄介な女としか考へられなかつた。あんなみすぼらしい、低能らしい娘よりは、誰が見ても美しい令嬢の方が無事かしらんと考へると、愈々牧野一家の者は狡猾極まる人間に思はれて憎らしかつた。それでもその憎らしい牧野老人が、首を突出して書面を讀んで居るのを見ると、どうしても弱味は見せられなかつた。彼は腹の中で舌打ちしながら續けた。

「就而は豫而申上候通り小生の意に適ひ候人をめとる事と致候。その人と申すは目下小生勤務中の銀行の先輩牧野三次郎氏の令姪房子殿に御座候。もとより御兩親樣にも御異存無之事とは存候へども爲念一應右御知らせ申上候次第に御座候」

書終つた手紙を牧野老人に見せて心密に得意だつた。父も母も、自分をこんな遠方の氣に喰はない土地に寄越して、下宿暮しなんかさせるから惡いのだ。これで始めて自分達の教育方針の間違つて居た事を思ひ知るだらう。

「ざまあみやがれ。」

と正太郎は腹の中で舌を出した。

「三田さん、貴方ほんまに此の手紙を親御さんの所へ出しやはるのか。」

老人は二度三度讀返してから、今更心配さうに見えた。

「その爲めに書いたのですもの、出さなくて如何するもんですか。失禮ですけれどもお歸途に、途中の郵便函に入れて下さいませんか。」

正太郎は全然人の意表外に出て、驚かしてやつた滿足を感じながら、征服者が被征服者に對する態度で老人を見下した。

「ほんまに。」

「くどい人だなあ。」

彼は昂然として煙草をとつて吸つた。

「まことに難有う御座います。」

老人は感激して、座蒲團から疊の上に滑つて、改めて手をついて低頭した。

その意氣地の無い相手の恰好を見ると、もつと平つくばらせてやらうといふ心持の働くのを止め兼ねた。彼は手紙をくるくる巻納めて、封筒に入れた上で、極めて叮嚀に表書を認め、切手を

貼附けて老人に渡した。

「難有う存じます。」

老人はその封書を二度三度押頂いて懷中に納めた。

「偉い濟まん事ですが、實は私の妹の婆奴も、貴方の御返事を一刻も早う承り度うて待つとりますさかい。――それに勉強の御邪魔をしてもあきめへんし、私はこれで去なして貰ひまつさ。――偉い濟まん事でおますが……」

幾度も云ひ澁りながら老人は無闇に頭を下げた。どう見てもその様子は、愚圖々々して居るうちに、正太郎の御意が變つては大變だと思つて居るらしかつた。

「いづれ又明日は銀行でお目にかかります。」

額の汗を拭かんばかり、老人は落つきを失つて、へどもど頭を下げながら狼狽しく辭し去つた。

その後姿を見送り果てて、さも自分に後を見せて逃げて行つたやうに思ひながら、正太郎は優越感を禁じ得なかつたが、火鉢の火の氣もうすらいで、うそ寒く室内に殘る自分を顧みた時、彼は俄に不安を感じ始めた。

如何しても、事の餘りの唐突さが、此の事件の進展に伴つて起きた各種の場面を、現實のもの

とは思はせなかつた。正太郎は自分自身の身の上に起きた事としてよりも誰か他人の事のやうに思はれて爲方が無かつた。つい昨日の事に思はれる日曜の日の光景から、それはいかにも小說じみて居た。

「俺は一體子供の時分から輕率だつた。」

と正太郎は遠い時代の事迄追想して、此の世の中に生れてから、いつも損ばかりして居る自分の今日迄を忌々しく思つた。

あれは小學校の一年か二年位の時分だつた。近所の鼻垂しが遊びに來て居て、二階の欄干にもたれながら、目の下の松葉牡丹の咲いて居る庭の赤土に夏の日の燒けつく景色を眺めて居た。みゆうみゆう足もとに啼いて居る猫の首玉をつかんで、子供の一人は二階から庭にはふり投げた。危ない、と思ふひまも無く、地面に落ちた猫は身を返してしやんと立つと、長い尻尾をおつたてのそのそ步きながら退屈さうに欠伸をした。

「猫は偉いねえ。二階から落つことしても平氣なんだねえ。」

子供達は心底から感服した。

「人間たつて平氣だよ。」

正太郎は猫ばかりほめられるのが殘念だつた。
「噓云つてら。そいぢやあ君、此處から飛べるかい。」
「飛べるとも。」
「飛べるものか。」
「飛べなくつてさ。」
幼い正太郎の姿は欄干を越えて屋根に出た。
「およしよ正ちやん、危ないつたらさ。」
彼の氣勢に吃驚した子供達は一齊に呼止めた。止められると愈々止められないのが彼の性分だつた。
「いゝかい、飛ぶよ。」
飛白(かすり)の筒袖を着た正太郎の姿は、いきなり宙に飛んで地面に落ちた。彼は友達を驚かした滿足をかち得たと同時に、足首を挫いて立上がる事が出來なかつた。緣側から跣(はだし)で駈出して來た母に抱上げられて、正太郎は火のつくやうに泣出した。
其の當時の光景を思ひ浮べて、今の自分に比較(ひきくら)べたが、二昔も前の自分も、三十歲近い今日の

自分も、ちつとも變りの無いのを知つて腹が立つた。彼は觀念の眼を閉ぢたつもりで、冷い疊の上に大の字になつて倒れて見たが、とんだはめになつた事を悔む心持は、どうにもかうにも消えなかつた。

一體全體牧野老人が怪しからないと、正太郎は思ひ切り惡く考へた。あんないゝ年をして、こんな事にならしてしまつたのは、あの爺の思慮が無さ過ぎるんだ。それにあの妹の婆さんの惡計に違ひ無い、あんな婆の妹なんか持つ奴があるものかと、筋道も無く憤慨した時、その婆の生んだ娘の姿さへ呪ふ可きものに感じたのである。元來女なんてものは、此の人生に於ては、男子にとつて厄介物だ。正太郎はふと、此の世の中から一切の女といふものを追拂つた後の、さつぱりした景色を想像して、その想像の世界に憧れた。

さうだ、女といふものさへ居なかつたら、あの婆もあの娘も存在しないのだから、こんな面倒は起らなかつたに違ひ無い。さうしてあのまあるい顏をした、鼻の低い、唇の厚ぼつたい、お凸の、その癖そのお凸にうつりのいい地藏眉と、睫の長い瞳が赤坊のやうに無邪氣に見える特徴が人をひきつける娘などは、自分の目には永久觸れなかつた筈だと考へると、さまざまの場面の女主人公としての娘が、正太郎の目の前に彷彿として現はれた。場末の町の活動寫眞の前に佇んで、

毒々しい安繪の具で塗られた繪看板を見上げて居た姿、金ぷらの折をぶらさげて一本筋の電車道を歩いて居た後姿、殊にあの金ぷら屋の二階で見た第一印象は、今も目の前に動いて居るやうに思はれた。

あまりに明かに其の時の光景を想像した時、正太郎は其處に一人大男の姿が、娘と共に坐つて居るのを感じた。綿の厚い羽織を着て、セルの袴を裾長く穿いたのが大胡坐で、今も尙正太郎と娘の間にじやじや張つて居るやうに思はれた。頰骨の高い、耳の薄い貧乏相に、金縁の眼鏡ばかり際立つて光つて居たのを正太郎は忘れなかつた。

「さうだ、あの大男といふものが居たつけ。」

と新に主要人物を一枚加へた事件の紛糾を想像した時、正太郎は其の男によつて救はれる希望さへ描いた。

「如何して俺は今迄あの男の事を忘れて居たのだらう。」

彼はあの鳥屋の二階で、其の男があの娘を覗つて居る事を確めた時、牧野老人が極力男を罵倒した勢ひに釣込まれて、取るに足りない相手だと極めてしまつた自分の淺薄さを、此の時つくづく悔んだのである。

彼は俄に澄んだ頭腦を回復して、筋道を立てて考へて見た。若しもあの男が非常に熱心に娘を想つて居るとすれば、きつと苦情を云ひ出すに違ひ無い。若しもあの娘も男を憎からず思つて居てくれたら、

「占めた。」

と正太郎は思つたのである。彼は金ぷら屋の二階の有様から想像して、娘も存外あのづうづうを尊敬して居た事を明瞭に思ひ出して安心した。これでまあ女房なんていふうるさいものは持たないでもいゝ事になるだらうと考へると、彼は存外氣が樂になつて、何時しか溫まつて來た蒲團の中で、蟠の無い熟睡に陷つた。

次の日銀行へ行くと、久しぶりで牧野老人も出勤して居た。

「昨晩は。」

と四圍(あたり)の人を憚りながら私語(さゝや)いて、老人は何喰ぬ顏をしながら、暫時手に觸れなかつた算盤を鮮かに彈いた。擦りむいた額の傷のうす黑く殘つて居るのをかくすやうに、うつ向き勝に働いてゐた。

夕方人々が仕事をしまつて歸り初める頃、何時もの通り眞先きに事務室を出ようとする正太郎

の後から、牧野老人は追掛けて來て、石の門柱のかげで呼止めた。
「三田さん、昨晩は偉いお邪魔致しました。」
と叮嚀に頭を下げて、偖て一段聲を低くして、
「宅へ歸りましてなあ、婆にも話して聞かせましたところ、自身の手一つで育てたあないた娘を、貴方のやうな御大家のぼんぼんが貰うてくれはるのか云うて、涙を流して喜びましたわ。ついてはな、明日の晩私とこで、ほんのまあ內輪の心祝に一杯差上げ度いと、こない申しましてなあ……」
老人は平生よりも遙かに改まつた言葉づかひで、くどくどと同じ事を繰返しながら、兎に角銀行の歸りに來て貰ひ度いと云ふのであつた。
「難有う御座いますけれど、あんまり度々御馳走になり過ぎますね。」
正太郎は何となく老人の態度に反感を持ちながら冷かに答へた。
「なんのまあそないな事がおますもんで。つまり貴方と私達と距て無う親類づきあひしてお貰ひ申さんならんさかい、とんと風情もおまへんねやけど、內輪同志もな、又氣が張らんとよろしうおまつしやろと思ひましてな。」

「左樣ですか。それぢやあ折角ですから兎に角伺ひませうか――けれどもあの、お房さんはあの話をなんて云つてました。」
正太郎は云ひ憎い筈の言葉の、存外すらすら出て呉れたのを喜んだ。
「お房がよう何を云ひますものか。貴方のやうなお方に貰うて頂くというたかて、ほんまの事とは思へまへんやろ。」
老人は嬉しさうににこにこした。
「と云ふと、まだお房さんにはお話しなさらないんですね。」
正太郎は老人を詰りながら、あの娘の意向を訊かなければならないと云ふ解り切つた事を、今迄等閑にした自身の迂濶さに驚いた。若しも娘が厭だと云つて呉れたら、それをきつかけに此の面倒臭い事件にもけりがつく譯だと思ふと、彼は圖に乘つて此の一手を攻め度かつた。
「そりやあ餘り亂暴ぢやありませんか。御當人が承知しないものを……」
「三田さん貴方何いうてはんのや。」
牧野老人は狼狽てて彼の言葉を中斷した。
「當人が承知せんなんて事がありますかいな。」

「だつてそりやあわからないぢやありませんか。第一あの何とか云ふ、お房さんの出て居る會社の人も居るぢやありませんか。」

正太郎は愈々自分の方が歩がよくなつたのを感じて落つき拂つた。

「田附はんたつか。阿呆らしい。貴方と田附はんと比べものになりますかいな。」

老人は夢中になつて息忙しく詰つた。

「いいえそんな事を云つてるんぢやないんですよ。」

正太郎は相手に卑賤な解釋をされたのが癪に障つて、聲も些か荒くなつた。

「僕のいふのは、つまりお房さんが私の所へ來る事を望んで居るんならいゝけれど、萬一さうでないのならその時は當然私があきらめる他爲方が無いと思ふので……」

「めつさうな、そないな事がおますもんで。」

老人は目をまるくして、そんな事があるものかといふ表情をして見せた。

「あれにもな、母親から貴方の難有い思召を話しまして、最初はな、餘り願うてもない結構なお話やさかい、嘘やいうて信用しませんでしたが、それもな、決して御冗談ではないと云ふ事がわかりましたよつて、當人もしつくりと得心が行きまして……」

「ですけれどね、それは貴方がたが得心させたので、お房さんはほんとはあの會社の人の所へ行き度いんぢやないんですか。」

「貴方もいこぢな人やなあ。あのやうな人やつたら、たとへ當人が行くというたかて、第一此の私が不承知や。會社勤務はさせたかて私の姪をあのやうな男達の弄りものにされては堪りまへんわ。」

老人は勢込んで唾を飛ばしたが折柄玄關の方に多勢の行員の、がやがや云ひながら出て來るのを見ると、彼は夫をきつかけに逃出さうとする物腰で、

「三田さん。話は又ゆつくり致しますさかい、兎に角明日は來とくれやす、そのつもりで御馳走を考へて置きまつさへツへツへツへ。」

と冗談にして笑ひながら、ひよつこり一つ頭をさげると、ばたばたと草履を鳴しながら、事務室の内へ駈け込んだ。

正太郎は輕い舌打をして、後からやつて來る同僚達に追付かれないやうに、早足で銀行の門を出ると、日の沈んで行く頃の往來の、ひとしきり往來の忙しい車馬の間を縫つて、大跨に歩き出した。

彼は牧野老人との數分間の對談に、自分の身に迫つて居た危難は、まだまだ逃れる餘地のある事を知つた。夕暮の高い空を仰ぎながら下宿に歸つたが、それにしても早まつて、父母のもとへ出した手紙の事が氣にかかつた。年とつた父母はさぞかし驚きに胸を打たれたであらう。苦り切つた父の視線を避けながら、度の強い近眼鏡に押付けるやうに近々と、あの手紙を開いた母は、幾度となく讀返して、目には涙さへ浮べたであらう。正太郎は親戀しい優しい心持に悩みながら、電報を打つてあの手紙を取消さうかとさへ考へた。

翌朝目の覺めた時、正太郎は朝の配達の郵便が心配で堪らなかつた。一昨日の晩牧野老人に託した手紙は、昨日のうちには東京の家に着いて居る筈だ。あれを見れば吃驚するに違ひない。吃驚すれば屹度折返して何か云つて來るに違ひない。思ひ止らせようと努めるだらう。意見がましい事も云つて來るだらう。いづれにしても、もうあの手紙の返事は來る時分だ。矢張り母が、其許いつもお變りなくと書出して、細々と歎くのだらうか、つひぞ筆を持たない父も流石に狼狽て、漢文調の簡略で力強い手紙を寄越すだらうか。どつちにしろそれに對して、此方も亦何かしら返事をしなくてはならないのだと思ふと、正太郎は紛糾した場面の主人公となつてしまつた煩はしさが面倒臭くてなさけなくなつた。彼は起出ると直ぐ門口の郵便函を見に行つたが、中には

二三本の手紙が入つて居たけれど、彼宛のものは一通も無かつた。正太郎は安心して、朝飯の膳に向つた。

眞靑に晴れた空に輝く日輪もあかあかと暖くなつた。その光の普(あまね)く行き渡る屋根の上にも、道端(ばた)の馬糞の上にも、ちちと啼きかはす雀が際立つて澤山目についた。物の音に驚いて飛立つのは遠くの空の霞に消えた。銀行へ急ぐ途すがら、彼は冬の外套を重たく感じる程春めいた朝を喜んだ。冬の間いぢけて居た彼の足も自然と早くなつた。其の上今日は土曜日で、おまけに彼が待ちわびた月給日であつた。

心なしか事務室に入つて來る人の顏は、どれもこれもいきいきして見えた。かりそめの冗談に湧き起る笑聲さへ、平生よりも高いやうに思はれた。

「ええお天氣だんな。」

揉手をしながら牧野老人は、正太郎を見ると近寄つて來た。

「貴方今日は私と一緒に來てくれはりまんのやろな。」

と彼に意味あり氣に目配せして訊いた。

「ええ伺ひます。」

正太郎は面白くない顔をして答へた。それつきり二人とも終日口もきかないで仕事に追はれて居た。

月給日のならひで、あつちでもこつちでも、歸途に何處かで一杯やらうと云ふ相談が始まつて居るのを、知らないふりをして二人は仕事を切上げた。

「他の人に見つかると、面倒やさかい、とつとと去にまほ。」

老人は正太郎のむつつりして居るのを氣づかふやうに寄添ひながら電車へ急いだ。

「三田さん、貴方お宅からどないにも云うて來てはおまへんか。」

込み合ふ電車の中で、あたりに氣を配りながら訊いた。

「いいえ何とも云つて來ません。」

と不機嫌に答へながら、正太郎は若しかすると下宿の机の上に、父からか母からかの手紙が自分を待つて居るのではあるまいかと思つた。

「そやつたらよろしうおますけどな、ひよつとして親御さんが御立腹ででもおありだと申譯がおまへんよつてな。」

「そんな心配は無用です。僕がいゝと云へばそれ迄の事なんです。」

「左様だつか。――大事おまへんやろか。」
老人はまだ不安さうにつぶやいて居た。
正太郎は表面こそ老人よりも度胸のいゝ落つきを見せて濟まして居たけれど、實は自分は牧野老人の手に人質に捕はれて居るやうな氣持がした。否でも應でも引張つて行つて、有無を云はさず事を纏めてしまはうとして居るのだと考へられた。彼は固く脣を結んで、老人の後から電車を下りて横町に曲つた。何時から變つたのか活動寫眞の看板は、西洋物になつて居た。「デブ君の結婚」といふ外題で、豚のやうに肥つた男が、若い娘の後をつけたり、横目をつかつたり、花束を捧げたりして居る最後に、手に手に丸太棒や箒を持つた大勢の人に取巻かれて、若い娘に横面を張飛ばされて泣いてゐる繪があつた。一寸面白さうだなと思ひながら其の下を通り過ぎた。
日曜以來不思議なはめになつて、あまり繁々出入する露路の内で、正太郎は露路そのものに對しても氣羞かしい思ひがした。
「オイ今戻つたぞ。」
先に立つた老人は勇立つて格子をあけた。
「さあさ、どうぞお上がり。」

と障子をあけて出て來たのは婆さんだつた。

「三田さん、貴方ほんまによう來ておくれやしたなあ。こちらから御挨拶に上がらんならんと思ひながら、途法ない勝手ばかり申しまして、偉い濟まん事やさかい、たんと御馳走してあげまほと、私が一生懸命で働いてまんのや。」

正太郎が靴を脱いでゐる間に、婆さんは彼の背中にくつついてしやべつた。彼は愈々人質に捕られた氣持がして、婆さんに顏を見られ度ないと思ふばかりで、挨拶さへろくに出來なかつた。

座敷へ通ると床の間には、相も變らぬ不動樣の一軸がかかり、その横手の金神樣の祭壇にはお燈明がちらちらした。

「まあおひとつぶぶなとあがつておくれやす。今日はほんまに仰山御馳走がおまんねぜ。」

とお茶を運んで來た婆さんは愛想笑ひをして、大げさな口をきいたが、茶盆を後に押やると、俄に改まつて坐り直して、

「此の度は又何と申上げてよろしう御座いますのか、お羞かしうて口もようきけんやうな、思ひもかけぬ思召で、牧野からからかうと承はりました時は、御冗談やと思ひましてん……」

婆さんは止度もなく長々と、金持の息子の正太郎が、母一人の手で育てた貧しい娘を貰つてく

れる忝なさを、極端に相手を持上げる調子で、正太郎が苦り切つて居るのには頓着なく述べ立てた。

「房もな、あまり身分が違ひ過ぎるさかい、氣が引ける、お斷りするのが當然やと、こない申しましたのやけど、三田さんはそないな事はよう御承知の上で貰うて下はるのやよつて構はんと、はたから牧野も申しましてな、あれもよう得心致しましてん。」

と正太郎には口も開かせずに、たてつづけに一人でしやべつたが、

「そやけどな、貴方も餘程もの好なお方やなあ。」

とおそろしく碎けた調子で云ひながら、仰山な表情をして笑つた。正太郎はその媚を賣る笑も氣に喰はなかつた。

「まあま話は後でゆるりとするがええわ。それよりも早う御酒の支度なとせんかいな。それにかんじんの花嫁はんはどないしたのや。早うに歸つてお化粧して待つとれと、私が今朝程いうてたんやがなハハハハハハハハ。」

牧野老人も婆さんの調子に引入れられて、はしやいだ聲を出した。

「ほんまにもう戻りさうなものと思うてまんがな、今日は會社が忙しいのやろか。」

「忙しいかつて大事ないがな。三田さんの嫁はんが、もう會社になんぞ行かんかてよろしいわ。」
「ほんまにいな。」
婆さんはあだいやらしい笑聲を殘して臺所に立つて行つた。平生とは違つて他所行らしい小綺麗な着物を着て、湯にでも行つたのか顔もてかてか光つて居た。
障子の外の狹い庭の上の空も何時しか暮れ切つて、金神樣のお燈明の火の色は深くなつた。正太郎は默然として、どうともなれと思ひながら、煙草を吹かした。
「オイオイ、お房はまだ戻つたれへんのか。」
これも火鉢のふちで煙管ばかり叩いて居た老人は堪へ兼ねたやうに呶鳴つた。
「まだだんね。」
臺所の方から婆さんの答へる聲も邪慳だつた。
「どないしたのや。」
「どないしたんだつしやろな。」
「しようむない奴ちやなあ。」
老人はぶつぶつ云ひながら、正太郎の前を憚るらしく、立上つて室外に去つた。直ぐにその襖

の向ふで、二人がしきりに云ひ合ふ聲が聞えた。正太郎は耳を澄ましながら、これもつまれたやうな手持無沙汰を感じて來た。

「偉い濟みまへんな。」

と老人は悄氣た顔付で室内に戻つて來た。

「どないしよつたのか、平生こない遲い事はあれへんのに。」

と辯解らしい事をつぶやきながら、まぎらかしの煙管を口に持つて行つた。

「そやつたらな。」

婆さんも、明かにまごついてゐる顏を襖のところから出して、

「一寸通りの酒屋迄走つて、會社へ電話を掛けて來まほか。」

「さうやな。そんなら私が行て來たるわ。」

煙管をとんとはたくと、老人は威勢よく立上つた。

「まあそれには及ばないぢやありませんか。」

正太郎は老人の性急を止めた。

「會社の仕事が忙しければ、少しは遲くなる事もあるでせう。」

「そやけどなあ、今夜は貴方が來やはるさかい、早うに歸らんとあかんぜと、あれ程私が云うときましたのに。」

老人はむしやくしやする樣子で、

「直き其處やさかい、失禮して一寸走つて來まつさ。」

と云ひ殘して、狼狽てて室の外に出て行つた。又してもその襖の外で、ごそごそ婆さんと相談して居たが、間も無く格子をあけて出た樣子で、露路を遠ざかる下駄の音が聞えた。

「三田さん、偉い濟まんこつておまんな。」

と一二尺開けた襖の間から婆さんが顏を突出して、氣の毒さうに云つて引込んでから、正太郎はいつそ一人で煙を吹いて居る氣樂な十數分を喜んだ。當の娘の歸が遲れて、ぢぢいやばばあがまごまごして居る樣子が、何よりも痛快だつた。心根のよくない者を懲しめるそれが攝理ででもあつたかのやうに、彼は暫時なりとも安らかな自分を見る事を感謝した。

電話をかけに行つた老人は直ぐに歸つて來た。又しても上り口で婆さんとひそめいて居る樣子が、てつきり彼等の思惑のはづれた事を示すものと考へられた。入つて來た老人の暗い顏を見ると、愈々勝利を得たやうに思つた。

「どうしました、牧野さん。」
わざと彼は老人に問ひかけてやつた。
「それがな、どうも合點いきまへんのや。」
聲にも力なく答へた。
「會社へ電話をかけますと、當直の人が出やはりまして、あの方は夙にうちへ歸らはりましたと云うてだんね。」
老人はごまかし煙草をしきりに吸つては、燒薬に火鉢のふちを叩いた。家の内には沈默が續いて、金神様のお燈明ばかりがしきりにまたたいた。
「あのなあ。」
突然老人は突拍子も無い聲を出して、臺所にゐる婆さんを呼んだ。
「なんだツ。」
「あのなあ、なんぼ待つたかて埒あかんさかい、支度が出來たるなら、一杯差上げたらどないたもんやろ。」
「左様だんな。支度は夙に出來たるのやけどな。」

「そんならそろそろ始めたらええやないか。」

老人は空腹に堪へられなくなつたのと、正太郎と向合つて居る苦痛を逃れ度がる様子で、御馳走をせいた。さうして自分も立つて行つて、食臺を持込んだり、盃洗を運んだり、さも忙しさうに立働いた。

「御馳走々々々と偉さうにいうたかて、三田さんのお口に合ふやうなものはあれへんやろ。」

と食臺の上に並んだ品々を一々覗いて見た。

「いいえ、結構な御料理だつせ。」

婆さんは冗談を云ひながらお銚子をとつて、

「まあおひとつ。」

と正太郎に勸めた。

「成程これは御馳走や。」

老人は盃を口にふくみながら刺身、吸物、燒魚と、ひとつひとつ箸をつけて舌皷を打つた。

「三田さん、貴方私とこでならいくら醉ひなはつたかて大事おまへんぜ。」

「いいえ此の間の晩でこりこりしました。」

「なんぞいな。これからはあかの他人とは違ひますさかい、此の婆が介抱してあげまつさ。」
と婆さんもしきりに酒を勸めた。
「さう注がれては堪りませんよ。」
と正太郎は既に顏の赤くなつたのを感じて盃を手で覆つた。
「まあま、こないな婆さんのお酌ではいやや云うてなはるホホホホホホ。」
とわざとらしく若々しい笑聲を出して、
「今に若いのが歸つて來たら、そしたらたんとあがつて貰ひまつさ。」
と意味をふくませた目附で正太郎を睨んだ。その樣子の色氣たつぷりなのが、正太郎には我慢が出來なかつた。
「三田さん、私も貴方の奥さんの親御さんになる身やさかい、ひとつ頂かせて貰ひまほか。」
と婆さんはづうづうしく手を差延した。
「失禮。」
正太郎の差す盃を受けて、婆さんがさもうまさうになめた時かすかに格子の開く音がした。
「房ちやんか。」

婆さんは盃を下に置いて狼狽しく立上つた。
「お房か。」
酒を飲んでも元氣の出なかつた牧野老人も、俄に元氣づいて、これも續いて立上つた。
「ハイ。」
と低い返事がして、ごとごと上り口で音をさせて居る。
「貴方どないしなはつたのや。三田さんが先刻にから待つてゐやはるがな。」
婆さんは窘め聲で小言を云ひながら、がらりと襖をあけた。
「オオまあ、あんた。」
と云つたばかりで二の句は續かなかつた。
「今晩は。」
太い男の聲で云ひながら入つて來たのは、忘れもしない、あの東北訛の大男であつた。
「まあ、あんた田附はん。」
婆さんは立ちふさがつて呼びかけたが、男は無遠慮に入つて來て其處に坐つた。此の間と同じ綿の厚い羽織を着て、セルの袴を裾長く穿き、頬骨の高い黄色い顏に、こればかりは光る金縁の

眼鏡をかけたのが、一見して敵意を持つ態度に見えた。正太郎は一も二もなく癪に障つた。
「こんな奴に負て堪るもんか。」
と心の中で思ひながら、弱味を見せまいとして、知らん面をして済まして居た。
「田附はん、貴方何時お歸りでした。」
牧野老人は意氣地の無い聲を出して、へたへた坐りながらお世辭を云つた。
「昨晩戻りました。」
男はわざわざ落ついた態度を示すつもりで叮嚀に答へたが、
「此の方が三田さんですか。」
と正太郎の方に向直つた。
「さうだ。さうだ。こちらが三田さんです。」
老人は狼狽して紹介した。
「初めまして。私は三田です。」
正太郎は窮屈な洋服の膝で坐り直して、挨拶した。
「僕は田附で御座います。先日は天ぷら屋でお目にかかりましたなあハツハツハツハツハツハ。」

と豪傑笑ひをしたが、その聲は少し震へて力が無かつた。

「厭な奴だな。」

と思ひながら、正太郎は相手の頰骨の高い卑しい顔付をさげすんだ。しかし金ぷら屋の二階の事を云はれたのには少々閉口した。

「御酒宴最中甚だ失禮ですが、牧野さん、私は貴方に伺ひ度い事があつて參上しました。」

無理に落つき拂つて切口上を使つて居るのが、「し」と「す」の使ひ分が滅茶々々なので、寧ろ悲慘な程滑稽だつた。

「貴方まあ話があるのやつたら明日にもゆつくり伺ひませう。今日は折角三田さんも見えてのやさかい、ひとつ愉快に飮んで貰ひまほ。」

老人は平生の勢ひにも似ず、ちひさくなつて盃をさした。

「失禮ですが今日は酒は頂きません。」

男は昂然として云つて、

「幸ひ三田さんも來てゐらつしやる事ですから、用件を聞いて貰ひませう。」

と上づつた聲がうまく出ないのを氣にしながら、しかも威嚴を保たうとして居る樣子が馬鹿々々

々しかつた。
「實は今日會社へ行きまして、お房さんから聞いた話なのですが、私の留守中貴方方(あなたがた)は、お房さんを此の三田さんと云ふ方に嫁入らせる事に決めたのですか。」
彼の聲は激情に震へた。
「田附はん、貴方そないな話なら今せんとよろしいがな。」
先刻から氣を揉んで控へて居た婆さんは、大男に擦り寄つてなだめ顏をした。
「いや、第一貴方に伺ひ度いです。一體それは事實なのですか。私に一言の斷りも無く、お房さんを此の人にやるといふのは。」
男は無作法にも正太郎を指さして詰つた。
「何をお房が云ひましたのやら知りめへんが、後で私がゆつくり承はりますさかい、今夜はそないな事は云はんと置きなはれ。」
「お房の奴め、何をいひくさるのや。」
老人は襖の向ふの娘にあてつけがましくつぶやいた。
「お房さん――お房さん。」

男は何と思つたか、ふりかへつて大きな聲で呼んだ。
「貴方も此處にお出で。事の眞相をたださなければならん。」
「房ちやんは何も知つたる事やおまへんやないか。」
婆さんは狼狽てて男を思ひ止らせようとした。
「お房さん。」
男は威猛高に再び呼んだ。
襖のかげにかくれて居た娘は、悄然として入つて來て、閾の上に坐つた。
「お房、お前何か間違うた事を田附はんに云うたのか。」
老人は萎れ切つて居る娘を見ると、俄に勢ひづいて高壓的な態度で詰つた。
「牧野さん、お房さんをとがめる事はありますまい。萬事の樣子は私が承知してゐます。」
男は老人などは眼中にないやうな態度で云つて正太郎を見た。
正太郎は傲慢なその男を面憎く思ひ、自分を動きのとれない立場に陷れた牧野老人と婆さんを忌々しく思つた。ただ一人其處に肩をすぼめて、身を責めてゐる娘の悄氣切つた姿ばかりが妙にいとしかつた。恰もそれは店頭にさらしてある品物のやうに思はれた。こんな粗雜な男に此の娘

をとられては男が立たないと思ふと同時に、こんな男に娘を占有させては第一娘が可哀さうだと思つた。

「三田さんは御存じない事かも知れませんが、僕は先頃このお房さんを嫁に欲いと申し出たのです。」

と正太郎にむかつていふ口吻だつた。

「三田さんは何も知つてなはる事やおまへんやないか。」

と老人は正太郎の氣を兼ねて、憤りに震へて居る男をなだめようとした。

「しかし三田さんにも僕のいふ事を聞いて貰はにやならん。」

と男は口では云つたものの、多少正太郎を憚つたらしく、今度は老人の方に向いて言葉を續けた。

「僕がお房さんを嫁に貰ひ度いと云つた時に、貴方はなんと云ひました。決して厭とは云はれなかつたぢやないですか。」

「けどな田附はん。私は何も貴方にお房をあげますときつちり云うた事はおまへんぜ。」

「なんですつて。成程貴方はさう明かには云はれなかつたです。しかしそもそも此の話は、かん

じんのお房さんのお母さんの口から最初出たものではなかつたでせうか。然るに……」

「田附はん、一寸待つてお吳れやす。」

婆さんは平生の愛嬌づくつたのとはうつて變つて、とげとげしい聲で遮つた。

「成程それは私でつしやろ。けどなあ、何が爲めに私が貴方に娘を貰うてくれと云うたか知つてゐやはるか。――知つてはゐまへんやろ。」

婆さんは女の年寄つたのに限る憎々しい態度で膝を乘出した。

「私がな、貴方に娘を貰うて吳れと云うたのは、貴方が娘を連れ出しては、二人つらつて活動寫眞に行つたり、何處をどう步いて來るのか、散步や云うて夜遲う迄歸らん事もあるさかい、私の娘は藝妓や舞子やあるまいし、人のおもちやにはさせとむない、若しも貴方がほんまに貰うて吳れはるのやつたらそのやうに話を運んで貰はんならんと思うたからだつせ。何も貴方が嫁に欲いとも思うてはるのやなかつたら、他人の娘を夜さり誘ひ出したりせんかてよろしいのや。默つて放つといたらどないな間違ひが起るかもしれんよつて……」――

婆さんはいきまいてまくし立てたが、あまり一生懸命になつたので、息が續かなくなつて咳入つた。

「ハハアうまい事を云ひますな。」
冷嘲するやうな男の聲は痙攣した。
「しかし動機の如何は暫時問はないで、兎に角貴方がお房さんを私に貰つて呉れと云つたのは事實です。さうでないとは云はれんでせう。」
彼は眞正面から婆さんと膝を突合せて詰つた。流石に婆さんも弱味があると見えて、負けない氣になつて男の顏を見かへしたが、それつきりで返答は出來なかつた。
「どうです。それは否定出來ますまい。」
男は勝ほこつた樣子で、今度は牧野老人の方に顏を向けて、
「さうして叔父さんの牧野さんは自分にも異存は無いと明言されたのでした。」
と云ひ切つて肩を聳(そびや)かした。
「それは貴方がた皆が勝手に話を決(き)めてしまうた後で、私(わて)の意見を聞きに來たのやよつて、私一人不承知やというたかてあきまへんやろ。そやさかい私も異存は無いと云ひましてん。けれどもなあ、それはその貴方が愈々貰うてくれはるのやつたら異存は無いと云ふ話で、何もはつきりと纏まつてしまうたと云ふ譯(わけ)やおまへんぜ。」

牧野老人は屁理窟を並べながら如何かして正太郎の目の前で首尾よく云ひ抜けようとあせる様子だつた。
「ハハア、成程それは證文を取つたわけでもなし、いはば口約束に過ぎんのですが、しかし僕が愈々貰ふと云へば、必ず呉れるといふ話ではなかつたですか。」
老人は再び氣勢があがらなくなつた。
「けどなあ、貴方にはおふくろさんもゐやはるさかい、一應相談すると云ひはりましたやろ。ほつたら其のおふくろさんが承知しやはるものやらしなはらんものやら知れへんのに、此方ばかり何時迄も話がきまらんで、中ぶらりんに放つて置かれたら、こないな迷惑な事はおまへんぜ。」
と暫時たつてから、無理に考へた事を口にした。
「だから僕はわざわざ東京迄行つて、母の同意を得て來たのです。」
と男は得意さうに一座を見廻した。
正太郎は默然としてその光景を見ながら、どいつもこいつも氣に喰はなかつた。此の場に及んで未だごまかしをしやべつて居る牧野と婆は、餘り根性が卑賤に思はれた。殊に自分にこんなもたれ役を押付けたのは、みんなその二人がたくらんでした所業だと考へられた。

「けどなあ、貴方はただ會社の用事で東京へ行くと云うてはつただけやさかい、私達はそないな事とは知りまへんやろ。」
「だから僕の留守中に三田さんとか云ふ人にお房さんをやらうといふ相談をしたのですか。」
男は當の相手は正太郎だと云はんばかり、彼の顔を睨んだ。
「田附はん、三田さんは何も知つてはる話や、おまへんねぜ。」
と婆さんは又見兼ねて口ばしを入れた。
「貴方の方のお話だつて、別段結納を取替せたわけでも無し、ひよつとして貴方の氣が變つて、あれは冗談だと云はれたかて、どうにもならんやうな頼り無い事やさかい、幸ひ三田さんのやうな立派なお方に貰うて貰へるものならと思うて……」
「三田さんは財産家の御子息ださうだからですねハハハハハハ。」
男は婆さんの話を遮つて、わざとらしく笑つた。
「それに貴方のやうなんとは違うて、お話があると直に、東京のお邸へ御相談になつて、親御さんも御承知になりましたのやさかい、貴方にはお氣の毒な事やけれど、なあ田附はん。」
婆さんは出たらめな事を云つて、づうづうしく押迫つた。まだ東京からは何とも云つて來はし

ないのにと思ひながら、正太郎は女の年とつたの程始末の悪いものは無いと思つた。
「それでは三田さんの御兩親も承諾なさつたのですか。」
男は一大事にでつくはしたやうに吃驚した顏をした。その樣子の眞劍さが、一座の者の心に觸れたのか、婆さんもちやらつぽこの口を閉ぢて、室内は寂とした。
正太郎は自分の身の處置に困じながら、かういふやり切れない立場に居る自分が、我慢の出來ない程忌々しかつた。彼は婆さんの嘘つぱちを發いてやらうかとも思つた。その儘嘘をつかせて置いて、理が非でもあの娘を男の手から奪つてやらうかとも考へた。
「それぢやあお房さんも承知したのですか。」
目をつぶつて、腕組をして、さも感慨に堪へないやうな形をして見せて居た男は、暫時してから誰にともなく詰問した。
「お房だつか。お房も承知しましてん。」
牧野老人は押かぶせるやうに答へながら、閾の上にうなだれて木偶坊のやうに動かない娘の方を睨むやうに見た。
「それは實際ですか。」

男の聲は沈んで居た。
「ほんまともいな。」
老人は一段落ついたやうに安心した様子で答へた。
「ハハハハハハハハ。」
突然男は高々と笑つた。
「無理押付けに押付けても、矢張り承知したと云へるんですかな。」
と男は正太郎にむかつて冷嘲的な言葉をかけた。その態度と調子が怖ろしく憎々しく思はれて、
正太郎はむかついた。
「無理押つけですつて。」
と彼は詰つた。
「無理押つけでなくてなんでせう。」
男も聲を高くして、これも詰問する調子だつた。
「田附はん、貴方と私達の話は話で、三田さんの知つてゐやはる事ではおまへんやないか。」
老人は狼狽てて中に入つた。

「三田さん、貴方にはほんまに濟まん事ですがこれには一寸わけがおましてな、いづれお詫もせんならんし、委細はお話しますさかい、今日はまあ貴方は何も云はんと堪忍しておくんなはれ。」
「いいえ私もあいまいな話は嫌ひなんです。」
正太郎は老人の、何から何迄糊塗しようとする狡猾さが氣に喰はなかつた。彼は先刻からあてつけがましく、東北訛の男の口から、いろんな事をきかされて沈默して居た顏の惡さに對しても、何とか云はなければ承知出來なかつた。
「さうすると貴方(あなた)は、お房さんは不承知なのを無理押付けに承知させられたのだといふんですね。」
彼は強ひても落ついて口をきかなければならないと思つた。
「まあ左樣でせうな。」
相手も負けない氣になつて冷かに答へた。
「どういふわけで。」
「當人が云ひましたハハハハハ。」
男は又とつてつけた笑方をして肩を聳した。

正太郎はその傲慢な恰好を見ると張飛ばしてやり度なつたが、娘を問題の中心にして見ると、どう考へても自分の方が歩が悪かつた。結局俺の負かなと、彼は著しく打算的な頭脳を働かせた。

「どうせ負けならみつともなく負けよう。こんな娘は奪られたつて惜くはないや。」

と心の奥底でふてくされがつぶやいた。

「牧野さん。」

彼は老人と婆さんの方に向いて聲をかけた。

「まあいろいろ雙方に言ひ分もありませう。第一私にも言ひ分はある。しかしそんな事はどうでもいゝとして、これはひとつお房さんの心に聞く事にしようぢやありませんか。」

「三田さん、貴方はまあ……」

と老人はなだめるやうな手つきをしたが、

「それが當然の事なんです。」

と正太郎はきつぱり云つてその口を止めた。

彼は自分の態度の落ついて居る事と、自分の處置の公平な事を娘に丈は認めて貰ひ度かつた。

「どうです、そんなら貴方にも御異存はないでせう。」

「勿論ですとも。」

男は満足した黄色い顔で、得意さうに頷いた。

「これは愈々俺の負けだ。しかしあんな所帯道具のやうな娘をしよはされなくてしあはせだつた。」

と正太郎は腹の中で考へながら、人々の後にちひさくなつて、面（おもて）もあげないで坐つて居る娘の姿を見た。

「お房さん。」

彼は餘りに芝居がかつて居る其の場の光景を、心にそぐはないものに思ひながら、勇を皷して呼びかけた。

「三田さん、貴方（あんた）一寸待つとくれやす。」

婆さんは狼狽てて正太郎を押止めた。

「房ちやん、あんたは三田さんのとこへ貰うて頂いたら、此の上もない幸福やさかい、何も不承知のなんのといふ事はあれへんなあ。」

「ほんまにしつかりせんといかんぜ。」

牧野老人も心配さうに口を添へた。
「およしなさい、そんな事をいふのは。」
正太郎は自分でも驚いた程凛とした聲で二人を叱責した。
「お房さん、何も氣兼ねをする事はありませんよ。ただ貴方の思ふ通りにすればいゝのです。」
と物柔かに云ひながら、自分の度量をほこる氣持のあるのを少しばかりやましく思つた。
「簡單に云へば、貴方は私のところへ來る氣はあるのですか。それとも。」
「三田さん。」
と牧野老人は堪へ兼ねて立上がらうとしたが、正太郎はそれを手で押へて續けた。
「それとも不承知ですか。」
何かうまい文句を云ひ度いと思ひながら、唇が乾いてそれつきり云へなかつた。
「お房。何も不承知な事あれへんな。」
「うつかりした事はいはれへんぜ。」
凄みをつけて二人が云ふので、娘は愈々うつむいて身動きもしなかつた。一座の者はまたたきもしない緊張した瞬間だつた。

突然けたたましい嗚咽に人々が驚いた時、袂を顔に押當てた娘は、疊の上に突伏した。堪へに堪へた涙にむせて咳入れば、背中は激しく波打つて揺れた。

「あんたまあ。」

婆さんは狼狽へて擦寄つて娘を抱起さうとした。

「阿呆奴。何いうてんのや。」

牧野老人は興ざめた顔をして、てれかくしにつぶやいた。綺麗に結つて居た束髮も亂れて、むせかへつて泣いて居る姿を見ると、正太郎は慘酷な事をした自分を悔いた。その癖彼は娘が自分を嫌つて居る事を、人々の前で證明された面はゆさよりも、此の紛糾した事件から自分の身の釋放された事を喜んだ。

「解りました。つまり貴方は不承知なんですね。」

正太郎は泣いて居る娘の背中にむかつて訊いた。突伏した束髮は咽び泣きながら、かすかにうなづいたのである。

「牧野さん、どうも致し方がありません。」

彼は一度でも貰ふと云つた言葉に對して、悄氣て見せなくてはならないと思つた。さめ切つた

心の底に湧いて來る苦笑を殺して、彼は坐り直して一同に挨拶して立上つた。
「三田さん、貴方まあ。」
「偉い濟まん事で。」
と老人と婆さんは止めるにも止め切れないで後からついて來た。
「何もこれで話がこはれたといふ事はおまへんさかい、いづれ明日にもお詑かたがた伺つて、とつくり御相談致します。」
とごとごとつぶやいては頭を下げて詑る老人には頓着なく、正太郎は編上の靴の紐に手間取るのをじれつたく思ひながら、無理にも不機嫌な顔をして格子の外に出た。娘の嗚咽く聲はまだ聞えてゐた。
春の夜の空は水底のやうにうすら明るく靑みわたり、星屑は何時も變らず冴え冴えと光り輝いて居た。その廣々とした空を仰ぎ見て、正太郎は身の上に起つた一切の些事は、どうなつたつて構ふものかと思ふのんびりした心持を持つたが、熱した顔に夜氣が觸れて冷靜になると、彼は甚しい空腹を感じた。
正太郎は此の間も入つたちひさい西洋料理屋に入つて、片隅の椅子に掛けた。肉汁や醬油の沁

み込んだ汚らしい卓布を覆うた食卓にもたれて、二皿三皿註文の品を前に、昂奮した後のものうさで、麥酒を飲んだが、思ひ切つて空つぽになつて居た腹の中に、冷い酒が流れ込むと、忽ち醉が廻つて陶然とした。

彼は短い一週間の間に起つた事を順序も無く思ひ出して、その主人公の自分の役廻りの惡かつたのが癪に障つた。自分自身の輕率もつくづく厭になつた。

彼はふと、今もその前を通つて來た活動寫眞の「デブ君の結婚」を思ひ出して苦笑した。それにしても自分を取卷いて動いた人間のすべて——牧野老人もその妹の婆さんも、その娘のお房も、頰骨の高い東北訛の大男も、一切がつさい憎む可きものに思はれた。殊にあの娘が、傲慢で、粗野で、頰骨の出張り過ぎた男を、立派な男だと思ひ込んでゐる心根がなさけなかつた。

「あんな奴よりは俺の方がどの位いゝかわからない。」

と考へた。正太郎はつくづく女といふものの無價値な事を感じたのである。

「旦那さん、なんぞ後をしまほか。」

入口の空いてゐる椅子に腰かけて居睡りをして居た小女は、無性つたらしく立上つて、空になつた皿と麥酒瓶をさげながら訊いた。

「いらない。」
正太郎は頭を振つて斷つた。
「おあいそだつか。」
と女はふりむいて云つた。
「ウヰスキイ。」
正太郎は何か痛烈な刺戟が欲しくなつた。トクトクと長い瓶の口から音立てて流れ出る金色の酒は燈火を照りかへして匂つた。彼は一息に飲み干した。
「もう一杯。」
小女はあきれた顔をして正太郎を見ながら注いだ。
「今度の活動は途法無いええさうにおまんな。」
と女は側の椅子に來て話かけた。
「デブ君の結婚かい。」
「ええ、それがほんまにをかしうおまんねと。ええ女子に惚れはつてな、あんまりじやらじやらしやはつたよつて、女子はんにどづかれまんねと。」

みそつぱの小女は面皰だらけの顔に斑に白粉を塗り立てて、舌の廻らたい口でしやべつた。
「もうひとつウヰスキイ。」
正太郎は面白くもない顔をして又一息に飲み干した。
彼はからだ中燃えるやうな強烈な酒の醉に、何も彼も忘れて下宿に歸つた。
「お歸りやす。ええ御機嫌さんやな。」
と帳場の女房さんが聲をかけたけれど、返事もしずに通つた。突掛けた上草履が度々ぬけかかるのを氣にしながら梯子段を上つて室に入ると、引ちぎるやうに洋服を脱ぎ捨て、蒲團の上にぶつ倒れた。
翌朝正太郎が目を覺ましたのは正午近い頃であつた。何時の間にあけて行つたのか、窓の障子には朝日がかんかん當つて居た。枕頭の火鉢の上の鐵瓶はチンチンと輕い音をさせて沸騰して居た。
日曜はつくづくいゝと思ひながら、無性つたらしく蒲團の中に潛り込んだまゝ手を延して疊の上の新聞を引寄せると、その下から一通の手紙が出た。
痼疾の僂麻窒斯で手の震へる父の拙い字を見ると、正太郎は吃驚して起き上つて、胸を轟かせ

ながら封を切つた。

「謹啓陳者貴公愈々御清榮奉賀候。當方一同無事消光罷在候間乍憚御安心被成度候。扨て書狀を以て御申越の貴公結婚の件につきては、當方にも勿論異存可有之儀には無御座候へども一應御相談申上度事も有之候に付來月初旬數日間の休暇御請求の上、日曜大祭日を利用御出京被成度其節萬縷可申述候。」

と判で刷つたやうな堅苦しい文句が手短に認めてあつた。彼が期待したやうな高壓的の文言は一切無かつた。うつかり何か書いて、息子の反抗心に油をそそぐ事を怖れて居るのに違ひなかつた。

「流石におやぢは狡いや。」

と正太郎はその味もそつけも無い手紙を忌々しく思つた。

「三田さん、おめざめだつか。」

箒とはたきを持つた女中が、襖をあけて入つて來た。

「南のお馴染さんからええ消息でもおましたか。」

と出たらめを云ひながら、もう蒲團をあげ始めた。

「なあにおやぢの手紙さ。」
と正太郎はさもつまらなさうに机の上に叩きつけた。
身體中に沁込んだウヰスキイの臭ひに胸がむかむかするので、彼は楊枝を銜へて湯に出かけた。
「おいでやす。」
と今日も亦若い娘が番臺に坐つて居て、正太郎が着物を脱ぐのを見守つて居る樣子なので、人前で裸體になる事の嫌ひな彼は、酒に疲れてたるんだ氣持のする肉體を忌々しく思つた。
湯上がりのさつぱりした氣持で下宿に歸つて、鐵瓶の湯をがぶがぶ飮んだ。階下で燒く魚の臭ひが忍び込んで來る度に、彼は甚しい空腹を感じた。
「今日は何處に行かうかしら。」
昨日貰つた月給が袋のままに入つて居る財布を懷にして考へた。
ふと河岸つぷちの金ぷら屋の二階が、正太郎の目にありありと浮んで來た。
「彼處に行かう。」
此の頃のこんがらかつた事件を生んだ其の家に、何となく心が引かれた。
帽子をかぶつて、下駄を穿いて、戸外に出ると、すつかり春になつた空も地も、遠くの方は紫

に霞んで、背中にあたる日光も、昨日より一段温くなつた。飲過ごした酒の疲勞と空腹に、何を考へる氣力も無く、懐手をしたまま坂道を下りて行つた。

乾いた往來に心地よく響く自分の下駄の音さへ夢のやうに思はれて、あまり頼り無い自分の意識を鮮明にする爲めに、道端の石つころを思ひ切つて蹴飛ばした。まんまるい石は日に光りながら、ころころ威勢よくころがつた。肌に青味を持つたその一つの石を、一丁二丁蹴つて行つた。あの金ぷら屋迄何物にも邪魔されずにころがして行つてやらうと、長閑な事を考へながら、又しても力強く蹴飛した。とたんに横町から馳出して來た娘の目の前を、石はうなつて飛んで行つた。

「危ないツ。」

と思つた時、その十六七の島田の娘は、吃驚して立止つて、けげんな顔をして正太郎を見た。彼は赤面して早足に歩き出した。何處に行つたのか見えなくなつてしまつた石つころの行方は、暫時の間彼の心に懸つた。

その川のふち迄ゆくと、五六間てまへから、金ぷらの匂ひは春の風に吹かれて漂つて來た。

「おいでやす。お上がりやす。」

と帳場で二三人一齊に云ふのを聞流して二階に上つた。珍しく客の無い川に面した二間の、此

の間の室の方にわざわざ入つて行つた。
「お一人さんだんな。」
　女中は後からついて來て念を押した。
「アアちひさい食卓の方に行けつていふんだらう。」
「いいえ貴方さんの事やさかい、どちらでもお好きな方でよろしうおまつせホホホホホ。」
　はち切れる程肥つた女中は、目も鼻もなくなつた顔をして笑つた。
「お誂へは。」
「何時もの通り。」
「お酒だすか。」
「それも何時もの通り。」
　正太郎は狹い一隅の、きたないちひさい食臺を前にして坐つた。もう一つ空いて居る大きな方に、今にもあの東北訛の頬骨の高い大男が、傲慢な面をして、お房を連れて來るやうな氣がして、彼は何かしら冒險的な豫覺さへ持つた。
「お待遠さま。」

女中はお銚子を持つて上つて來た。

「今日は何處ぞへお出かけだつか。」

と何時も變らないお愛想を云ひながら、正太郎の取上げる盃に酌をした。

女中が行つてしまふと、空腹に沁みる溫い酒の心地よさに、正太郎は一切の不平を忘れた心持になつた。

玻璃戸の外の川の景色は、此の前の日曜よりも更に春の色が深くなつて、土の肌の現はれて居た土堤は愈々綠を增し、柳の木の下には釣する人の姿も見えた。遠い川下の海から來たのか、白い鷗が群つて飛んで居たが、玻璃戸にぶつかる迄近々と舞ひ立つ時は、かすかに其の羽ばたきも聞かれるのであつた。

正太郎は手酌の酒の味は、相手のある酒よりも遙に結構だと思ひながら、はればれとした氣持になつた。

此の一週間の出來事に、うつかり乘りかかつた愚さを思ふと共に、よくもあの無智な娘をしよひ込まないで濟んだ目今の幸運を感謝しながら、彼はあの東北訛の厭な男さへ、自分を面倒な結婚問題から救ひ出して呉れた恩人のやうに思つた。

「これでもう面倒な事はない。」

と考へて、正太郎は獨身の幸福を沁々感じながら、手酌の酒の味ひを又なきものに思つたのである。今、彼の心には誰も彼も世の中の他人が他人である限りはなつかしく思はれた。

「日曜は實にいゝ。」

と痛切に日曜の嬉しさを感じながら、平和な獨身の生活を、破られなかつた身の幸福を祝したのである。（大正八年二月十三日稿了）

後記

この卷に收錄したのは、大正六年四月から大正八年四月までに發表された十篇の作品で、卷末の「日曜」を除けば、いづれも歐米に場面を採つたものか、然らずんば新歸朝者の情緒を作の內容としたものばかりである。

「同窓」は、雜誌「新小說」の大正六年四月號に發表され、單行本「海上日記」に收められた。
「楡の樹蔭」も「海上日記」に收められ、「三田文學」の大正六年八月號で發表された。
「大都の一隅」は單行本「旅情」所收の作品で、「三田文學」の大正六年十月號で發表された。
「ベルファストの一日」も「旅情」に收められ、「三田文學」の大正七年三月號で發表された。
「汽車の旅」も「旅情」に收められ、「三田文學」に、大正六年六月號七月號九月號十二月號、大正七年二月號六月號と六回に亙つて分載された。
「火事」は、「三田文學」の大正七年九月號で發表され、單行本「大空の下」に收められた。

「新嘉坡の一夜」は「旅情」所收の作品で、「新小說」の大正七年九月號で發表された。
「霧の都」も「旅情」に收められ、雜誌「中外」の大正七年十二月號で發表され、題下に小品と斷つてある。
「俱樂部」は「大空の下」に收められ、「新小說」の大正八年一月號と二月號に連載された。
「日曜」は一篇の作品に纏つてゐるが、もとは二つの作品となつて、先づ「日曜」と題し「日曜の序」をその「はしがき」として、大阪每日新聞に大正七年八月二十三日から九月二十一日まで二十六回連載され、も一つは「次の日曜」と題して、同紙に大正八年二月二十日から四月二日まで三十八回連載され、單行本「日曜」に收められた。

「火事」の主人公は大槻正太郎であるが、「日曜」の主人公も大每發表當時は大槻たつたのが、單行本になると、「大阪」及び「大阪の宿」の主人公と同じく三田になつた。蓋し茲に所謂「大阪物」が始まるのである。この卷に於ては「外國物」の波動が、「同窓」に起されて「倫敦の宿」(小說・六所收)に向つて高まり、また「大阪物」の波動が、「日曜」に發して「大阪の宿」(小說・四所收)に向つて描かれようとしてゐるのが分る。
「霧の都」は「小品」と斷つてあり、作中人物は小泉、澤木の如く實在の名稱を以て呼ばれてゐるが、「倫敦の宿」では、殆ど同じ情景が出場人物の名を變へて長篇小說の場面の一部を構成してゐるのである。
　單行本「海上日記」は、大正六年十二月十八日春陽堂發行、獻詞に「泉鏡花先生同奥樣にさゝぐ」とある。「六

空の下」は、大正九年五月二十三日春陽堂發行、獻詞にはやはり「泉鏡花先生同奧樣にささく」とある。「旅情」は、大正八年十一月二十八日春陽堂發行、獻詞には「小泉信三君に贈る」とある。「日曜」は、大正九年十一月十日國文堂發行、獻詞には「飲仲間に贈る」とある。

この卷に收錄された作品の半數は原稿が保存されてゐるし、また「新嘉坡の一夜」、「倶樂部」では揭載雜誌に作者の書き入れがあるので、それ等の原稿及び書き入れを原據として校訂をし、他卷と同じく、敢へて文字遣ひの統一を計らうとはしなかつた。校合の仕事には主として荻野忠治郎君を煩はした。

また私は責任者でありながら東京を離れて轉地しなければならなくなつたので、再校三校は水木京太君と平松幹夫君を煩はした。從つて校合校正の仕事は、主として前記三君の手になつたことを特記して置かねばならない。（井汲清治）

東京府規格外許可　巳資紙規第一五四號

昭和十六年六月二十五日印刷
昭和十六年六月三十日發行

水上瀧太郎全集　二卷

著者　阿部章藏

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所　岩波書店
電話九段(33)一一八七・一一八八番
一一八九・一一八〇番
振替口座東京七四四一六番

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

精興社印刷　長澤製本

落丁・亂丁等不完全な品がありましたら直接御申出願ひます　お取替致します。